中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書　8

―松本市内　その5―

北　栗　遺　跡

本　文　編

1990

日本道路公団名古屋建設局
長　野　県　教　育　委　員　会
㈶長野県埋蔵文化財センター

中央自動車道長野線
埋蔵文化財発掘調査報告書　8

―松本市内　その5―

北　栗　遺　跡

本　文　編

1990

日本道路公団名古屋建設局
長　野　県　教　育　委　員　会
(財)長野県埋蔵文化財センター

北栗遺跡全景（南上空より）

S B 261

輸入海綿砦（内郭）

ＳＴ45	ＳＲ105	ＪＲ	ＳＤ60	ＳＤ２
（図版206-1）	（図版160-13）	（図版206-4）	（図版206-5）	（図版206-3）
ＪＮ区	ＪＮ区	ＳＤ59		ＪＨＫ
（図版206-15）	（図版206-14）	（図版206-12）		（図版206-13）
ＳＤ59	ＪＮ区			ＪＫ区～ＯＫ
（図版206-21）	（図版206-27）			（図版206-23）

SB196

SB198

輸入陶磁器（白磁）

輸入須恵器（青磁・青白磁）

ＳＴ82	ＳＢ254	ＳＢ265	ＳＴ100
（図版220-71）	（図版216-19）	（ＰＬ80-169）	（図版222-147）
ＳＫ800		ＥＫＩＫ	ＥＫＩＫ
（図版222-155）	ＳＤ59	（ＰＬ80-170）	（図版222-148）
ＳＫ1217	（図版221-79）	ＥＮ区	ＳＢ265
（図版222-156）		（ＰＬ80-168）	（図版222-149）
ＳＤ39	ＥＮ区	ＳＢ265	ＳＢ253
（図版221-80）	（図版222-154）	（図版222-150）	（図版222-151）

S K 1541

S K 1504

輸入陶磁器（青磁・青白磁）

序

本書は昭和59年度より同62年度にわたり発掘調査されました、中央自動車道長野線用地内松本市内11遺跡のうち、北栗遺跡の発掘調査報告書であります。北栗遺跡からは広範囲にわたって遺構・遺物が多数検出され、整理作業には3年の歳月を要しました。

調査成果の概要については、現地説明会・出土遺物展示会・(財)長野県埋蔵文化財センター年報・埋文ニュース等によって公開してまいりましたが、その後の整理によって松本平の沖積地に立地した古代・中世集落の存在が明らかにされてきており、北栗遺跡においても刻期の集落の様子を知るうえで貴重な発見がなされております。

本遺跡は、松本平南西部に位置し、7世紀末から中世に至るまでの長期間、居住域や生産域として利用された遺跡であり、8世紀初め遺跡全体に開発が及び、計画的に開発がされていったことがその占地場所や遺構配置から知ることができました。また、本遺跡では10世紀初め集落が断絶する時期があったこともわかってきております。

本遺跡から北、西方にかけて広がる新村・島立の条里景観との関係も、その成立時期との関連から注目されていました。発掘調査の結果、現畦畔と方向を合わせた中世に属する溝・建物址等が検出され、溝により方区画された中に掘立柱建物址が整然と並ぶ、計画的に形成された中世集落も発掘され、現在の条里景観は中世以降に形成されたものであることが証明されました。このことは、中世集落址の調査例が少ないなかで貴重な調査として高く評価できることと思われます。

おわりに、本遺跡の調査開始より本書発刊に至るまで、記録保存の遂行に深いご理解とご協力をいただきました、日本道路公団名古屋建設局、同松本工事事務所、長野県高速道局、同松本高速道事務所、松本市、同教育委員会、松本平農業協同組合、地区被買収(者)組合等の関係諸機関、発掘現場や記録整理作業に従事された多くの皆さん、直接のご指導・ご助言を賜った、長野県教育委員会文化課、多くの研究者の方々、発掘調査を実施した(財)長野県埋蔵文化財センター職員に対し、心から敬意と感謝を表する次第であります。

平成2年3月20日

㈶長野県埋蔵文化財センター

理事長　樋口太郎

例　　言

1　本書は、中央自動車道長野線建設工事に係わる、松本市内・豊科町内12遺跡の内、北栗(きたくり)遺跡（EKK）の発掘調査報告書である。

2　本書は、松本市内にかかる遺跡を、古代から中・近世にかけての一連の遺跡群としてとらえ発掘調査を実施した関係から、全遺跡に係わる内容と考察編を１冊に、各遺跡編を６冊に分けて編集し、以下の構成をとる。松本市内その１－総論、松本市内その２－神戸遺跡・上二子遺跡・中二子遺跡、松本市内その３－下神遺跡、松本市内その４－南栗遺跡、松本市内その５－北栗遺跡、松本市内その６－三の宮遺跡、松本市内その７・豊科町内－南中遺跡・北中遺跡・北方遺跡・上手木戸遺跡。

3　本書で使用した航空写真は、建設省国土地理院の許可を得て複製したものである。

4　本書で使用した地図は、日本道路公団作成の中央自動車道長野線平面図（１：1000）、松本市発行の松本市都市計画図（１：2500）をもとに作成したほか、建設省国土地理院発行の２万５千分の１・５万分の１地形図を複製した。

5　本書及び松本市内・豊科町内遺跡報告書に掲載した、実測図の縮尺・表現方法、時代・時期区分、遺物写真縮尺、遺構・遺物の分類基準等は全分冊で統一してあり、その要点は凡例に示してある。

6　本書および松本市内・豊科町内遺跡報告書では、以下の遺構記号を使用している。竪穴住居址－SB、掘立柱建物址－ST、柵址－SA、溝址－SD、土坑－SK、井戸址－SE、鍛冶址－SI、水田址－SL、畑・畠址－SN、自然流路－NR、不明遺構－SX。また本遺跡の遺構番号は、調査時に付されたものを、報告書刊行に伴って南側の遺構から順に番号を付け替えている。

7　本書で報告する内容については、既に、当埋文センター発行の『長野県埋蔵文化財ニュース』、『長野県埋蔵文化財センター年報』２～４に調査概要を報告している。それらと本書での記述に若干の相違があるが、本報告をもって最終的な報告とする。

8　発掘調査、報告書作成にあたり、次の各項目について、各氏に終始ご指導いただいた。
古代集落関係－小笠原好彦、中世集落関係－石井進、竪穴住居址・掘立柱建物址－宮本長二郎、プラント・オパール分析－藤原宏志、水田土壌－梅村弘、古代集落・土器－吉岡康暢・桐原健、人骨・獣骨鑑定－西沢寿晃、地形形成－小林詢、炭化材鑑定・同定－中島豊志、須恵器・灰釉陶器－斎藤孝正、美濃須衛窯産須恵器－渡辺博人、条里遺構－井原今朝男・小穴芳実・小穴喜一、輸入陶磁器－森田勉、古瀬戸系陶器－藤澤良祐、近世陶磁器－仲野泰裕、墨書土器－平川南、漆関係－永島正春、協力機関－松本市教育委員会、長野県遺跡調査指導委員会（順不同、敬称略）。

9　発掘調査及び文責等本書刊行に関する分担は巻末に一括掲載してある。

10　参考文献は巻末に一括した。

11　本書で報告した各遺跡の記録及び出土遺物は、(財) 長野県埋蔵文化財センターが保管している。

凡　　例

1　本書に掲載した実測図の縮尺は、特に断りのある場合を除いて下記のように統一してある。

(1) 遺構実測図

本文挿図　竪穴住居址・掘立柱建物址　1：60　住居址内施設・墓址・土坑　1：40

(2) 遺物実測図等

土器・陶磁器　1：4　文字関係資料　1：3　墨書文字　1：2　土器拓影　1：3

金属製品　1：2　石器・石製品　1：6 ～ 2：3　銭貨拓影　2：3

(3) 遺物写真

土器・陶磁器　2：5　内耳鍋・常滑系甕　1：4　中世土器・陶磁器破片　1：2

鉄製品　1：2　銅製品・銭貨　1：1　石器・石製品　1：6 ～ 2：3

2　遺物実測図の番号は、遺跡ごとに次のように付けてある。

(1) 縄文・弥生土器、石器…… 1から通し番号　(4) 文字関係資料…… 1から通し番号

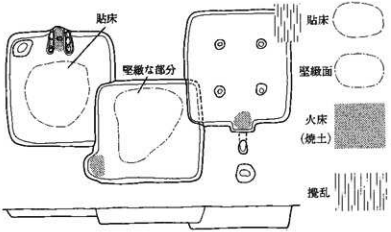
(2) 古代土器…… 各遺構毎の通し番号　(5) 金属製品…… 1から通し番号

(3) 中・近世土器・陶磁器…… 1から通し番号　(6) 古代以降の石製品…… 1から通し番号

3　実測図中のスクリントーン等は以下の事項を表わしている。

(1) 遺構

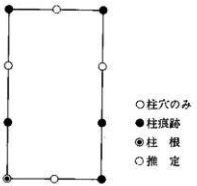
ア　竪穴住居址



イ　掘立柱建物址

本文中の掘立建物址模式図は、

約1：200で以下の事項を表している。



(2) 遺物

ア　古代土器

①　実測図の断面は、黒色土器、赤彩土器を含む土師器－白抜き、須恵器・施釉陶器－黒塗り、輸入陶磁器－スクリントーン▒▒▒によって区別した。黒色処理・赤彩を施したものはその処理された器面の範囲に、漆・炭化物の付着については以下のスクリントーンにより表現してある。

②　施釉陶磁器の施釉範囲は一点鎖線で示した。

イ　中・近世土器・陶磁器

①　実測図の断面は、土器－白抜き、陶器－黒塗り、輸入陶磁器－スクリントーン▒▒▒により区別してある。

②　国産陶磁器の釉の種類は以下のスクリントーンにより区別してある。但し、灰釉は白抜きにした。

③ 施釉陶磁器の施釉範囲は一点鎖線で示した。

ウ 金属製品

① 金属製品の形状はX線等の観察にもとづいており、錆・付着物によるふくらみは線の太さをおとして表現してある。

② 断面図は、平面形状観察にさしさわりのない範囲で平面図に組み入れてある。

③ 鉄製品、銅製品の断面図と、漆、炭化物の付着および木質部をスクリントーンで表現してある。

鉄製品　銅製品　漆　炭化物・木質部

エ 石器・石製品

① 打製石斧・磨石等の磨耗範囲は で示し、砥石の使用面は、断面図に |← →| で示した。

オ 土製品

① 羽口のタール付着・ガラス状発泡範囲を 、被熱により変色した範囲を で示した。

4 本書を含む松本市内・豊科町内遺跡報告書における遺構・遺物の分類、時期区分の要点は以下のように統一してあり、ここで扱っていないものについては、各報文中で説明してある。詳細は「松本市内その1」第3章に記述してある。

(1) 時代・時期区分

時代区分は、縄文時代、弥生時代、古墳時代、古代、中世、近世、近・現代とし、古代を1～15期、中世を1～2期に時期区分した。

(2) 遺構

ア 竪穴住居址

① 主軸は、カマドの中心を通る竪穴住居址の中軸線をあて、それと直交する中軸線を直交軸とした。ただし、住居址の隅にカマドを有するものや、カマドの見られない住居址については、東西方向の中軸線を主軸とした。住居址の規模は主軸と直交軸方向での床面の差渡しで測り、床面積はその二者の積をあてた。

② 平面形は「方形」「隅丸方形」「長方形1」「隅丸長方形1」「長方形2」「隅丸長方形2」及び「不整形」に分けた。(隅丸)方形は主軸と直交軸方向の長さの差が10パーセント未満のもの、その差が10パーセント以上15パーセント未満のものを(隅丸)長方形1、15パーセント以上のもの(隅丸)長方形2とした。

③ 古代住居址の規模については、時期別に、一辺の長さで以下のような6つの種類に分けた。

型 / 時期	小型	中型1	中型2	大型1	大型2	超大型
1～4期	3m強	4m強	5m位	6m位	7m位	8m以上
5～15期	3m以下	3m～4m弱	4m～5m弱	5m強	6m位	7m～8m以上

イ 掘立柱建物址

① 棟方向は、南北棟、東西棟と記してあるが、不明なものについては南北棟として記入した。

② 規模は、柱痕跡、掘り方の芯々間の距離を基本として推定復元し、面積は両者の積により求めた。

③ 柱間寸法は、柱痕跡、掘り方の芯々間の距離を求め、最大と最小値について表示した。

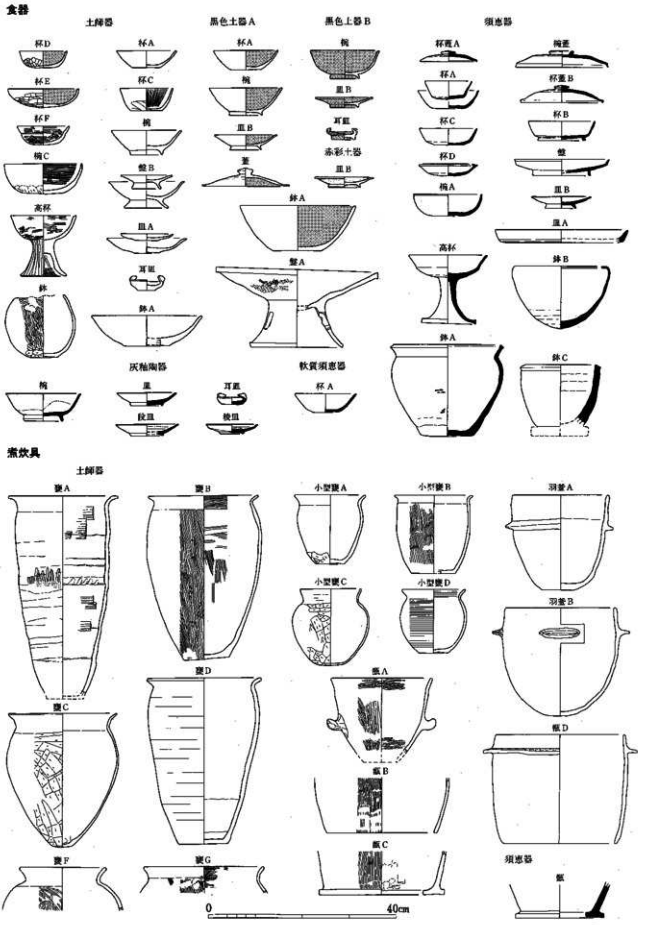
④ 掘り方では、平面形については方形、円形に分類し、「方」「円」と表記し、両者の混在するものは「方・円」とした。規模については、長軸の最大値と最小値を表示した。

(3) 遺物

ア 古代土器の器種分類について

① 次ページに示す古代土器器種分類表は、本報告書における土器の器種の呼称を示したものである。報告をおこなう土器のうち、土器の器種分類に当たって出土例が少なく、将来、周辺遺跡の資料をも含め、資料の増加を待って細別名を決定すべきと判断したものについては、ここではあえて細別を行わず、通例の呼称に従っている。

② 器種分類の詳細、器種内の法量等による細別については、総論編で明らかにしている。



古代土器の器種分類(1)食器・煮炊具

貯蔵具

須恵器

長頸壺A　長頸壺B　長頸壺C　壺蓋A　短頸壺A　短頸壺B　短頸壺C　短頸壺D　水瓶　甕A　鉢　平瓶　甕C　甕D　甕B　甕E　横瓶

灰釉陶器

黒色土器B

小瓶　平瓶　広口瓶　長頸壺　短頸壺　長頸壺　短頸壺

0　40cm

古代土器の器種分類(2)貯蔵具

期	土師器		須恵器		黒色土器A	土師器	北栗遺跡の代表的遺構
	杯 F	杯D・E	杯 A	杯 A	杯 A	杯 A	
1							SB14 SB29
2		○					SB95 SB181
3							SB106 SB111
4					○		SB152 SB218
5							SB105 SB220
6							SB202 SB31
7							SB191 SB120
8							SB49 SB198
9							SB196
10							
11							
12							SB4 SB43
13							SB3 SB15
14							SB81 SB213
15							SB117
備考	非ロクロ調整 有稜杯	非ロクロ調整	ロクロ調整 回転ヘラ切り	ロクロ調整 回転糸切り 8期は軟質須恵器	ロクロ調整 回転糸切り	ロクロ調整 回転糸切り	縮尺 1：10

700
800
900
1000
1100

0 20cm

古代土器時期区分の大略

イ　中世土器・陶磁器の分類

神戸遺跡から上手木戸遺跡を通して、出土した上器・陶磁器の主な器種内の分類と消長表を以下に示した。詳細は総論編で明らかにしている。

①　土師器皿

〈手捏ね成形＝Ⅰ類〉

ⅠA1－口径約12.5cm以上、器高約2.5～3.5cmのもの。

2－口径約11.0～12.5cm未満、器高約2.0～3.5cmのもの。

3－口径約10.0～11.0cm未満、器高約2.5～3.5cmのもの。

B1－口径約9.0～11.0cm、器高約1.5～2.5cm未満のもの。

2－口径約9.0cm以下、器高約1.0～2.0cmのもの。

〈ロクロ成形＝Ⅱ類〉

ⅡA－法量が口径約10.0～12.0cm、器高約2.0cm以上のもの。

B－法量が口径約7.0～10.0cm未満、器高約1.0～2.5cmのもの。

②　内耳鍋

Ⅰ　－口縁部を強く「く」状に外反させるもの。

ⅡA－口縁部内面に明瞭な1条の工具痕を残すもの。

ⅡB－口縁部内面に明瞭な2条の工具痕を残すもの。

ⅡC－口縁部内面に明瞭な3条の工具痕を残すもの。

Ⅲ　－口縁部の断面がクランク状に外へ張り出すもの。

③　常滑系の壺・甕類

Ⅰ－頸部を緩く「く」状に反らせ、口縁端部を丸くおさめるもの。

Ⅱ－口縁部断面が「L」状の受口状を呈するもの。

Ⅲ－口縁部断面を「⊢」状あるいは「N」状をなし、縁帯が頸部に接着しないもの。

Ⅳ－口縁部断面を「N」状をなし、縁帯を頸部に接着させようとしているもの。

Ⅴ－口縁部断面を「N」状をなし、縁帯を頸部に完全に接着させているもの。

④　擂　鉢

Ⅰ－口縁端部をやや細く挽き出し、端部を面取りするもの。

Ⅱ－器厚を均一に保ちながら口縁部を挽きあげ、端部外面を面取りして尖らせるもの。

Ⅲ－器厚を均一に保ちながら口縁部を挽きあげ、端部を隅丸方形及び丸くまとめるもの。

Ⅳ－口縁端部から1～4cmくらい下をナデて器壁を薄くし、端部は丸くおさめているもの。

Ⅴ－口縁端部から1～4cmくらい下をナデて器壁を薄くし、端部を角状にして端部中央に浅い溝を入れるもの。

Ⅵ－口縁端部から1～4cmくらい下を強くナデて器壁を薄くし、端部を丸くおさめて中央に溝を入れるもの。

⑤　輸入陶磁器

横田賢次郎・森田勉氏の成果（1978）に負うところが大きく、特に青磁碗については氏に従って以下のように分類した。

A－同安窯系碗Ⅱ類。

B－同安窯系碗Ⅱ類。

C－龍泉窯系碗Ⅰ－1・2・3類。

D－龍泉窯系碗Ⅰ－4類。

E－龍泉窯系碗Ⅰ－5a類。

F－龍泉窯系碗Ⅰ－5b・c類。

G－龍泉窯系碗Ⅰ－6a・b類。

H－龍泉窯系碗Ⅲ－2類。

Ⅰ－龍泉窯系碗Ⅰ－1およびⅢ－1類。

J－明代の所産で、外面上半に雷文施文のもの。

K－明代の所産で、外面に片切彫りによる細蓮弁文施文のもの。

L－明代の所産で、外面に線刻によっての細蓮弁文を施すもの。

⑥　古瀬戸系陶器と大窯製品の分類は、藤澤良祐氏（1982・1984、1986）に従い、山茶碗の分類は、斎藤孝正氏（1988）・田口昭二氏（1983）による。

各形態　消長表

	古代	中世1期			中世2期			近世
年代	12 C	13 C	14 C	15 C	16 C	17 C		
土師器皿	ⅠA1・2? Ⅰ B1? ⅠB2	ⅠA3	ⅡA ⅡB		? ?			
内耳鍋			Ⅰ	ⅡC ⅡB	Ⅲ			
須恵器	Ⅰ	Ⅱ Ⅲ Ⅳ	Ⅴ Ⅵ					
常滑系甕	Ⅰ Ⅱ	Ⅲ	Ⅳ	Ⅴ				

本文編目次

巻頭図版　1　北栗遺跡全景（南上空より）
2　SB 261 出土銅鏡
3　SB 196 出土緑釉陶器・SB 198 出土緑釉陶器・輸入陶磁器（白磁）
4　SK 1541 出土天目茶碗・SK 1504 出土香炉・輸入陶磁器（青磁・青白磁）

序
例言
凡例

第1章　遺跡の概要と調査の概要……1
第1節　遺跡の概観……1
第2節　調査の概要……2
第3節　調査の方法……4
第4節　調査の経過……5
第5節　基本層序と微地形……6
1　基本層序……6
(1) 奈良井川－鎖川系　(2) 梓川系
2　遺構切り込み面の微地形……8

第2章　遺　構……10
第1節　縄文時代の遺構……10
1　土坑……10
第2節　弥生時代の遺構……11
1　竪穴住居址……11
第3節　古代の遺構……12
1　竪穴住居址……12
2　掘立柱建物址……86
3　溝址……104
4　柵址……109
5　墓址……110
6　土坑……114
(1) Ⅰ群の土坑　(2) Ⅱ群の土坑　(3) Ⅲ群の土坑
7　鍛冶址……117
8　水田址……118
9　自然流路……120
第4節　中世の遺構……122
1　竪穴住居址……122
2　掘立柱建物址……130
3　溝址……144
4　柵址……151
5　墓址……152
(1) 土葬墓　(2) 火葬墓

6　土坑……157
(1) Ⅰ群の土坑　(2) Ⅱ群の土坑　(3) Ⅲ群の土坑
7　自然流路……160
第5節　近世の遺構……161
1　掘立柱建物址……161
2　溝址……162
3　土坑……164
4　水田址……165
5　不明遺構……170

第3章　遺　物……171
第1節　縄文時代の遺物……171
1　土器……171
2　石器……171
第2節　弥生時代の遺物……171
1　土器……171
第3節　古代の遺物……172
1　土器……172
(1) 概観　(2) 遺構出土の土器　(3) その他の土器
2　文字関係資料……215
(1) 墨書土器　(2) 刻書土器　(3) 転用硯
3　金属製品・鍛冶滓……219
(1) 鉄製品・鉄滓　(2) 銅製品・銅滓・銭貨
4　石製品……222
5　土製品……223
第4節　中世の遺物……225
1　土器・陶磁器……225
(1) 概観　(2) 竪穴住居址・掘立柱建物址・溝址出土の遺物　(3) その他の遺物
2　文字関係資料……232
3　漆器……232
4　金属製品・鉄滓……232
(1) 鉄製品・鉄滓　(2) 銅製品・銭貨
5　石製品……234
6　土製品……234
第5節　近世の遺物……235
1　土器・陶磁器……235
(1) 概観　(2) 土器　(3) 陶器　(4) 磁器
2　金属製品……236
(1) 鉄製品　(2) 銅製品・銭貨

第4章　考察……237
第1節　遺構の変遷と構造……237
1　竪穴住居址の変遷……237
(1) 規模と形状　(2) 柱配置　(3) カマド　(4) 諸施設　(5) 軸線の方向

2　掘立柱建物址の変遷……245
(1) 規模と形態　(2) 柱穴・柱間間隔　(3) 棟方向
3　土坑を伴なう掘立柱建物址について……249
第2節　用水と水田開発……252
1　溝址・自然流路の変遷と水利……252
(1) 古代前半　(2) 古代後半　(3) 中世1期　(4) 中世2期　(5) 近世
2　水田址の変化と現条里的景観……258
(1) 古代の水田　(2) 近世の水田
第3節　出土遺物の検討を通して……260
1　竪穴住居址内出土土器の量と器種構成……261
2　竪穴住居址間における土器の接合について……265
3　SB75 における遺物出土状況について……266
4　文字関係資料の出土状況について……269
5　鉄製品の出土状況について……273
6　中世の出土遺物から……279
第4節　遺構群の構成と変遷……281
1　古代における遺構群の構成と変遷……281
(1) 南部北地区　(2) 北部南・中地区　(3) 北部北地区　(4) 南部南地区
2　中世における遺構群の構成と変遷……288
第5節　北栗遺跡における集落の変遷と開発……293
1　古代の開発と集落景観……294
(1) 古代1期　(2) 古代2期　(3) 古代3期　(4) 古代4期
(5) 古代5期　(6) 古代6期　(7) 古代7期　(8) 古代8期
(9) 古代9・10・11期　(10) 古代12・13期　(11) 古代14・15期
2　中・近世の開発と集落景観……299
(1) 中世1期1段階　(2) 中世1期2段階　(3) 中世1期3段階　(4) 中世1期4段階
(5) 中世2期　(6) 近世

第5章　結　語……311

参考文献一覧
発掘調査及び執筆等の分担一覧
付表

挿 図 目 次

第 1 図　年度別調査範囲と地区名称
第 2 図　各地区割付図
第 3 図　堆積変換点と主な流路
第 4 図　土層模式図
第 5 図　SK 5・6 実測図
第 6 図　SB 1 実測図
第 7 図　SB 3 遺物出土状況実測図
第 8 図　SB 8 カマド実測図
第 9 図　SB 9 カマド実測図
第 10 図　SB 20 実測図
第 11 図　SB 23 礎石検出状況実測図
第 12 図　SB 27 カマド実測図
第 13 図　SB 31 床下掘り方実測図
第 14 図　SB 33 炭化材出土状況実測図
第 15 図　SB 36 柱穴断面図・カマド実測図
第 16 図　SB 42 カマド・遺物出土状況実測図
第 17 図　SB 43 掘り方・遺物出土状況実測図
第 18 図　SB 49 遺物出土状況実測図
第 19 図　SB 49 カマド実測図
第 20 図　SB 62・63 切合状況実測図
第 21 図　SB 72 遺物出土状況実測図
第 22 図　SB 75 遺物出土状況実測図
第 23 図　SB 76 カマド実測図
第 24 図　SB 78 礎石検出状況実測図
第 25 図　SB 92 掘り方実測図
第 26 図　SB 92 カマド実測図
第 27 図　SB 93 カマド実測図
第 28 図　SB 101 カマド実測図
第 29 図　SB 110 請施設実測図
第 30 図　SB 111 遺物出土状況実測図
第 31 図　SB 127 遺物出土状況実測図
第 32 図　SB 137 礫出土状況実測図
第 33 図　SB 150 実測図
第 34 図　SB 154 礫出土状況実測図
第 35 図　SB 154 カマド実測図
第 36 図　SB 163 カマド実測図
第 37 図　SB 165 礫出土状況実測図
第 38 図　SB 174 礫出土状況実測図
第 39 図　SB 176 炭化材出土状況実測図
第 40 図　SB 183 遺物出土状況実測図
第 41 図　SB 184 遺物出土状況実測図
第 42 図　SB 191 遺物出土状況実測図
第 43 図　SB 198・199 遺物出土状況実測図
第 44 図　SB 202 カマド実測図
第 45 図　SB 212 礫・遺物出土状況実測図
第 46 図　SB 221 柱穴実測図
第 47 図　SB 225 請施設実測図
第 48 図　SB 229 カマド実測図
第 49 図　SB 233 カマド実測図
第 50 図　SB 236 遺物出土状況実測図
第 51 図　ST 6 断面図
第 52 図　ST 8 断面図
第 53 図　ST 11 断面図
第 54 図　ST 23 断面図
第 55 図　ST 25 断面図
第 56 図　ST 34 断面図
第 57 図　ST 41・42 断面図
第 58 図　ST 57 断面図
第 59 図　ST 59 断面図
第 60 図　SD 3・4・5 実測図
第 61 図　SD 3 断面図
第 62 図　SD 11・12・13 実測図
第 63 図　SD 12・13 実測図
第 64 図　SD 16・SL 1 実測図
第 65 図　SK 43 実測図
第 66 図　SK 50 実測図
第 67 図　SK 333 実測図
第 68 図　SK 334・343 実測図
第 69 図　古代土坑の長軸と短軸関係図
第 70 図　SK 379 実測図
第 71 図　SK 435 実測図
第 72 図　SK 612・613 実測図
第 73 図　SK 419 実測図
第 74 図　SK 461 実測図
第 75 図　SL 1 実測図
第 76 図　NR 10 断面図
第 77 図　SB 252 遺物出土状況実測図
第 78 図　SB 254 礫出土状況実測図
第 79 図　SB 255 実測図
第 80 図　SB 267 実測図
第 81 図　SB 270 実測図
第 82 図　ST 81 実測図
第 83 図　ST 87 実測図
第 84 図　ST 88 付属土坑実測図
第 85 図　ST 104・105 実測図
第 86 図　ST 107 実測図

第87図　ST 115 付属土坑実測図
第88図　ST 117 実測図
第89図　SD 30・32・33・36～41 断面図
第90図　SD 48 と想定掘立柱建物址模式図
第91図　SD 54 断面図
第92図　SD 60 断面図
第93図　SD 66・67 平面図・断面図
第94図　SA 13 実測図
第95図　SK 1486・1393 実測図
第96図　SK 740 実測図
第97図　SK 1483 実測図
第98図　SK 1534・1533 実測図
第99図　SK 701・703 実測図
第100図　中世土坑の長軸と短軸関係図
第101図　SK 1502・1620 実測図
第102図　SK 965・1475 実測図
第103図　ST 118 実測図
第104図　近世土坑の長軸と短軸関係図
第105図　SD 69～71・SL 2 実測図
第106図　SD 73～78・SL 3 実測図
第107図　SD 79・SL 4 実測図
第108図　竪穴住居址出土土器の構成
第109図　SB 4 出土土器法量分布図
第110図　SB 23 出土土器法量分布図
第111図　SB 31 出土土器法量分布図
第112図　SB 43 出土土器法量分布図
第113図　SB 49 出土土器法量分布図
第114図　SB 81 出土土器法量分布図
第115図　SB 105 出土土器法量分布図
第116図　SB 111 出土土器法量分布図
第117図　SB 112 出土土器法量分布図
第118図　SB 117 出土土器法量分布図
第119図　SB 191 出土土器法量分布図
第120図　SB 198 出土土器法量分布図
第121図　SB 202 出土土器法量分布図
第122図　SB 213 出土土器法量分布図
第123図　SB 218 出土土器法量分布図
第124図　SB 220 出土土器法量分布図
第125図　SK 435 出土土器法量分布図
第126図　古代墨書・刻書文字集成図
第127図　古代遺構出土石錘長幅比グラフ
第128図　古代土製品実測図
第129図　中世漆器想定復元図
第130図　近世陶磁器・銭貨・銅製品実測図
第131図　竪穴住居址の規模と形状度数分布
第132図　カマド位置・煙道変遷模式図
第133図　竪穴住居址の方向
第134図　掘立柱建物址の規模・形状
第135図　掘立柱建物址棟方向模式図
第136図　土坑付属建物址の規模・形状
第137図　付属土坑の規模・形状度数分布
第138図　土坑の付属する掘立柱建物址模式図
第139図　溝址・自然流路の存続時期
第140図　時期別の流路の変遷
第141図　中・近世の遺構分布と条里的景観
第142図　古代水田址と現条里的景観
第143図　近世水田址と現条里的景観（1）
第144図　近世水田址と現条里的景観（2）
第145図　時期別住居址出土土器量比
第146図　ＳＢ75 遺物出土状況実測図
第147図　墨書・刻書土器分布図
第148図　文字関係資料出土数
第149図　鉄製品機能別円グラフ
第150図　鉄製品時期別出土数
第151図　鉄製品及び関連遺物出土分布図
第152図　鉄製品時期別出土分布図
第153図　南部北地区遺構群時期別変遷図
第154図　北部地区遺構群時期別変遷図
第155図　南部南地区遺構群時期別変遷図（1）
第156図　南部南地区遺構群時期別変遷図（2）
第157図　中世遺構群変遷図（1）
第158図　中世遺構群変遷図（2）
第159図　現条里的景観と中世遺構群
第160図　北栗遺跡集落変遷図（1）
第161図　北栗遺跡集落変遷図（2）
第162図　北栗遺跡集落変遷図（3）
第163図　北栗遺跡集落変遷図（4）

挿表目次

第1表　土坑形態分類表（古代）
第2表　SL 1 プラント・オパール結果抄表
第3表　土坑形態分類表（中世）
第4表　掘立柱建物址一覧表（近世）

第 5 表　土坑形態分類表（近世）
第 6 表　SL 2 プラント・オパール結果抄表
第 7 表　SB 3 出土土器構成表
第 8 表　SB 4 出土土器構成表
第 9 表　SB 15 出土土器構成表
第 10 表　SB 31 出土土器構成表
第 11 表　SB 42 出土土器構成表
第 12 表　SB 43 出土土器構成表
第 13 表　SB 72 出土土器構成表
第 14 表　SB 75 出土土器構成表
第 15 表　SB 81 出土土器構成表
第 16 表　SB 100 出土土器構成表
第 17 表　SB 106 出土土器構成表
第 18 表　SB 111 出土土器構成表
第 19 表　SB 112 出土土器構成表
第 20 表　SB 117 出土土器構成表
第 21 表　SB 125 出土土器構成表
第 22 表　SB 127 出土土器構成表
第 23 表　SB 152 出土土器構成表
第 24 表　SB 173 出土土器構成表
第 25 表　SB 174 出土土器構成表
第 26 表　SB 176 出土土器構成表
第 27 表　SB 181 出土土器構成表
第 28 表　SB 196 出土土器構成表
第 29 表　SB 198 出土土器構成表
第 30 表　SB 202 出土土器構成表
第 31 表　SB 209 出土土器構成表
第 32 表　SB 218 出土土器構成表
第 33 表　SB 220 出土土器構成表
第 34 表　白磁一覧表
第 35 表　墨書土器一覧表
第 36 表　近世土器・陶磁器器種構成表
第 37 表　竪穴住居址時期別深度一覧表
第 38 表　北部南・中地区 8 期住居址深度一覧表
第 39 表　時期別有柱穴住居址数一覧表
第 40 表　カマド構成要素一覧表
第 41 表　住居址内諸施設一覧表
第 42 表　掘立柱建物址規模別一覧表
第 43 表　柱穴据り方規模一覧表
第 44 表　桁行柱間間隔一覧表
第 45 表　土坑付属建物址規模別一覧表
第 46 表　付属土坑規模別一覧表
第 47 表　竪穴住居址出土土器機能別量比一覧表
第 48 表　古代住居址出土土器接合個体一覧表
第 49 表　7 期の住居址出土遺物表
第 50 表　判読文字一覧表
第 51 表　鉄製品機能別一覧表
第 52 表　鉄製品保有指数の推移

付 表 目 次

付表 1　古代竪穴住居址一覧表
付表 2　古代掘立柱建物一覧表
付表 3　中世竪穴住居址一覧表
付表 4　中世掘立柱建物一覧表
付表 5　住居址時期別一覧表
付表 6　古代土器器種構成一覧表
付表 7　墨書・刻書土器・転用硯出土一覧表
付表 8　中世土器・陶磁器出土一覧表
付表 9　鉄製品・鉄滓出土一覧表
付表 10　鉄製品・鉄滓時期別出土一覧表
付表 11　銅製品・銅滓・銭貨出土一覧表
付表 12　石製品出土一覧表
付表 13　砥石出土一覧表
付表 14　土製品出土一覧表

図版編目次（別　冊）

図　版　目　次

図版 1　周辺遺跡範囲図
図版 2　周辺の地形と調査範囲
図版 3　遺構分布図　古代面
図版 4　遺構分布図　中世面
図版 5　古代遺構割付図
図版 6　古代遺構実測図
図版 7　古代遺構実測図
図版 8　古代遺構実測図
図版 9　古代遺構実測図
図版 10　古代遺構実測図
図版 11　古代遺構実測図
図版 12　古代遺構実測図
図版 13　古代遺構実測図
図版 14　古代遺構実測図
図版 15　古代遺構実測図
図版 16　中世遺構割付図
図版 17　中世遺構実測図
図版 18　中世遺構実測図
図版 19　中世遺構実測図
図版 20　中世遺構実測図
図版 21　中世遺構実測図
図版 22　古代遺構割付図
図版 23　古代遺構実測図
図版 24　古代遺構実測図
図版 25　古代遺構実測図
図版 26　古代遺構実測図
図版 27　古代遺構実測図
図版 28　古代遺構実測図
図版 29　古代遺構実測図
図版 30　古代遺構実測図
図版 31　古代遺構実測図
図版 32　古代遺構実測図
図版 33　古代遺構実測図
図版 34　古代遺構実測図
図版 35　古代遺構実測図
図版 36　古代遺構実測図
図版 37　古代遺構実測図
図版 38　古代遺構実測図
図版 39　古代遺構実測図
図版 40　古代遺構実測図
図版 41　古代遺構実測図
図版 42　古代遺構実測図
図版 43　古代遺構実測図
図版 44　古代遺構実測図
図版 45　古代遺構実測図
図版 46　古代遺構実測図
図版 47　古代遺構実測図
図版 48　古代遺構実測図
図版 49　古代遺構実測図
図版 50　古代遺構実測図
図版 51　古代遺構実測図
図版 52　古代遺構実測図
図版 53　古代遺構実測図
図版 54　古代遺構実測図
図版 55　古代遺構実測図
図版 56　古代遺構実測図
図版 57　古代遺構実測図
図版 58　古代遺構実測図
図版 59　古代遺構実測図
図版 60　古代遺構実測図
図版 61　古代遺構実測図
図版 62　古代遺構実測図
図版 63　古代遺構実測図
図版 64　古代遺構実測図
図版 65　古代遺構実測図
図版 66　古代遺構実測図
図版 67　古代遺構実測図
図版 68　古代遺構実測図
図版 69　古代遺構実測図
図版 70　古代遺構実測図
図版 71　古代遺構実測図
図版 72　古代遺構実測図
図版 73　古代遺構実測図
図版 74　古代遺構実測図
図版 75　古代遺構実測図
図版 76　古代遺構実測図
図版 77　古代遺構実測図
図版 78　古代遺構実測図
図版 79　古代遺構実測図
図版 80　古代遺構実測図
図版 81　古代遺構実測図
図版 82　古代遺構実測図

図版 83　古代遺構実測図
図版 84　古代遺構実測図
図版 85　古代遺構実測図
図版 86　古代遺構実測図
図版 87　古代遺構実測図
図版 88　古代遺構実測図
図版 89　古代遺構実測図
図版 90　古代遺構実測図
図版 91　古代遺構実測図
図版 92　中世遺構割付図
図版 93　中世遺構実測図
図版 94　中世遺構実測図
図版 95　中世遺構実測図
図版 96　中世遺構実測図
図版 97　中世遺構実測図
図版 98　中世遺構実測図
図版 99　中世遺構実測図
図版 100　中世遺構実測図
図版 101　中世遺構実測図
図版 102　中世遺構実測図
図版 103　中世遺構実測図
図版 104　中世遺構実測図
図版 105　中世遺構実測図
図版 106　中世遺構実測図
図版 107　中世遺構実測図
図版 108　中世遺構実測図
図版 109　中世遺構実測図
図版 110　中世遺構実測図
図版 111　中世遺構実測図
図版 112　中世遺構実測図
図版 113　中世遺構実測図
図版 114　中世遺構実測図
図版 115　中世遺構実測図
図版 116　中世遺構実測図
図版 117　中世遺構実測図
図版 118　中世遺構実測図
図版 119　中世遺構実測図
図版 120　中世遺構実測図
図版 121　中世遺構実測図
図版 122　中世遺構実測図
図版 123　中世遺構実測図
図版 124　中世遺構実測図
図版 125　中世遺構実測図
図版 126　中世遺構実測図
図版 127　縄文・弥生土器実測図
図版 128　古代土器実測図　SB 2 ～ 5
図版 129　古代土器実測図　SB 6 ～ 9
図版 130　古代土器実測図　SB 9・11・13
図版 131　古代土器実測図　SB 14・15・18
図版 132　古代土器実測図　SB 16・19・20・24
図版 133　古代土器実測図　SB 22・23
図版 134　古代土器実測図　SB 25・27・28
図版 135　古代土器実測図　SB 26・29・30
図版 136　古代土器実測図　SB 31・32
図版 137　古代土器実測図　SB 33・34・36・37
図版 138　古代土器実測図　SB 38 ～ 42
図版 139　古代土器実測図　SB 43・44
図版 140　古代土器実測図　SB 45・46
図版 141　古代土器実測図　SB 47・48・50
図版 142　古代土器実測図　SB 49
図版 143　古代土器実測図　SB 52
図版 144　古代土器実測図　SB 51・53 ～ 56・59
図版 145　古代土器実測図　SB 57・58・60 ～ 62
図版 146　古代土器実測図　SB 62 ～ 66
図版 147　古代土器実測図　SB 66 ～ 68・70
図版 148　古代土器実測図　SB 72・75
図版 149　古代土器実測図　SB 75
図版 150　古代土器実測図　SB 73・74・76 ～ 78
図版 151　古代土器実測図　SB 78・79・81
図版 152　古代土器実測図　SB 81 ～ 84
図版 153　古代土器実測図　SB 83・85 ～ 87
図版 154　古代土器実測図　SB 88 ～ 93
図版 155　古代土器実測図　SB 94・96
図版 156　古代土器実測図　SB 95・97・98
図版 157　古代土器実測図　SB 98 ～ 100
図版 158　古代土器実測図　SB 100・102 ～ 104
図版 159　古代土器実測図　SB 105・106
図版 160　古代土器実測図　SB 107 ～ 110
図版 161　古代土器実測図　SB 110・111
図版 162　古代土器実測図　SB 111・114
図版 163　古代土器実測図　SB 112・113
図版 164　古代土器実測図　SB 113・115・117・118
図版 165　古代土器実測図　SB 119・120
図版 166　古代土器実測図　SB 121 ～ 124・126
図版 167　古代土器実測図　SB 125・127
図版 168　古代土器実測図　SB 127 ～ 129
図版 169　古代土器実測図　SB 129 ～ 131
図版 170　古代土器実測図　SB 132 ～ 134・136・137・139・140
図版 171　古代土器実測図　SB 141 ～ 144

図版 172　古代土器実測図　SB 144・148
図版 173　古代土器実測図　SB 145～147・149～151
図版 174　古代土器実測図　SB 152～154
図版 175　古代土器実測図　SB 154～156
図版 176　古代土器実測図　SB 157・159・160・162・167
図版 177　古代土器実測図　SB 161・163・166
図版 178　古代土器実測図　SB 164・168・169
図版 179　古代土器実測図　SB 169～171
図版 180　古代土器実測図　SB 172～174
図版 181　古代土器実測図　SB 174～176・180
図版 182　古代土器実測図　SB 177・178
図版 183　古代土器実測図　SB 178
図版 184　古代土器実測図　SB 179・183
図版 185　古代土器実測図　SB 181・182・184
図版 186　古代土器実測図　SB 184～186
図版 187　古代土器実測図　SB 186～190
図版 188　古代土器実測図　SB 191
図版 189　古代土器実測図　SB 192・194～197
図版 190　古代土器実測図　SB 198
図版 191　古代土器実測図　SB 199・200・202
図版 192　古代土器実測図　SB 202～207
図版 193　古代土器実測図　SB 207～209
図版 194　古代土器実測図　SB 210～214
図版 195　古代土器実測図　SB 215～217・219・220
図版 196　古代土器実測図　SB 218
図版 197　古代土器実測図　SB 221～224
図版 198　古代土器実測図　SB 224・225・228
図版 199　古代土器実測図　SB 226・227
図版 200　古代土器実測図　SB 229・230・232・234
図版 201　古代土器実測図　SB 233・235
図版 202　古代土器実測図　SB 236・ST 3・11・13・18・21・25・26・41
図版 203　古代土器実測図　ST 42・54・56・57・63・67・SD 16・71・SK 42・43・50・98・343
図版 204　古代土器実測図　SK 35・38・51・55・97・106・162・180・276・333・338・347・379・387・392・402・418・433
図版 205　古代土器実測図　SK 435・443・450・456・511・568・575
図版 206　古代土器実測図　SK 602・614・NR 4・5
中国製輸入陶磁器（白磁）
図版 207　文字関係資料実測図
図版 208　文字関係資料実測図
図版 209　文字関係資料実測図
図版 210　文字関係資料実測図
図版 211　文字関係資料実測図
図版 212　文字関係資料実測図
図版 213　文字関係資料実測図
図版 214　古代金属製品実測図
図版 215　古代金属製品・石製品実測図
図版 216　古代石製品実測図
図版 217　古代石製品実測図
図版 218　古代石製品実測図
図版 219　中世土器・陶磁器実測図
図版 220　中世土器・陶磁器実測図
図版 221　中世土器・陶磁器実測図
図版 222　中世土器・陶磁器実測図
図版 223　中世金属製品実測図
図版 224　中世金属製品・石製品実測図
図版 225　中世石製品・土製品実測図

写真図版目次

PL 1　遺跡周辺航空写真
PL 2　遺跡遠景航空写真
PL 3　遺跡遠景航空写真
PL 4　遺跡遠景航空写真
PL 5　SB 1・周溝・柱穴・炉
PL 6　SB 3・カマド・カマド石組状況
PL 7　SB 7・カマド、SB 8・カマド
PL 8　SB 20・掘り方・カマド・土器出土状況
PL 9　SB 23 礎石状況・カマド遺物出土状況・カマド
PL 10　SB 33・炭化材・カマド
PL 11　SB 42・掘り方・カマド・遺物出土状況・SB 43 床下遺物
PL 12　SB 46・掘り方、SB 47・掘り方
PL 13　SB 49・ピット内遺物・カマド、SB 50 掘り方・ピット内遺物・断面
PL 14　SB 51・掘り方・カマド石組状況、SB 63・カマド
PL 15　SB 66、SB 69、SB 70
PL 16　SB 75・遺物出土状況・カマド遺物出状況
PL 17　SB 76・北側カマド・北側カマド煙道先ピット、SB 78 礎石状況

PL 18　SB 96・カマド、SB 95・石鏃出土状況
PL 19　SB 96・カマド、SB 102・カマド
PL 20　SB 111、SB 112・カマド・SB 120・カマド
PL 21　SB 147、SB 150・カマド
PL 22　SB 154・礫出土状況、SB 174
PL 23　SB 178・礫遺物出土状況・西側カマド・北側カマド
PL 24　SB 218・カマド・SB 221・カマド
PL 25　SB 226・礫出土状況・SB 233・カマド
PL 26　ST 8、ST 12・13・14、SB 21
PL 27　SB 22、SB 23、SB 24・25
PL 28　SB 26、SB 34、SB 39・40
PL 29　SA 1・SD 3 付近、SD 3 断面、SL 1
PL 30　SK 43、遺物出土状況、SK 50、SK 54、
SK 81、SK 333・遺物出土状況・断面
PL 31　SK 343 遺物出土状況・断面、SK 435 遺物出土状況
SK 450 遺物出土状況、SK 97 遺物出土状況
SK 419・礫出土状況
PL 32　SK 251、SK 252・礫出土状況
PL 33　SK 253、SK 254・礫出土状況
PL 34　SK 261・遺物出土状況・SB 262
PL 35　SK 267・遺物出土状況・SB 272
PL 36　ST 88・付属土坑・礫出土状況、ST 90
PL 37　ST 104・105・106・付属土坑
PL 38　ST 107・付属土坑・礫出土状況、ST 119
PL 39　SD 30～35 付近・断面、SD 54
PL 40　SD 56・57、SD 60 付近・土橋・礫出土状況・SD 64
PL 41　SD 61・66 付近、SD 66、SD 69～71 付近
PL 42　SD 73～76、SK 701・礫出土状況、SK 736、
SK 737 礫出土状況、SK 775、SK 843 礫出土状況、
SK 1044
PL 43　SK 933、SK 965、SK 969、SK 1017・礫出土状況・
炭化物出土状況、SK 1018・礫出土状況
PL 44　SK 1203、SK 1325 礫出土状況、SK 1393 遺物出土状
況・木質部出土状況、SK 1533・礫出土状況、
SK 1534・炭化物出土状況
PL 45　SK 1539、SK 1567、SK 1568、SK 1569、SK 1591、
SK 1600、SL 3、NR 11 礫出土状況
PL 46　縄文土器、弥生土器・SB 1
PL 47　古代出土土器　SB 3・4
PL 48　古代出土土器　SB 15・20
PL 49　古代出土土器　SB 29・31・42
PL 50　古代出土土器　SB 43
PL 51　古代出土土器　SB 72・75
PL 52　古代出土土器　SB 75
PL 53　古代出土土器　SB 75・81
PL 54　古代出土土器　SB 100・106
PL 55　古代出土土器　SB 106・110・111
PL 56　古代出土土器　SSB 112・117
PL 57　古代出土土器　SB 125・127
PL 58　古代出土土器　SB 127・152
PL 59　古代出土土器　SB 155・169・173
PL 60　古代出土土器　SB 174・176
PL 61　古代出土土器　SB 181・196
PL 62　古代出土土器　SB 196・198
PL 63　古代出土土器　SB 198・202
PL 64　古代出土土器　SB 202・209・218
PL 65　古代出土土器　SB 218・220
PL 66　古代出土土器　SK 435・450
PL 67　緑釉陶器、輸入陶磁器
PL 68　文字関係資料
PL 69　文字関係資料
PL 70　古代金属製品
PL 71　古代金属製品
PL 72　古代銅製品、古代石製品
PL 73　古代石製品・土製品
PL 74　古代土製品
PL 75　古代石製品
PL 76　中世土器・陶磁器
PL 77　中世土器・陶磁器
PL 78　中世土器・陶磁器
PL 79　中世土器・陶磁器
PL 80　中世土器・陶磁器
PL 81　中世金属製品
PL 82　中世銅銭、中・近世銭貨・煙管
PL 83　中世石製品・土製品

第１章　　遺跡の概観と調査の概要

第１節　　遺跡の概観

北栗遺跡は長野県松本市大字島立字鍵田4.274－1などを中心とする奈良井川左岸に所在する。奈良井川を挟んで松本市街と東西に対峙する位置にあり、眼前に北アルプスや美ケ原を望む松本平のほぼ中央にもあたる。鎖川および梓川によって形成された扇状地扇端部の、東向きの緩やかな傾斜面に立地する。遺跡のほぼ中央を境として、南側は奈良井川・鎖川の堆積域、北側は梓川の堆積域と、土層の状況が大きく変化する。標高は600ｍ内外で、全体として南西から北東方向に傾斜している。付近一帯は緩傾斜面を東流する用水堰によって灌漑され、稲作地帯となっている。その水田に囲まれるようにして、いくつかの小集落が散在している。遺跡内や周辺には、信濃三の宮であり延喜式内社である砂田神社や御乳神社などの古社寺が鎮座し、古道とされる仁科道と千国道が走っており、開発の歴史の古いことが想定される。

本遺跡の周辺は、南北両側に位置する南栗・三の宮遺跡をはじめ、西の和田地区を含めて遺構や遺物の密集する地域である。したがって、遺跡は切れ目なく続くと考えられ、遺跡の範囲を明確にできない現状にある。中央自動車道長野線（以下中央道長野線と略す）に関わる本調査では、松本市教育委員会の遺跡範囲を参考に現地形の変換点などを考え合わせ、南栗遺跡との境を堀川、三の宮遺跡との境を境沢と便宜的に定め、南北850ｍの範囲を北栗遺跡とした。東は北栗の集落から奈良井川の西側、西は高綱中学校付近まで広がり、遺跡範囲は数十万㎡以上に及ぶ。

本遺跡の北側部分から三の宮遺跡にかけての地域は、「島立条里的遺構」として古くから調査・研究されてきている。現条里景観を対象に、地割・耕土の深さ・水利・古字・社寺など他方面から総合的に追究する試みは、信濃史学会の総合調査（信濃史学会 1985）など団体・個人で進められて今日にいたっている。一方、考古学的な調査も、戦前からの遺物出土例の丹念な積み重ねによって北栗地区だけでも宅地や水田下に数十地点の遺物・遺構発見箇所が明らかになるなど、先進的な追究がなされていた（藤沢 1939・東筑摩郡・松本市・塩尻市郷土資料編纂会 1973）。近年、松本市教育委員会によって埋蔵文化財の発掘調査が精力的に進められ、現条里的景観の水田下に、古代の遺構が濃密に分布することが確認され、条里の坪区画や田面などが明確にならないとの所見（松本市教委 1985・1987）が発表されたことから、条里の起源と様相の理解に新たな一石を投じている。

このような状況のもとで、当長野県埋蔵文化財センター（以下埋文センターと略す）では、本遺跡を含む条里的地割の残存する地域およびその周辺の調査方法を検討するとともに、調査に先立ちプラント・オパールの分析を通して水田の存否と田面の位置確認を試みた。サンプル採取用の試掘坑における土層断面の観察とプラント・オパール分析の結果から、調査区域全体がかなり濃密に遺構の集中する集落域であることと、その間に水田が存在しそうなことが明らかになった。そこで、集落の変遷過程を明らかにしながら条里あるいは生産址との関係を把握することに調査の重点を置いて、水田址の究明などから地理的環境や土地利用などを含めた開発の歴史を明らかにすることを目的とし、隣接する遺跡全体で調査課題を設定し調査に入った。

遺跡周辺は、中央道長野線建設を機に大がかりなほ場整備事業などが行なわれ、静かな農村としての環境は大きく変化し、かつての条里的景観はほとんど見ることができなくなった。

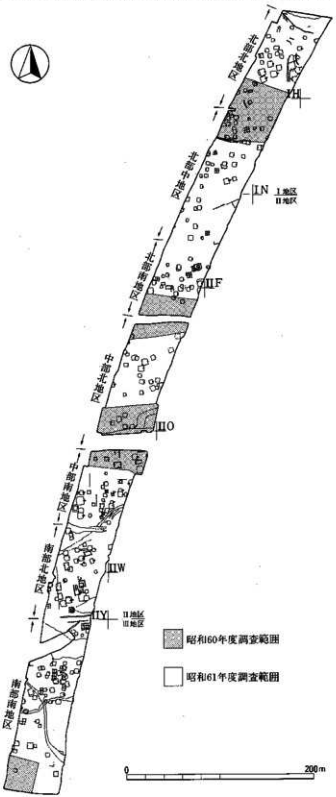
第2節　調査の概要

中央道長野線は、遺跡の西側部分を南西から北東に横断しており、調査対象面積は54，320㎡に及ぶ。調査が開始されたのは昭和60年9月9日であり、冬期間の整理作業をはさんで翌昭和61年10月2日まで、2年度にわたり発掘調査が続けられた。

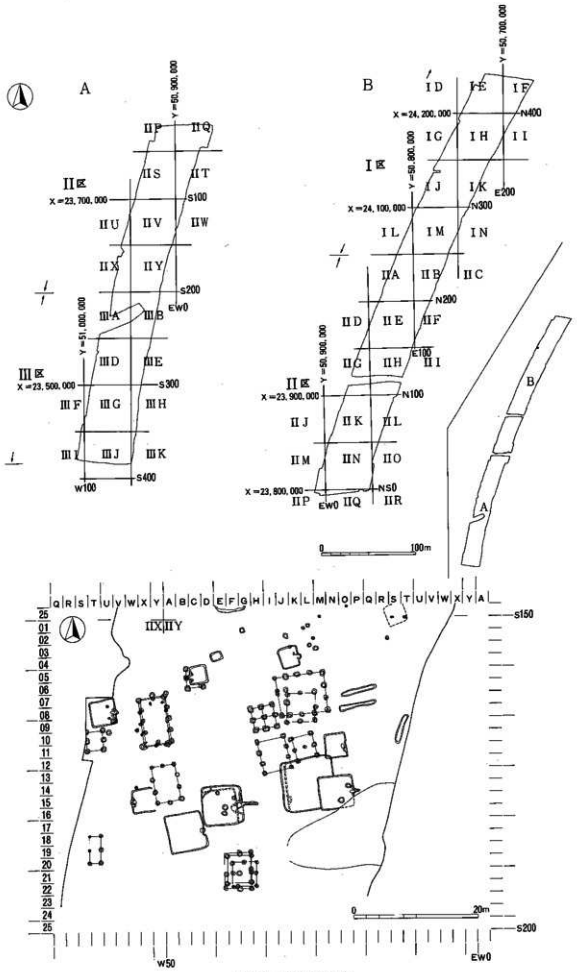
初年度の調査は、ボックス・カルバートや側道建設部分4か所に限って、9月9日から12月11日までの期間で行なわれ、全調査対象面積の約4分の1にあたる14,130㎡が終了した。まず先行トレンチによって遺構の分布と土層の堆積状況を確認したところ、礫層で遺構が密に存在しないと考えていた調査区北側を含め、全域で遺構が検出され、検出面が2面以上あることが判明した。調査研究員10名が2班に分かれて発掘を進め、弥生時代の竪穴住居址1軒、古代の竪穴住居址31軒・掘立柱建物址5棟、中世の竪穴住居址9軒と掘立柱建物址を7棟、その他墓址・土坑・溝址など多数の遺構を検出した。これにより、弥生時代から中世までの集落が複合して存在する、大規模な遺跡になることが明確になった。12月から翌年3月までは、図面の整理と所見のまとめを中心とした整理作業を実施した。

昭和61年4月7日に全体総括1名、土層総括1名のほか調査研究員17名で発掘調査を再開し、同年10月2日までに前年度調査分を除く調査対象面積38,140㎡を全掘した。排土場所の確保や工事工程との関係で、4小班に分かれて地区を細かく区切っての調査となった。新たに検出された遺構は、古代の竪穴住居址204軒・掘立柱建物址66棟、中世の竪穴住居址18軒、中・近世の掘立柱建物址33棟、土坑合わせて約1，500基など膨大な数におよび、主に古代から中世にかけての貴重な資料を提供することになった。発掘調査を続ける一方で、出土遺物の整理・水洗・注記の作業を進めた。発掘終了後10月以降年度末まで、残された遺物の水洗・注記、図面・写真の整理、所見等諸記録のまとめを中心に整理作業を行なった。

調査状況の公開は、各年度1回の遺跡見学会と新聞・テレビなどの報道を通して行ない、遺



第1図　年度別調査範囲と地区名称


A
B
II区
III区
I区
x =23, 700, 000
x =23, 500, 000
x =24, 200, 000
x =24, 100, 000
x =23, 900, 000
x =23, 800, 000
y =50, 500, 000
y =51, 000, 000
y =50, 800, 000
y =50, 900, 000
y =50, 700, 000
S100
S200
S300
S400
N400
N300
N200
N100
N50
E200
E100
EW0
W100
W50
0
100m
20m
S150
IIXIIY

第２図　各地区割付図

物については松本市・塩尻市で３回の速報展を行ない、多数の参加者を得た。

報告書作成に向けての本格的な整理作業は62年４月よりはじめられ、遺物の接合と図化、各種図面の作成、原稿執筆などを経て本報告書の刊行にいたった。

第３節　調査の方法

埋文センターの地区割り付けの原則にしたがい、調査区全域を50ｍの大地区区画に区切った。大地区の設定に当たり、基準点を南接する南栗遺跡の測量基準点から導き出したＸ＝23,800.000・Ｙ＝－50,900.000に定めた。さらに大地区を８ｍ区画の中地区に区切り、２ｍ区画の小地区（グリッド）に分けた（第２図）。標高は工事用杭を利用してベンチマークを設定し、そこから導き出した数値を使った。

細長い調査区に対応するため、大きく３地区に分けて調査を進めた。Ｘ＝24,000.000より北をＥＫＫⅠ、Ｘ＝23,600.000以北をＥＫＫⅡ、それより南をＥＫＫⅢとし、遺構番号等は地区毎に付けた。しかし、北栗遺跡全体からは番号の重複が起こるため、あらためて南より遺構番号の付け直しをし、本報告書の番号はすべて新番号に統一した。

また、遺構の位置などを概略説明するために、平面的にとらえられる遺構の大きなまとまりで、便宜的に７地区に分け、南より南部南地区・南部北地区・中部南地区・中部北地区・北部南地区・北部中地区・北部北地区と呼称し用いている（第１図）。

分層発掘を原則としているが、時間等の制約から中世・古代・縄文の３面で遺構検出をした。縄文面については、遺物が集中的に出土した南部北地区から中部南地区にかけて面的な調査をし、他の部分はトレンチ調査を主としている。

遺物の取り上げは、遺構外の遺物は中地区あるいは小地区ごとの取り上げとした。遺構内については、層位別に取り上げ、竪穴住居址についてはさらに平面的に４区分して取り上げた。床面上やカマド内出土の遺物と遺存状態の良好な遺物は、１点ずつ位置と標高を記録に残した。

遺構等の測量は、原則として簡易遣り方法で行なった。測量基準点や遣り方の設定と標高測量用ベンチマークの設置は、業者委託をして実施した部分が多い。また、遺構全体図と遺構実測図の一部については、業者委託の写真測量を採用した。

第４節　調査の経過

昭和60年度

6月22日　プラント・オパールの調査を実施する。住居址・水田址等の存在を確認する。
9月9日　中部北地区のボックス建設部分および北部地区の側道部分で調査を開始する。
9月20日　中部南地区ボックス建設部分の調査を開始する。中部北地区では中世の掘立柱建物址・大小の土坑・直線的な溝址等が次々に検出される。
10月1日　中部南地区での溝址精査中に瓦塔の破片が出土する。
10月7日　中部地区では中世の遺構検出面の下に古代の遺構が存在することが判明し、本日より遺構検出を開始する。
10月15日　中部北地区では竪穴住居址内より和鏡・鉢等が出土する。
10月25日　本日より北部中地区ボックス建設部分の調査を開始する。
11月1日　北部中地区で礫層を掘り込む竪穴住居址等の遺構が検出され始める。
11月21日　南安曇郡三郷村文化財審議委員７名が視察。
11月26日　北部中地区航空測量を行なう。
12月2日　本日をもって作業員による発掘作業を終了する。
12月7日　遺跡見学会が開催。約40名が参加する。
12月11日　昭和60年度の現場での作業を終了する。
12月12日　図面整理等整理作業を本格的に開始する。
2月24・25日　滋賀大学小笠原好彦氏の指導を受けて、古代集落の学習会が開かれる。
3月7日　次年度調査に向けての準備作業を開始する。

昭和61年度

4月1日　表土除去作業を開始する。
4月7日　発会式が行なわれ、本日より調査研究員17名、作業員150名の体制で調査を開始する。
4月8日　北部北・中地区、中部北地区の３地区で同時に遺構検出を進める。
4月14日　ＳＢＣによるテレビ取材が行なわれる。
4月23日　北部中地区航空測量を行なう。
5月2日　北部中地区ボックス部分の調査を終了する。
5月7日　北部北地区で古代の水田址検出、中部北地区では中世の遺構が多出する。
5月8日　南部北地区の調査を開始する。
5月15日　長野県農事試験所梅村弘氏より、水田土壌等について現地指導を受ける。
5月16日　滋賀大学小笠原好彦氏より、調査全般について現地指導を受ける。
5月21日　宮崎大学藤原宏志氏プラント・オパール試料の採取に来所。水田址の現地指導を受ける。
5月23日　信州大学笹本正治氏他８名見学。
5月27日　北部中地区南半分の調査を終了する。
5月28日　信濃毎日新聞社、中部北地区出土經当の取材。
5月31日　各地区の航空測量を実施する。
6月5日　中部北地区の調査が終了する。
6月6日　本日より北部南地区の調査を開始する。
6月9日　開智小学校児童約90名が見学。
6月12日　南部北地区で縄文時代の遺構が検出される。
6月13日　北部中地区の調査が終了する。
6月20日　南部南地区の調査を開始する。
7月3日　中部南地区の調査を開始する。
7月9日　北部北地区の調査を終了する。
7月20日　現地見学会が開かれる。雨天ながら約400名の参加があり盛会であった。
7月23日　南部南・北地区を中心に航空測量を実施する。
8月20日　中部北地区の調査が終了する。
8月22日　県遺跡調査指導委員会の現地指導が行なわれる。航空測量を実施する。
9月5日　中部南・南部北両地区の航空測量を実施する。
9月19日　南部北地区の調査を終了する。
9月27日　最後の航空測量を実施する。
9月30日　中部南地区の調査を終了する。発掘終了式。
10月2日　南部南地区の調査が終了し、本日をもって発掘調査が終了する。
10月3日　本格的な整理作業を現場プレハブで開始する。
12月1日　室内での整理作業に入る。
3月31日　本日までに図面整理・所見の書き込み等を完了。

昭和62年度

4月1日　遺物の接合・実測、各種図面の作成など報告書作成に向けての基礎的な作業を開始する。

昭和63年度

4月1日　原稿執筆、トレースなど報告書作成作業を続ける。

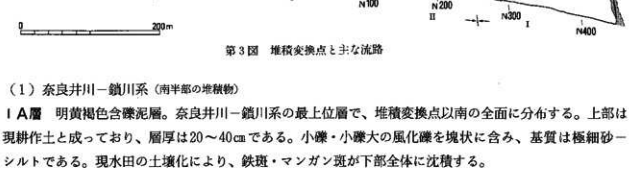
平成元年度

4月1日　報告書刊行に向けての作業を開始する。

第５節　基本層序と微地形

１　基本層序

北栗遺跡では南北の土層の層相が大きく異なる。例えば、基底の礫層は、南半部で硬砂岩・砂岩・頁岩・チャート珪岩から構成されるが、北半部では砂岩・チャート・輝緑凝灰岩・花崗岩・閃緑岩・石英斑岩・流紋岩・安山岩など火成岩を含んだ構成となる。また、礫層を被覆する砂層も、南半部のものは神戸遺跡まで安定して連続するが、北半部のものは若干の変化を持ちながら断続的に分布する。これら南・北半間の層相の相違は、後背地の地質（自然観察資料集作成委員会編 1983）と扇状地堆積物の特性（藤原 1967）から勘案して、南半部の堆積物が奈良井川－鎖川に由来し（奈良井川－鎖川系と呼ぶ）、北半部のものが梓川に由来する（梓川系と呼ぶ）と判断される。従って、本遺跡は合流扇状地の縫合部に当たる。２つの河川系は中部地区中央で指交し、この地点を「堆積変換点」と呼ぶことにする（第３図）。土層模式図は第４図に示し、以下に河川系ごとに分けて記載する。



第３図　堆積変換点と主な流路

（１）奈良井川－鎖川系（南半部の堆積物）

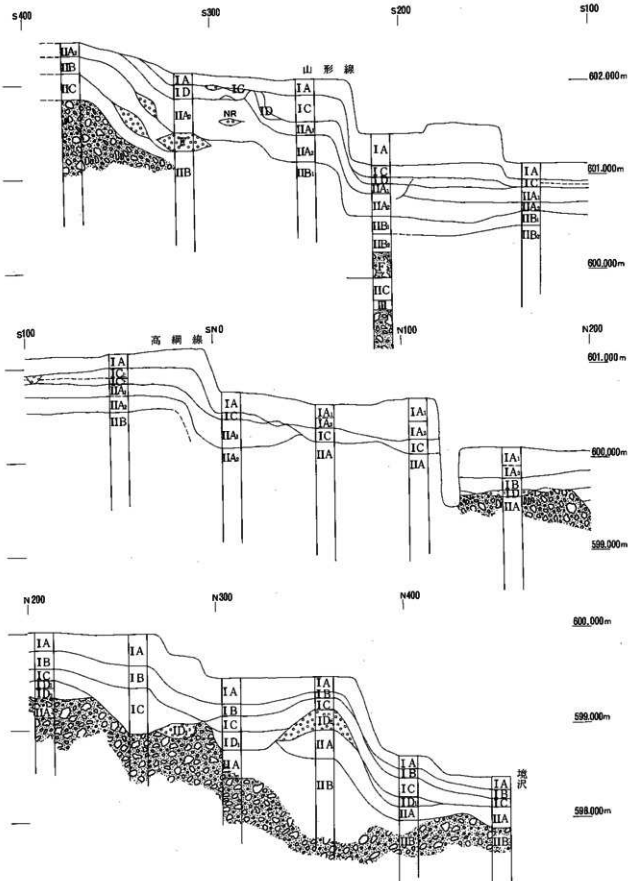
ＩＡ層　明黄褐色含礫泥層。奈良井川－鎖川系の最上位層で、堆積変換点以南の全面に分布する。上部は現耕作土と成っており、層厚は20～40㎝である。小礫・小礫大の風化礫を塊状に含み、基質は極細砂－シルトである。現水田の土壌化により、鉄斑・マンガン斑が下部全体に沈積する。

ＩＣ層　褐色含礫泥層。ＩＤ層とⅡＡ層をおおい、ＩＡ層におおわれる。南部地区北半から堆積変換点付近にかけて分布し、層厚は10～30㎝である。小礫を少量塊状に含み、シルトの基質からなる。粒径組織と塊状構造が発達し、塊間に粘土が充填する特徴は下神道跡・南栗遺跡のＩＣ層と共通し、一連の堆積物であることを示している。なお、上部のほとんどが水田土壌化されている。

ＩＤ層　暗灰黄色または褐色土シルト～細砂層。ⅡＡ層をおおい、ＩＣ層またはＩＡ層におおわれる。南・中部地区境と中部地区南半の流路周辺（NR７･８）、および南部地区南縁の堀川沿いに小分布する。層厚は５～20㎝である。各中小河川に由来する洪水性の堆積物と推察され、分布地点によって層相の変化が見られるが、遺構の切り込み時期との係わりで一括して扱うことにする。

ⅡＡ層　黄褐色土極細砂層。ⅡＢ層・Ⅳ層をおおい、また堆積物変換点付近では梓川系の礫質ⅡＡ層に端部が重なり、ＩＤ層・ＩＣ層におおわれる。南半部の全面に小規模な起伏を持ちながら分布し、層厚は20～50㎝で、南へ厚くなる傾向がある。上部は全体に腐植するが、南縁の堀川沿いではＩＤ層に削剥されている。南栗遺跡など南にある他遺跡と同層相でありながらやや粗粒であり、特に堀川付近は川原砂を楔状に何枚も挟んで粗粒化する。

ⅡＢ層　黄褐色土極細砂層。ⅡＣ層・Ⅳ層をおおい、ⅡＡ層におおわれる。中部地区南縁付近を中心に発達し、下部は若干腐植している。層厚は０～60㎝である。下部は川原砂を含みながら粗粒化し、正級化構造を示す。また、堀川に近付くと河川の影響が顕著となり、礫質となったり斜交葉理を見せたりする。


S400
S300
S200
S100
山形線
602.000m
601.000m
600.000m
S100
高綱線
SN0
N100
N200
601.000m
600.000m
599.000m
N200
N300
N400
600.000m
599.000m
598.000m
境沢

第４図　土層模式図

ⅡＣ層　黄褐色シルト層。Ⅲ層・Ⅳ層をおおい、ⅡＢ層におおわれる。中部地区南縁付近を中心に発達しており、層厚は０～40㎝、腐植した部分はほとんど見られない。

Ⅲ　層　灰赤色シルト層。Ⅳ層をおおい、ⅡＣ層におおわれる。中部地区南縁に小分布し、層厚は20±５㎝である。小礫を散点させるが、Ⅳ層との境界はシャープである。

Ⅳ　層　礫層。本遺跡南半部での基底を構成し、地表下200㎝付近で出現する。中・古生界起源の礫を主に、大～中礫からなり、上限は神戸遺跡より連続しながら徐々に高度を下げ、本遺跡では最も低い標高にある。

（２）梓川系（北半部の堆積物）

ⅠＡ層　灰黄色含礫泥層。梓川系の最上位層で、堆積変換点以北の全面に分布する。上部は現耕作土で層厚は20～30㎝である。小礫・小礫大の風化礫を塊状または下限付近に密に含み、細砂の基質からなる。中・北部地区境周辺で発達し、分布範囲は堆積変換点を越えて南半部北縁まで及ぶ。

ⅠＢ層　黄褐色含礫泥層。ⅠＣ層をおおい、ⅠＡ層におおわれる。主として北部地区で分布し、層厚は０～30㎝である。南方へ楔状に消滅し、中部地区中央以南では見られない。小礫・風化礫をわずかに混入しており、主体は基質部のシルトである。

ⅠＣ層　暗灰黄色含礫泥層。ⅠＤ層をおおい、ⅠＢ層におおわれる。堆積変換点付近を除く北半部のほぼ全面に分布し、層厚は15～50㎝である。小礫を塊状に含み、細砂の基質からなる。上部はほとんど水田土壌化されている。

ⅠＤ層　黄灰色含礫泥層。ⅡＡ層をおおい、ⅠＣ層におおわれる。主として北部地区の低所に分布し、層厚は０～20㎝である。小礫が密に含まれるものと少量含まれるものの２層があり、一部に後者が上位で広く分布する。基質は細砂～シルトで、小礫の含有量が高まると基質も粗粒化し、推定される流体の規模と密度の変化が調和的である。

ⅡＡ層　暗赤褐色極細砂層。Ⅲ層・ⅡＢ層をおおい、ⅠＤ層におおわれる。土壌化に伴なうと思われる色調が特徴で、遺構検出の際の指標とし易い。北半部の全面に分布し、層厚は20～50㎝である。上面は波状に起伏を持ち、小凹地が交互に繰り返す。一般に小凹地では礫を含まない模式的な砂層が厚く堆積し、小凹地では礫質で、下位の基底の礫層（Ⅳ層）に移化している。面的には中絶することなく連続するが、淘汰良好の層相から堆積状況を推測すると、高所で早い段階で離水し、特に北部の低所では離水が遅れた－同一面でありながら離水に時期差があった－ことも予想される。

ⅡＢ層　明黄褐色シルト層。Ⅲ層をおおい、ⅡＡ層におおわれる。北部地区のⅢ層が低い地点で分布しており、層厚は０～100㎝である。ⅡＡ層との境界は漸移的で、色調の相違が分層の指標となるが、上位のⅡＡ層がやや粗粒であり、２つの層の間に層理面の存在を認めたい。

Ⅲ　層　礫層。本遺跡の北半部での基底を構成し、上面に波状の凸凹をもつ。頂部はＥ－Ｗ方向に軸をもち、100ｍ余りを１サイクルとして規則的な起伏を繰り返す。北方へ振幅を大きくしながら、頂・底部の高度を下げていく。礫種は中・古生界起源のものに加え、火成岩が多量に含まれる。

２　遺構切り込み面の微地形

遺構切り込み面は、検出所見から、奈良井川－鎖川系のⅡＣ層上面が縄文時代中期～後期、ⅡＢ層上面が縄文時代後期、ⅡＡ層上面が弥生時代後期、ⅠＤ層上面が古墳時代後期～平安時代末期、ⅠＣ層上面が中世である。一方、梓川系のⅡＡ層上面は奈良時代後半～平安時代前半、ⅠＤ層上面は平安時代中頃～末期、ⅠＣ層上面が中世前半、ⅠＢ層上面が近世とされている。

平安時代前半頃の微地形は、南縁の堀川に沿って自然堤防状の小規模な微高地があり、この地点が最も

高かった。ここから北へ傾斜し、中部地区南縁NR６・７付近で小凹地に至る。さらに、北方へは若干高くなりながら堆積変換点を越えてから、なだらかな波状起伏をもって北へ緩傾斜する単調な地形が展開していた。ここでは小凹・凸地間の斜面や小凹地に竪穴住居址群が立地した。

平安時代中頃になると北半部の小凹地にＩＤ層が堆積し、地形はやや平坦化された。北半部では、この頃から礫質のⅡＡ層またはⅢ層を掘り抜いて小凹地上に竪穴住居址を営んでいる。この間、南半部の地形には大きな変化はないが、小凹地を流れた小河川が住居址を切って拡大したらしい。

中世初頭以降、全域に亙ってＩＣ層がおおい、地形はさらに平坦化した。これを契機に、小凹地を流れていた小河川のあるものは厚い堆積のために消滅し、あるものは復旧または位置を変えられたと推測される。ＩＣ層上面は北・南部地区を中心に広く水田化されるが、小河川のこうした変化と係わることも予想される。

第2章 遺　構

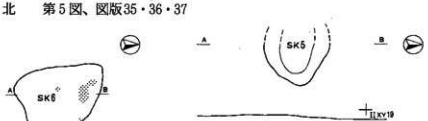
第1節 縄文時代の遺構

古代遺構の調査時に、全域から散発的に縄文時代の土器・石器が出土していた。遺物は時期的には中期後半から後期のものが多く、また地域的に多く認められる傾向にあるのは、調査区域の南側である南部南地区（Ⅲ区）と南部北地区（Ⅱ区）の境界付近であった。この付近は特にⅡ層が厚く堆積している部分である。この周辺を中心にⅡ層を掘り下げた結果、ⅡＢ２層上面、ⅡＣ層上面で合わせて６基の土坑（焼土址）が確認された。

1　土坑

ＳＫ１～６　　位置：南部南・北　　第５図、図版35・36・37

ⅡＢ２層上面で、焼土・炭化物を伴なう不整形の土坑（焼土址）が検出された。土坑は数十ｍの範囲にまとまって５基（ＳＫ１～４・６）が検出され、周囲の同一面から縄文時代中期後半から後期前半までの土器片が散在的に出土した。土坑はいずれも炭化物が混在する焼土層からなるもので、明確な掘り込みを持った土坑はない。焼土・炭化物層は10cmほどの厚さをもち、底面は部分的に落ち込むものが認められ、凹凸がある。遺構中から遺物の出土した土坑はなく、ＳＫ１では焼けた角礫が炭化物の上に位置していた。古代の遺構検出面から２枚の間層を挟んでⅡＢ２層上面で検出されたことや、周囲の遺物の様相から、縄文時代に帰属する火を使用した遺構と捉えた。



第５図　ＳＫ５・６実測図

さらに下層を調査したところ、ⅡＣ層上面で同様の土坑が１基（ＳＫ５）検出された。平面形は不整形を呈するもので、掘り込みは明確に認められ、焼土を多く含んだ粘質土が入っていた。周囲を精査したが、同一面からは、近くで礫が１点出土したほかは、土器片など遺物は認められず、土坑の存在も確認されなかった。従って、遺構の帰属時期は不明である。上面の土坑との関係は不明であるが、同一の目的を果たした遺構と思われる。６基の土坑以外の遺構は認められず、遺物の出土も距離が離れるにつれて少なくなっていく傾向にあった。

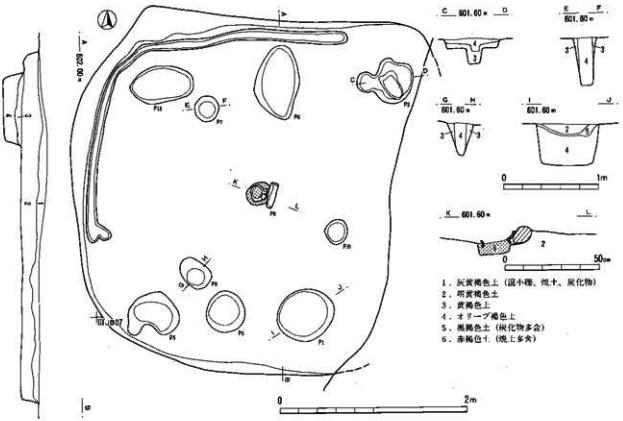
第2節　弥生時代の遺構

遺跡の南端、堀川の北の自然堤防上で、弥生時代の竪穴住居址1軒が検出された。この一帯は、堀川の氾濫などによって削平されている部分が多い。

中部南地区（Ⅱ区中央）では、古代遺構の調査時に覆土などから弥生時代の土器が数点認められたが、それに関係する遺構などはまったく検出できなかった。

1　竪穴住居址

SB1　位置：南部南　第6図、図版6・23、PL5



第6図　SB1実測図

検出：ⅡB層で黄褐色土の落ち込みとして検出した。現耕土直下での検出のためプランを確定するのが難しかった。東側ほど水田耕作で削平され、東壁は全く確認できなかった。炉：ほぼ中央で埋甕炉を検出した。床面を掘りくぼめた掘り方の中位に、口縁部から体部上半までの甕を逆位にして埋めている。土器の内部には焼土が多量に詰まっており、周囲の床面にも焼土・炭化物が散っていた。甕に接して焼けた細長い石が床面に置かれるように残存していた。床：ⅡB層主体の黄褐色土の掘り方上面が部分的に硬くなっており、この面を床と考えた。しかし、耕作の影響が大きくはっきりとしなかった。柱穴：床面精査の結果、大小12基のピットが検出された。柱痕跡が認められるピットが4基あるが、位置からピット2・7・9が主柱穴と判断した。南東部の未検出の柱穴と合わせ4本柱が想定でき、中央に近いピット10は補助柱穴ととらえたい。そのほかのピットは不整形なものが多く、大きな炭化材が出土したピット1以外は本住居址に帰属するかを含めて明確にならない。諸施設：西壁から北壁にかけて周溝らしき浅い溝が認められる。埋没：覆土は耕作で攪乱されており、焼土・炭化物の多いこと以外はよく分からない。埋甕炉に用

いられた土器(1)のほかは、遺物はほとんど認められない。帰属時期：埋甕炉に用いられた土器から、弥生時代後期に帰属する竪穴住居址と考える。

第3節 古代の遺構

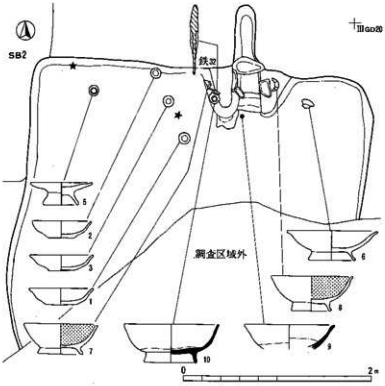
古代の遺構は、調査区の全域にわたって検出されている。しかし、時期別に区切ってみると、空白域になる部分も多く、古代を通してほとんど遺構の構築されない場所も存在しており、遺構の分布にはかなり粗密がある。第1章で触れたように、遺構は平面的には南部南地区から北部北地区の7か所の大きな単位にまとめることができる。検出された遺構の総数は、竪穴住居址235軒（付表1）、掘立柱建物址71棟（付表2）、溝址23条、柵址9条、墓址9基、土坑577基、鍛冶址2基であり、そのほかに水田址が1面、自然流路が10条確認されている。

竪穴住居址は、時期ごとの増減が激しく、まったく構築されなくなる場所や、位置を移動させている例がみられる。住居址の規模や形状、柱穴の有無やカマドなどの諸施設などは、時期を追って変遷を認めることができる。掘立柱建物址と溝址・柵列址は、竪穴住居址と近接した位置にあることが多く、軸線の方向の一致など両者には密接な関係を指摘することができる。墓址と土坑は、場所を限って集中しており、そのほかの場所にはほとんど存在しない。

1 竪穴住居址

SB2 位置：南部南 図版6・24

検出：ⅠD層に相当する砂層中にオリーブ褐色土が落ち込んでいる。西半分は用地外であり、東壁南側をわずかにSB3に切られる。カマド：両袖の残存と考えられる褐色土の高まりが検出できた。火床は床面を掘りくぼめずに構築されており、わずかに焼土が認められるが範囲などは明確にならない。奥壁は急に立ち上がり煙道へ続いている。床：地山の砂層の上を粘性のある暗灰黄色土で硬く貼床している。埋没：単一層で、遺物量は少ない。遺物出土状況：カマド左側の北東隅より須恵器鉢A(1)と土師器甕B(2)が床面から出土している。時期：遺物が少なくやや不明確であるが、切り合うSB3の時期の遺物以外は5期に帰属するので、5期と考えた。



第7図 SB3遺物出土状況実測図

SB3 位置：南部南

第7図、図版6・24、PL6

検出：ⅠD層中に褐色土の落ち込みとして検出された。南東部は年度当初にいれたトレンチによって破壊されてしまった。北西隅でSB2と切り合う。プラン確定の際の観察の結果、SB3の方が新しいことが明確

になった。カマド：石組カマドで、袖石や天井石が残るなど遺存状態は比較的良い。袖石は右袖に2個、左袖奥に1個検出され、床を少し掘りくぼめて据えてあった。左袖奥の石はやや内側に倒れており、手前の石は抜かれていた。天井石は袖手前と奥壁にかかる位置に平石2個を水平に置いている。ただし手前の石は袖石が抜かれたためやや左に傾いている。いずれの石も火を受けているが、燃焼部側の内面以外にも焼けた跡が認められ、ほかの住居址のカマド石が再利用された可能性が高い。このほかにも周りに袖石らしき礫が転がっており、いくつかカマド石が使われていたと考えられる。袖石の周囲には覆土に良く似た褐色土が構築材として残存していた。火床はほとんど掘りくぼめず、焼土などもわずかであるが、焚口前方に炭化物や灰などが広く分布していた。奥壁がなだらかに立ち上がってそのまま煙道へ続く。床：地山の砂層が平坦にされているが貼床かどうかははっきりしない。遺物出土状況：単一層の覆土には遺物が散在し出土量は少ない。右袖の上と脇から黒色土器A椀(8)、土師器椀(6)、左袖の上と西から黒色土器B椀(7)、土師器杯3点(1～3)、灰釉椀(10)、鉄鏃（図版214－32）など、また北西隅近くの床面から土師器盤B(5)が出土した。いずれも完形に近くほぼ原位置を保っている。時期：残存状況の良い遺物から、13期に帰属する住居址である。

SB4　位置：南部南　図版6・24

検出：調査区の西境に沿って南北に長くいれたトレンチの断面観察時に、ID層ににぶい黄褐色土の落ち込みが認められ、ID層上面から切り込む住居址として検出された。西壁のほとんどはトレンチによって破壊されてしまった。カマド：両袖に3個ずつ、深い掘り方に埋まった状態で袖石が検出された。奥の袖石の上には平たい天井石が組まれており、右袖手前の石の上にもそれらしき石が水平に位置する。そのほかいくつかの石が火床の上などに残存しており、SB3に類似する多くの石を組み合わせたカマドが想定される。袖石は粒子の細かい黄褐色土で固定されている。火床では深い掘り方の上に良く焼けた焼土層が認められた。奥壁はほぼ垂直に立ち上がるが煙道は確認できない。床：中央部から南にかけてはやや粘性のある黄褐色土を薄く貼床しており平坦で硬いが、周辺部は砂質で軟弱である。柱穴：北東隅の壁にかかるように小ピットが存在する。本址に帰属すると考えた。機能などは不明である。遺物出土状況：単一層内に散在している。カマド内から出土した羽釜(15)、カマド左脇から出土した土師器甕(14)、中央西寄り床面上の灰釉陶器段皿(12)、覆土中の緑釉陶器椀(11)、不明鉄製品などがある。時期：SB3とカマドの位置や構造が類似するが、出土遺物からはやや先行する12期と思われる。

SB5　位置：南部南　図版6・25

検出：IIA層中に褐色土の落ち込みとして検出した。北壁はほとんど確認できず、北西隅は削平されてしまった。南東隅でSK22と切り合うが、土層観察などでの新旧判断はできず、出土遺物からSK22が新しいと判断した。カマド：明確に検出できなかったが、焼土の広がりなどから北壁から北西隅と推定される。この部分が掘りくぼめられており、焼土に混じって遺物が多出した。床：小礫の地山の上に褐色土で貼床しており、全体に硬くなっている。遺物出土状況：北西部カマド掘り方内に偏在しており、須恵器杯が2点(1・2)完形で逆位に出土し、甕(4・5)もみられた。2は墨書土器（図版207－1）である。時期：カマド掘り方から出土した遺物から、5期と考えた。

SB6　位置：南部南　図版6・25

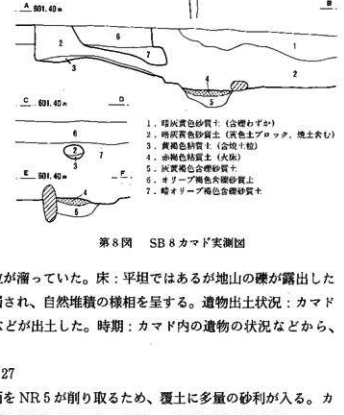
検出：IIA層に暗褐色土が落ち込んでいる。南西部半分をNR1によって削り取られている。カマド：北東隅付近の床面に少量の焼土と炭化物が認められ火を受けた礫が何個か転がっているので、これを破壊されたカマドの残存物と捉えた。床：地山の砂質土まで掘り込み暗褐色土を入れて上面を良く固めている。遺物出土状況：北東隅に羽釜の小破片が出土している。時期：時期を決定する根拠に乏しいが、僅かな出土遺物と遺構の位置からは、12あるいは13期の可能性が高い。

SB7 位置：南部南 図版6・26、PL7

検出：ID層の砂質土ににぶい黄褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：北東隅に近い東壁に床面を掘りくぼめて火床を構築している。袖にあたる位置に黄褐色土の高まりが認められ、袖の残存の可能性が高い。焚口付近に火を受けた花崗岩があり、石組カマドと考えた。奥壁はかなり急に立ち上がり煙道にいたる。床：黄褐色土を固めているが、軟弱な部分が多く覆土との区別がつきにくかった。諸施設：南西隅付近床下に直径90㎝深さ15㎝程のピットが検出された。遺物出土状況：カマド袖付近から羽釜(3・4)が出土したほかは散在的である。時期：出土遺物からは12期と思われ、カマドなどの状況もそれを裏付けている。

SB8 位置：南部南 第8図、図版6・26、PL7

検出：ID層下部で暗灰黄色土の落ち込みとして検出した。北東部約3分の1はプラント・オパール試掘坑で破壊されてしまった。カマド：煙道がほぼ完全に残るなど残存状況は特に良い。西壁を掘り込み、床下も40㎝程深く掘りくぼめて構築している。火床は灰色の粘質土を埋めた上を使用しており、良く焼けた焼土層が残っていた。左袖部分に大きな花崗岩の平石が、床下に埋め込まれて立っており、手前に掛かるようにほぼ同じ大きさの平石が水平に検出された。右袖からは袖石や抜き取り痕は確認できなかったが、いくつかの礫が周囲に転がっていた。奥壁はなだらかに立ち上がって煙道に続く。西壁の掘り込みをえぐるように水平方向に煙道入り口が構築され、その奥は地山を掘り抜いてトンネル状の煙道を作っている。緩やかな傾斜をもつ煙道は、いわゆる煙道先ピットに至って垂直に方向を変える。煙道はやや横に扁平な楕円で、内側上部に紫色の焼土がみられた。煙道先ピットは煙道の数倍の口径をもち、少し掘りくぼめられた底には焼土のブロックとスス状の炭化粒が溜っていた。床：平坦ではあるが地山の礫が露出した状態で、貼床などは認められない。埋没：2分層され、自然堆積の様相を呈する。遺物出土状況：カマド燃焼部より土師器小型甕D(5)、須恵器甕(6・7)などが出土した。時期：カマド内の遺物の状況などから、6期と判断した。

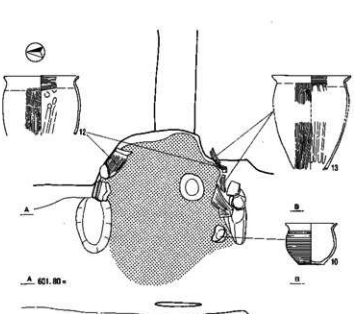


第8図 SB8カマド実測図

SB9 位置：南部南 第9図、図版6・27

検出：ID層ににぶい黄褐色土が落ち込む。上面をNR5が削り取るため、覆土に多量の砂利が入る。カマド：残存状態の良いカマドである。東壁と床面を荒掘りしたのち、両袖に一個ずつ袖石を設置している。左袖石は抜き取り痕のみ確認でき、燃焼部中央やや右寄りから支脚の抜き取り痕と見られるピットが検出された。袖石は粘性の強い黄褐色土で固定されているが、袖から奥壁にかけて土師器甕B(12・13)片がこの粘質土によって貼り付けられていた。土器と接する側の土が焼けていることから、カマド構築時に付加

されたものでなく、使用途中で貼り付けられたと想定できる。付近には構築石材らしい被熱を受けた花崗岩が散乱していた。函形に掘り込まれ急角度に立ち上がる奥壁で、上部に天井部の残痕が確認された。袖と同質の土が用いられ、ほぼ水平に作り出されている。地山を掘り抜いた煙道も完存している。横に扁平な煙道は上半分に紫色っぽい焼土がみられ、緩やかに登って垂直に角度を変え煙出し口にいたる。床：地山の砂利の上に黄褐色土を硬く貼り平坦な床を構築している。諸施設：ほぼ中央の床下から、中に砂利を入れた深いピットを検出した。柱痕は認められなかったが上屋と何らかの関係をもつ可能性がある。カマド右側には焼土・炭化物・黒色土器A杯A(2)・土師器甕Bなどの土器を多量に含むピットがあり、ほかに南東隅床下から小型甕D(11)などの土器片が入るピット、南壁際の中央部よりやや東に須恵器杯(3)などが出土したピットが床下から検出された。埋没：自然流路による砂利の堆積を含め、基本的には自然埋没の様相を示す。遺物出土状況：覆土中より多量の土器が出土した。カマド内出土遺物と接合するものが多く(11・12・13)、南壁際のピット出土の3はカマド内、覆土から出土した破片と接合している。3は墨書土器(図版207−2)、17は転用硯(図版212−110)である。時期：カマド構築材に使用された土器の状況とカマドの形態等から6期と判断した。



第9図　SB9カマド実測図

SB10　位置：南部南　図版6・27

検出：調査区西境にいれた土層断面観察のためのトレンチ断面にⅡA層へ落ち込むにぶい黄褐色土をもつ遺構を確認したが、トレンチによる削平と用地外にかかるため、カマドを含む東側部分をわずかに検出したにとどまった。南側をNR3に切られる。カマド：地山の砂利を掘り残し袖の芯材として利用し、その周囲を黄褐色土で固めている。火床の焼土は厚く、奥壁は緩やかに立ち上がる。床：砂利を掘り抜いているが貼床は認められない。遺物出土状況：単一層で削平著しく、遺物は少ない。時期：遺物量が少なく判然としないが、カマド付近出土の土師器甕の状況からは、5期に帰属すると思われる。

SB11　位置：南部南　図版6・7・27・29

検出：ⅡA層ににぶい黄褐色土の落ち込みとして検出した。西半分は調査区を南北に走るトレンチにかかり、用地外に出る。カマド：床を少し掘りくぼめて火床を構築している。袖石は2個ずつ床に突き込むように立て、黄褐色土で固定している。石に熱を受けた痕跡がないことから、袖石全体が覆われていたと思われる。煙道へは急角度をもって奥壁から立ち上がっていく。床：礫層まで掘り込んだ後、粘性のある黄褐色土をいれて平坦な床をつくっている。諸施設：カマド南側にテラス状の平坦な高まりがある。床下は凸凹が激しく、ピットもいくつか認められたが柱穴と確認できるものはない。遺物出土状況：1・7・12・13がカマドから出土し、うち12・13は北東隅床下ピット、南東隅床下ピット出土のものと接合する。南

東隅に遺物が多く、3・4・8・9が覆土中から出土している。刀子が覆土中より出土している。時期：比較的残存状態の良好な床面出土の遺物から4期と判断した。

SB12 位置：南部南 図版6・7・29

検出：遺跡の土層観察のため南北に横切るトレンチを入れた結果、調査区西側の断面にⅡA層から落ち込むオリーブ褐色土の遺構が認められた。付近を精査したがプランや帰属時期などは確認できず、全体が西側用地外に位置すると思われる。床面は暗オリーブ褐色土を埋め戻して構築している。

SB13 位置：南部南 図版6・7・29

検出：西側カマドと南西隅付近だけが、ⅡA層に褐色土の落ち込みとして検出できた。北側のSB14と切り合い、トレンチによる土層断面観察の結果、本址がSB14を切ることがはっきりした。カマド：西壁を箱形に掘り込んで燃焼部を構築し、火床は床面をわずかに掘りくぼめている。袖や煙道などは確認できない。床：部分的に観察できただけだが、貼床は認められない。遺物出土状況：カマド火床より須恵器甕D(4)、須恵器杯A(2・3)が出土した。時期：カマド内より出土した遺物より、5期と判断した。

SB14 位置：南部南 図版6・7・29

検出：ⅡA層中で褐色土の落ち込みとして検出したが、上部はNR1によって削り取られており、床面直上でなければ検出できなかった。特に北東隅や南部では攪乱が床面にまで及ぶ。南西隅をSB13に切られる。カマド：床面をわずかに掘りくぼめた火床と、褐色土で構築された袖の残存部が確認できた。床：褐色土を入れて上面を叩き締めている。中央部は特に堅緻で貼床しているようにみえる。柱穴：床下の精査で凸凹のある掘り方の四隅に、柱穴と判断できるピットを4基検出した。規模や深さは一定しないが、柱痕跡らしきものが認められるピットもある。遺物出土状況：カマド火床より11、南東隅床面より5、南西ピット付近の床面より9が出土したほかは覆土中に点在している。不明鉄製品が1点、南東隅床面から出土した。時期：切り合いから5期より古いことは確実で、床面遺物から1期に帰属させた。

SB15 位置：南部南 図版6・7・27・29

検出：砂利層に暗灰黄褐色土の落ち込みとして検出されたが、上部は自然流路に削られ、特に北側は床面近くまで削平が及ぶ。西壁にかかるSK39を切っている。カマド：火床直下のみを荒掘りし、石を用いて袖を構築している。焼土の堆積は少なく袖石も花崗岩が散乱している状態である。奥壁は急角度で立ち上がる。床：地山の砂利の上に黒褐色土をうすく入れている。諸施設：南東隅に一辺40㎝程の平石が床に埋め込まれるように置かれている。礎石の可能性がある。カマド焚口前床上には110×60㎝の花崗岩平石が置かれており、台石のような施設と考えたい。西壁際床下に焼土の入ったピットを一つ検出した。遺物出土状況：2・6・10・13・17・21はカマド火床から出土し、9は北壁際中央床面から出土したほかは覆土中に土器が散在する。鉄滓が覆土中にみられる。時期：カマドを含む住居址の形態と出土遺物から、13期と判断した。

SB16 位置：南部南 図版6・7・29

検出：ⅡA層で地山に良く似た暗褐色土の落ち込みとして検出された。上部をNR1で削られ、壁は数㎝残るだけである。南西部では削平が床面にまで及ぶ。カマド：床面を掘り込んだ燃焼部のみ検出できた。袖は掘り残しとも思える地山の張り出しが認められるがはっきりしない。方形に掘り込まれた奥壁は急角度で立ち上がる。床：暗オリーブ褐色土の上面が硬く平坦な床面になっている。床下の掘り方は中央部に比べ周辺が10㎝程低い。遺物出土状況：覆土中からはほとんどみられず、カマド燃焼部に集中していた(1～7)。時期：カマド内の遺物から5期に帰属させた。

SB17 位置：南部南 図版6・7・28・29

検出：NR1の堆積による砂層に、にぶい黄褐色土の落ち込みとして検出した。東側の用水路とSB18に

切られて、南西隅だけが確認できたのみである。SB18との切り合いは、SB18の覆土中にSB17が確認できないことからSB18のほうが新しいと判断した。細かな凸凹のある床面が検出できただけで、住居址と認定するにはやや疑問が残る。時期：SB18よりも古いとすると、5期以前の可能性があるが、出土遺物もなく明確にならない。

SB18　位置：南部南　図版6・7・29

検出：砂層にオリーブ褐色土の落ち込みとして検出される。東側の用水路と南側の先行トレンチによって全体の半分以上が切られている。東側でSB17を切っていると思われ、西壁でSK40を切っている。床：地山の砂礫を荒掘りした後、暗灰黄色で埋めて床を構築しているがやや軟弱である。この掘り方の土には焼土と炭化物が少量含まれる。遺物出土状況：覆土中から出土しており、量的には少ない。時期：遺物の状況から5期と思われる。

SB19　位置：南部南　図版6・7・29

検出：ⅡA層に褐色土の落ち込みとして比較的容易に検出できた。ほぼ中央を用水路が横断し約2分の1は調査不能であった。西壁をST6が切る。当初切り合い関係が判然としなかったが、土層などの検討の結果、本址をST6が切ることが明らかになった。カマド：東壁を函形に掘り込み燃焼部をつくっている。床をわずかに掘りくぼめた火床には、薄く焼土が残る。奥壁はかなり急角度で立ち上がるが、その先の煙道は緩やかな傾斜である。床：地山をそのまま利用しており、中央部は堅緻で周辺部は軟弱である。諸施設：床面精査時東側の両隅に、焼土と炭化物を多量に含むピットを検出した。規模が大きく浅いもので、柱穴の可能性はない。埋没：3分層できる。基本的には同質の土で、レンズ状の堆積から自然埋没と考えたい。遺物出土状況：カマド燃焼部(5)とその周辺の床面(1～3・6・7)からの出土が目立つ。北東隅の浅い落ち込みから出土した須恵器杯B片はSB36（図版137－6）と接合する。覆土中から鎌、鏃（図版214－26）、鉄滓が出土した。時期：床面の遺物から、4期に帰属すると判断した。

SB20　位置：南部南　第10図、図版6・7・30、PL8

検出：ⅡA層中で暗オリーブ褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：床面を深く荒掘りしたのち、袖や火床をつくっている。袖は黄褐色土で固めており、袖石は認められない。火床面の焼土は薄く、その中央部から支脚に用いられたらしい土師器小型甕(3)が倒立して出土した。奥壁から煙道は緩やかに登っている。床：壁際を特に深く荒掘りした後、オリーブ褐色土を埋め戻して平坦な床を構築している。掘り方から炭化物・焼土・土師器甕破片が出土している。諸施設：北壁ほぼ中央部壁際に体部下半を欠いた土師器甕F(9)が、口縁部を床面からわずかにのぞかせた状態で埋設され、蓋をするように土師器甕G(8)があった。掘り方などは認められなかったので、埋設は床面の構築と同時と考えられ、住居使用時に何らかの用途があったと思われる。周囲の床面には焼土や炭化物がみられたが甕の内部には混入していない。北東・南西の両隅付近の落ち込みは柱穴の可能性をもっている。床下掘り方は凸凹が多い。遺物出土状況：覆土中からの遺物の出土は少なく、2・3がカマド内から出土した。掘り方には1・4・5・7などの多くの土師器片が認められた。時期：埋設土器などの出土遺物から1期に帰属する。

SB21　位置：南部南　図版6・7・28・29

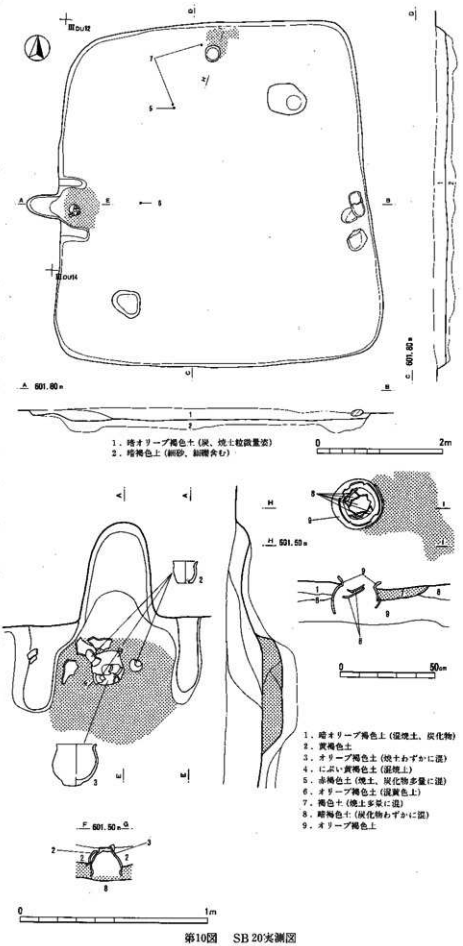
検出：ⅡA層中での検出であるが、NR3による削平が激しく、床面が部分的に露出している状況にあり北東部は存在しない。カマド：床面を荒掘りの後火床面をつくっている。火床を残すのみで不明な点が多いが、袖石抜き取り痕が認められないので石組カマドでない可能性がある。床：砂利層まで荒掘りを行ないにぶい黄褐色土を埋め戻して平坦な床を形成している。遺物出土状況：カマド内の土師器甕以外はほとんど出土しなかった。時期：遺物が少ないなど明確な時期の決定ができないが、カマド内の遺物からは5期か6期の可能性が強い。

SB22　位置：南部南　図版6・7・28

検出：ⅡA層で暗褐色土の落ち込みとして検出された。西半分を用水路に切られ、北側をNR5に切られるなど、検出が難しかった。カマド：右袖に袖石3個が遺存していた。深く荒掘りをし袖石を据え付け、床面と同レベルまで土を埋め戻して火床などを構築している。奥壁はなだらかに立ち上がる。床：地山の黄褐色土まで掘り込み、暗褐色土を混ぜて埋め戻している。南半では硬く締まっている。遺物出土状況：カマド付近から2～8・10～14がまとまって出土し、1は床下調査時に出土したほかは覆土中より出土している。時期：遺物の状況から8期と判断した。

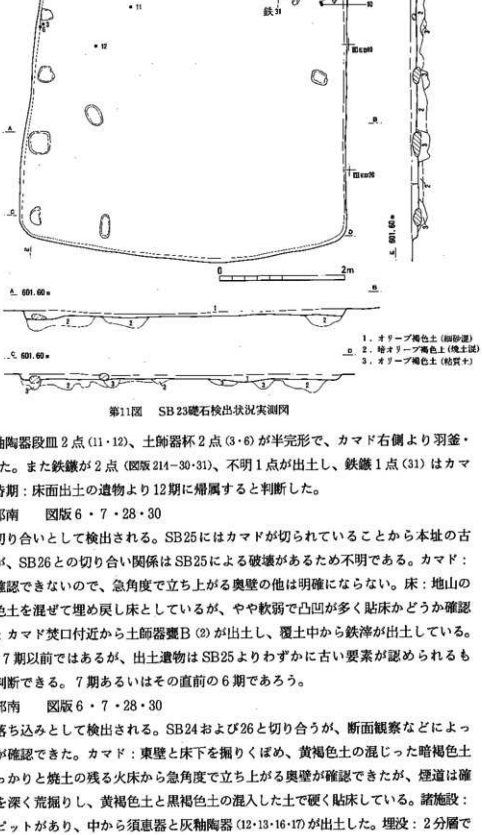
SB23　位置：南部南　第11図、図版6・7・28、PL9

検出：ⅡA層中でにぶい黄褐色土が落ち込む。上面を削平され、一部で床面が露出していた。カマド：荒掘りののち、袖石を設置して火床面を構築している。袖石が左右に2個ずつ床面より僅かに低く据えられている。さらに数個の礫がカマド内に落ち込んでいたので、かなりの石を組んで袖を構築したと想定できる。袖土はほとんど確認できない。



第10図　SB20実測図

奥壁から煙道は緩やかに立ち上がる。床：壁際を深く荒掘りしオリーブ褐色土を貼り床して平坦な床を構築している。諸施設：北壁を除く壁際から礎石と思われる石が出土した。貼床構築後に礎石の掘り方を掘り、貼床とは別の土で固定して据えている。礎石は全部で8個確認されており、扁平な石を水平に置いている。礎石がほぼ揃って検出できた西壁では、各礎石間の距離は110～130㎝を測る。南壁には等間隔に掘り方が遺存しており、東壁北壁でも確認はできなかったが礎石が存在したと思われる。遺物出土状況：北西部床面より灰釉陶器段皿2点(11・12)、土師器杯2点(3・6)が半完形で、カマド右側より羽釜・甑(14・15)の破片が出土した。また鉄鎌が2点(図版214-30・31)、不明1点が出土し、鉄鏃1点(31)はカマド内焼土中にみられた。時期：床面出土の遺物より12期に帰属すると判断した。



第11図　SB23礎石検出状況実測図

SB24　位置：南部南　図版6・7・28・30

検出：ⅡA層にて3軒の切り合いとして検出される。SB25にはカマドが切られていることから本址の古いことが容易にわかったが、SB26との切り合い関係はSB25による破壊があるため不明である。カマド：左側半分を切られ右袖も確認できないので、急角度で立ち上がる奥壁の他は明確にならない。床：地山の黄褐色土を荒掘りし黒褐色土を混ぜて埋め戻し床としているが、やや軟弱で凸凹が多く貼床かどうか確認できない。遺物出土状況：カマド焚口付近から土師器甕B(2)が出土し、覆土中から鉄滓が出土している。時期：SB25より古いので7期以前ではあるが、出土遺物はSB25よりわずかに古い要素が認められるものの、ほとんど同時期と判断できる。7期あるいはその直前の6期であろう。

SB25　位置：南部南　図版6・7・28・30

検出：ⅡA層に褐色土の落ち込みとして検出される。SB24および26と切り合うが、断面観察などによって本址が一番新しいことが確認できた。カマド：東壁と床下を掘りくぼめ、黄褐色土の混じった暗褐色土で袖を構築している。しっかりと焼土の残る火床から急角度で立ち上がる奥壁が確認できたが、煙道は確認できない。床：周辺部を深く荒掘りし、黄褐色土と黒褐色土の混入した土で硬く貼床している。諸施設：カマド焚口左手前に床下ピットがあり、中から須恵器と灰釉陶器(12・13・16・17)が出土した。埋没：2分層できレンズ状の自然堆積を示す。遺物出土状況：土器はカマド周辺出土と床下ピット出土が接合し(14・16)、また西壁近くの床面(1・2・4)から多く出土している。南西隅付近からは石錘(第127図)が、ほかに墨書土

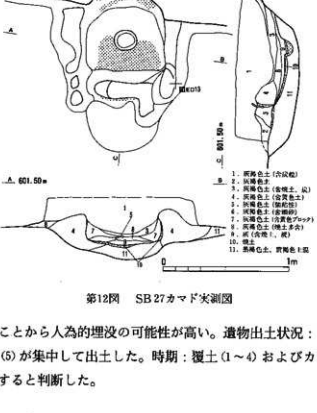
器（図版207－3）が1点、釘が1点出土している。時期：切り合いと床面出土遺物から7期と判断した。

SB26　位置：南部南　図版6・7・28・30

検出：ⅡA層に暗褐色土の落ち込みとして検出されたが、大部分は西側のSB25に切られている。また、東壁をSK41が切る。カマド：黒褐色土とオリーブ褐色土がブロック状に混入する土で両袖を構築している。袖と同じ土を埋めてつくっている火床と奥壁は良く焼けて焼土が残り、奥壁には地山をトンネル状に穿った煙道が検出された。煙道は緩やかにのぼるがその先は削平されて確認できない。床：黄褐色土の地山を荒掘りし黒褐色土とオリーブ褐色土の混入土をつき固めて平坦な床をつくっている。遺物出土状況：カマド燃焼部（3・5・6・8・9）およびその周囲（1・5－5はカマド内出土と接合）から破片ではあるがまとまって出土した。時期：切り合いとカマド内出土遺物から判断して、5期に帰属させた。

SB27　位置：南部南　第12図、図版6・7・30

検出：ⅡA層中で灰黄褐色土の落ち込みとして検出された。北半分でSB28と切り合う。検出面での観察および先行トレンチでの土層観察により、本址をSB28が切っていることが判明した。カマド：床面から東壁を楕円形に掘り込み、黄褐色土ブロックを多量に含む土を盛って袖を構築している。燃焼部の土層を観察すると、火床の焼土の上に炭化物－焼土－袖土の順で堆積しており、天井部が崩落して残存している状態と判断した。火床中央部に支脚の跡と考えられるピットが残っている。やや急角度で立ち上がる奥壁からなだらかで細長い煙道に続く。床：荒掘りは周辺部を深く掘っており、黄褐色土と黒褐色土のブロック状混入土で平坦に貼床をしている。諸施設：西壁際中央床上から大きな角礫が組まれた状態で出土した。位置的には入り口部の施設の可能性がある。掘り方は凸凹が激しくピットの判別が難しかったが、5基が認められた。いずれも柱穴とするには浅い。



第12図　SB27カマド実測図

埋没：単一層で地山の黄褐色土ブロックを多く含むことから人為的埋没の可能性が高い。遺物出土状況：破片が多く量は多くない。カマド内から土師器甕B（5）が集中して出土した。時期：覆土（1～4）およびカマド出土の遺物から、7期もしくはその直前に帰属すると判断した。

SB28　位置：南部南　図版7・30・32

検出：ⅡA層上面で灰黄褐色土が落ち込む3軒の切り合いとして検出された。SB27・29との切り合い関係は、本址が一番新しいことが土層観察などより比較的明瞭に判断できた。カマド：東壁を掘り込んで覆土と良く似た土で袖を構築している。袖土を取り除くと、袖石抜き取り痕が左右一つずつ認められたので、土を主体とする石組カマドと想定した。火床には薄い焼土層が残り、奥壁は急角度で立ち上がる。床：掘り方のくぼみを埋めるように薄く貼床をしてあり中央はほとんど地山のままである。柱穴：3基のピットが検出されたがSB27に帰属する可能性のあるものもあり明確にならない。埋没：4分層されブロックを含む堆積から人為的と判断した。遺物出土状況：3・4がカマド火床から出土したほかは、覆土中からの出土である。不明鉄製品も覆土中から出土した。時期：混入した遺物が多く認められるが、出土遺物から

14期と判断した。

SB29　位置：南部南　図版7・30・32・PL9

検出：ⅡA層上面ではまったく判別できず下面まで下げて褐色土の落ち込みを検出する。西側でSB27・28・30・31と切り合う。いずれも本址覆土内にカマドや床面が存在するので、本址が一番古いと判断した。カマド：残存状況が悪く、床下まで掘りくぼめた火床と、東壁を掘り込みやや急角度で立ち上がる奥壁を確認できたに留まる。袖はまったく確認できなかったが、火床にのる黄褐色土が袖土の残りと思われる。火床中央やや奥壁寄りに土師器小型甕A (4) が2個体重なって、火床上に倒立するかたちで置かれていた。火を受けて焼損が著しいことや、他の住居址の類例から支脚と判断した。床：荒掘りの後薄く黄褐色土ブロックの混じる土を埋め戻して平坦な床にしている。諸施設：床下の荒掘りの凸凹が激しく、柱穴などの検出は難しかった。東壁近くから焼土・炭化物を伴なうピットがいくつか検出された。遺物出土状況：カマド南側床面より非ロクロ土師器杯 (1)、須恵器杯 (3)、カマド右袖脇の焼土をもつピット内から土師器杯・甕 (2・5)、南西部で須恵器フラスコ形瓶 (6) が出土した。時期：カマド内で使用された土師器甕などより、1期に帰属すると明確に判断できた。

SB30　位置：南部南　図版7・30・32

検出：ⅡA層中で灰黄褐色土の落ち込みとして検出される。東側で切り合うSB31と覆土が良く似ており新旧関係などを判断できなかったが、トレンチを入れて土層観察をした結果、本址はそのほとんどをSB31に切られていることがわかった。さらに本址を切っているSK35の存在も明らかになった。床：荒掘りした後で埋め戻して床をつくっているが、全体に軟弱である。掘り方は凸凹が激しく、位置から柱穴と想定できるものもあるが確定できない。遺物出土状況：カマド脇の床下ピットより土師器小型甕C (5) が出土したほかは覆土からの出土である。覆土から鉄滓が出土した。時期：切り合いからはSB31よりも古いことが判明し、出土遺物からもSB31と同様かわずかに古いと思われるので、6期あるいはその直前である。

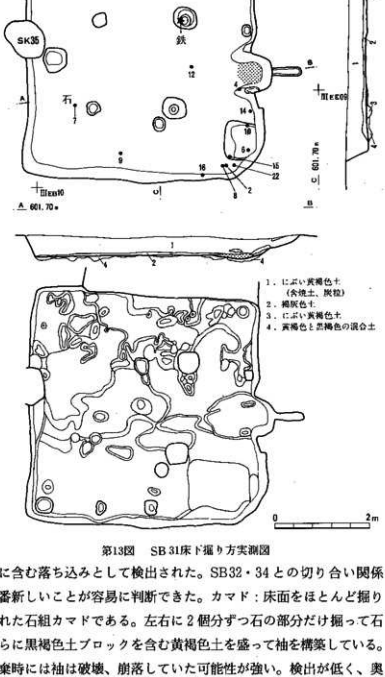
SB31　位置：南部南　第13図、図版7・30・32

検出：ⅡA層中でにぶい黄褐色土の落ち込みが認められたが、切り合いが激しくなかなかプランが確定しなかった。北側のSB32は覆土の違いから一見して本址を切っていることがわかり、SB29を切って本址のカマドが構築されていること、トレンチの断面観察からSB30の床を本址が切り取っていることが明確になった。住居址間の新旧関係はSB29→SB30→SB31→SB32の順であろう。SK35も本址西壁を切る。カマド：比較的小さな袖石を芯に、小礫混じりの黄褐色土で袖を構築している。袖石は両袖に一つずつで、左袖は抜き取り痕のみ検出できた。火床は焚口に近い部分に厚い焼土が認められる。東壁を函形に掘り込んでつくった急角度で立ち上がる奥壁は、最初は地山をそのまま使い、のちに粘土を貼って補修していることが観察できた。床：褐灰色土を埋め戻して上面を叩き締め床を構築している。中央は非常に堅緻であった。柱穴：床下を精査していくと壁際を中心にピット状の落ち込みが並ぶ。位置的には柱穴と考えられるものも多いが、カマド焚口の両脇の2基のピット以外は浅いものが多く、柱穴と認めるにはやや疑問が残る。また、他の住居址のピットの可能性もあるが判別できない。遺物出土状況：出土量は比較的多い。カマド内より黒色土器A杯A (3・4)、土師器甕B (25) が出土し、カマド南側では須恵器杯 (10・14)、また南東隅のピットより須恵器横瓶 (27) が出土し、そのやや上から周辺床面より食器を中心に多くの遺物がみられた。また柱穴かと思われる北東のピットより学引鉄が出土し、南西部分より砥石（図版217−7）が出土した。時期：切り合いから6期と判断し、カマド付近の床面出土土器からも同様の時期と判断できる。

ＳＢ３２　位置：南部南

図版７・32

検出：ⅡＡ層中で灰黄褐色土の落ち込みとして検出されたが、上面のほとんどをSB33に切られている。カマド：SB33に上面を削られ、残存状態は非常に悪い。床面を掘り込んだ燃焼部に薄く火床の焼土が残り、黄褐色土でつくられた左袖の残りが確認された。壁を掘り込まずに構築したらしい奥壁がわずかに認められる。床：壁際を深く荒掘りし、中央部は埋め戻している。中央は硬く周囲ほど軟弱である。諸施設：南西を除く住居址隅に床下ピットが検出された。位置的には柱穴が想定できるが、広く浅いことなど問題が残る。遺物出土状況：カマド焚口手前から黒色土器Ａ(7)、南東隅付近の床面から黒色土器Ａ杯・須恵器杯Ａ(5・8)、北東隅のピットから土師器甕Ｂ(13)が出土した以外は覆土中からの出土が多い。覆土中より鉄滓がみられた。時期：切り合いと床面出土の土器から、７期に帰属すると判断した。



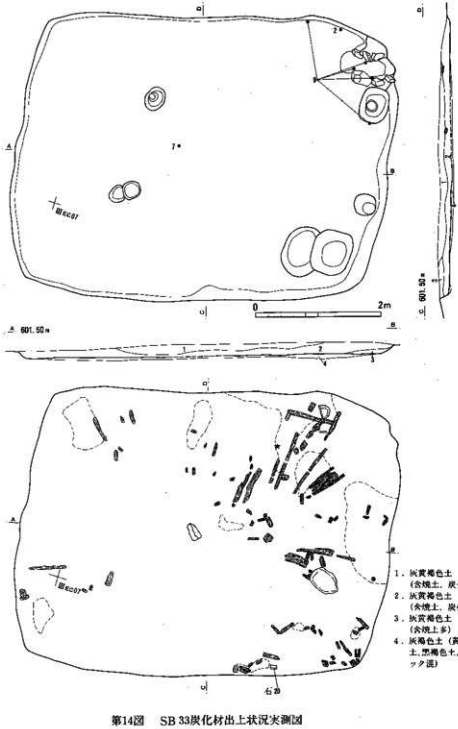
第13図　SB31床ド掘り方実測図

ＳＢ３３　位置：南部南

第14図、図版７・32、PL10

検出：ⅡＡ層上面で焼土、炭化材を多量に含む落ち込みとして検出された。SB32・34との切り合い関係は覆土が全く異なることから、本址が一番新しいことが容易に判断できた。カマド：床面をほとんど掘り込まず、花崗岩の平石を芯にして構築された石組カマドである。左右に２個分ずつ石の部分だけ掘って石を据え、その上にいくつか石を組み、さらに黒褐色土ブロックを含む黄褐色土を盛って袖を構築している。右袖手前の石は内側に傾くなど、住居廃棄時には袖は破壊、崩落していた可能性が強い。検出が低く、奥壁などは明確にできない。床：荒掘りが平坦であることもあってか、わずかに埋め戻した土が認められるがカマド前を除いて軟弱である。柱穴：東壁に接して２基中央やや西寄りに３基検出された。南西の２基は建て替えと考えられ、主軸方向に長い４本柱が想定できる。いずれも形は小さいが深い掘り方をもつ。諸施設：南東隅に規模が大きい割に浅いピットが２基切り合う状態で存在する。覆土の状態から一つは埋められ、もう一つは開口していたと思われる。東壁際の柱穴の中間に台石らしき平石が床面上に置かれていた。埋没：２分層された。上層は黒褐色土ブロックが混じり埋められたと考えられ、その下に焼土、炭化材を多く含む層がある。炭化材は、径５㎝内外の棒状のものが、放射状とそれに直行するかたちで検出された。炭化材の間にカヤ状の細長い炭化物が部分的に認められることから、その大方は屋根材と思わ

れる。棒状のものには樹皮が付いており、加工のあとはほとんど認められない。壁際の柱穴近くに直立する炭化材が見つかっているが、柱とは断定しきれなかった。遺物出土状況：南西部では炭化材とほぼ同レベルで焼けた人骨らしき骨が散乱していた。残存状態が悪く具体的な状況はつかめない。カマド付近より土師器杯・羽釜A（9）が出土し、床面より灰釉陶器椀（7）が出土した。また炭化材とともに不明鉄製品3点、砥石（図版217－20）が出土している。本址は火事による焼失よりも、意図的な焼却の可能性が強いと考える。時期：カマド付近や床面の遺物から、13期に帰属すると判断した。



第14図　SB33炭化材出土状況実測図

SB34　位置：南部南　図版7・32

検出：ⅡA層中で褐色土の落ち込みとして検出される。南半上面をSB33に切られていることもあって、床面での検出となってしまった。またST9とは、ST9の柱穴が本址の覆土中に認められなかったことから、ST9より新しいと考えられる。カマド：上を削平されてほとんど残っていない。床面や東壁をあまり掘り込まないで構築したことが確認できた。床：掘り方は凸凹が激しく埋め土をして平坦にし黒褐色土を硬く貼床しており、周辺部ではほとんど認められない。諸施設：南東隅を削り込むように大きな掘り込みがつくられ、多量の土器（1～5）と焼土、炭化物などが入れられていた。6はカマドから出土している。時期：掘り込み中の土器等から6期とした。

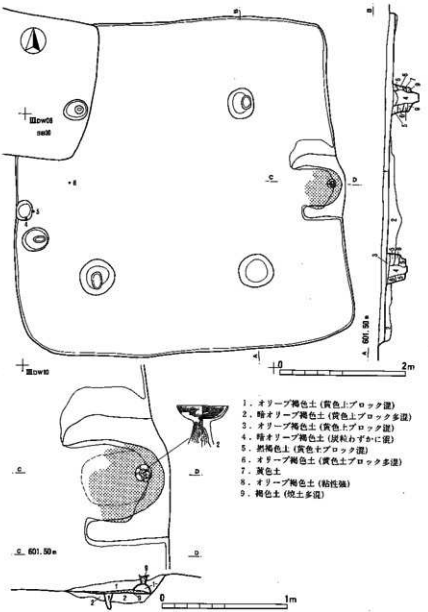
SB35　位置：南部　図版7・32

検出：ⅡA層上部でオリーブ褐色土が落ち込んでいる。プラン確認中覆土の明瞭な違いからST8が本址を切ることがわかった。東側で切り合うSB36・37は土層観察の結果から、本址が両住居址を切ると確認

された。カマドなどの施設は確認できない。床：荒掘りの後暗オリーブ褐色土を埋め戻している。時期：本址に帰属する遺物が明確にならないが、切り合いと5期よりも新しい遺物が認められないことから、4期あるいは5期の可能性が高い。

SB36 位置：南部 第15図、図版7・30・32

検出：ⅡA層上面でSB35・ST8・SK42などいくつかの遺構と切り合った状態で検出された。覆土の識別と土層断面観察によって、いずれも本址を切って構築されていることが確かめられた。また床面精査の段階で、SB37が本址に切られて存在するとされたが、土層や遺物を再検討した結果、本址のほうが古いことが判明した。カマド：床を掘り込み埋め戻してつくられた火床は焼土が厚く残っている。袖は覆土とよく似た土でできており、袖石は認められない。奥壁寄りの火床上に土師器高杯(2)が倒立して置かれており支脚の可能性があるが、その手前に抜き取り痕とも思えるピットがあり、どちらとも判断できない。奥壁の立ち上がりは急角度である。床：黄褐色土と暗褐色土を混ぜた土で床面を構築している。柱穴：各住居址隅に4基の柱穴が確認された。住居址掘り方よりも深く掘られ、柱の周囲を土をサンドイッチ状に固めている。西壁際で2基のピットが並んで検出された。遺物出土状況：西壁際の2基のピットのうち一方で須恵器杯(4)が出土しているが、SB37に帰属するものとも思われる。5もSB37の可能性が高い。本址に確実に伴うものとしてはカマド内出土の1・7・8がある。6はSB19出土のものと接合している。混入を除くと遺物が少ない。時期：カマド内遺物では1～2期頃と思われるが、4期までの遺物が多く含まれており、時期を特定することは難しい。



第15図 SB36柱穴断面図・カマド実測図

SB37 位置：南部南 図版7・30・32

検出：SB36の床面精査中床面とは相違した部分が検出され、それを住居址と認定し、SB37とした。調査時点では一応SB36が新しく本址が古いと考えられた。但し、出土遺物より本址が新しいと再判断される。SB36調査時に十分な検討ができなかった部分があり、不明点が多い。カマド：北東隅から東側にかけて

焼土・焼礫・土師器甕破片が散乱しており、この一角にカマドが存在したと思われるが、既に破壊された状態となっていた。また北壁際中央部にも焼土が確認されている。床：浅く荒掘りした後、埋め戻して平坦な床を構築している。遺物出土状況：カマドと思われる東壁際の焼土中より、土師器小型甕A (1)、須恵器甕A (5) がみられ、さらに東側に土師器小型甕D・B (2・4) が散乱していた。時期：出土遺物より4期に帰属すると判断した。

SB38　位置：南部南　図版7・31

検出：ⅡA層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出した。東壁でSK51に切られ、南壁でST7を切っている。西半分は用地外であった。カマド：SK51に中央を切られ、不明な部分が多い。左袖は地山を掘り残して芯としており、右袖は黄褐色土で硬く固めて築いている。しかし、火床に掘り込みはまったく無く焼土も認められない。床：荒掘りの後くぼみに黄褐色土を入れ平坦な床を構築している。遺物出土状況：カマド横からは2が出土したのみで、量は非常に少ない。時期：カマド付近の床面出土の土器から14期と判断した。

SB39　位置：南部南　図版7・31

検出：ⅡA層上部で褐色土の落ち込みとして検出した。中央部を用水路が横切る。土色の違いで比較的容易にプランの確定ができた。カマド：床下を掘り込み暗褐色土を入れてから黄褐色土で袖を構築している。火床は焼土がきれいに残り、奥壁は急角度で立ち上がる。床：覆土に類似した土で貼床した堅緻な部分が中央部で見られるが周辺は軟弱である。床下の掘り方はかなり凸凹があり、埋めて平坦にしている。柱穴：北東と南西の隅近くに深いピットがあり、形状や位置から柱穴と考えた。他の2か所も想定できるが、用水路にかかり確認できなかった。遺物出土状況：カマド内およびその周辺から土師器甕B (2)、カマド左袖近くから鉄滓少量が出土した。時期：断片的な遺物のみで明確な時期判定ができないが、土師器甕Bなどから5期と判断した。

SB40　位置：南部南　図版7・31

検出：ⅡA層中でオリーブ褐色土の落ち込みとして検出されたが、床面・カマドを部分的に残すのみである。断面精査の結果、本址を切るSB41を確認した。SK52と切り合うが、新旧関係は不明である。カマド：残存状態が悪く、袖・奥壁・煙道などはすでに破壊されている。左袖部分に抜き取り痕が認められ、カマド左側に袖石と思われる礫や粘質土が広がっている。礫・粘質土中に土師器杯 (1・2)、盤B (3) が混在していた。床：荒掘りの後オリーブ褐色土を埋めて平坦な床をつくっている。カマド周辺に貼床らしきものがわずかに残存する。時期：土器の出土量が少なく細片であるが、遺物からは14期に帰属すると判断できる。

SB41　位置：南部南　図版7・31

検出：SB40を検出中に本址のカマドが発見され、精査の結果、カマドのすぐ西で本址の壁の一部が検出でき、SB40を切って本址が構築されていたことが判明した。しかし、検出時点では既に削平されて不明瞭な部分が多い。カマド：火床の焼土のうえに火を受けた礫が散在しており、石組カマドと想定される。カマドから灰釉陶器椀 (1) が出土している。時期：SB40との切り合いから14期以後に帰属すると思われ、少ない出土遺物も該期のものである。

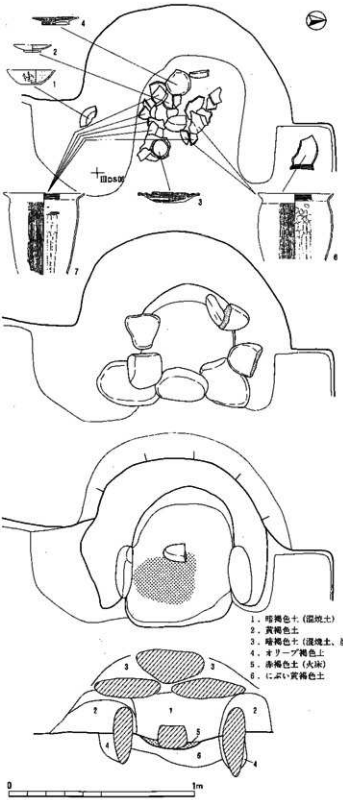
SB42　位置：南部南　第16図、図版7・31、PL11

検出：ⅡA層上部で暗褐色土の落ち込みとして検出された。北側で切り合うSB43とは覆土に違いが見出せず、先行トレンチによる土層断面観察によって本址が切られることが確定した。カマド：遺存状態が良い。西壁と床面を掘り込み、覆土と同じ土を入れて火床面を形成している。その際、袖にあたる部分は地山を掘り残しており、そこに袖石の掘り方を深く掘って、大きく扁平な花崗岩平石をしっかりと据え付け

袖の芯としている。石を黄褐色土でくるむようにして袖を築いている。その上に平石を水平に置き、黄褐色土でくるんで天井部をつくったと考えられるそのままの状態で火床の上に崩落している。燃焼部中央に石製支脚が立っており、なだらかな奥壁へと続いている。床：壁際を深く荒掘りし薄く埋め戻して平坦な床を構築している。中央部は地山がそのまま使われている部分もある。埋没：カマド燃焼部奥寄りから多量の土器が積み重なるように出土した。黒色土器AⅢ(2)、黒色土器BⅢ(4)の半完形品が火床の上に正位に置かれ、その上に土師器甕B(7)の破片が重なり、一気に埋められた状態で黄褐色土主体の土が埋没している。さらにその上に黒色土器B(3)が置かれ、土師器甕B(6)が周辺の破片と接合するかたちで散乱していた。なおカマド左袖から出土した黒色土器A杯A(1)は墨書土器(図版207−4)で、また覆土中より釘・鉄滓・鞴羽口が出土している。覆土はブロックを含む単一層で人為的である。時期：カマド内に廃棄された土器の状況から、7期に帰属する住居址である。

SB43 位置：南部南 第17図、図版7・31、PL11

検出：ⅡA層上部でオリーブ褐色土の落ち込みとして検出され、南側でSB42を切る。カマド：荒掘りの後オリーブ褐色土を埋め戻して火床などを成形している。その際左右2個ずつの袖石を据えて芯とし、単黄色土でつき固めており、袖石には被熱を受けた形跡が残っている。火床には焼土がほとんど認められず、中央奥寄りに石製支脚が据えられていた。奥壁から煙道は緩やかな傾斜である。床：壁際を深く荒掘りし、くぼみを埋め戻して平坦な床を構築している。灰釉陶器椀16の出土した東側床面には、50×30㎝の範囲に約10㎝の高まりのある焼土集中域がみられ、この焼土溜まりからカマドにかけて床面には炭化物層が薄く広がっていた。荒掘り面を露出させると、壁際は凸凹が激しくピットらしい掘り込みも数多い。西壁際中央の焼土・炭化物が充満するピットの底から、植物遺体らしきものが入った土師器杯A(4)と、それに蓋



第16図 SB42カマド・遺物出土状況実測図

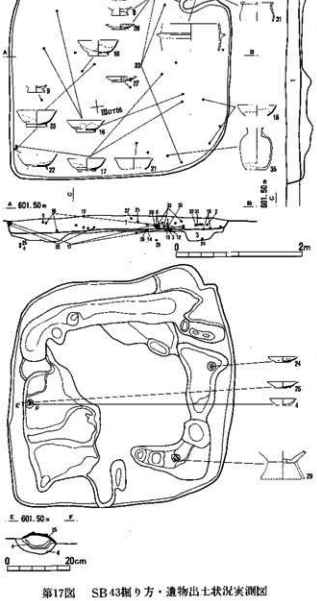
をした灰釉陶器段皿（25）が出土した。東壁際のほぼ対称的な位置から灰釉陶器皿（24）の完形品が出土している。「地鎮め」的な施設として注目される。遺物出土状況：単一層の覆土下位および床面で完形・半完形の土器が第17図に示したように出土した。また、焼土溜まり付近の覆土中より銅滓の付着した坩堝の出土があった（図版215−45）。時期：良好な残存状況を示す出土土器から、12期に帰属することが判明した。カマドの形態なども該期の特徴が認められる。

SB44　位置：南部南　図版7・33

検出：ⅡA層中で暗オリーブ褐色土が落ち込む。北東部でSB45と切り合い、トレンチによる土層断面観察の結果本址のほうが新しいと判断した。規模が小さく、カマドや柱穴などの施設は認められない。床：壁際を深く荒掘りし、黒褐色土主体のブロック土で埋め戻している。中央部は堅緻であるが周辺は軟弱である。埋没：ブロックを含む単一層で、遺物の出土はほとんど無い。時期：明確に時期を特定することはできないが、出土土器から14期と判断した。

SB45　位置：南部南　図版7・33

検出：ⅡA層上部で暗オリーブ褐色土の落ち込みとして検出され、南西隅をSB44に切られる。カマド：西壁を少し掘り込み、床面と同レベルまで土を埋めて火床をつくり、覆土に黄褐色土を混ぜた土で袖を構築している。良く焼けて厚い焼土層の残存する火床中央に、掘り方の底まで深く埋めた石製支脚が立っていた。急角度で立ち上がる燃焼部の奥壁に接して上面の平らな花崗岩が据えられている。床：壁際を深く荒掘りして黒褐色土と黄褐色土がブロック状に混じる土を埋め戻している。全体に軟弱で床面の特定が難しかった。凸凹の多い床下で、カマド周辺には焼土・炭化物の多い不定形の落ち込みや規模の大きな円形の落ち込みが認められるが、柱穴などは明確にできない。遺物出土状況：カマド内およびその周辺から黒色土器A杯A（3）、土師器甕（11・13）、カマド左袖脇にある床下から検出されたピットより黒色土器A杯A（1・2）、須恵器杯A（5）、土師器甕（9・12）、北西隅覆土中から須恵器杯A（4）、土師器小型甕D（8）、甕C（9）が出土し、9は覆土と床下のものが接合している。覆土中より刀子・鉄片が出土している。時期：カマド付近の出土遺物から、6期に帰属すると判断した。



第17図　SB43掘り方・遺物出土状況実測図

SB46　位置：南部南　図版7・32・33、PL12

検出：ⅡA層上部でオリーブ褐色土の落ち込みとして検出した。ST9と切り合うが、本址の煙道がST9の柱穴を切っている。カマド：荒掘りし黄褐色土を埋め戻した燃焼部の両脇に、同じ黄褐色土で袖を構築

している。左袖はかなり破壊されており、袖石や抜き取り痕は認められない。奥壁から煙道へなだらかに登っていく。床：壁際を深く荒掘りし黒褐色土と黄褐色土の混合土を埋め戻している。中央部がやや高いが、比較的硬く平坦である。遺物出土状況：北西側床面から須恵器杯A (4)、カマド北側床面から須恵器杯A (5)、中央部やや北寄り覆土中より刀子・不明鉄製品が出土している。時期：細片ではあるが土器の点数は多く、4期に帰属すると判断した。

SB47　位置：南部南　図版7・32・33、PL12

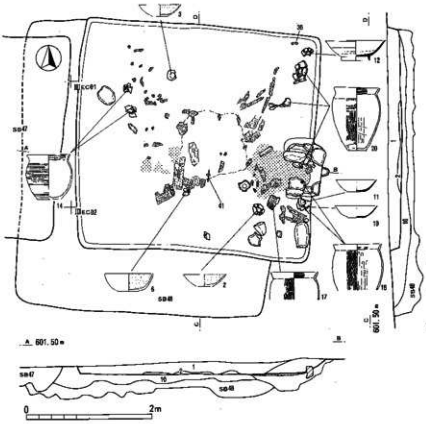
検出：ⅡA層上部でオリーブ褐色土が落ち込む。東側のSB48と切り合い、検出面での確認と断面観察によって本址が新しいと判断した。西壁際からカマド付近にかけて上面の攪乱が及んでいる。カマド：深く荒掘りし埋め戻して火床面をつくっている。右袖は黄褐色土が使われており、燃焼部に接して袖石の可能性のある礫が立っている。攪乱で左袖は破壊されている。奥壁と同角度で煙道が壁に掘り込まれる。床：壁際は深い荒掘りで、埋め土して平坦にしているがやや軟弱である。中央部は地山をそのまま使用しており堅緻である。遺物出土状況：土師器甕B (3) がカマド火床から、カマド左袖脇より黒色土器A杯A (2)、SB48と切り合う東側で須恵器杯B (1)、甕B (4) が出土している。時期：出土遺物より7期に帰属しSB48よりもやや後出的と判断した。

SB48　位置：南部南　図版7・32・33

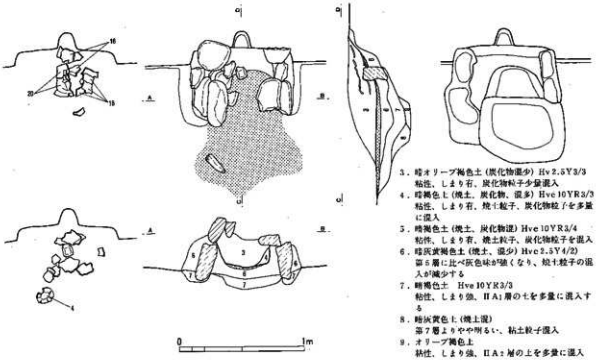
検出：上面をSB47・49に削り取られ、かろうじてプランは確認できたものの、大きく削平されている。カマド：SB49構築時にほとんど削平されてしまい、焼土の広がる火床とオリーブ褐色土で築かれる袖基部が検出できた。床：荒掘りの後黒褐色土と黄褐色土の混じった土を埋め戻して、平坦で非常に硬い床を構築している。荒掘りは壁際で深く、中央部では埋めていない部分も多い。柱穴：それぞれの隅に主柱穴と想定されるピットが4基、床面と床下の精査で検出された。ほぼ同じ規模と深さであり柱痕跡などは認められない。南東隅ではさらに2基の柱穴が確認されたが、それと対になるようなものは見当たらない。遺物出土状況：8がカマド火床から、2が右袖付近床面から、4が北東隅床面から、3・9がピット内から出土している。時期：切り合いから7期よりも古いが、出土土器は7期の様相であり、SB47より若干古いものの、該期に帰属させた。

SB49　位置：南部南　第18・19図、図版7・32・33、PL13

検出：ⅡA層上部で検出。SB48とほとんど重なる。覆土に焼土・炭化物が混入しているため、SB48の上面を切って構築されていることが明確にできた。カマド：袖の遺存状態などが良い。壁を函形に掘り込み、大形の花崗岩を中心に石を組んで袖を構築している。両袖に2個ずつ浅い掘り方に据えられており、その上に天井にかかるようにがっちりと石が組まれ、暗灰黄褐色土で固定している。袖土と同じ土で埋められた燃焼部は良く焼けており、奥壁に近い位置に石製支脚が据えられている。急角度で立ち上がる奥壁と、僅かながら煙道が検出された。床：SB48を埋め立てて構築しているため、やや軟弱である。柱穴：柱穴は確認できなかったが、南東隅と西壁際床面上に花崗岩平石が置かれており、礎石の可能性がある。埋没：検出面が低いので単一層であるが、床面上には焼土と炭化材が広がっていた。特に中央部で重なるように出土しているが、火事などによる焼失とは状況が異なる。遺物出土状況：カマドおよびカマド周辺からの出土が目立つ。カマド内からは黒色土器A杯A (4) と土師器甕B (16・18・20) が重なって入っており、燃焼部を土器で封鎖したような状態である。カマド右脇のピットからは黒色土器A杯・椀 (5・8・9) が3個正位で重なって出土した。同じく右脇床面から軟質須恵器杯 (10・11) 2個、焚口付近から黒色土器A杯A (2)、北東隅から灰釉陶器椀 (12)、苧引鉄（図版215－36）、住居址中央部より鉄製紡錘車（図版215－41）などが出土している。鉄製品としてはほかに釘・棒状鉄製品がみられる。時期：カマド内およびカマド付近出土の土器と切り合いから、8期に帰属すると判断した。



第18図　SB 49遺物出土状況実測図



第19図　SB 49カマド実測図

SB50 位置：南部南 図版7・33、PL13

検出：ⅡA層上部で暗灰黄褐色土が落ち込むが、東壁から中央部にかけて上面からの攪乱を受けている。カマド：攪乱のため煙道の一部が残存しているだけである。床：壁際を主に荒掘りを行なった後黒褐色土で埋め戻して平坦な床を構築する。中央では地山をそのまま床としている。諸施設：南東隅で規模の大きな落ち込みを検出した。焼土・炭化物・土器（2・3・5・9・12）が多出した。遺物出土状況：1は墨書土器（図版207－5）で、ほかに2点ある（同図版6・7）。刀子・不明鉄製品各1点が出土している。いずれも覆土中からの出土である。時期：落ち込み出土の土器から、7期と判断した。

SB51 位置：南部南 図版7・32・33・34、PL14

検出：ⅡA層上部でカマド石が検出されたがなかなかプランがつかめず、ⅡA層下面まで掘り下げて検出できた。SK56・57と切り合い、トレンチによる断面観察の結果SK57を切りSK56に切られることが判明した。カマド：荒掘りをした後両袖に1個ずつ袖石を据え、さらに石を組み暗褐色土で固めている。左袖には裏込めの石も確認された。火床には厚く焼土が堆積している。床：壁際を深く荒掘りし、黄褐色土を埋め戻して平坦な床を構築している。遺物出土状況：カマド内から破片（1～4）が出土したほかは非常に少なかった。時期：出土量は少ないが、カマド出土の土器などから、8期に帰属すると判断した。

SB52 位置：南部南 図版7・32・33・34

検出：ⅡA層中で検出した。SB53と重なるように切り合い、本址が暗オリーブ褐色土の落ち込みとしてSB53を切ることは検出面で判断できた。カマド：左袖が比較的良く残っており、前方の袖石と暗褐色土の袖土で固められているようすが確認できた。奥壁から煙道は緩やかに立ち上がり、長い煙道になりそうである。床：荒掘りはだいぶ凸凹があるが、中央部と壁際が高い傾向がある。暗褐色土と黄褐色土の混入土を埋め戻しており、中央部は堅緻である。埋没：単一層であり黄褐色土のブロックが混じることから人為的と考えたい。遺物出土状況：遺物量は多い。1～3・5・11・15・17・29・32・33・34はカマド火床および火床手前から、9・26・31は北西隅床面から、12は北東隅床面から、またピット内遺物として7・8・20、中央部北東寄りのピットから、35は中央部より北西寄りのピットから、10・37は床下調査時に出土している。ほかは覆土中から出土している。この中で、8・11は墨書土器（図版207－9・8）で、ほかに2点（同図版10・11）あり、また14は刻書土器（図版212－108）で、ほかに1点（同図版107）がある。土器以外の遺物も多く、鉄製品としては刀子（図版214－14）がカマド近くから出土しているほか、覆土中より刀子2点、金具1点、棒状鉄製品3点、鉄片2点、不明2点がみられ、鉄滓も出土している。砥石は4点（図版216・217－14～16）あり、うち15は北西寄りから、16は南東床面から出土し、また鞴羽口小片（図版218－5）が覆土中から出土している。時期：出土土器から8期への帰属が考えられるものの、西側に隣接するSB51とは同時存在はしない。やや本址が古い様相を示すが、前後を明確にできなかった。

SB53 位置：南部南 図版7・34

検出：ⅡA層中で検出されたが、SB52にほとんどを切られ東壁とカマドの一部を確認したに留まった。カマド：壁を掘り込み立ち上がりの急な奥壁とゆるやかな煙道が部分的に認められた。遺物出土状況：煙道より1が出土した。時期：出土遺物はきわめて少ないが、SB52へ混入した土器を含めて、一応4期と判断した。

SB54 位置：南部南 図版7・33・34

検出：ⅡA層上部で暗褐色土の落ち込みとして検出された。煙道の東側が用地外にかかる。カマド：大きく荒掘りし、にぶい黄褐色土を埋め戻して燃焼部を形成している。袖は褐色土が使われ袖石は認められない。焼土の残る火床の左寄りに石製支脚らしき礫が転がっていた。壁を函形に掘り込み急角度で立ち上がる奥壁から煙道へ続く。床：荒掘りをしてから10cmほど埋め土をし、平坦な床を構築している。床下に

は10基ほどの落ち込みが見られるなど凸凹が多い。遺物出土状況：カマド燃焼部から土器（1・4・7・8・11～14）片が多量に出土し、うち13は床下南壁際のピット内出土のものと接合、ほかに北西隅床下ピット内から3と15、北東隅床下ピット内から6が出土している。不明鉄製品と砥石が覆土中から出土している。時期：カマド出土土器などから、6期に帰属すると判断した。

SB55　位置：南部南　図版7・33・35

検出：道路の下で攪乱が多く、また覆土と地山の判別がつかず、火床の焼土が確認されてからの検出になったため、床下の掘り方が残存しているだけである。SB56と切り合う位置にあるが、検出が低すぎ、新旧の関係を明確にできなかった。床：荒掘りはかなり凸凹があり、暗灰黄褐色土で埋め戻している。遺物出土状況：土師器小型甕D（5）が南東部で焼土とともに出土し、その反対側に西側で軟質須恵器（2）が掘り方より出土している。時期：遺物が少ないことから判然としないが、7期と判断した。7期の中では新しいと捉えられる。

SB56　位置：南部南　図版7・35

検出：ⅡA層上面で焼土が認められ付近を精査したところ床下の掘り方が残存していた。道路部分にかかっているため上面の削平が進んでいるが、床面はⅡA層上面よりも高く施設のほとんどは残っていない。カマド：かろうじて火床と思われる焼土面を捉えることができた。荒掘りを一旦行なった後埋め戻しながら、袖や火床面を形づくっている。袖は残存せず、袖石抜き取り痕と思われる落ち込みが左袖の位置に存在している。床：凸凹の激しい荒掘りをし、褐色土を埋め戻している。北側部分に床面の可能性のある平坦な面が残る。遺物出土状況：火床付近に土器片（1・2）が散乱していた。時期：カマド付近から出土した土器で判断すると、5期に帰属する。

SB57　位置：南部南　図版7・35

検出：ⅡA層上部で暗オリーブ褐色土の落ち込みが認められ、精査の結果南壁をわずかにSD2に切られ北西部分が攪乱を受けている本址を検出した。カマド：東壁を大きく掘り込み燃焼部の半分程を壁の外につくり出す。西側に焼土の厚く残る火床中央部を掘り込んで、支脚として使用されたらしい土師器小型甕D（3）が、倒置の状態で据えられている。袖はまったく確認できず、奥壁は急角度で立ち上がる。床：比較的平らに荒掘りをして暗褐色土を埋め戻している。遺物出土状況：カマド内に集中している（1～4）。時期：カマド内の土器から6期と判断した。

SB58　位置：南部南　図版7・35

検出：道路下の調査になったため、検出が難しかった。南側は攪乱を受けて存在せず、北西部は道路工事のため破壊されており、さらに東側は調査区域外に出てしまう。覆土にST11の柱穴が掘り込まれているのが、断面観察によって確認された。西壁の一部もSK76に切られている。床：荒掘りの後黒褐色土を埋め戻して平坦な床を構築している。掘り方はかなり凸凹があり落ち込みもいくつか見られる。遺物出土状況：北西隅付近の床面から1・2・5・6と銅鏡が出土した。時期：出土土器から5期と考えられ、ST11を間にしてのSB59との切り合いでも同様の結果が出ている。

SB59　位置：南部南　図版7・35

検出：ⅡA層中で暗オリーブ褐色土の落ち込みとして検出され、東側半分以上が調査区域外にかかるがプランの検出は容易であった。ST11の柱穴を本址のカマドが切っている。カマド：西壁を掘り込み、袖石は下を掘り込んで据えている。左袖に2個の袖石が残存し、右袖には大きな抜き取り痕が残っていた。奥壁近くに焼土の入った落ち込みがあるが、支脚としては奥に寄りすぎる。函形に掘り込まれ急角度で立ち上がる奥壁から緩やかに登る煙道へと続く。床：荒掘りをしてくぼみを埋め戻す程度に土を入れ、平坦な床を構築している。遺物出土状況：遺物は少なく、覆土中から出土している。時期：SB58との切り合い

も考え合わせ、7期と判断した。

SB60 位置：南部北 図版8・37

検出：ⅡA層上面でオリーブ褐色土の落ち込みとして検出された。土色の違いからSD47に切られていることや、プランについては容易に判断できた。カマド：袖の部分を掘り残して芯とし、黒褐色土を含む暗褐色土で袖を構築している。燃焼部は深く荒掘りし黄褐色土を入れており、焼土の厚く残った火床が認められる。奥壁はかなり急に立ち上がる。床：オリーブ褐色土を数cm入れて平坦な床を構築している。柱穴：北東・北西両隅で床下の落ち込みを検出した。遺物出土状況：カマド焚口(2～5)と南西隅付近の床面でほぼ完形の須恵器杯A(1)が出土したほかは散見する程度である。時期：床面出土の土器から判断して5期とした。

SB61 位置：南部北 図版8・37

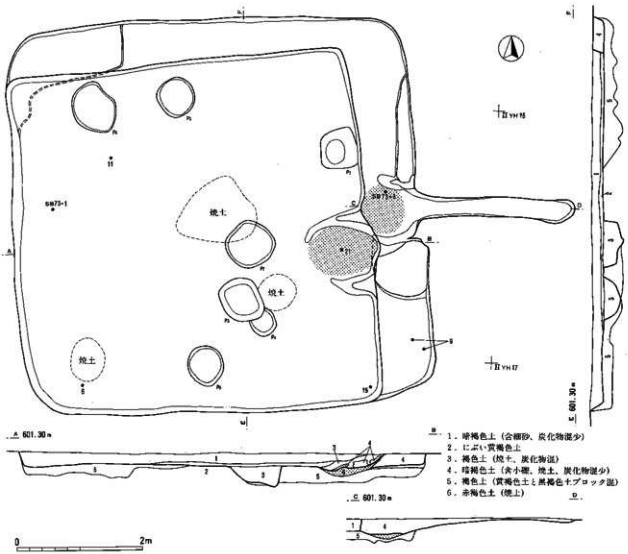
検出：ⅡA層上面で検出、覆土が黄褐色土のためⅡA層との判別は容易であった。カマド：深く荒掘りをして暗オリーブ褐色土などを入れ、燃焼部をつくっている。火床には10cm以上の厚さに焼土が残り、奥壁は急角度で立ち上がる。暗褐色土を主体とした袖が壁際で部分的に認められる。床：荒掘りは平坦に掘られており、褐色の砂質土を薄く貼床している。床下に数基の落ち込みが認められ、位置的には柱穴の可能性もあるがいずれも浅い。埋没：2分層され自然堆積の状況を呈する。遺物出土状況：土器はカマド内から須恵器杯B(5)、土師器小型甕D(9)が出土し、南壁中央壁近くにあるピットから土師器小型甕B(7)と須恵器甕E(10)、床下から須恵器杯蓋B(3)、土師器小型甕D(8)が出土した。北壁際床面上から土錘(図版218-13)が1点出土している。時期：山土土器と、隣接するSB62・63とは同時存在できないことから、両住居址よりも古い3期とした。

SB62 位置：南部北 第20図、図版8・37

検出：ⅡA層上面でオリーブ褐色土が落ち込み、検出は容易であった。SB63の内側に「入れ子」の状態で構築される。SB63の覆土に本址のカマドが存在することから切り合い関係ははっきりつかめたが、覆土が類似するためプランを確定するのが難しく土層の観察によって決定した。カマド：床面をわずかに掘りくぼめ黄褐色土で袖をつくっている。東壁をわずかに掘り込んだ奥壁は緩やかに立ち上がっている。床：地山を直接使用しており平坦で堅緻である。床下にピットがいくつか存在し、焼土と炭化物を含む。SB63の施設との判別が難しかった。遺物出土状況：北壁中央際のピット2から須恵器杯B(7)、ピット1からは15が出土し、南東隅出土の破片と接合している。またピット4からは14、ピット5から17～19が出土した。カマド内からは16・21がある。このうちピット4・5はSB63の可能性がある。SB63に帰属する可能性のあるものは、1・20があり、SB62の床下から出土した。床面出土のものとしては6・11がある。時期：切り合いから、SB63の建て替えとして、その直後と考えられるが、遺物からも裏付けられ、両址の出土土器ともに同じ4期で、本址がやや新しい様相をもつとの結果を得た。

SB63 位置：南部北 第20図、図版8・37、PL14

検出：SB62と一緒に検出され、プランは明確に確認できた。カマド：床面をわずかに掘りくぼめた火床に焼土が残る。袖部分には暗褐色土が残存しており袖石は使われなかったと思われる。奥壁から煙道は緩やかな傾斜で、長く煙道が伸びる。袖の外側は壁際が一段高くテラス状になっている。床：SB62と同レベルであり平坦で堅緻である。床下のピットはSB62と区別できない。埋没：赤っぽい土をブロック状に含む単一層で人為的埋没の可能性がある。遺物出土状況：1・9は床面から、8はカマド内から出土している。2～7・10は床下から出土した。時期：切り合いと出土土器から、4期と判断した。



第20図　SB 62・63切合状況実測図

SB64　位置：南部北　図版8・38

検出：ⅡA層上面で褐色土の落ち込みとして検出された。北壁および覆土をST21・22に、東側をSB66・67に切られることは検出面での観察で明確に土色が異なるので容易に判別できた。プラン確認の際西側が不整形になるので、再精査したところ本址にほとんどを切られるSB65の存在が明らかになった。カマド：SB66の床下から焼土や炭化物が多量に出土し、位置的に本址のカマドと想定できるが詳細は不明である。床：荒掘りの後暗褐色土を埋め戻して平坦で硬い床を構築している。諸施設：西壁南側にテラス状の土盛りが検出され、出入り口部の階段的施設とも考えられる。床下では焼土・炭化物の入った2基の浅いピットが検出された。遺物出土状況：西壁近くの床面よりやや高い位置で、植物の茎と葉を重ねた状態の炭化物が多量に出土した。水平に広がりを見せているが、本址に帰属するかどうか明確にできなかった。覆土から遺物が出土したほかは少ない。帰属時期：SB66との切り合いから2期以前と認められ、出土遺物からも2期と判断できる。

SB65　位置：南部北　図版8・38

検出：SB64と同様に検出されたが、大部分はSB64に切られ西壁際が残存するのみである。1軒の住居址の可能性も考えたが、覆土の違いから別の竪穴住居址と認定した。床：荒掘りをし黄褐色土と黒褐色土の混入土を浅く埋め戻して構築している。床下からいくつかのピットが検出されたが、どちらの住居址に

帰属するかなど不明点が多い。遺物出土状況：SB64の床下北東隅から検出されたピットは本址のものと考えられ、ピット内より土師器甕B (4) が出土したほか、西壁から須恵器甕の大破片が出土した。時期：SB64より古いことは確実だが、土器には両址の違いは認められないので、2期に帰属するとした。

SB66 位置：南部北 図版8・38、PL15

検出：ⅡA層上面でオリーブ褐色土の落ち込みとして検出され、プランの確認とSB64を切ることは土色の違いで容易に判断できた。またNR5に南東隅を削り取られることも検出面で捉えられた。カマド：床下を深く荒掘りした後褐色土を埋め戻して燃焼部を形づくり、袖を構築している。燃焼部は東壁を少し掘り込んでおり、奥壁から煙道は比較的緩やかに立ち上がる。床：壁際を深く荒掘りして、その部分に褐色土を埋め戻しており、中央は地山をそのまま床としている。諸施設：カマド左袖脇に焼土・炭化物の詰まり、遺物 (8) を含むピットが位置する。そのほか床下に焼土・炭化物・遺物 (1・6) の入った落ち込みがいくつか認められた。埋没：3分層され自然埋没の様相を呈する。5はSB67出土のものと接合する。時期：切り合いから2期以後に帰属し、出土土器からはSB64よりもやや新しいと判断できる。3期の可能性を含む2期とした。

SB67 位置：南部北 図版8・38

検出：ⅡA層上面で覆土が黄褐色土のプランが明確に検出され、SB64を切ることも容易に確認できた。カマド：浅く荒掘りをしてから暗褐色土を埋め戻して燃焼部をつくり、黄褐色土で袖を構築している。火床には厚く焼土が残り、奥壁は急角度で立ち上がる。床：荒掘りの後褐色土を埋め戻して硬く平坦な床にしている。北東隅で床下に落ち込みを検出したが性格などはわからない。埋没：3分層され自然堆積の様相を示す。遺物出土状況：カマド内 (4・6) と東半 (1～3) を中心に散在する。覆土出土の5は墨書土器（図版207−12）で、カマドから出土した須恵器杯蓋Bは SB66のものと接合する（図版146−5）。時期：切り合いと出土土器から、5期と判断した。

SB68 位置：南部北 図版8・39

検出：ⅠD層下面で不明瞭ながら存在が認められ、ⅡA層上面まで下げて暗褐色土のプランが明確になった。カマド：浅く荒掘りし黄褐色土を埋めて燃焼部をつくっている。暗褐色土でつくられた袖は右袖が比較的良く残存している。焼土が厚く残る火床のやや奥寄りに石製支脚が据えられ、焼土の上には天井部の残りらしい黄褐色土の薄い層がある。東壁を函形に掘り込んだ奥壁は急角度で立ち上がり、その先に煙道がわずかに確認された。床：荒掘りのあと薄く土を入れ平坦な床をつくっているが、カマド焚口前以外は軟弱である。柱穴：カマド袖脇に位置する2基のピットが東側の柱穴と想定できるが、柱痕跡は明瞭にならず対応するピットも検出できなかった。諸施設：南東隅に焼土と炭化物の詰まった浅い落ち込みがある。埋没：ⅠD層主体の単一層である。検出面で南壁にかかって花崗岩の平石が水平を保って出土した。住居址使用時にこの石が存在したとは考えられず、後の耕作などによって持ち込まれた可能性が高い。遺物出土状況：9・10はカマド右袖、7・8はカマド内から出土した。南壁際床面に3・7があり、7はカマド内出土と接合する。4は床下より出土した。時期：床面出土の土器から判断して、4期に帰属する。

SB69 位置：南部北 図版8・39、PL15

検出：ⅡA層上面でオリーブ褐色土の落ち込みとして検出された。カマドがST72の柱穴を切っていることが検出面で明確にわかった。カマド：床をわずかに掘り込んだ燃焼部に焼土が厚く堆積している。暗灰黄褐色土を用いた袖が壁際だけ残存しており、袖石は認められない。西壁を大きくえぐって奥壁から煙道がなだらかに立ち上がる。床：荒掘りはかなり凸凹があるが黒褐色土と黄褐色土の混じった土を埋め戻して平坦にしている。埋没：2分層でき自然埋没の状況を示す。遺物はほとんど無い。時期：カマド内出土の土師器甕などから判断して5期とした。

SB70　位置：南部北　図版8・40、PL15

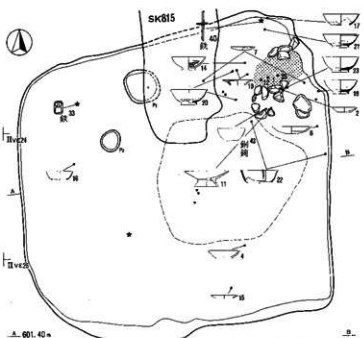
検出：ⅡA層上面でオリーブ褐色土が落ち込み、プランの確認は容易であった。カマド：床を深く荒掘りし土を埋め戻す際に、左右一つずつ花崗岩の平石を据え付け袖石としている。右の袖石は内側に傾き、周囲に袖石らしき礫が転がっている。火床やや右寄りに石製支脚らしい花崗岩礫が残っている。奥壁は壁をきちんと函形に掘り込み垂直に立ち上がる。床：壁際を深く荒掘りし黒褐色土を主とする土を埋め戻しているが、全体に軟弱である。遺物出土状況：カマド焚口上面よりほぼ完形の食器（1～4）が出土した。カマド火床より6～8が出土し、6は内面に炭化物が付着している。時期：カマド付近の食器から7期と判断した。

SB71　位置：南部北　図版8・40・42

検出：ⅡA層中で検出したが床面がわずかに残存する程度であった。カマド：西壁に焼土がかすかに認められたが明確にならない。床：荒掘りをして黒褐色土主体の土を埋め戻すが軟弱である。その上に部分的に残るにぶい黄褐色土が覆土の残存と思われる。時期：切り合いや遺物がまったく認められず、時期の判断が難しいが、住居址の規模や方向と位置関係から、6期あるいは7期に帰属する可能性がある。

SB72　位置：南部北　第21図、図版8・41

検出：ⅠD層で灰褐色土の落ち込みとして検出された。ST26・SK98・SK815と切り合う。SK98には炭化材が多く入っており本址の北壁を切るラインが明瞭に見え、逆にST26の柱穴に本址のプランのラインが引けた。さらに床下の精査中、上面を切られたSK815が発見された。カマド：床をわずかに掘りくぼめて燃焼部をつくっているが、破壊されたらしく残りが悪い。左袖は4個の石組が残っており、カマド前面に花崗岩を中心にした礫が多数転がっていた。床：中央部からカマドにかけて地山の上に薄く黄褐色粘質土の貼床が認められたが周辺部ははっきりしなかった。諸施設：北壁寄りに炭化物の入ったピットが2基検出された。いずれもごく浅い。遺物出土状況：第21図にあるようにカマド周辺に遺物が集中している。焚口前で礫に囲まれるようにして銅鈴（図版215－43）が出土した。北東隅で鉄製紡錘車（図版215－40）、北西部で鉸具（図版215－33）がいずれも床上で出土した。覆土中からは雲母鉄（図版214－4）が出土している。時期：残存状態の良好な土器から、14期と判断した。カマドの形態なども該期の特徴を示している。



第21図　SB72遺物出土状況実測図

SB73　位置：南部北　図版8・41・43

検出：ⅠD層上面で検出したが検出レベルが低く南壁は削平されてしまった。SK735が上面から北壁を、SK736・737が覆土を切り込む。カマド：床を掘り込み、袖石を据えながら褐色土を入れて燃焼部を形成している。右袖に1個左袖に2個袖石が残存するが、周辺に花崗岩の平石などが散乱するのでかなりの石が組み合わされてカマドが構築されていたと思われる。東壁を船底型に掘り込んだ奥壁はなだらかに立ち

上がる。床：礫混じりの地山をそのまま床としており、全体が締まって硬い。遺物出土状況：カマド内から土師器皿(2・3)、甑(7)が出土したほかは少ない。時期：出土土器から判断して、14期とした。

SB74 位置：南部北 図版8・43

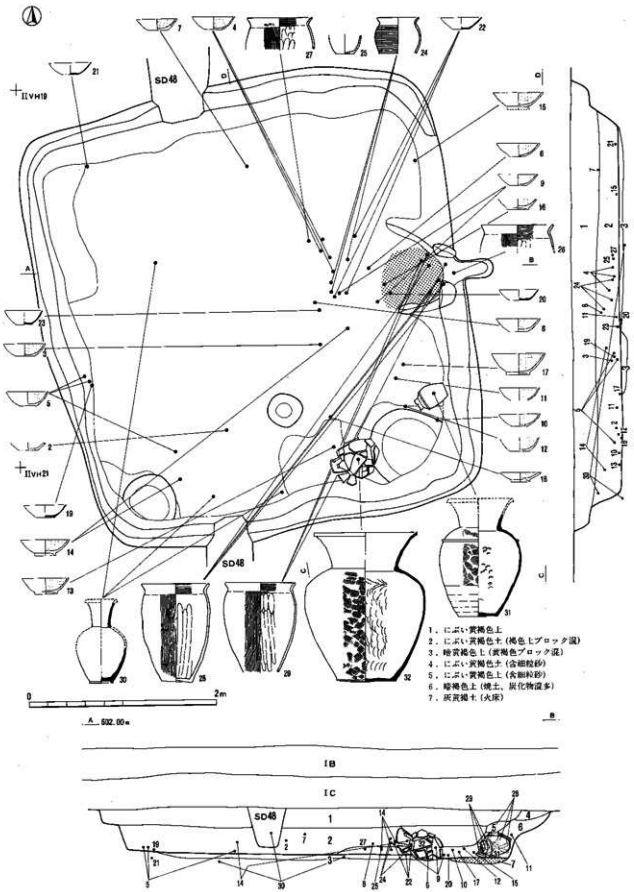
検出：ＩＣ層の遺構検出の段階でカマド部分が発見され、ＩＤ層上面でプランの確認をしたが東側を中心に、上面の遺構でかなり破壊されている。SK744・771～773が覆土と東壁に切り込んでおり、南西隅は調査で削平されている。またNR6を本址が切っている。カマド：床面を掘り込み左右に花崗岩の平石を据えて袖を構築している。掘り方の下部に焼土層が認められるが、火床としては位置が低いように思われる。焚口の手前にいくつかの花崗岩礫が見られた。床：荒掘りの後低い部分に黄褐色土を主とする土を埋め戻して平坦な床をつくっている。諸施設：南東隅に不整形の大きな落ち込みが検出されたが、掘り方の可能性もありはっきりしない。遺物出土状況：土師器羽釜(2)が火床手前から、砥石(図版217−19)が覆土より出土している。時期：出土量は少ないものの14期の遺物が多いことから、14期と判断した。

SB75 位置：南部北 第22図、図版8・41・43、PL16

検出：ＩＤ層ににぶい黄褐色土が落ち込むため明瞭に検出できた。SD48が本址のほぼ中央を南北に横切ることも土色の違いではっきりと確認できた。カマド：床をわずかに掘り込んで築いた火床には厚く焼土が残っており、両脇に袖石が残存している。袖石は右袖手前と左袖奥に一個ずつ据えられており、さらに右袖奥に天井部にかかる平石が水平に位置する。石を芯として褐色土で築かれた袖の内側に土師器甕Ｂ(28・29)の破片を張り付けており、特に左袖で良好に残っていた。奥壁は壁を船底型に削り込み、なだらかな煙道へと続く。床：荒掘りをして黄褐色土を薄く入れ平坦な床を構築しているが、全体に軟弱である。柱穴：南東・南西両隅と南壁際中央寄りに３基のピットが検出された。位置からは柱穴と想定できるが、対応するピットが無く柱痕跡も認められない。南壁際中央部よりの１基については貼床がされていたことより、ある段階の生活時には機能していなかったと考えられる。諸施設：カマド部分を除く壁に、テラス状の狭く平坦な面が巡る。埋没：２分層できるが黄褐色土がブロックに入っており、人為的に埋められた可能性が強い。遺物出土状況：遺物の残存状況が良く、原位置を保っていると思われる出土状態を示すものが多かった。南側壁際に須恵器甕Ｄ(31)、甕Ａ(32)、長頸壺Ａ(30)が、並ぶように西に口縁部を向けて倒れており、西壁際には、土師器杯(2)、黒色土器Ａ杯(3・5)が完形に近く、床面上に正位の状態で出土した。カマド焚口から中央にかけては、床面より高い位置に、食器と土師器甕Ｂが投げ込まれたような状態で多量に出土した。カマド内からも、構築材とされた土師器甕Ｂ以外に土師器甕Ｂ(26)などが出土している。時期：出土土器から判断すると、７期に帰属する。

SB76 位置：南部北 第23図、図版8・41・42、PL17

検出：ＩＤ層中で灰黄褐色土の明瞭な落ち込みとして検出された。北壁と西壁にカマドが存在するので２軒の住居址の切り合いの可能性を考え、断面観察を繰り返した結果、複数のカマドを持つ本址が確認された。カマド：北側のカマドは、床の上に黄褐色粘質土で築かれている。火床に厚く焼土が残り、両脇にも袖土がわずかに残存する。奥壁際の火床上に天井の構築材らしい黄褐色土が認められた。壁をわずかに削り込んだ奥壁から北壁を穿って煙道が斜めに登っていく。煙道の先に30cmほどの深さのピットが構築されている。ピットの手前に花崗岩を組み合わせた施設が確認された。西側のカマドは遺存状態が悪く燃焼部では円形に掘りくぼめた火床が確認できたのみである。奥壁と煙道部は不明瞭であり、炭化物と焼土によって急角度の立ち上がりを検出できた。おそらく西のカマドが廃棄された後北のカマドが構築使用されたのであろう。床：荒掘りをして暗褐色土などで埋め戻している。中央部で硬く周辺は軟弱である。凸凹のある掘り方で落ち込みらしいものも認められたがはっきりしない。埋没：単一層でブロック堆積をしているので人為的埋没と考えたい。遺物出土状況：北のカマド燃焼部内から土師器甕(9)、煙道先ピットか

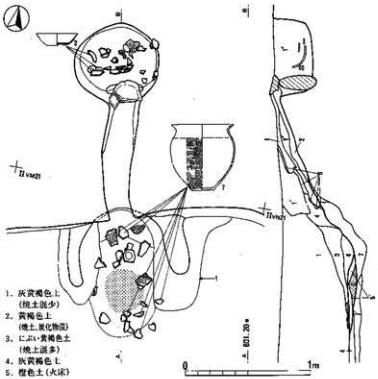


第22図　SB 75遺物出土状況実測図

ら須恵器杯A(2)、土師器甕Bがまとまって出土したほかは、覆土中より土器破片、鞴羽口破片が出土している。時期：出土土器にはやや古いものも混じっているが、6期に帰属すると判断した。

SB77 位置：南部北 図版8・42・43・44

検出：ID層で褐灰色土の落ち込みとして検出され、SK100・101が本址を切って構築されていることも明確に判断できた。土坑の精査中に本址の下にSB78が存在することが明らかになった。カマド：東壁を船底型に削り込み、花崗岩を主に石を組んで構築している。両袖に3～4個の石を掘えその周辺に大小の石を組み暗褐色土で固めており、比較的良好に残っていた。燃焼部の焼土は少なく、奥壁から煙道は緩やかに立ち上がる。床：荒掘りをして黄褐色土主体の土を薄く埋め戻している。中央からカマドにかけて硬化した部分があるが全体に軟弱である。遺物出土状況：カマド内より灰釉陶器椀(3～5)、SB78と切り合わない部分で椀・皿(2・4・8・10)が覆土中より出土した。10は転用硯（図版213-111）で、またカマド右袖より釘が出土している。時期：カマド内と床面出土の土器から、14期と判断した。

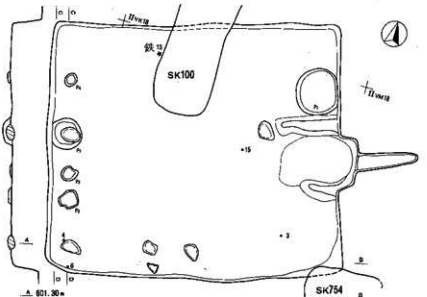


第23図 SB76カマド実測図

SB78 位置：南部北

第24図、図版8・41・42・43、PL17

検出：SB77の床面下で検出されたが、比較的覆土が厚く残りカマドなども良く残存していた。カマド：袖は床面を大きく掘り込んだあと、褐色土を埋め戻し、さらに黄褐色土を使って構築される。燃焼部は、壁を函形に掘り込み、奥壁から煙道にかけては急傾斜で、煙道の先きには煙出しと考えられるピットを有する。火床上面では黒色土器A(11)、甕B(13・14)が出土している。床：荒掘りされた後、にぶい黄褐色土を埋め戻しているが全体に軟弱である。柱穴：南壁際に扁平な花崗岩3個が並び、西壁には同様に並んだ4個のごく浅い掘り込みが検出された。掘り込みの一つには



第24図 SB78礎石検出状況実測図

扁平な花崗岩が入っており、この平石と掘り込みを礎石とその掘り方と想定した。北壁から東壁では掘り込みを含めそれらしい痕跡は認められない。埋没：3分層され下層はレンズ状堆積を呈しているが、全体の埋没過程は明らかにできなかった。遺物出土状況：カマド周辺からの出土が多く、カマド左脇のピットから小型甕D（12）などが出土した。ほかに覆土中より刀子（図版214－13）、砥石（図版217－11・12）が出土している。時期：出土土器と切り合いから判断し、7期とした。

SB79　位置：南部北　図版8・42

検出：ID層上面で褐灰色土の落ち込みとして検出され、土色の違いからSD48に西壁を切られていることが明確に判別できた。カマド：東壁を大きく函形に掘り込んで燃焼部などをつくり、黄褐色土で袖や天井を構築している。奥壁は垂直に立ち上がり緩やかに登る煙道の先に深いピットが掘り込まれている。床：荒掘りをして暗褐色土を埋め戻しており、中央部は硬く締まっている。掘り方には凸凹が目立ち、落ち込みが判別しにくかったが、焼土・炭化物が多量に混じる浅い落ち込みがいくつか認められた。遺物出土状況：カマド内から1・8・11・12、カマド両脇のピットから9・13・14とカマド周辺に多く、また東半分の覆土（2・3）にも小片が多い。時期：カマド内出土土器などから5期とした。

SB80　位置：南部北　図版8・43

検出：IIA層上層で黄褐色土が落ち込み、SK784・788・802などと切り合う。SK798は上層で検出され、SK784・802など土層観察からいずれも本址を切ることが明確になった。カマド：検出できなかったが、他遺構に切られている北東隅付近と考えたい。床：地山を直接床としており、平坦だが特に硬い部分などはない。遺物出土状況：北壁際中央床面から鉄鎌（図版214－1）が出土したほかは、出土遺物は少ない。時期：土器片が数片出土しただけであり、土器からは5期から7期までの可能性がある。カマドの位置や煙道が合致しないなど、帰属時期は判然としない。

SB81　位置：南部北　図版8・43・44

検出：ID層上面で褐灰色土の落ち込みとして検出された。土質と土色の違いで、南東隅でSB82を切り、本址を東西に分断して自然流路が流れたことが明確にわかった。カマド：残存状況は悪い。東壁をわずかに掘り込んで構築された火床と袖石に使用されたらしい礫の散乱が確認できた。床：礫混じりの地山をそのまま床としており、中央部がやや高く硬い。諸施設：北西隅近くに土器片多数（1・2・4・5・7・20）と鉄製紡錘車（図版215－42）を伴なう大きく浅いピットが検出された。遺物出土状況：カマド内（6・24）、カマド左の北東隅（19・27・28）や前述の北西隅ピット以外は覆土中に散在している。ほかに覆土中から鉄製品として刀子・鎌が、また砥石（図版217－22）が出土している。時期：出土土器の様相から判断すると14期に帰属する。

SB82　位置：南部北　図版8・44

検出：ID層中で青灰色を帯びた褐灰色土の落ち込みとして検出され、北西隅を切るSB81と煙道の先を削るSD10の切り合いは明確に判別できたが、本址のプランはやや不明瞭であった。カマド：東壁を大きく函形に掘り込み、床面を掘りくぼめて燃焼部をつくっている。火床には焼土がレンズ状にしっかりと残り、黄褐色粘質土で構築された左袖の一部が残存している。垂直の奥壁から煙道が緩やかに登っていく。床：礫の多い地山をそのまま床として使用しており、全面が硬く平坦でマンガンの沈着が認められた。埋没：2分層され下層は暗褐色土のブロックが混じるので人為的埋没と考えられる。そのくぼみに上層の土が自然堆積していたととらえた。遺物出土状況：カマド内出土（5・8）のほか、中央部南寄り床面からまとまって出土した（1・6・7）ほかは、覆土中からの出土である。覆土より棒状の鉄製品が出土している。時期：遺物は少ないが、土師器甕などから判断すると6期である。

SB83 位置：南部北 図版8・43・44・45

検出：ⅡA層上面で青灰色を帯びた黄褐色土の落ち込みとして検出された。土色の違いから、北西隅をSK891に切られることやプランなどは明確に判別できた。カマド：袖や煙道などは確認できなかったが、北壁中央やや東寄りの床面に焼土の固まりが認められ、ここをカマド位置と想定した。床：荒掘りをした後暗褐色土主体の土で埋め戻して平坦な床を構築している。北東部を除いて硬く締まっている。諸施設：北西・北東両隅から床下精査の段階でピットが検出された。位置的には柱穴とも考えられるが明確にならなかった。埋没：2分層されるが暗褐色土ブロックの多少で分けており、人為的埋没と考える。遺物出土状況：北壁と東壁に沿って土器が覆土より出土している。9は転用硯（図版212−112）、また墨書土器（図版207−14）が覆土中から1点、ほかに刀子・釘・棒状鉄製品が住居址中央の覆土から出土している。時期：出土土器から、8期と判断した。

SB84 位置：南部北 図版8・45

検出：ⅡA層上面で青灰色を帯びた土の落ち込みとして検出された。SK881・916に切られていることは、土色の違いで明瞭に捉えることができた。カマド：東壁を船底型に掘り込んで構築した燃焼部にはしっかりと焼土の残る火床が残存していた。両袖に使用された褐色土がわずかに認められ、奥壁は急角度で立ち上がる。床：地山をそのまま床として使用しており、全体に平坦で硬い。埋没：2分層でき下層はブロックを含んだ人為的堆積、上層はくぼみへの自然堆積ととらえた。遺物出土状況：5がカマドから出土しているほかは床面または第2層から出土している。鉄製品としては刀子が出土した。時期：出土土器から5期とした。

SB85 位置：南部北 図版8・45

検出：ⅡA層上面で褐色土の落ち込みとして検出された。SK904・919の大きな土坑に切られて南壁付近だけが完全に残っている状態である。竪穴住居址と認定するのに迷ったが床面や壁の状態から認定した。北側のSB86を切る。カマド：東側に焼土粒と炭化粒が散っている場所があることから、東カマドの可能性が高いと考える。床：地山をそのまま使用しているようであり、やや凸凹のある軟弱なものである。埋没：3分層されるが基本的には暗褐色土ブロックを含む土であり、焼土・炭化物の含有量で分けられている。人為的埋没と考えたい。遺物出土状況：3〜6は南東隅覆土からの出土で、2は床下から出土した。時期：混入と考えられる土器片が多いが、出土土器から8期と判断した。

SB86 位置：南部北 図版8・45

検出：ⅡA層上面で検出され、当初SB85の北側部分と考えていたが、トレンチの土層断面を観察したところSB85に切られている本址の存在が明らかになった。南側をSB85に切られ、残った北側も上面をNR7に削り取られていて、壁のわずかな部分と床が確認できたのみである。SB87との切り合いは、土層断面の観察の結果本址が新しい。カマド：消失しているが東側で焼土・炭化物が少量認められることからカマドと認定した。床：はっきりと確認できないが、地山をそのまま利用しており軟弱である。埋没：ブロック堆積をしており人為埋没と考える。遺物出土状況：北東隅覆土中から黒色土器A杯A（1）が出土しているほかは、小片が覆土中から出土している。棒状の鉄製品が1点みられる。時期：SB85・87との切り合い関係と出土土器から、5期に帰属すると判断した。

SB87 位置：南部北 図版8・45

検出：NR7の礫を取り除いたⅡA層上面で検出された。南壁をSB86・SK787などに切られ、上面をNR7で削り取られているが、北西部分を除きプランの検出は明瞭にできた。カマド：上部を削り取られ、床と東壁を船底型に掘り込んで構築した燃焼部と、袖土らしい褐色土の堆積をわずかに確認しただけである。床：荒掘りをしてから暗褐色土主体の土を埋め戻して平坦にし、その上を数cm黄褐色土と暗褐色土

の混合土で貼床している。中央部ほど厚くて硬く、壁際は軟弱である。諸施設：床下は凸凹が激しくピットなどが判別しがたい。カマドの周辺部にいくつか焼土・炭化物を含み土器片の入った浅い落ち込みが存在する。遺物出土状況：1・9はカマドから、11・14はカマド左脇のピットから、10は中央やや南のピットから、6・8は南西隅床面から、12は南東隅から、7・13は中央床面から、2・15は床下から出土している。ほかに不明鉄製品が覆土中から出土している。時期：出土土器と切り合いから判断して4期とした。

SB88　位置：南部北　図版8・44

検出：ID層上面で褐灰色土の落ち込みとして検出され、東側は調査区域外でプランなどは不明である。カマド：北東隅から東壁のいずれかに構築された可能性を指摘できる以外は明らかにならない。床：地山を床としており、平坦ではあるが中央部を除き軟弱である。諸施設：北壁際と南西隅付近、北西付近にピットが検出された。規模が大きくて比較的深く、炭化物と土器片を伴なう。位置的には柱穴も考えられるが、柱痕跡は認められず対応するピットも存在しない。遺物出土状況：北壁ピット(7)と北西付近のピット(3)に遺物がみられたほか、覆土中に点在する。板状の鉄製品が覆土中にみられる。時期：出土土器から14期とした。

SB89　位置：中部南　図版9・47

検出：IIA層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出された。上面をNR6が削ることもあって検出が難しく、床面直上でプランが確定した。カマド：地山を掘り込んで直接使用したらしい火床が検出できただけである。楕円形の掘り込みには焼土と炭化物が残る。袖はまったく残存しておらず、袖石抜き取り痕やそれらしい石も認められない。床：地山を床としたと考えられる。平坦であり、部分的に硬化しているのが認められるほかは軟弱である。諸施設：カマド右脇で土器片と炭化物が多量に入った大きな落ち込みが検出された。このピットから出土したものに土師器杯(1)、椀(2)、羽釜(7)、灰釉陶器椀(3～5)などがある。時期：ピットから一括出土した土器から判断すると、14期に帰属する。

SB90　位置：中部南　図版9・46

検出：IIA層上面で暗褐色土が落ち込む。南西隅をSB256・SK1006～1009が切る。カマド：床面を広く掘り下げて細粒砂を薄く敷いた燃焼部に厚く焼土が堆積していた。袖ははっきりと検出できなかったが、左袖部分の東壁が張り出しており、掘り残して袖の芯とした可能性もある。奥壁から煙道入り口は比較的緩やかに立ち上がり、その奥はほぼ水平に伸びて長い煙道になる。床：荒掘りをした後くぼみを中心に埋め戻しをして平坦な床を構築している。中央部から西壁際にかけては硬く締まっていたが、他の部分は軟弱である。柱穴：それぞれの隅付近に4基の柱穴が検出された。ほぼ同規模・同深度で、柱痕跡や柱を据え付けたと思われる小さいピットが坑底面に認められる。上屋の自重による沈下痕とも考えられる。土層は2分層でき、下層は焼土混じりの粘質土、上層には粗い砂質土が水平に堆積している。埋没：2分層でき、下層は人為的なブロック堆積、上層はレンズ状の自然堆積を呈する。遺物出土状況：ほとんどの遺物が下層から出土した。完形に近いものでは南東隅床面出土の須恵器杯(6)があり、カマドから2と7、床下から4が出土している。覆土中より棒状鉄製品と不明鉄製品が出土している。時期：出土土器から、3期と判断した。

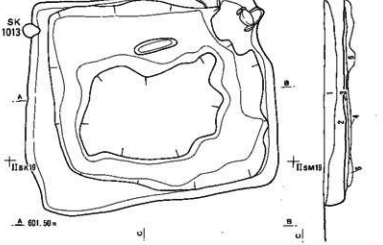
SB91　位置：中部南　図版9・46

検出：IIB層まで掘り下げて最終的な検出をした際に、青灰白色の落ち込みとして検出された。したがって床面近くまで検出面が下がってしまった。カマド：東壁を船底型に掘り込んで構築した燃焼部には、わずかに焼土が残存していた。左袖部分に黄褐色土の高まりが認められるが、下面に焼土の薄い層が存在するので袖の構築法などに問題が残った。両袖部分の床に落ち込みが認められ、袖石抜き取り痕の可能性がある。床：比較的平坦な荒掘りがされた後、暗褐色土と黄褐色土の混じった土を薄く埋め戻して床を構築

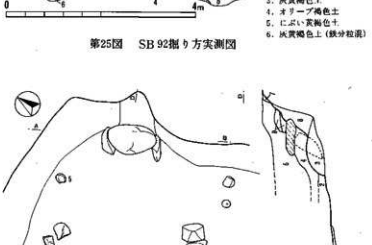
しており、全体に軟弱である。遺物出土状況：カマド内から須恵器(1)が出土しているほか、小破片が覆土中より出土している。時期：少ない量でやや不明確であるが、土器から4期と判断した。

SB92 位置：中部南 第25・26図、図版9・46、PL18

検出：ⅡA層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出された。北西部分でSB94と切り合い、トレンチを入れて土層の観察をした結果、本址が切っていることが判明した。西壁の一部をSK1013が切る。カマド：北東隅の壁に接して袖石が一つずつ据えられ、その上に天井石が置かれている。燃焼部にはほとんど焼土は認められないが、焚口周辺には焼土が広がり、土師器杯(5)や袖石と思われる花崗岩の割石がいくつか見られた。奥壁は東壁をわずかに削り垂直に立ち上ががる。床：壁に沿って幅60㎝程一段低く荒掘りをし、黄褐色土主体の土で埋め戻している。床面は掘り方の高低に一致して、中央部が高く周辺は低い。高い部分が特に硬い。諸施設：カマドの左側に、壁をえぐるように掘り込み床面を浅く掘り込んだ施設を検出した。内部には炭化物と土器片(6)が入っている。埋没：2分層され中央部が低くくぼむレンズ状堆積を呈しているので自然埋没ととらえた。遺物出土状況：第2層より2・4・7・9が出土し、平面的には北東部に多い。9は転用硯(図版212-113)である。また敲石(図版216-3)が覆土中より出土した。時期：出土土器から14期と判断され、カマドの位置なども該期の特徴を示している。



第25図 SB92掘り方実測図



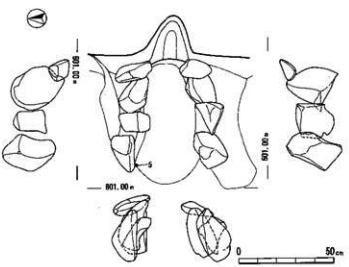
第26図 SB92カマド実測図

SB93 位置：中部南

第27図、図版9・46・48

検出：SB94の覆土で灰褐色土の落ち込みが検出された。先行トレンチを入れて土層観察を行なった結果、本址がSB94の中に完全に「入れ子」状に構築されていることが判明した。西側はSK1014に大きく切られている。カマド：袖石の残存状況が良い。両袖ともに4個の石を組み合わせ、黄褐色土でその周辺を固めている。手前の3個は大きな角礫を立て一番奥には扁平な石を横に据えている。周囲にもいくつか被熱を受けた礫が転がる。使われている石の多くは花崗岩であり硬砂岩が混じる。東壁を船底形に掘り込み楕

円形に構築された燃焼部には焼土が厚く堆積し、奥壁は急角度で立ち上がる。床：SB94の覆土をそのまま使用しており、中央部は硬いが周囲は軟弱で判別が難しかった。埋没：単一層に本址以外のカマド石がいくつか投棄されている。遺物出土状況：カマド右袖脇より灰釉陶器椀(4)、土師器杯(1)が出土し、さらに離れた右側の東壁際より土師器杯(6)などが出土した。また、南壁際中央より棒状鉄製品がみられ、ほかに鉄滓が出土している。時期：出土土器とカマドの形態や位置から、14期と判断した。



第27図　SB93カマド実測図

SB94　位置：中部南

図版9・46・48

検出：ⅡA層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出された。カマドから南東隅にかけてSB92に切られ、覆土を切ってSB93が構築されていることが、土層断面の観察からわかった。北西部は調査区域外にかかる。カマド：右袖から煙道をSB92によって削り取られる。床面を浅く楕円形に掘り込んで構築された燃焼部には焼土がわずかに残っている。両袖は黄褐色砂質土でつくられており、右袖の手前に石製支脚らしき礫が残存している。東壁の中央を穿って奥壁から煙道が緩やかに立ち上がる。床：地山をそのまま床としており平坦だが軟弱である。床下に大小10基以上の焼土と炭化物の入った落ち込みが認められたが、柱穴の判別を含め内容は明確にならなかった。埋没：3分層されるが覆土の大部分をSB93に切られており、堆積過程などははっきりとしない。遺物出土状況：カマド内から土器(21・26)・不明鉄製品があり、左袖脇にあるピットからも土器(6・10・14)が出土している。南東隅にある床下ピットから17、そのピットの1m西側の床下ピットから23、住居址中央の床下ピットから24が出土している。そのほかは覆土中から出土し、刀子(図版214－9)、棒状鉄製品、不明鉄製品、鉄滓、土製紡錘車(図版214－18)がある石錘(第127図)が床面から出土している。時期：床面出土の土器から、4期に帰属すると判断した。

SB95　位置：中部南　図版9・46・48、PL18

検出：ⅡA層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出される。プランは比較的明確に確定できたが、南西部はSB94などが存在するためはっきりせず、トレンチで確認したところSK1015が本址を切っており SB94は切り合い関係にないことが判明した。カマド：床を楕円形に掘り込んで構築した燃焼部には厚く鮮明に焼土が残っていた。その中央奥に石製支脚らしい砂岩が据えられていた。両袖は黄褐色砂質土でつくられており袖石は認められず、左袖には抜き取り痕とも思えるくぼみが存在する。奥壁は緩やかな傾斜で長い煙道につながる。床：地山をそのまま使用しており、中央部は平坦で硬いが壁際はやや凸凹があり軟弱である。諸施設：床下精査の段階で焼土と炭化物を伴なう落ち込みがいくつか認められたが性格などははっきりしない。北壁にテラス状の一段高い部分があり、出入口などとの関連も考えられる。埋没：3分層されるが基本的には炭化物を含む青灰色土をブロック状で含んだ類似する土で、人為的埋没であろう。遺物出土状況：出土量は多いが全体に細片である。カマド内(9・21～25)に多く、北西隅にあるピット内に1点(13)あるほかは覆土からの出土である。覆土中より鎌・刀子が出土し、下層に多い。南西隅床面で石錘が20点がまとまって出土した。時期：出土土器から2期に帰属すると判断した。

ＳＢ９６　位置：中部南　図版９・46・48、PL19

検出：ⅡＡ層上面でSD52に切られる落ち込みが検出されたが明確なラインが引けず、トレンチで確認をして褐色土の落ち込むプランが判明した。覆土上面をSD52が南北に流れる。カマド：北西隅の床を楕円形に掘り込んだ燃焼部には焼土のしっかりと残った火床がつくられている。右袖は黒褐色土を主に、左袖は壁を張り出させるように掘り残して芯とし黄褐色土を主に、いずれも粘質土で構築されているが、右袖には拳大の礫一つが入っており石を使用した可能性もある。壁を削り込むように奥壁から煙道が垂直に立ち上がる。床：荒掘りの後黒褐色土と黄褐色土の混合土を埋め戻して床を構築しており、平坦だが南側の一部を除き軟弱である。床下は凸凹が激しく落ち込みなどは判別できなかった。埋没：焼土・炭化物を含む単一層で、人為的な埋没と考える。遺物出土状況：北半に多く覆土中から須恵器短頸壺Ｃ(3)、カマド火床上から土師器甕Ｂ(5・6)が出土したほかは細片が点在する程度である。時期：床面およびカマド出土の土器から、５期と判断した。

ＳＢ９７　位置：中部南　図版９・48

検出：ⅡＡ層中で暗褐色土の落ち込みとして検出された。東側に伸びた煙道がSB98の西壁を切っていることが土層断面観察の結果判明した。カマドから南の東壁と南壁が不整形になり、他の遺構の存在も想定したが土層観察などによりテラス状に張り出す１軒の住居址と捉えた。西側半分以上が調査区域外に出る。カマド：東壁を函形に掘り込んだ燃焼部に厚く焼土が広がる。垂直に立つ奥壁の中位に煙道が掘り込まれている。煙道は下半分は地山を掘り込み、上半分は掘り方に暗褐色土を埋め戻して形成している。煙道は先へ行くほど傾斜がなだらかになり、先端に円形の掘り込みをもつ。掘り込みの左右には花崗岩が一つずつ据えられており、焼土・炭化粒がかなり入っていた。床：地山をそのまま使用しており、ほぼ平坦である。南東隅に焼土の入った浅い落ち込みが一基検出された。諸施設：テラス状の施設があるが部分的な検出で明確にならない。埋没：２分層でき上層はレンズ状の自然堆積、下層は人為的なブロック堆積と判断した。遺物出土状況：破片の出土が多い。カマド内(1・5・6)と床下(3)から出土したほかは覆土中からの出土である。また瓦塔小片（第128図1）、刀子２点（図版214－12）も覆土中から出土している。時期：出土土器は混入したものが多く、時期の判断が難しいが、SB98との切り合いを考え合わせると、６期あるいは７期とするのが妥当であろう。

ＳＢ９８　位置：中部南　図版９・48

検出：ⅡＡ層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出され、SB97の煙道が西壁を切る。カマド：東壁を函形に掘り込み床面を広く掘りくぼめて燃焼部を構築している。火床に残る焼土は狭い範囲しか認められず、袖も確認できなかった。SB97と似た構造が考えられるが明確にならない。床：地山をそのまま使っており、平坦で中央部ほど硬く壁際は軟らかい。柱穴：床下の精査で四隅に焼土・炭化物を伴なう落ち込みが検出された。埋没：２分層され上層は自然堆積下層は人為的な堆積と捉えた。遺物出土状況：カマド火床から出土した(2・14・16・20・22・23)のほか、南東隅のピット(15)、南西隅のピット(15・22)、北東隅のピット(18・19)に遺物があり、各々接合するものが多い。また５・７・８・10～12は南西側から集中して出土した。６は墨書土器（図版207－15）で、刀子・鉄・棒状鉄製品が住居址中央より出土している。時期：出土土器から判断して５期とした。

ＳＢ９９　位置：中部南　図版９・47・49

検出：ⅡＡ層上面でにぶい黄褐色土が明瞭に落ち込み、プランの確認は容易であった。南西隅をST29が切り、SK32・33・161が壁を切って構築されていることも明瞭に捉えられた。カマド：床面をわずかに掘り込んだ燃焼部に焼土がサンドイッチ状に堆積しており、天井部の崩落とも考えられる。袖部分は黄褐色土が使われており、壁を掘り残して芯としたと思われる。急角度で立ち上がる奥壁からはほぼ水平な煙道

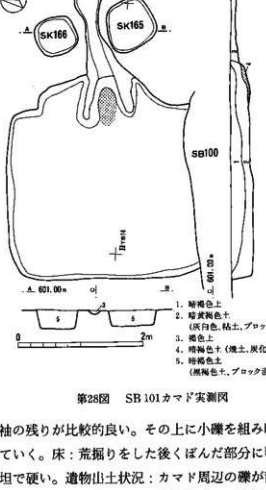
へ続く。床：荒掘りをして暗褐色土と黄褐色土の混じった土を埋め戻している。全面が硬く平坦である。掘り方は凸凹が比較的多い。埋没：単一層の下位に焼土が含まれている。遺物出土状況：カマド火床より銅滓かと思われるものが出土したほかは、カマド右脇（2・3）、南壁西寄り（1・6）にみられる。時期：カマド付近出土の土器などから、5期に帰属すると判断した。

SB100　位置：中部南　図版9・47・49

検出：ⅡA層上面でにぶい黄褐色土が落ち込む。北側のSB101と切り合い、検出面で土色の差により比較的明瞭に判別できた。カマド：床をわずかに掘り込んだ掘り方の中央に焼土の堆積する部分があり、袖を含んだ大きな掘り込みがされている。袖は芯として掘り残された部分だけが残存する。船底形の奥壁に角度をもって立ち上がる煙道が掘り込まれる。煙道の入り口部分を青灰色の強い土で固め、その奥を掘り抜いたようである。床：荒掘りの後にくぼみを埋め戻して平坦にし、灰白色の粘質土を薄く貼床しており全体に硬い。掘り方は凸凹が激しく落ち込みとの判別が難しかったが、15基の落ち込みが認められる。埋没：3分層されレンズ状の堆積状況を呈するが、南側の床面近くには焼けた花崗岩を含む投棄された礫が見られるので、どちらかはっきりしない。遺物出土状況：カマドより8・12・31、カマド右脇のピットより7・13・32、南東隅のピットより4・17、南東隅のピット西隣りにあるピットより27・28、床下より9が出土している。遺物は南東に多く、鎌・刀子2点が覆土中より出土している。1・7・12は墨書土器でほかに1点ある（図版207−16〜19）。時期：多数出土した貯蔵具等から判断すると、6期に帰属する。

SB101　位置：中部南　第28図、図版9・49

検出：ⅡA層で検出したが、北壁・西壁のラインは明瞭に見えたのに対して、東側は土色の差が明瞭ではなかった。南側をSB100に切られる。カマド：残存状態が悪かった。床面とほぼ同一レベルに薄く焼土が残り、その両側に袖に使用されたらしい黄褐色土が認められる。奥壁から煙道は緩やかに立ち上がり、ほぼ水平に長く伸びる。煙道の両脇に2基の土坑が対になって位置する。本址に関係する柱穴などの可能性もある。床：地山をそのまま使っており、やや凸凹が目立ち軟弱である。埋没：2分層できた。下層は粘土ブロックなどが混じり、上層はレンズ状の堆積を示す。遺物出土状況：覆土中より出土しており、遺物が少ない。時期：遺物からは時期を判定することはできないが、切り合いから4期または5期の可能性を指摘できる。



第28図　SB101カマド実測図

SB102　位置：中部南

図版9・49・51、PL19

検出：ⅡA層中の検出であり、暗灰黄褐色土の落ち込みが明瞭に確認された。カマド：北東隅を船底型に掘り込んだ燃焼部に焼土がきれいに残る。両袖は石を組んで構築されており、3個の花崗岩が据えられている左袖の残りが比較的良い。その上に小礫を組み暗褐色土で固めている。奥壁から煙道は緩やかに立ち上がっていく。床：荒掘りをした後くぼんだ部分に明黄褐色粘質土を貼床するように埋め戻している。全体に平坦で硬い。遺物出土状況：カマド周辺の礫が散乱しているところに土器片（1〜4）、鉄製品（鎌・棒状不明品）がみられた。時期：カマド付近出土の土器から、

14期と判断した。

SB103 位置：中部南 図版9・50・51

検出：ⅡA層上面で灰黄褐色土の落ち込みとして検出され、ST38およびSK213・214と切り合う。東壁の2基の土坑との切り合いは、検出面での観察の結果土色の違いから土坑が本址を切ることが容易に判断できた。ST38の北東隅の柱穴との切り合いは、トレンチなどを入れながら検討を重ねて、本址のラインが確定することと柱穴が確認できないことから、本址のほうが新しいと判断した。カマド：円形に床を掘り込んで構築した燃焼部に焼土が厚く堆積し、中央奥寄りに支脚抜き取り痕が存在する。袖の残りが悪く、使われた黄褐色土が広く散っており、それを取り除くと右袖の下に2か所の抜き取り痕が認められた。奥壁から煙道は同じ角度で立ち上がり、煙道の先に焼土や煤状の炭化粒と多量の土器片(3・7・8)の入った掘り込みがある。床：荒掘りをして黒褐色土と黄褐色土の混合土を埋め戻し床面をつくっているが、やや凸凹があり中央部を除いて軟弱である。掘り方は中央部が高く壁際が低い。落ち込みらしきものも数か所認められたが柱穴などとは考えにくい。埋没：3分層され多量の焼土・炭化物を含む土が間層として入っている。遺物出土状況：焼土・炭化物層をはさんで下層より5・9、上層より4・6が出土している。時期：出土土器から判断して、3期の可能性を含む4期とした。

SB104 位置：中部南 図版9・50

検出：ⅡA層上面で灰褐色土が落ち込む。西壁をわずかに掘り込む楕円形の燃焼部には薄く焼土が残るだけで、垂直に立ち上がる奥壁は焼けている。左袖は地山を掘り残して芯としていることが確認できた。右袖は検出できなかった。西壁をえぐるように煙道が急角度で立ち上がる。床：荒掘りの後埋め戻して平坦な床を構築しており、締まって硬い。掘り方は凸凹が激しく落ち込みなどの判別が難しかった。埋没：2分層されレンズ状堆積を呈するので自然堆積の可能性が高い。遺物出土状況：カマド焚口付近に土師器甕(1・2)、須恵器甕(3)の破片がまとまって出土したほかは散在する程度である。時期：貯蔵具から4期と判断される。

SB105 位置：中部南 図版9・49・51

検出：ⅡA層上面で北側のSB106と切り合って検出された。両方の覆土が非常に似ており、トレンチを入れて精査を繰り返し、遺物の状態などから、本址が切っていると判断した。カマド：比較的残存状況は良好である。床面を楕円形に掘り込んだ燃焼部から両袖の内側、奥壁にかけては良く焼けて焼土が残る。袖は黄褐色砂質土で構築されており、手前から一つずつ砂岩の小礫が出土したが、袖に使用されたかどうかはっきりしない。垂直な奥壁の中位に緩やかな角度で煙道が掘り込まれており、内部は焼けていた。床：地山の上に暗褐色土を薄く貼床しているようで、南東部を除いて平坦で硬い。柱穴：四隅に接するように同規模のピットが検出された。やや浅く柱痕跡も認められないが、位置と中に入っている土が同じことから柱穴とした。そのほか床下にいくつか落ち込みがあるが、柱穴とは入っている土が異なる。埋没：4分層でき、均一的な土がレンズ状堆積をするので自然埋没と考えたい。遺物出土状況：須恵器杯B(19)、土師器甕B(22)がカマド内から、土師器小型甕D(21)がカマド左脇のピット焼土中より、杯蓋B(15)が中央南よりのピット内から出土しているほかは覆土中からの出土である。壁際に多く住居址中央には少ない。14は墨書土器(図版207－20)で、ほかに1点(図版208－21)がある。また鎌・棒状鉄製品が覆土中より出土している。時期：出土土器から判断すると5期に帰属する。

SB106 位置：中部南 図版9・49・51

検出：ⅡA層上面で検出され、SB105との切り合いは一応本址が切っているとして調査を進めたが、後にこの切り合いが逆であることが判明した。カマド：焼土がしっかりと残る火床と奥壁から煙道にかけては残りが良い。袖は東壁際で黄褐色土がわずかに残存しているのが認められた。垂直に立ち上がる奥壁に煙

道が掘り込まれ、SB105のカマドに良く似たタイプである。床：地山をそのまま使っており、西側部分には硬いところもあるが全体に軟弱である。埋没：分層されるが、類似する土が堆積している。堆積過程は良くわからない。遺物出土状況：カマド焚口から7、南側にかけての床から1・2・9・10、西壁近くから5・11がまとまっているほかは覆土中より出土している。時期：床面出土の土器から判断すると、3期に帰属し、遺物からみる限りSB105より確実に古い。

SB107　位置：中部南　図版9・49・51

検出：ⅡA層上面で褐色土の落ち込みとして検出された。カマドから南東部分にかけて調査区域外にかかる。カマド：袖と火床の一部が確認された。火床にしっかりと残った焼土の上に天井の崩落らしい土が乗り、袖と思われる黄褐色土が認められた。床：地山をそのまま使っており、平坦だが軟弱である。柱穴：東側の二隅にピットが検出された。位置からは柱穴が想定できるが、浅く柱痕跡も認められない。埋没：基本的には二層に分かれ、上層は自然下層は人為の埋没の可能性が強い。遺物出土状況：南壁寄りの床上で焼土・炭化物に混じって黒色土器A杯(1・3・4)、黒色土器A蓋(8)、須恵器杯(9・11～13)、須恵器長頸壺(17)、須恵器甕A(18)、土師器甕(14)が出土し、カマド付近から須恵器杯A(10)、土師器甕(16)が出土している。時期：床面出土の土器などから、7期に帰属すると判断した。

SB108　位置：中部南　図版9・51

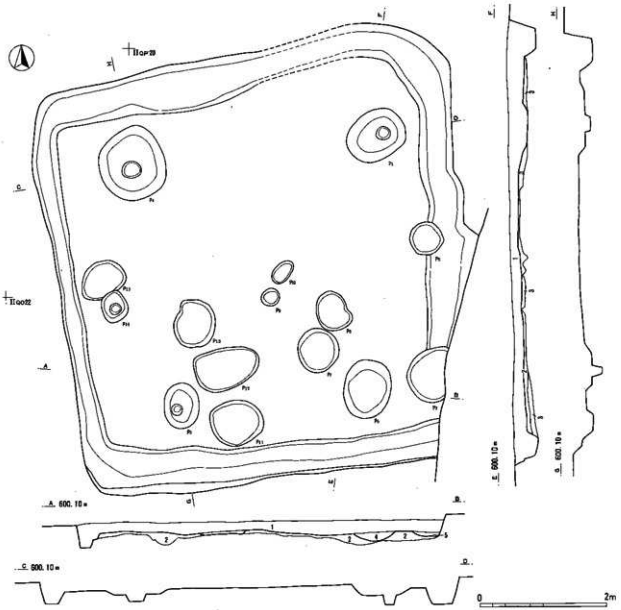
検出：ⅡA層の上面で検出されたが東側の大部分が調査区域外にかかっている。カマド：煙道の残存状況が良い。西壁をそのまま利用したような奥壁の中途に煙道が掘り込まれている。煙道の口の上部は奥壁を削り込みほかの土で固めている。また煙道口に一辺10cm程の平石が置かれており、炎の調節など何らかの施設と考える。煙道の先に焼土や炭化粒と土器片を伴なう大きく深い掘り込みがみられる。この掘り込みは、両側に位置するSK233・235とともに、掘立柱建物址の柱穴になる可能性もある。床：荒掘りをして地山の土との混合土を薄く埋め戻し平坦な床を構築している。中央部は硬いが壁際は軟弱である。柱穴：北西部分で炭化材を伴なうピットが検出された。柱穴に残る柱の下部の焼けた部分とも思えるが明確にならない。他の位置では調査できなかった。埋没：単一層だが床に近づくと焼土・炭化物の割り合いが多くなり、床の一部は焼けた状態であった。調査範囲が狭いので埋没過程ははっきりしない。遺物出土状況：5はカマド火床から出土したほか、カマド周辺、覆土中(2～4・6・7)に集中する。時期：出土土器から判断して3期とした。

SB109　位置：中部南　図版9・10・52

検出：ⅡA層上面で多量の遺物の出土があり、竪穴住居址の存在を想定して精査したが検出できなかった。さらに一段下位で精査したところ、暗褐色土の落ち込みが確認できた。西側をSD52に切られることは明確であったが、東壁で本址を切るSK1043との関係は不明瞭であった。カマド：床をわずかに掘り込み、両袖の奥に一つずつ石を据えて芯とし、黄褐色土を用いて袖と天井を構築している。焼土の残る火床から急角度で立ち上がる奥壁に続くが、煙道は削平されて確認できない。床：荒掘りの後暗褐色土を埋め戻して平坦な床を構築している。中央部は硬く締まっているが壁際は軟弱である。諸施設：カマド焚口の前に大きく浅い落ち込み、右袖脇に焼土の詰まった小さな落ち込みが検出されたが、性格などははっきりしない。埋没：2分層され自然堆積の可能性が強い。遺物出土状況：上層上面には細片で、下層下部床面付近(4・8・10)、カマド(9)に遺物が集中する。4は墨書土器(図版208－22)である。時期：出土土器から6期と判断した。

SB110　位置：中部南　第29図、図版9・10・53

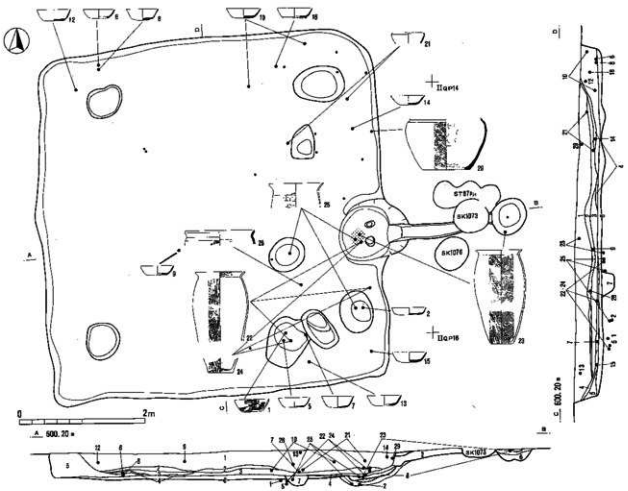
検出：プランの確定が困難で、検出できたのはⅡA層下面である。東側の一部が調査区域外にかかることもあってカマドなどは明確にならなかった。カマド：区域外にかかるため明確にならないが東壁中央から



第29図　SB 110諸施設実測図

南に存在する可能性が高い。床：荒掘りの後暗褐色土主体の土を埋め戻して平坦な床をつくっている。中央は硬く周辺ほど軟らかい。柱穴：四隅に柱の下部を入れたと考えられる小さなピットを持つ柱穴が存在する。上屋の自重による沈下痕の可能性がある。柱穴はいずれも大きな掘り方をもち、ほぼ同じ深さまで掘り込まれる。西壁際の柱の中間の位置に、同じく小さなピットを伴なう落ち込みがあり、東壁中央にも対応する落ち込みがある。6本柱あるいは2本の補助柱が想定される。諸施設：壁際を幅が広く深い周溝が一周する。土層断面で観察する限りでは覆土と同一の土の入る溝と捉えられるが、壁際だけ深い掘り方の可能性も十分にある。また南壁周溝の外にはテラス状の一段高い部分が認められる。床下から焼土を伴なう落ち込みがいくつか検出された。不整形なものが多く南側に集中するが柱穴の可能性は少ない。埋没：単一層であるが埋没過程などは明らかにならない。遺物出土状況：遺物はカマドの存在が想定される東壁中央から南壁東半部分にかけて多く、床面から6・11が出土している。ピット内からはピット2より10、ピット5より7・9がみられ、そのほかは第1層からの出土である。不明鉄製品も覆土中から出土した。また覆土出土の土師器甕Bは SB111出土のものと接合している（図版162－26）。時期：出土土器から2期と判断した。

SB111　位置：中部南　第30図、図版9・10・53・54、PL20



第30図　SB111遺物出土状況実測図

検出：ⅡB層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出された。煙道の先端部を上面から掘り込まれたSK1073に切られる。カマド：東壁と床を円形に掘り込んだ燃焼部は良く焼けて焼土も厚い。燃焼部中央に2基対になる小ピットが認められ、支脚抜き取り痕の可能性がある。両袖は壁際でにぶい黄褐色土の高まりがわずかに認められる。垂直に立ち上がる奥壁になだらかな煙道が掘り込まれ、その先は焼土の詰まった落ち込みが設けられる。床：荒掘りは平坦にされその上に黄褐色粘質土を貼床しており、硬く締まっている。柱穴：四隅にほぼ規模の同じ落ち込みがあり、深さが不揃いでやや浅いものが多いが、位置などから柱穴と考えた。東側床下に焼土を伴なう落ち込みがいくつか検出された。埋没：基本的には焼土・炭化物を多量に含む間層を挟んで、淘汰の悪い第1・2層がレンズ状に堆積している。各層ともブロックを含み、時間を置いた人為的埋没とも考えられる。遺物出土状況：残存率の高い須恵器杯類の出土が目立つ。北から東の壁際に集中するが、床面から浮いた状態での出土が多い。その中でカマドや煙道先のピット、カマド周辺の落ち込みから出土し、土師器甕類(22～25)、土師器杯(1)、須恵器杯(2・5・7)などは、本址に係る遺物の可能性が高い。3・4は第1層から出土した。26はSB110出土の破片が接合している。時期：残存状態の良い出土土器から、3期に帰属すると判断した。

SB112　位置：中部北　図版10・55、PL20

検出：ⅡA層中でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：床を深く掘り込み褐色土を埋め戻しながら燃焼部がつくられ、その中央に焼土がしっかりと残る火床が検出された。両袖は袖石抜き取り

痕などを含めその痕跡を確認できなかった。西壁をわずかに掘り込んで緩やかな傾斜をもつ奥壁に煙道が掘り込まれる。煙道は地山をトンネル状に掘り抜いて構築され、先端ほど狭くなっていく。床：地山をそのまま使用しており、ほぼ平坦だが軟弱である。柱穴：西側両隅に不整形の落ち込みが認められるが、柱痕跡の認められたものはなく柱穴かどうか判断できない。諸施設：北西隅と南壁際中央に周溝が部分的に認められた。埋没：大きく2分層され、自然堆積の状況を呈する。遺物出土状況：南西隅のピット（1・8・9・13・22・27・29・30）からまとまって出土したほか、北西隅のピット（12・30）、南壁際中央のピット（14）からも出土している。カマド周辺からの遺物（3・11・23・26・30）も西壁に沿って第2層から出土しており、同様に第2層からは南西隅ピット上面に数個体（4・5・10・16・20・21・25・28）がまとまって出土した。各地点出土のものは相互に接合している。3・6は墨書土器（図版208－23・24）で、ほかに砥石（図版217－6）が覆土中より出土している。また須恵器鉢C（28）は、SB118カマド出土の破片と接合している。転用硯（図版212－115）が1点ある。時期：床面出土の土器から4期と判断した。

SB113　位置：中部北　図版10・55

検出：ⅡA層中で暗褐色土の落ち込みとして検出された。中央部を南北にSD60が上面から切り込む。カマド：焼土の残る燃焼部と奥壁、煙道の一部が検出できたのに留まる。床：地山を床としており北東部がやや下がり軟弱であるほかは平坦で割り合い硬い。柱穴：四隅に検出されたピットが位置や深さから柱穴と想定できるが、柱痕跡は確認できず規模がやや小さい。埋没：単層で炭化粒を多く含む。埋没過程はわからない。遺物出土状況：床面近くからの出土が多いが、特に偏在はみられない。大多数が土師器の破片である。時期：床面出土の土器を中心に判断して、2期とした。

SB114　位置：中部北　図版10・55

検出：ⅡA層中で暗褐色土の落ち込みとして検出された。ST88付属土坑、SK1110に南東隅を切られる。カマド：右袖を土坑に切られているため、皿状に掘り込まれ、よく焼けている火床と黄褐色土で構築されている左袖が確認できただけである。床：全体を薄く貼床しているらしく平坦で硬い。柱穴：西側の両隅とその周辺に浅い落ち込みがいくつか見られるが、不整形であり柱穴とは考えにくい。諸施設：南壁際に周溝が認められる。埋没：不明な部分も多いが、自然埋没的様相を呈する。遺物出土状況：床面の遺物が多く、カマド焚口付近から須恵器杯（1）、杯蓋（2）、北西隅のピットから須恵器杯（4）が出土した。ほかに鞴羽口（図版218－4）が覆土中より出土している。時期：床面出土の土器から5期と判断した。

SB115　位置：中部北　図版10・55

検出：ⅡA層中で暗褐色土の落ち込みとして検出された。上面からSK1114・1115が掘り込まれており、覆土と西壁を切る。本址が西壁でSB116を切り、南壁をSD14に切られることは、土層断面の観察などで判断できた。カマド：東壁を大きく掘り込んで燃焼部が構築され、火床に焼土が厚く堆積していた。袖は検出できなかったが、火床に2個の礫が残っており袖石などの可能性がある。柱穴：南西隅を除く各住居址隅にかなり深いピットが存在する。位置はややずれるが柱穴の可能性が高い。南西のものはSD14に削られたと思われる。カマド右袖脇に焼土の詰まったピットが検出され、須恵器杯A（2）がみられた。埋没：単一層である。遺物出土状況：床面の遺物が多く、住居址中央にやや多い。カマド内より4・8・9があり、焚口手前に広がる焼土内から7が出土している。砥石が覆土中より出土した。時期：床面の土器から判断して、5期に帰属させた。

SB116　位置：中部北　図版10・55

検出：ⅡA層中で褐色土が落ち込むが、東側をSB115、南側をSD14に切られ、上面から掘り込むSK1114・1115にも切られて、北西部が残存するだけである。床：地山を床としており平坦だがやや軟弱である。遺物出土状況：単一層であり、遺物は認められなかった。時期：切り合いから5期以前であることが指摘

されるが、時期を限定することはできない。

SB117　位置：中部北　図版10・55

検出：ⅡA層中で検出された。覆土とⅡA層が酷似しており最終的なプランの確定に時間を要した。西壁を切ってSK1168が上面より掘り込まれる。カマド：北東隅付近で浅いくぼみを中心に焼土が認められ周辺に礫が散乱しているので、この位置にカマドを想定したが内容は明らかにならない。床：比較的平坦な掘り方の上に貼床が部分的に見られる。貼床は北壁と西壁の際を中心に残っているが、他の場所が貼床されたかどうかは明確にならない。諸施設：カマド右脇に焼土・炭化物・羽釜(15・16)と大小の礫を伴なう大きく浅いピットが存在する。埋没：検出面が低かったため明確にならない。遺物出土状況：東側の礫の間からの出土が多く土師器杯がいくつか出土したほか、火床から土師器小型甕D(13)・羽釜(15)・輸入陶磁器(12)が出土した。覆土中より砥石(図版217−21)がみられ、また中世に属すと思われる手捏ねの土師器Ⅲ(図版221−105)が出土している。時期：混入遺物が多いが、カマド付近の土器を中心に判断して、15期とした。

SB118　位置：中部北　図版10・11・57

検出：SB270の精査中底面から焼土と袖石が発見され、本址の存在が明らかになった。上面から掘り込まれた中世のSB270によって部分的に覆土が削平されている。切り合わない部分ではⅡA層上面でプランが確定され、にぶい黄褐色土が落ち込む。カマド：東壁を大きく削り込み床をわずかに掘り込んだ燃焼部に焼土が厚く堆積している。袖は左袖の奥に袖石が一つ据えられており、両袖に使用されたらしい黄褐色土が壁際でわずかに認められる。床：SB270調査時に破壊されてしまった部分もあるが、地山を床としていたらしく軟弱である。埋没：ブロックを多く含むことから人為的埋没と捉えた。遺物出土状況：カマド火床上の黒色土器A杯A(1)、土師器甕B(5・6)をはじめカマド周辺からの出土が目立った。カマドから出土した須恵器鉢Cは、SB112覆土出土のものと接合している(図版163−28)。そのほかに砥石、釘、不明鉄製品が覆土中より出土している。時期：混入がみられるが、カマド付近の土器から、7期の可能性のある6期と判断した。

SB119　位置：中部北　図版10・11・57

検出：ⅡA層中で暗褐色土の落ち込みとして検出され、南壁および覆土をSK1293・1294が切ることは土色の違いからはっきりと判断できた。西側半分以上が調査区域外である。カマド：荒掘りの後細粒砂を入れて火床の下をつくっており、良く焼けて焼土が残存している火床の奥に袖石らしき火を受けた花崗岩が出土した。火床中央部には支脚抜き取り痕と思われる小ピットがあり、右袖にも袖石抜き取り痕が認められた。奥壁はなだらかに登り水平で長く伸びる良く焼けた煙道にいたる。床：地山を使っており平坦で硬い部分が多い。埋没：黄褐色土をブロック状に含む単一層で、人為的埋没の可能性が高い。遺物出土状況：カマド付近で土師器甕B片が出土したほかは出土量は少ない。時期：出土土器から2期に帰属すると判断した。

SB120　位置：中部北　図版10・11・58、PL20

検出：ⅡA層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出された。北東隅をSD62が薄く削り取る。カマド：東壁を大きく掘り込み両袖に3個づつの袖石を据えながら燃焼部を構築している。手前の両袖石に乗り内側に崩れ落ちるように2個の花崗岩の平石が位置し、天井石の可能性が強い。袖の内側から燃焼部火床上に土師器小型甕D、甕B(18〜21)の破片が散らばり、一部は袖石に密着しているものもあることから、袖構築または補修材として土器片が使われたとも考えられる。袖石は暗褐色土で固定されているが、土は全体に軟らかい。焼土が明瞭に残った火床から緩やかに立ち上がる奥壁に続く。床：掘り方の上を小砂利を含む土で薄く貼床をしている。貼床は硬い部分が点々と残る。中央西寄りに焼土の固まりが認められるが、

その性格などは明らかにならなかった。埋没：灰色ブロックの混じる単一層であるので基本的には人為的埋没と考える。遺物出土状況：カマド右袖付近の床面上から黒色土器A杯A (1)、須恵器杯A (10)、左袖脇から須恵器短頸壺 (22) が出土するなど、床面に近いレベルでの出土が多かった。カマド内からは、構築材の可能性のあるものを含め、数個体分の土師器甕B (20・21) 7は住居址中央やや北西寄り床面より出土した刻書土器（図版212－109）で、また覆土中より不明鉄製品が出土した。時期：床面およびカマド内出土土器より、7期と判断した。

SB121　位置：中部北　図版10・11・58

検出：ⅡA層上面で検出をすすめるが、SD66が本址を横切り北側でいくつかの土坑（SK1326・1328・1332～1334）に切られるなど、上面から掘り込む遺構との切り合いが激しくプランが確定しなかった。東側のSB122との切り合いは、当初本址が切ると判断して調査をすすめたが、その後切り合いが逆になることが判明した。カマド：東壁を大きく掘り込んで構築されており、床と同レベルの火床に焼土がしっかりと残っていた。奥壁や右袖はSB122に切られており、はっきりしない部分があるが、左袖はⅡA層を掘り残して芯としている。焚口の前に黄褐色土の高まりがカマドを取り囲むように残る。床：地山の礫層をそのまま床としており、やや凸凹がある。埋没：小礫の混じった単一層であるが埋没過程などはわからない。遺物出土状況：非常に少なく細片のみである。1・3・4はカマド火床より出土した。時期：出土土器ではやや不明確であるが、切り合い等を考え合わせて、4期の可能性を含む3期と判断した。

SB122　位置：中部北　図版11・58

検出：ⅡA層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出される。西壁でSB121のカマドを切り、南部分はSD66の掘り込みに切られる。カマド：東壁を大きく掘り込み床と同レベルに構築されている。火床には焼土がほとんど残っていない。袖も確認できなかった。急角度で立ち上がる奥壁とそれに続く煙道がわずかに検出された。床：やや凸凹のある地山の礫面をそのまま床としており、貼床は認められない。埋没：焼土・炭化物が混じる単一層で人為的埋没の可能性が高い。遺物出土状況：カマド火床から土師器杯C (1)、土師器甕B・C (6・7) 片が出土したほかは出土量が少なく偏在も認められない。時期：切り合いと出土土器から、5期と判断した。

SB123　位置：中部北　図版11・58

検出：ⅡA層上面で検出された。上面から掘り込まれる土坑（SK1337・1338・1343・1350など）に切られ、東側のSB124との切り合いもあってプランの確定に手間取った。土層断面の観察の結果、本址東側半分がSB124に切られることが判明した。カマド：検出されなかったが東側に存在する可能性がある。床：地山をそのまま床としている。硬く締まってはいないが平坦である。埋没：2分層されたが埋没過程はわからない。遺物出土状況：出土量は少なく細片が多い。時期：遺物が少なく明確な時期決定ができないが、切り合いを考え合わせると5期か6期と考えたい。

SB124　位置：中部北　図版11・58

検出：ⅡA層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出されたが、切り合う遺構が多くプランを確定できなかった。5基（SK1339・1343・1344・1347・1352）の土坑が本址の壁と覆土を切り、東側の一部は調査区域外にかかる。西側でSB123を切る。カマド：東側床面で10個位の礫が検出されており、調査に至らなかった東壁にカマドが存在したと思われる。床：地山を床としており平坦で中央部が硬い。埋没：単層だが埋没過程は不明である。遺物出土状況：東側床面に集中し、土師器小型甕D (5)、甕B (6)、須恵器杯 (2) などがある。鉄滓が覆土中より得られている。時期：混入とみられる遺物もあり、やや不明確であるが、土器と切り合いから6期あるいは5期と判断した。

SB125　位置：中部北　図版11・58

検出：ⅡA層上面で検出作業をしたが、梓川系と鎖川系の堆積域の境界にあたり、SD66が東壁際に存在していたことから、土層が複雑で明確にプランを確認できなかった。さらに検出面を下げるとカマド石が露出し、ようやく検出できたが西半分はすでに調査不能であった。カマド：床をわずかに掘り込み黄褐色土を入れて燃焼部を構築しており、床面と同レベルの火床には焼土がきれいに残っていた。右袖は大きな花崗岩平石を2個据え黄褐色土で固めた状態で検出されたが、左袖では袖土が確認できたにとどまる。奥壁は比較的緩やかに立ち上がる。右袖周辺に花崗岩礫がいくつか散乱している。床：地山を使っており平坦であった。遺物出土状況：カマド火床上面に黒色土器A杯(5・7)、皿(11)の3個体が正位に置かれていたほか、カマド火床より黒色土器A杯A(1・4・6)、椀(9)、灰釉陶器椀A(13)、土師器甕C(17)、カマド右側南東隅から黒色土器A杯A(2)、椀(8)、土師器甕B(16)などが出土している。12は転用砥(図版212−115)で覆土中より出土した。時期：カマド付近を中心に、遺物の残存状況が良好なので、出土土器で判断して7期とした。

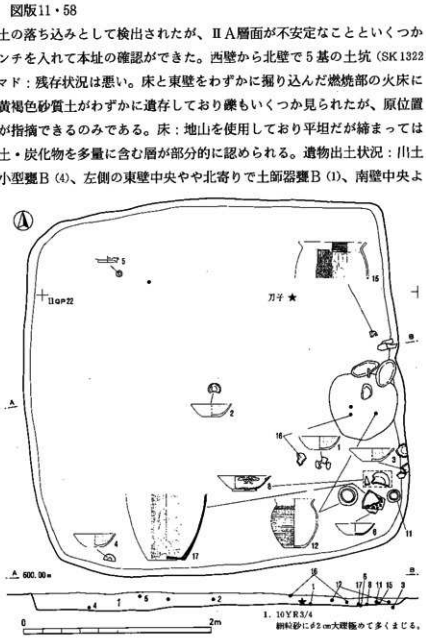
SB126　位置：中部北　図版11・58

検出：ⅡA層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出されたが、ⅡA層面が不安定なことといくつかの土坑と切り合うため、先行トレンチを入れて本址の確認ができた。西壁から北壁で5基の土坑(SK1322〜1324・1330・1451)に切られる。カマド：残存状況は悪い。床と東壁をわずかに掘り込んだ燃焼部の火床には薄く焼土が残っている。両袖に黄褐色砂質土がわずかに遺存しており礫もいくつか見られたが、原位置を留めておらず、構築材の可能性が指摘できるのみである。床：地山を使用しており平坦だが締まってはいない。埋没：単一層で床上に焼土・炭化物を多量に含む層が部分的に認められる。遺物出土状況：出土量は少ないがカマド右側で土師器小型甕B(4)、左側の東壁中央やや北寄りで土師器甕B(1)、南壁中央より土師器甕B(5)と砥石が出土し、砥石は覆土中にも1点認められた。時期：床面出土の土器から、4期に帰属すると判断した。

SB127　位置：中部北

第31図、図版11・59

検出：ⅡA層中で暗褐色土の落ち込みとして検出された。カマド石は既に露出していた。カマド：掘り方に細砂を敷きつめた燃焼部火床面には焼土・炭化材が残っていた。左袖に2個の花崗岩が据えられていたが、右袖はまったく確認されなかった。埋没：覆土が浅く埋没過程はつかめなかった。遺物出土状況：図示したように、カマド右側を中心にまとまった遺物が出土している。土師器小型甕D(11〜



第31図　SB127遺物出土状況実測図

13) が正位で置かれ、その脇に須恵器甕D (7) が斜めに倒れかけている。周辺には陰刻花文が施された緑釉陶器 (8) をはじめ数個体の食器が位置し、さらにいくつかの黒色土器A杯・椀が中央から西側部分の床から出土している。土師器甕B (15) は床面よりやや浮いた位置に、投げ込まれたような状態で出土した。9は墨書土器 (図版208−25)、また刀子・釘が覆土中から出土している。時期：床面出土の土器から7期とした。

SB128　位置：中部北　図版11・59・60

検出：ⅡA層中で焼土が認められたため、検出を試みるが覆土とⅡA層の判別が難しく検出に至らなかった。特に北壁が不明確で再々検出を繰り返してプランが確定した。カマド：掘り方に細砂を入れた火床に焼土が明瞭に残っていた。その上に焼土の混じる黄褐色土の層が認められ天井の崩落と考えた。奥壁がわずかに検出できただけで、袖や煙道は確認できない。床：地山の黄褐色土を床としており、全体によく締まって硬く平坦である。埋没：単一層であるが埋没過程などはわからない。遺物出土状況：カマド右側より完形の須恵器杯B (3・5) 2個体と土師器甕B (7) が、左側より土師器小型甕B、刀子が出土した。時期：出土土器から4期と判断した。

SB129　位置：中部北　図版11・59・60

検出：ⅡA層上面で暗褐色土が落ち込むが、ⅡA層との判別が難しく検出に時間がかかった。カマド：東壁を函形に掘り込み床をわずかに掘りくぼめて構築した燃焼部に、丸く焼土の残る火床が残存していた。袖は左側で袖土らしき黄褐色土がかすかに認められるだけで、その痕跡は残っていない。奥壁は急角度で立ち上がるが、煙道は削平されて検出されなかった。床：地山の礫の上に黄褐色粘質土を薄く貼床している。北西隅を除いて硬く締まった平坦な床が残っていた。柱穴：北側の二隅に4基の落ち込みが認められる。位置的には柱穴も考えられるが、いずれも浅く柱痕跡などは確認できない。諸施設：西壁南半分で床面より一段高いテラス状の施設が検出された。この部分だけ階段状に壁を掘り残している。埋没：単一層であるが埋没過程は明らかにならない。遺物出土状況：カマド内から土師器小型甕B・甕B (9・14〜16)、北西隅のピットから須恵器杯A (5) が出土した。また石錘 (第127図) 31点が北西隅と南壁際中央より、北東隅床面より砥石 (図版216−9)、南東隅で不明鉄製品、北壁中央近くより1点ずつが出土した。時期：床面出土の土器から、3期と判断した。

SB130　位置：中部北　図版11・61

検出：ⅡA層上面で検出した。初年度調査の当初に行なったプラント・オパール調査のため、北東隅を破壊している。覆土はⅡA層と酷似しており、焼土・炭化物の内容と断面観察によってプランが確定した。カマド：東壁の中央に壁をやや掘り込む。袖の確認はできなかった。赤化した火床上面に土器片 (6・9・11) がみられた。床：ⅡB層の細粒砂層をそのまま床としている。諸施設：柱穴などは確認されなかった。埋没：大きく2分層され、下層に遺物破片が多い。遺物出土状況：破壊された北西隅より多くの土器 (2・3・5・10・12) が出土したが詳細は不明である。北壁際中央より土師器小型甕B (8) が出土している。時期：出土土器より3期から4期の様相を示すものである。

SB131　位置：中部北　図版11・59・60

検出：Ⅱ層の礫中に暗褐色土の落ち込みとして検出された。掘立柱建物址 (ST102) と土坑 (SK1467) が上面から覆土に掘り込んでいるが、床面まで達しているものはない。カマド：東壁と床を掘り込んで構築している燃焼部の中央に、2層の厚い焼土の堆積が認められる。左袖奥に袖石一つが据えられており、火床上にも花崗岩平石が一つ転がっていた。袖土などは検出できず、垂直に立ち上がる奥壁の一部が残存している。床：地山の礫の上を直接床としており、礫が露出して多少凸凹がある。埋没：単一層である。遺物出土状況：カマド火床上とカマド周辺から出土した須恵器四耳壺 (17) のほかは覆土中からの出土ある。時

期：出土土器から5期と判断した。

SB132　位置：中部北　図版11・59・60

検出：ⅡA層上面で検出されたが、覆土とⅡA層が酷似しており検出は難しかった。東側のSB133との切り合いは、SB133のカマドが本址の覆土中に存在することから、本址が切られていることが容易に判断できた。北西隅を上面から掘り込まれたSK1483が切る。カマド：SB133構築時に破壊されており、火床と掘り方が検出できただけである。掘り方上面に焼土が薄く広がる火床が認められる。床：地山の礫層まで掘り込み、頭を出している礫を取り除いて平坦な床にしている。北東部分に向かってやや高くなっていく。諸施設：カマド右側に周溝らしい細長い落ち込みが存在するが、掘り方の可能性もあり内容は明らかにならない。埋没：炭化物を含む黄褐色土の単一層であるが、埋没過程は不明である。遺物出土状況：細片が少量出土した。1は墨書土器（図版208－26）である。時期：切り合いから5期以前で、遺物の内容より4期を前後する段階を考えたい。

SB133　位置：中部北　図版11・59・60

検出：SB132の検出時に本址のカマドが発見された。北壁と東壁は上面から掘り込む土坑（SK1486・1487）によって切られており、西側で切り合うSB132と覆土が良く似ていることもあってプランが確定しなかった。ⅡA層中で検出を繰り返し、東壁の一部が残っていることが判明してプランを決定していった。カマド：床面をわずか掘りくぼめた火床に焼土が明確に残り、西壁を削り込むようにして奥壁が緩やかに立ち上がる。右袖ににぶい黄褐色土が広がるが左袖はまったく検出できなかった。床：地山の礫を床としており、やや凸凹があり軟弱な部分が多い。埋没：切り合いが激しく検出面も低いので明確にならない。遺物出土状況：カマド内より須恵器杯A（2）、高杯（3）、土師器甕B（4）などが出土したが他は少ない。2は墨書土器（図版208－27）である。時期：カマド内出土の土器より、5期と判断した。

SB134　位置：中部北　図版11・60

検出：ⅡA層中でSB135とともに不整形な落ち込みとして検出された。両者の覆土が類似しており、トレンチによる土層観察を繰り返してSB135を切る本址のプランが確定された。カマド：床面を掘りくぼめ、オリーブ褐色土を埋め戻しながら袖石を据えて、燃焼部を構築している。袖石は花崗岩の平石を用い、それを芯として黄褐色土で固めていることが確認された。焼土の厚く堆積した火床の奥に緩やかな傾斜の燃焼部奥壁が認められた。カマド左側で火を受けた礫と土器片が焼土に混じって集中して出土している。床：地山をそのまま床としており、平坦だがカマド焚口付近を除いて軟弱である。埋没：覆土が浅く埋没過程などは明らかにならなかった。遺物出土状況：カマド火床上とその左側で須恵器杯A（2）、土師器甕C（3）がまとまって出土したほかは少ない。覆土中より鉄滓が出土している。時期：出土土器から5期と判断した。

SB135　位置：中部北　図版11・60

検出：ⅡA層中で暗褐色土の落ち込みとして検出された。南東部をSB134に切られ、西側半分は調査区域外にかかる。カマド：床を浅く掘りくぼめた燃焼部全体に焼土が薄く認められる。袖土がわずかに残っており袖石および石抜き取り痕は確認できなかった。奥壁は東壁を掘り込み緩やかに立ち上がる。床：地山をそのまま使っており南側はやや軟らかい。埋没：検出面が低く詳細は不明である。遺物出土状況：量は少く、覆土中から出土している。時期：出土遺物から時期を判断することはできない。切り合いから5期よりも古いことは判明している。

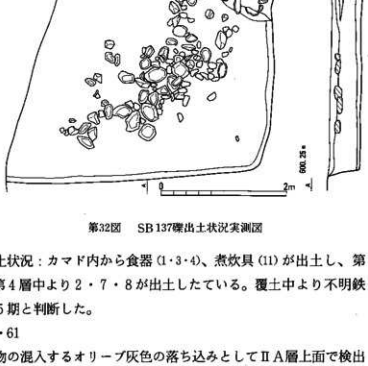
SB136　位置：中部北　図版11・62

検出：ⅡA層で検出を試みたが明確なラインが引けず、ⅡA層下位で暗褐色土の落ち込みが検出できた。西側の半分以上が調査区域外に出てしまう。カマド：東壁を函形に掘り込み、床を浅く掘り込んで構築さ

れた燃焼部中央に厚く焼土の堆積した火床が検出された。焼土の上に天井の崩落と思われる褐色土が薄く堆積し、両袖に袖土らしい粘質土がわずかに認められる。奥壁はやや緩やかに立ち上がる。煙道は削平されて確認できない。床：地山をそのまま床としており平坦であるがカマド焚口付近を除いて軟弱である。遺物出土状況：カマド内より土師器小型甕D(3)、カマド焚口付近と南東隅壁際から須恵器杯A(1・2)の完形品2点がいずれも逆位で出土した。砥石が覆土中から出土しており、ほかには破片が出土している。時期：カマド付近出土の土器から判断して、5期に帰属させた。

SB137　位置：中部北　第32図、図版11・62

検出：ⅡA層下面で暗褐色土の落ち込みとして検出された。西側約半分が調査区域外にある。カマド：両袖とも比較的小さな礫を組み合わせて芯とし褐色土で固めて構築している。焚口付近に大きな花崗岩平石が転がっており、天井に使われていた石の可能性がある。火床には焼土が厚く堆積しており、急角度で立ち上がる奥壁から緩やかな煙道へと続いている。床：礫を多く含む地山を床としており、平らに整えられているがカマドから中央部以外は軟弱である。柱穴：東側の二隅に落ち込みが認められ位置から柱穴と考えたが、柱痕跡などは認められない。埋没：基本的には第1・2・4層に3分層され、第2層の上面に焼土とともに拳大から人頭大の礫が出土した。また第3層は特に焼土が集中している部分である。堆積状況がレンズ状になっているが、礫と焼土もレンズ状に認められ南東部分に集中して投棄されたと想定される。遺物出土状況：カマド内から食器(1・3・4)、煮炊具(11)が出土し、第2層中より10、第3層中より5・6・12、第4層中より2・7・8が出土したている。覆土中より不明鉄製品が出土している。時期：出土土器から5期と判断した。



第32図　SB137礫出土状況実測図

SB138　位置：中部北　図版11・61

検出：中世の遺構が集中する一角で、炭化物の混入するオリーブ灰色の落ち込みとしてⅡA層上面で検出された。そのほとんどをSB273に切られ、北壁際がわずかに残存するだけであり、竪穴住居址と認定する根拠に乏しいが、壁と床面の状態から判断した。中世の遺構の可能性も捨て切れない。床：地山の砂礫を直接床としている。ほぼ平坦であるが硬くはない。埋没：単一層で、埋没過程も明らかにならない。遺物出土状況：覆土中より鉄製の楔が1点出土しているが、混入の可能性もある。時期：切り合いや遺物が存在せず、時期の判断はできない。

SB139　位置：中部北　図版11・61

検出：ⅡA層中に褐色土の落ち込みとして検出された。東側の大部分が調査区域外にあるため、竪穴住居址と認定できるか疑問が生じたが、床面の状態・規模・出土遺物などから判断した。床：地山をそのまま床としており、平坦であるが全体に軟弱である。埋没：単一層であるが埋没状況などは明確でない。遺物

出土状況：覆土中より須恵器(1)と土師器(2)などが出土している。時期：遺物が少なく判然としないが5期の可能性を含む4期と判断した。

SB140　位置：中部北　図版11・62

検出：ⅡA層下面まで下げた段階で焼土の残った火床が発見され、プランの確認に入ったが既に覆土は削平され掘り方部分がわずかに残存するだけである。したがって正確な形状や規模などは不明で、東カマドの大きな竪穴住居址ということが確認されたにとどまる。上面から掘り込まれたSK1512などに切られる。カマド：焼土は残っていたが、詳細は不明である。床：暗褐色粘質土が残っており、貼床を含む床下部分と考えた。遺物出土状況：カマド火床の両脇で土師器甕A(1)の大形破片が出土した。時期：カマドの遺物から2期と判断した。

SB141　位置：中部北　図版11・12・61

検出：本址は調査区の境に位置し、後世の攪乱や中世の遺構(SK1550～1555)との激しい切り合いで、カマド部分の検出によってその存在が確認された。ⅡA層下面で暗褐色土の落ち込みとして検出された。北側半分は攪乱を受け南側は中世の土坑などに切られて、部分的な検出にとどまった。カマド：きわめて残存状況が悪く、壁より内側に床面と同レベルで焼土の残った火床が確認できただけである。袖は痕跡をとどめず抜き取り痕は認められない。床：地山の上を床面と想定したが軟弱であり、掘り方の可能性も否定できない。埋没：基本的には単一層と捉えられる。遺物出土状況：覆土中より小破片が散見された。時期：遺物が少なく不確実な面があるが、4期に帰属すると判断した。

SB142　位置：北部南　図版12・64

検出：ⅡA層中で小礫混じりの暗褐色土の落ち込みとして検出された。カマドの南半分から東壁は最近の攪乱を受けており、北西隅は調査区域外に出る。カマド：半分が攪乱を受けて残存状況が悪いが、東壁を掘り込んで構築された燃焼部が検出されほぼ床面上に火床が位置している。袖はまったく確認できず袖石や抜き取り痕も認められない。奥壁は垂直に立ち上がるが煙道は削平されて検出できない。床：地山の礫層まで掘り下げ、その上に黄褐色砂質土を薄く貼床している。平坦で堅緻な貼床は中央部に認められ、壁際は地山の礫が露出している。埋没：炭化物・焼土の混じる単一層で、一時に人為的に埋められたと考えられる。遺物出土状況：南東隅床面上から須恵器杯蓋B(2)が出土し、カマド内より土師器甕類(3・4)が出土した。2は転用砥(図版213−116)である。時期：出土土器から判断して3期とした。

SB143　位置：北部南　図版12・64

検出：ⅡA層中でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出された。北側のSB145との切り合いは、上面の掘立柱建物址ST111の掘り込みや、礫層中での検出ということで判然としなかった。土層断面の観察から本址が切っていると判断した。カマド：ほぼ床面上に構築された火床には薄く焼土が残っており、中央奥寄りに支脚抜き取り痕と思われる焼土の詰まった小ピットが存在する。左袖では地山を掘り残して芯としているのが認られ、右袖には構築材の暗褐色土がわずかに残存していた。急傾斜で立ち上がる奥壁と、わずかではあるが煙道が確認された。床：地山の礫層まで掘り下げ黄褐色砂質土を全面に貼床している。平坦ではあるが硬い部分は少ない。埋没：大小の礫が入りブロック状に土が混じる単一層であり、人為的埋没と捉えた。遺物出土状況：火床上に土師器小型甕D(6)がまとまって出土したほか、覆土中から出土している。また北東隅床面から棒状鉄製品と、北西側床面より砥石(図版216−8)が出土している。時期：出土土器から6期と判断した。

SB144　位置：北部南　図版12・64・66

検出：SB145の覆土掘り下げ中に本址のカマドが検出されたことからその存在が明らかになった。したがってSB145を切るが、検出は逆になり、東壁を中心に調査中に削り取られた部分が多い。ⅡA層中に礫混

じりの灰黄褐色土が落ち込み、南壁の一部を上面の掘立柱建物址ST111が切っている。カマド：削平された部分が多く奥壁から煙道は検出できなかった。床を楕円形に掘り込み褐色土を埋めながら燃焼部を形成しており、その際中央奥寄りに石製支脚を埋め込んでいる。両袖とも礫を芯として灰黄褐色土で固めて構築されており、左袖が比較的残存状況が良い。袖の上から周辺に土師器甕片が散乱しており構築材として使用された可能性が高い。床：地山の礫の上を砂質土で薄く貼床をしており、全体に平坦で堅緻である。埋没：焼土・炭化物を含む単一層で人為的埋没と考えた。遺物出土状況：カマド周辺に土器（1・6・8・10～15）が集中するが、いずれも床面より5㎝前後上から出土している。同様に砥石（図版216－13）が出土している。時期：貯蔵具を中心に出土土器が充実しており、それで判断すると7期である。

SB145 位置：北部南 図版12・64・66

検出：Ⅱ A層下面で礫混じりの灰黄褐色土の落ち込みとして検出された。南西隅をSB143と掘立柱建物址ST111に切られ、西半分は上面をSB144に削り取られている。カマド：火床は床を浅く掘りくぼめており、火床から煙道にかけては、緩やかに立ち上がる。両袖は地山の礫層を掘り残して芯とし、それを黄褐色砂質土で包むようにして構築されている。床：地山の礫のうえに灰黄褐色土を中央で薄く周辺ほど厚く貼床しており、平坦で堅緻である。埋没：礫の非常に多い単一層で、土がブロック状に混じっている。人為的埋没の可能性が高い。遺物出土状況：カマド内から土師器甕A（3）が出土したほかは、破片が散在する程度である。棒状鉄製品と凹石（図版216－2）が覆土中より出土している。時期：出土土器の量は少ないが比較的まとまっており、1期に帰属すると判断した。

SB146 位置：北部南 図版12・64

検出：Ⅱ A層の礫中に大小の礫の多く混じった暗褐色土が落ち込んでおり、地山とは土色の違いで判別できた。南壁の一部と覆土をST109やSA14などが切っている。床をわずかに掘り込んだ火床の両脇は地山を掘り残して芯としてあり、それを灰黄褐色粘質土で覆って袖を構築している。奥壁は船底形で急角度で立ち上がるが、煙道は削平により検出できない。床：床面に地山の礫が頭を出しており、貼床の痕跡は認められない。埋没：地山に類似する土の単一層であり、人為的埋没の可能性が強い。遺物出土状況：覆土中より須恵器杯A・B（1・2）、土製紡錘車（図版218－21）がある程度で出土量は少ない。時期：土器から判断して5期とした。

SB147 位置：北部南 図版12・64・66、PL21

検出：Ⅱ A層での検出作業中にカマド石と焼土などが検出されて本址の存在が明らかになった。SK1675が掘り込まれ、壁などを切っていることもあってプランの確定に手間取り、先行トレンチを入れて礫混じりの暗褐色土の落ち込みを検出した。カマド：両袖に大きな花崗岩の平石を一つずつ据え、暗褐色土で固めて構築している。ほぼ床面と同じ高さの火床に薄く焼土が認められた。奥壁から煙道は比較的緩やかに立ち上がる。床：地山まで掘り下げて礫層面をそのまま床としており、やや凸凹がある。柱穴：確認できなかったが、北東隅床上に花崗岩平石が置かれるように出土しており、礎石の可能性もある。埋没：焼土・炭化物を含み大小の礫の混じった単一層で、人為的埋没と捉えた。遺物出土状況：カマド内に多く（5～10）、左袖側の南東隅覆土にもまとまっていた（1～4）。4は墨書土器（図版208－28）である。時期：割り合い良好な残存状況を示すカマド周辺の床面出土土器から、6期に帰属すると判断した。

SB148 位置：北部南 図版12・64・66

検出：Ⅱ A層上面で礫混じりの暗褐色土の落ち込みとして検出された。南側は土色の違いで比較的明瞭にわかったが、北側ははっきりせず部分的に掘りすぎた箇所がある。カマド：東壁を函形に掘り込み、床を浅く掘りくぼめて構築した燃焼部は、全体に良く焼けていた。両袖は黄褐色土と暗褐色土の混じった土を使っており、袖石の使用は認められない。火床左寄りに支脚抜き取り痕が検出された。奥壁から煙道は同

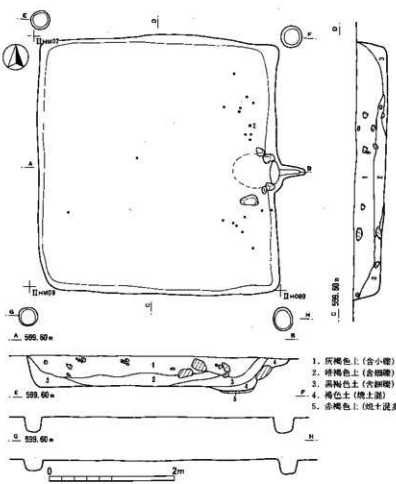
じ角度で立ち上がり、先には石と土器片を入れた掘り込みが存在する。床：貼床などは認められず地山の礫が露出している。埋没：炭化粒を含み小礫の多量に混入した土が覆土で、単一層であり人為的埋没の可能性が強い。遺物出土状況：カマド内と住居址南半覆土中に比較的多いが、小片である。カマド内からは土師器甕Bが出土している。釘と思われるものが覆土中に1点ある。時期：混入した可能性のある遺物もみられるが、土器から4期に帰属すると判断した。

SB149　位置：北部南　図版12・66

検出：ⅡA層中に暗褐色土の落ち込みとして検出され、土色の違いからプランの確認は比較的容易であったが検出面はきわめて低い。カマド：ほとんどが削平されて西壁と床をわずかに掘り込んでつくられた火床と、袖土の一部が確認できただけである。床：地山の礫を床としており南にむけて少し傾斜している。埋没：覆土が薄く埋没過程などは明瞭にならない。遺物出土状況：カマド内より土師器甕B小片、左袖側の南西隅より土器片（1・2など）、鉄製紡錘車（図版215－39）が出土した。帰属時期：遺物量が少ないが、貯蔵具などで判断すると4期に帰属する。

SB150　位置：北部南　第33図、図版12・63、PL21

検出：ⅡA層中で遺物や小円礫を多く含む灰黄褐色・暗褐色を呈する部分がみられたが、周囲のⅡA層と近似していたため、断面観察などを行ないながら住居址のプランを確定した。また住居址の四隅の竪穴外に同じ覆土を持つピットが4基確認され、本址に伴なうものとして合わせて調査した。カマド：東壁中央部カマドが構築される。石組カマドで、両袖は長楕円の石が核になるように立てて並べられている。火床部はよく燃焼しており、火床部奥壁には扁平な花崗岩が貼り付けられていた。煙道は扁平な花崗岩の上面から伸びている。床：貼床は認められない。諸施設：壁外の4か所に本址の柱穴と思われるピットが存在している。4基とも規模・形状は同じで30～36cmの円形を呈する。埋没：3分層され、淘汰のよい土であることから自然埋没と考えられる。遺物出土状況：カマド周辺に遺物が多い。左袖外側に灰釉陶器椀（2）があるほか、カマド両袖にほとんどが集中する。ほかに棒状鉄製品が覆土中より出土している。時期：出土遺物より8期で捉えられる。



第33図　SB150実測図

SB151　位置：北部南　図版12・63

検出：ⅡA層下面に近い層位で検出され、遺跡を東西に横切るトレンチの断面観察により存在を知り、プランを確定した。トレンチにより住居址の北壁を失う。住居址との切り合いはないが、SK1627・1628が

南西隅を切る。カマド：東壁中央部に位置し奥壁外に向かって函形に近い形で張り出す。袖は検出されず、火床はあまり焼けていない。床：貼床の痕跡はなく、礫が多く露出した面をそのまま床としている。諸施設：柱穴などは確認されない。埋没：単層である。覆土は海汰がよいことから自然堆積と思われるが、確定できない。遺物出土状況：カマド周辺より土師器甕B (2) と須恵器杯A (1) が小破片の状態で散乱しているほかは遺物量が少ない。時期：須恵器杯の出土と土師器甕Bの様相より5期と判断される。

SB152 位置：北部南 図版12・63・64

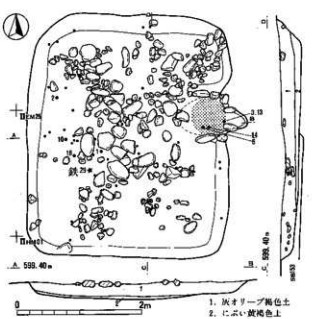
検出：ⅡA層上位で検出された。遺跡を東西に横切るトレンチによって破壊され南壁は不明である。カマド：東壁中央部に位置する。両袖は地山を利用しており、燃焼部である袖内側に石を組んでいる。火床上面には黄褐色粘質土が覆い、天井部の構築材の崩落と考えられる。床：東側半分に貼床が認められる。諸施設：西側の南と北から1基づつ柱穴が確認されたが、それと対応する東側部分には柱穴はなかった。カマド右袖の外側の東壁に、地山を利用した床より15cm程高い平坦な段が検出された。平坦面はおよそ60×70cmの広さをもつ。埋没：単層であり、大形の礫や土器破片を多く含むことから人為的な埋没と考えられる。遺物出土状況：覆土から大形破片が出土しているが、いずれも床面から高い位置にある。カマド内およびその周囲からの出土も多く、須恵器杯A・杯蓋B (3・5)・土師器甕B・C (11～13) がみられ、また須恵器甕E (15・残存率口縁部30%) がカマド左袖外側の東壁に寄りかかって出土している。時期：遺物の様相より4期と考えられる。

SB153 位置：北部南 図版12・63・65

検出：ⅡA層で検出される。SB154と北側で切り合う。断面観察の結果、本址の埋土中にSB154の床が確認されたことと、平面観察からも新旧関係は明瞭で、本址が古いと判断された。カマド：東壁中央部に位置する。両袖は粘質土を使ってつくられ、煙道は短く船底型に上がる。床：貼床はなく、地山を床にしている。諸施設：柱穴などの掘り込みは認められない。南壁に沿って粘質土が約1mの幅で、床より10m高い部分があった。覆土の可能性もある。埋没：土がブロック状に入っていることより人為的な埋め戻しと思われる。遺物出土状況：須恵器杯A・B (1～4) が覆土から出土している。時期：土器の構成から3期として捉えられる。

SB154 位置：北部南 第34・35図、図版12・63・65、PL22

検出：ⅡA層中で検出され、SB153と南側で切り合う。断面観察からSB153の埋土中に本址の南壁の立ち上がりがみえ、また本址の埋土中に含む礫の広がりから平面的にも新旧関係をみることができた。本址が新しい。カマド：東壁やや北寄りに花崗岩を主体とする石組カマドがある。左袖には構築材と思われる粘土が残っていたが、右袖には見られなかった。床：中央部がやや低い。北半に貼床がみられる。埋没：単層で花崗岩が多く入る。人為的埋没と思われる。遺物出土状況：埋土中に散在する。カマド内より黒色土器A杯A・椀 (3・6) と土師器甕B (13・14) が出土する。ほかに墨書土器 (図版208－29) と鉄鏃 (図版214－28・29) が覆土中より出土している。時期：カマド内出土遺物と覆土出土遺物の様相に差がなく、これらより



第34図 SB154遺出土状況実測図

8期と捉えられる。

SB155　位置：北部南

図版12・65・66

検出：ⅡA層の礫層上面で礫の混入した灰黄褐色土の落ち込みとして検出された。遺物の多出と焼土の確認で本址の存在が想定され、土色の違いなどで比較的容易にラインが確定できた。カマド：床と東壁を掘り込み黄褐色土を埋め戻しながら燃焼部をつくっており、薄く焼土を伴なう火床が認められた。その両脇には袖土として使用された焼土混じりの黄褐色土が散乱し、芯として使われた可能性のある礫が転がっていた。奥壁は船底形につくられ急角度で立ち上がる。床：地山の礫までほぼ平坦に掘り下げ、黄褐色砂質土を薄く貼床しておりやや軟弱である。埋没：砂礫をあまり含まない黄褐色土が北壁際を中心にレンズ状に堆積し、その上に礫を多量に含む灰黄褐色土が厚く堆積する。それが人為的なのか自然埋没なのかは判断できなかった。遺物出土状況：全体的に出土量は少なく破片が多かったが、カマド右側の南東隅にあった土師器甕C (5) と須恵器長頸壺 (8) は完形であり、床面にほぼ原位置を保って置かれていた。カマド内からは土師器甕B (6・7) がある。時期：床面出土の土器から、5期に帰属すると判断した。

第35図　SB154カマド実測図

SB156　位置：北部南　図版12・66

検出：ⅡA層の礫上面でSB157と切り合う状態で検出された。両者の覆土が酷似しており、切り合い関係を土層断面の観察から本址が切られていると判断した。灰黄褐色土の落ち込みであり、全体の半分ほどが切られている。カマド：西壁と床を船底形に掘り込んで構築しており、火床は厚く焼土が堆積していた。左袖の残りが良く、花崗岩の平石を掘り方に据え、暗褐色土で固めて構築されている。両袖から袖石抜き取り痕、燃焼部中央に支脚抜き取り痕が検出された。奥壁は船底形を呈し、緩やかな傾斜の煙道がわずかに認められる。床：地山まで平坦に掘り込みそのまま使用しており、貼床や硬い部分の痕跡は確認できない。埋没：礫を多量に混入する単一層であり、埋没過程は明らかにならない。遺物出土状況：カマド付近 (5・6) にやや多いが破片が散在する程度である。時期：切り合いと出土土器から、4期と判断した。

SB157　位置：北部南　図版12・66

検出：ⅡA層中に灰黄褐色土の落ち込みとして検出された。北側は検出が容易であったが、SB156と切り合う南側はラインが明瞭に引けなかった。カマド：床をわずかに掘りくぼめた燃焼部は薄く土を埋め戻して構築しており、ほぼ床と同レベルに良好な火床が残り、その上に天井の崩落らしい黄褐色土が乗っている。両袖には袖の黄褐色土が残存している。奥壁は垂直に近い立ち上がりをみせ、煙道は削平されて検出できない。床：地山の礫を深く掘り込んで床を構築しており、礫の上に黄褐色粘質土が認められるので貼床されていた可能性が強い。埋没：礫の混入度合いによって3分層される。特に中層に多量の礫が投棄されており、人頭大の礫が中央部に集中し床からはやや浮いて出土している。少なくてもこの層は人為的埋没である。遺物出土状況：カマド左袖脇より須恵器杯A (3) が完形で出土したほか、カマド火床上、天井崩落土下面に甕類 (11・12) があり、また中層の礫層からも出土した。ほかに砥石2点が覆土中層から、棒状鉄製品は覆土上層より出土している。時期：出土土器から判断すると5期であり、切り合いもそれを裏付けている。

SB158 位置：北部南 図版12・63・65

検出：ⅡA層の礫上層で礫混じりの褐色土の落ち込みとして検出された。SB159と切り合う北東部以外は容易に検出できた。SB159のカマドが本址の北東隅を切るので、切り合い関係は本址が古いと判明した。カマド：東側壁寄り中央の床面から焼土と花崗岩の平石が出土したので、この付近に存在した可能性が高い。床：地山の礫の上に暗褐色粘質土で薄く貼床しており、東側および西側の残存状態が良い。多少凸凹があり北側がやや低い。埋没：検出面が低く埋没過程は明確にならないが、拳大から人頭大の多量の礫が投棄されていた。遺物出土状況：覆土中に小破片が点在する。時期：出土土器は細片であり不明確な部分もあるが、切り合いも考え合わせて、2期に帰属すると判断した。

SB159 位置：北部南 図版12・63・65

検出：ⅡA層中で小礫と炭化物を含む褐色土の落ち込みとして検出された。西側のSB158との切り合いは本址のカマドが切ることではっきりとわかったが、この部分のプランは先行トレンチを入れて確定した。カマド：床面上に焼土が残存しその下がわずかに掘りくぼめられて暗褐色土が入れられている。袖は礫を掘り残して芯としており、その周りを黄褐色砂質土で固めて構築している。西壁をわずかに掘り込んで奥壁から煙道が垂直に近く立ち上がる。床：覆土を取り除くと礫が露出する状態であったが、黄褐色砂質土がわずかに存在するので貼床されていた可能性がある。埋没：小礫を多量に含む単一層であるが、礫が投棄されたものかどうかははっきりしない。遺物出土状況：破片が多く、床からかなり浮いた状態で礫と同じレベルで出土するものが目立つ。11はカマド火床からの出土で、本址覆土出土の須恵器長頸壺(12)はSB160出土のものが接合している。時期：切り合いと出土土器から、4期にと判断した。

SB160 位置：北部南 図版12・63・65

検出：ⅡA層中より検出する。東約半分が調査区外に伸び、西側部分の調査となる。規模・形状より住居址と認定した。カマド：調査区外にあると思われ、西側部分では確認することができない。床：貼床はなく地山をそのまま床としている。非常に堅く、面として捉え易かった。埋没：2分層され、淘汰が良いことから自然堆積によるものと思われる。遺物出土状況：須恵器杯A・B(1・2・4)・鉢(3)、土師器甕、土製紡錘車(図版218−17)などの小破片が覆土中より出土している。本址の覆土中から出土した須恵器長頸壺はSB159出土のものと接合している(図版176−12)。時期：土器から4期と判断される。

SB161 位置：北部南 図版12・65

検出：ⅡA層の礫中に灰黄褐色土の落ち込みとして検出された。当初1軒の竪穴住居址と考えたが、トレンチによる断面観察の結果、床が2面検出され2軒の存在が確認された。SB161・162として平面および断面の観察を行なった。切り合いの新旧関係が判然とせず、カマドが認められる本址を一応新しいとして調査を続けたが、後にこの判断は誤りであることが出土遺物などから明らかになった。したがって上面をSB162に切られ、南東隅部分は調査区域外にかかる。カマド：区域外にかかるため、床を掘り下げて構築した焼土の厚く堆積する燃焼部の一部と、袖土と思われる暗褐色土の高まりが確認できただけである。床：地山の礫まで平らに掘り下げそのまま床としているが全体に軟弱である。埋没：単一層であり人頭大の礫が入っていることから人為的埋没の可能性があるがはっきりしない。遺物出土状況：覆土全体に散在するものが多い。床面近くの遺物としては3・4・6・9・17の須恵器杯Aがあり、それより高い地点からは5・7・8の須恵器杯Aが出土している。後者はSB162に帰属する可能性がある。また鉄鏃(図版214−25)は本址に伴うものと考えられるが、砥石、土製紡錘車(図版218−16)はSB162の可能性もある。時期：床面出土の土器を検討の結果、4期に帰属すると判断できる。

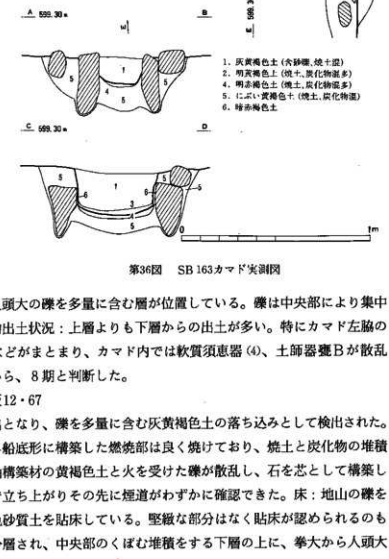
SB162 位置：北部南 図版12・65

検出：礫層がうねるように大きくくぼむ場所での検出であり、SB161との切り合いを含めて明確にできな

かった。結果的には本址はSB161の覆土上面を切って床を貼る新しい住居址であるが、検山・調査は逆になってしまった。また南東の大部分が調査区域外に出る。カマド：確認できなかったが東側に存在すると考えた。床：地山の礫まで比較的平坦に掘り下げ、その上に貼床をしているらしい痕跡が一部に認められた。埋没：礫などをあまり含まない暗褐色土の単一層であるが、覆土が浅く埋没過程などはわからない。遺物出土状況：出土量は少なく細片が散在する程度である。時期：出土量が少ないうえに混在も見られ、時期の確定にはやや不明瞭であるが、6期の可能性を含む5期と判断した。

SB163　位置：北部南　第36図、図版12・67

検出：Ⅱ A層上面で灰色っぽい落ち込みが見えたがはっきりとせず、下面まで下げて灰黄褐色土の落ち込みが確定した。南東隅は調査区域外にかかり一部調査できない部分が残った。カマド：西壁を大きく深く掘り込み、左右に3個づつの花崗岩を主とする平石を据え、黄褐色土で固めて袖を構築している。石の下部は床から20㎝以上深く埋められ、さらに礫で裏込めされていることも確認できた。石の上に大小の礫が重ねられており、焚口付近に大きな平石が存在することから、石を組み天井にも石を用いたと想定できる。焼土と炭化物の厚い層の下に良く焼けた火床があり、その奥に緩やかに登るの奥壁と煙道が見られる。床：地山の礫を平坦にして床としているらしく覆土の下に礫が露出するが、カマド焚口付近には黄褐色土が薄く堆積しておりこれが貼床になる可能性が高い。埋没：2分層され、下層は礫をほとんど含まず中央部がくぼむように堆積し、その上に人頭大の礫を多量に含む層が位置している。礫は中央部により集中し焼けた痕跡のあるものも混じる。遺物出土状況：上層よりも下層からの出土が多い。特にカマド左脇の床から軟質須恵器(3)、土師器甕B(5)などがまとまり、カマド内では軟質須恵器(4)、土師器甕Bが散乱していた。時期：床面出土の土器などから、8期と判断した。



第36図　SB 163カマド実測図

SB164　位置：北部南　図版12・67

検出：Ⅱ A層から礫上面にかけての検出となり、礫を多量に含む灰黄褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：床面と東壁をわずかに掘り込み船底形に構築した燃焼部は良く焼けており、焼土と炭化物の堆積した火床が認められる。両袖付近には袖構築材の黄褐色土と火を受けた礫が散乱し、石を芯として構築した袖の残存と思われる。奥壁は急角度で立ち上がりその先に煙道がわずかに確認できた。床：地山の礫を中央部がくぼむように掘り下げ、暗褐色砂質土を貼床している。堅緻な部分はなく貼床が認められるのも一部分である。埋没：大きく上下に2分層され、中央部のくぼむ堆積をする下層の上に、拳大から人頭大

の礫が中央に集中して投棄されている上層が堆積する。人為的埋没を考えたい。遺物出土状況：全体に出土量が多い。特にカマド焚口から4・5が出土し、また同一個体の破片が上層と下層で接合する。北東隅にある貼床上に砥石（図版216−10）が出土している。時期：出土土器から判断して6期とした。

SB165　位置：北部中　第37図、図版13・68

検出：Ⅱ A層中の礫層上面で暗灰黄褐色土の落ち込みとして検出された。カマドなどの施設はまったく検出されず遺物も認められないので、竪穴住居址と認定できるか問題があるが、規模や壁・床の状態から判断した。床：ほぼ平坦ではあるが礫が露出している状況で、貼床などの痕跡も認められなかった。埋没：単一層で礫の大量投棄がみられる。特に南東隅付近に集中して投棄されており、そこから放射状に住居址全体に広がっている。住居址構築途中で放棄したような状況を呈する。時期：時期を決定する根拠はないが、北側に位置するSB169と規模や軸線が類似するので、何らかの関連が窺われる。

第37図　SB165礫出土状況実測図

SB166　位置：北部中

図版13・69

検出：Ⅱ A層の礫中で、小礫の混入した暗灰黄褐色土の落ち込みとして検出されたが、礫中で確認ができず、床面に近いレベルでの検出になった。カマド：西壁を大きく掘り込んで構築しているカマドで、両袖の付け根部内側に一対の袖石を配している。袖はオリーブ褐色土でつくられているが、残存状態が悪いため明確にならない。焚口付近から両袖に、焼土や火を受けた礫が散乱している。床：礫をそのまま床としており、若干の凸凹はあるが大きな礫などは取り除かれている。貼床などは認められない。埋没：礫の混入の多い単一層で、覆土が浅いため埋没過程などは明らかにならない。遺物出土状況：破片ではあるが、カマド内（1～3）と焚口付近（1・3）に集中する。不明鉄製品が覆土中から出土している。時期：カマド周辺の遺物から、7期に帰属すると判断した。

SB167　位置：北部中　図版13・68

検出：Ⅱ A層上面で褐色土の落ち込みとして検出された。カマドと東壁際が検出できただけで、西側の大部分は調査区域外に出てしまう。カマド：床面を浅く掘り込み船底形に構築された燃焼部中央に円形に焼土の残る火床が位置する。両袖で地山を掘り残して芯とするのがわずかに認められたが、そのほかの状況は確認できなかった。奥壁は急角度で立ち上がり、煙道は削平されて検出できない。床：地山をそのまま床としており、平坦だが軟弱である。埋没：4分層でき最下層から床面にかけては焼土・炭化物が多量に含まれるが、埋没過程は明確にならない。遺物出土状況：カマド右脇の南東隅を中心に須恵器杯A（1）、甕類（2～4）などが床面から出土した。カマド焚口付近で植物質の繊維が編まれた状態で、炭化して出土した。時期：床面出土の土器を中心に検討して、2期と判断した。

SB168　位置：北部中　図版13・70

検出：Ⅱ A層中で褐色土の落ち込みとして検出され、南側半分は現在の用水堰に上面を削られている。カ

マド：西壁際中央に花崗岩の平石を据えた掘り方が検出され、その中や周辺に焼土と炭化物が散乱していた。奥壁が部分的に確認されただけで袖や煙道などの施設は認められず、カマドの残存と捉えた。床：地山の礫を床に使用しており、やや軟弱で平坦である。貼床などは認められない。諸施設：北西隅付近で浅い落ち込みを1基検出した。埋没：大きく3分層され中央のくぼんだ中層に人頭大以上の礫が投棄されている。遺物出土状況：カマドと推定される付近から土師器甕B (12) が出土したほかは、礫の間からの出土が多かった。1は墨書土器（図版208−30）で、ほかに1点（同図版31）があり、7～9は転用硯（図版212・213−117～119）である。本址覆土出土の須恵器杯Bは SB169出土のものと接合している（図版178−6）。時期：混入と思われる土器もあるが、土器からは8期と判断できる。

SB169　位置：北部中　図版13・68

検出：ⅡA層の礫に褐色土が落ち込み、比較的明確にプランは判明した。SK326に切られることも土色の違いで容易にわかった。カマド：東壁を船底形に掘り込みほぼ床面上に構築されている。火床の焼土の上に黄褐色土の層があり天井の崩落とも考えられる。両袖は黄褐色粘質土で固めているがいくつかの礫を芯としている。奥壁は緩やかに登り煙道は削平されて確認できない。床：礫層の上に褐色粘質土を薄く貼床しており、あまり堅緻ではない。埋没：単一層であり中央部に拳大から人頭大の礫が床面から少し浮いて積み重なるように大量に投棄されており、人為的埋没と捉えた。遺物出土状況：カマド内から須恵器杯A (3)、土師器甕A (10)、カマド左側付近床面から須恵器杯A (2)、土師器甕A (11)、南東隅と北西隅から土師器甕B (12)、南西隅より須恵器杯B (6)、砥石（図版216−9）など、床面からの出土が多い。6はSB168・170覆土出土のものが接合している。時期：貯蔵具を中心に時期判断できる土器が多く、土器から2期に帰属すると判断した。

SB170　位置：北部中　図版13・70

検出：ⅡA層中で褐色土の落ち込みとして検出されたが、西側が半分以上調査区域外にかかる。カマド：袖を中心に残存状態は比較的良好であった。袖の位置の地山を掘り残し、その上に3個程の石を据えて芯とし、周囲を暗褐色土で固めて構築している。燃焼部は床を掘りくぼめずに構築し、全体が良く焼けている。奥壁から煙道はなだらかに登り、煙道の方向は住居址の主軸線よりもかなり北に振れる。床：地山の礫の上に褐色粘質土を薄く貼床しており、平坦だがあまり堅緻ではない。埋没：3分層され、人頭大の礫を多量に含む中層が厚く堆積している。遺物出土状況：カマド内より土師器甕B (7) がまとまって出土したほかは覆土に散在している。覆土出土の須恵器杯BはSB169出土のものに接合する。時期：出土土器から2期と判断した。

SB171　位置：北部中　図版13・71

検出：ⅡA層上面で礫の混じったオリーブ褐色土の落ち込みとして検出され、西側壁際は調査区域外にかかるため調査不能であった。カマド：中央部で出土した礫の中に火を受けたものが見られるが、カマドと関係があるかは不明で西壁に位置する可能性を指摘できるにとどまる。床：比較的凸凹のある礫層の上面を床としており、やや軟弱で貼床は認められない。埋没：大きく2分層され、上層に大量の礫の投棄がみられる。礫は比較的小さなものが多く、煤の付着したものや熱を受けたものが大半である。人為的埋没の可能性が高い。遺物出土状況：北壁際中央の覆土から完形の灰釉陶器耳皿 (3) が出土するなど灰釉陶器片の出土が目立った。5・7は転用硯（図版213−120・121）で覆土より出土した。時期：出土土器から8期と判断した。

SB172　位置：北部中　図版13・70

検出：ⅡA層上面でSB173と切り合う状態で検出された。当初は断面観察の結果から本址が古いと判断をした。SB173の精査中にその西壁から多量の焼土が出土したため、改めて切り合い関係を確認し逆であ

ることが判明した。したがって東壁のカマド奥壁は誤って削られた部分がある。カマド：東側半分を削り取られてしまい奥壁と煙道は確認できない。床面を掘り込み黄褐色土を埋め戻して燃焼部を構築しており、火床には焼土がきれいに残っている。両袖はオリーブ褐色土でつくられており袖石は抜き取り痕なども認められない。床：地山の礫を平坦にして床としているが黄褐色土が部分的にみられるので貼床の可能性もある。埋没：礫を含んだ土が3分層されいわゆるレンズ状堆積を呈する。遺物出土状況：カマド焚口手前の炭化物が広がり土器(5・6)がみられたほかは、カマド右袖脇からの出土が多く、床からは浮いた状態で出土した。6は転用硯（図版213−122）で、また覆土より銅椀小片が出土している。なお本址覆土から出土した灰釉陶器椀と軟質須恵器杯はSB173出土のものと接合している（図版180−15・17・18）。時期：切り合いからSB173よりも古いことが明らかになったが、出土土器で見るかぎりは同住居址とも8期に帰属し、違いは認められない。

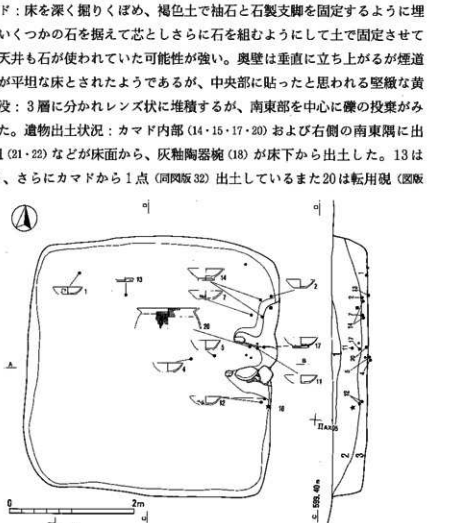
SB173　位置：北部中　図版13・70

検出：ID層中で存在を知ることはできたが、輪郭を捉えることができず、IIA層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出された。西側のSB172を切ると判断して精査を続けたが、後にその切り合い関係が逆であることがわかった。カマド：床を深く掘りくぼめ、褐色土で袖石と石製支脚を固定するように埋めながら燃焼部を構築している。いくつかの石を据えて芯としさらに石を組むようにして土で固定させており、周辺に散乱する花崗岩から天井も石が使われていた可能性が強い。奥壁は垂直に立ち上がるが煙道は確認できない。床：地山の砂礫が平坦な床とされたようであるが、中央部に貼ったと思われる堅緻な黄褐色土が部分的に認められる。埋没：3層に分かれレンズ状に堆積するが、南東部を中心に礫の投棄がみられ、埋没過程は判然としなかった。遺物出土状況：カマド内部（14・15・17・20）および右側の南東隅に出土が多く、灰釉陶器椀（16・19）、皿（21・22）などが床面から、灰釉陶器椀（18）が床下から出土した。13は墨書土器（図版208−33）で覆土より、さらにカマドから1点（同図版32）出土しているまた20は転用硯（図版213−123）で覆土中より、もう1点（同図版124）が出土している。なお17・18と覆土出土の15はSB172出土の破片が接合している。時期：床面から良好な状態で出土した土器が多く、それから判断して8期とした。

SB174　位置：北部中

第38図、図版13・71、PL22

検出：ID層中で存在を知ることはできたが、輪郭を捉えることができず、IIA層上面で礫の多い暗褐色土の落ち込みとしてプランが確定した。カマド：床の上に礫を据えそれを芯に暗褐色土で袖を構築している。右袖には2個の石が据えられ、さらにいくつかの礫が組まれているが、左袖は抜き取り痕が認めら



第38図　SB174礫出土状況実測図

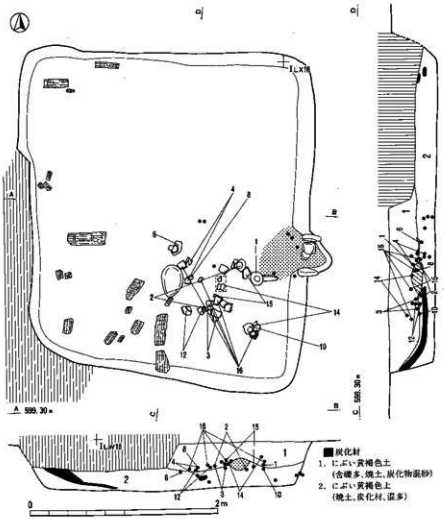
れるだけである。火床に薄く焼土が残り奥壁は垂直に立ち上がる。床：地山の砂層を床としているため、平坦ではあるがやや軟弱である。埋没：礫を含む土で3層に分かれレンズ状の堆積をする。南東部には礫の投棄がみられ、床面から覆土中にかけて集中している。埋没過程は判然としない。遺物出土状況：カマド周辺を中心に出土量が多く、墨書土器（図版208・209－34～40）が7点出土した。カマド左袖の上に黒色土器A杯(11)、灰釉陶器椀(17)、右袖には黒色土器A杯(12)が乗っており、墨書がある。その脇に土師器杯(7)、黒色土器A椀(14)などが出土し、北西隅の床面にも墨書のある土師器杯(1)が位置する。左袖にも上に乗るようにして、刀子（図版174－16）が出土したほか不明鉄製品3点が覆土中より出土している。時期：カマド付近と床面出土の遺物から、8期と判断した。

SB175　位置：北部中　図版13・71

検出：ⅡA層上面で灰黄褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：床をわずかに掘りくぼめ暗褐色土を入れながら燃焼部を構築している。両袖は石の残りが良くそれぞれ2個ずつの花崗岩平石を据え、その周囲から奥壁にかけて礫を組むようにして黄褐色土で固めている。薄く焼土の残る火床から急角度で立ち上がる奥壁、そしてほぼ水平に伸びる煙道へと続く。煙道の手前部分は幅の広い掘り方が認められるが、煙道と掘り方の区別はできなかった。床：覆土を取り除くと地山の礫が露出する状態で床面がはっきりと捉えられなかった。貼床の痕跡などは認められないので礫の上を床と想定すると、西側が高くカマドに向かって傾斜しており堅緻な部分はない。埋没：単一層で小礫を多量に含むが、埋没の状況は明らかにならない。遺物出土状況：土師器椀(1)がカマド左側の北東隅から、黒色土器A杯(2)が北西隅から、灰釉陶器椀(4)が南東隅からそれぞれ床面より出土した。覆土中より墨書土器（図版209－51）が1点出土している。本址出土の須恵器甕片がSB184のものに接合している（図版186－18）。時期：床面出土土器から、8期と判断した。

SB176　位置：北部中　第39図、図版13・74

検出：先行トレンチによって本址の存在が確認されて、ⅡA層上面で黄褐色土の落ち込みとして検出された。西壁から北壁の上面を先行トレンチで削り取られている。カマド：東壁を船底形に掘り込み床を浅く掘りくぼめて構築された燃焼部で、その左右の壁に立てかけるように一つずつ花崗岩平石が据えられている。カマド内部や焚口付近にも礫が散乱するので、さらにいくつ



第39図　SB176炭化材出土状況実測図

かの袖石が使用されていた可能性があるが、それを固めていた袖土は確認できなかった。焼土のしっかりと残った火床の奥に垂直に近い立ち上がりを見せる奥壁が存在する。床：地山の礫の上面を平らにして床としており、堅緻な部分や貼床は認められない。埋没：上下2分層された層の間から炭化材と焼土が礫とともに出土した。炭化材は一部で壁に向かって放射上に広がっていたものの床からは浮いた状態であり、火災による焼失とは考えにくい。遺物出土状況：遺物はすべて2層上面より炭化物や礫に混在しており、南東部に集中する。土師器杯（1～6）、椀（5）、黒色土器A杯（7）、椀（8・9）、灰釉陶器皿（11）、土師器甕B（16）などが多出した。また本址出土の須恵器甕AはSB177出土のものと接合している（図版182－10）。時期：土器の出土個体数が多く、それから判断して8期とした。

SB177　位置：北部中　図版13・74

検出：ⅡA層上面にて灰黄褐色土の落ち込みとして検出した。カマド：床を浅く掘りくぼめ左右に一つずつ大きな花崗岩平石を据えている。袖石の間隔が約20㎝と狭く天井に平石を一つ設置している。袖土は覆土と類似するためか確認できず、火床も焼土などがほとんど認められなかった。奥壁は急角度で立ち上がるが、煙道は削平されて確認できない。床：地山の礫を平らにして床としており、平坦であるが貼床などは認められない。埋没：小豆大から拳大の礫を多量に含む単一層で、人頭大の礫が中間に投棄されている。人為的埋没の可能性が高い。遺物出土状況：礫に混じるように土器片が出土している。北東隅覆土に遺物が多く、12の須恵器甕Aは北西隅から出土した。10の須恵器甕Aはカマド脇覆土から出土し、SB176出土のものと接合している。『嬰』と書かれた墨書土器（図版208－42）、鉄滓が覆土中より出土している。時期：出土土器から8期と判断した。

SB178　位置：北部中　図版13・74、PL23

検出：ⅡA層上面で褐灰色土の落ち込みとして検出された。カマド：西壁と北壁に2基検出された。北壁のカマドは壁を船底形に掘り込んであり、焼土が薄く残っている。壁に沿って燃焼部をふさぐように大きな花崗岩平石を押し付けてあり、袖は残存しない。西壁のカマドも壁を船底形に掘り込んでおり、左袖に一つ袖石が据えられている。焼土と花崗岩礫が付近に散乱しており、火床や袖は明確に確認できなかった。検出面で燃焼部奥寄りの位置に花崗岩平石が水平の状態で出土した。床：覆土の下は地山の礫が露出し床面ははっきりしない。貼床は認められない。埋没：小礫の混入する単一層で埋没状況は明らかにならない。遺物出土状況：破片が多く、いがカマド左脇から南東部の床面からの出土が目立つ（1・5・8・10・20・25・27～29）。須恵器横瓶（29）はSB180・183・184・187から出土した破片と接合している。また刀子（図版214－17）が西カマド右側の西壁際から出土し、覆土中から釘・砥石・羽口が出土している。時期：床面出土土器などから、8期に帰属すると判断した。

SB179　位置：北部中　図版13・14・74

検出：ⅡA層上面で灰黄褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：西壁を大きく掘り込んで構築されているが、袖などは攪乱による削平で確認できない。焼土とともに礫が散乱しているので、袖に石を使用した可能性がある。床：礫層を直接床としており、貼床はされていないが硬く締まっている。埋没：礫の混入の多い単一層であり埋没状況は不明である。遺物出土状況：カマドから黒色土器A椀（5）、住居址中央床面から黒色土器A杯A（2）、土師器甕（15）、南西隅から灰釉陶器皿（11）、カマド右袖脇の西壁際から砥石（図版217－17）が出土した。そのほかは覆土中からの出土であり、もう1点の砥石（図版217－18）と墨書土器（図版208・209－43・44）も覆土中から出土した。時期：出土土器から8期と判断した。

SB180　位置：北部中　図版13・14・74

検出：ⅡA層上面で灰褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：東壁を船底型に大きく掘り込んで構築しているが残存状況は悪い。床面上に焼土とともに多数の火を受けた礫が転がっており、右袖に一つだ

け花崗岩平石が据えられている。船底形の奥壁から緩やかな傾斜の煙道へ続く。床：覆土を取り除くと礫の頭が露出する状態で、堅緻な部分や貼床などは認められず床面ははっきりと捉えられない。埋没：小礫を含む単一層で埋没状況は明らかにできない。遺物出土状況：土器片が覆土中に散在する程度である。5はカマド内から出土した。覆土中の須恵器横瓶はSB178・183・184・187出土のもの（図版183－29）と接合している。時期：出土土器から判断すると6期である。

SB181　位置：北部中　図版13・73・74

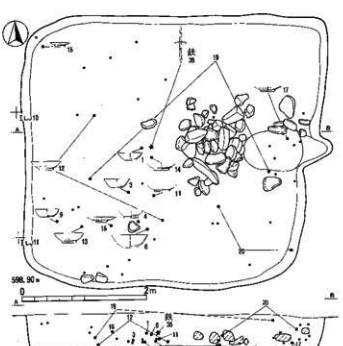
検出：ⅡB層上面で暗赤褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：ほぼ床面上に位置する火床には円形に厚く焼土が残り、その中央に石製支脚が床をやや掘りくぼめて据えられている。右袖に4個の礫が組んだように置かれているが、左袖では袖石抜き取り痕や袖土などまったく確認できなかった。周辺に焼土を含む土が広範囲に散っている。急角度で立ち上がる奥壁に続いて長く伸びる煙道が位置し、煙道の先に円形の掘り込みが検出された。床：地山の砂利層の上に灰褐色粘質土を貼床しており、全体に平坦で堅緻である。柱穴：四隅から検出され、規模や深さはほぼ同一である。径は約15cmと小さいが深さは25cm程あり、柱痕跡などは認められない。埋没：3分層されレンズ状に堆積をしているので、自然埋没の可能性が高い。遺物出土状況：カマド内より須恵器杯（1～4）、土師器甕B（8・9）が出土したほかは覆土中より出土している。鉄製紡錘車（図版215－37）が覆土中より出土している。時期：カマド付近から出土した土器を中心に、2期に帰属すると判断した。

SB182　位置：北部中　図版13・73

検出：ⅡB層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出された。南東部はSD74調査時に削平されてしまった。カマド：西壁際中央に焼土が残り礫が散在するので、袖などの施設は確認できないがこれをカマドの残存と想定した。床：地山の砂利を平らにして床としており全体に軟弱である。埋没：3層がレンズ状に堆積しており、自然堆積と判断した。遺物出土状況：遺物は少なく覆土中に散在する。時期：出土土器は細片が多いが、2期と判断した。

SB183　位置：北部中　第40図、図版13・14・74

検出：ⅡA層上面で褐灰色土が落ち込み、土色の違いからプランは容易に確定した。カマド：床面を楕円形に東壁を船底形に掘り込んで構築している。左袖には床上で組まれた袖石が残存しており、焚口から中央部に熱を受けた花崗岩が多数見られるので、石組カマドと思われるが袖土は覆土と類似するためか確認できない。火床から奥壁は良く焼けて焼土が硬く貼り付き、奥壁は急角度で立ち上がる。床：地山の砂利の上に黄褐色粘質土の硬い貼床がされており、ほぼ全面に認められた。埋没：小礫を含む単一層であり床面近くには熱を受けた花崗岩を中心に礫の大量投棄がみられる。本址のカマドに使用されたものより多くのカマド石が投げ込まれており、人為的埋没の可能性が強い。遺物出土状況：出土量や個体数

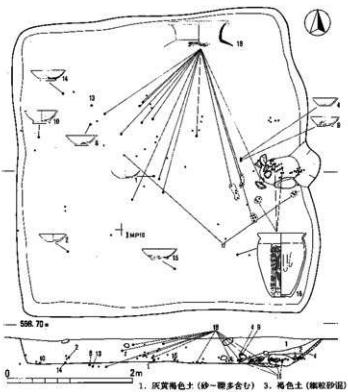


第40図　SB183遺物出土状況実測図

は多いが、礫の間に挟まるようにして、破片での出土がほとんどである。床面から浮いた状態のものが多く、確実に床面出土したものは9・13がある。1・11～13など『嬰』・『真』と墨書した5点（図版209－45～49）をはじめ、転用硯（図版213－125）が1点、また鉄製紡錘車（図版215－38）・棒状鉄製品が出土している。本址出土の須恵器横瓶はSB178・180・184・187（図版183－29）と、灰釉陶器長頸壺がSB198（図版190－41）と接合している。時期：出土土器から判断して8期とした。

SB184　位置：北部中　第41図、図版14・73

検出：ⅡA層上面で灰褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：床を楕円形に掘り込んだ火床に焼土が残り、その右側に花崗岩の平石が据えられている。左袖はまったく確認できず、奥壁は東壁を船底形に掘り込んで急角度で立ち上がる。床：地山の礫混じりの黄褐色土を床としており、平坦だが軟弱である。埋没：単一層であるが、拳大から人頭大の礫が多数投棄されており、人為的埋没と考えたい。遺物出土状況：SB183と同様に破片の状態ではあるが、土器が礫の間から多量に出土した。特に黒色土器A杯と椀の出土が多く、中央部に散乱して出土した須恵器甕（18）やカマド内と覆土で接合する土師器甕（16）がある。床面から出土したものでは灰釉陶器椀（13～15）がある。また9・13・15は墨書土器（図版209－50・55・56）で、ほかに4点（同図版51～54）が出土している。本址より出土した須恵器横瓶はSB178・180・183・187出土のもの（図版183－29）と須恵器甕（18）はSB175出土のものが接合している。時期：個体数の多い出土土器から、8期と判断した。



第41図　SB184遺物出土状況実測図

SB185　位置：北部中　図版14・75

検出：ⅡA層上面から落ち込む一軒の竪穴住居址として検出された。掘り下げ過程において本址の内側に別のカマドの存在が知れ、住居址が切り合っていることが明らかになった。両者の覆土が酷似するため切り合いの判別が難く、土層観察などから本址の内側に「入れ子」状に掘り込まれたSB186を確認した。本址の覆土の大部分を削られ、西側は調査区域外にかかる。カマド：残存状況は良くない。東壁を船底型に掘り込み床を円形に浅く掘りくぼめて構築しており、火床に焼土が薄く残っている。袖はまったく確認できず、奥壁から煙道は急角度で立ち上がる。床：地山の礫層を平らに掘り下げそのまま床としている。平坦であるが堅緻な部分はない。埋没：SB186が掘り込まれているため明確にならない部分があるが、2分層されレンズ状堆積をしている。遺物出土状況：全体に出土量は少なく破片が多い。カマド焚口より2・4～8・10が出土し、鉄滓が覆土中にみられた。1は墨書土器（図版209－57）で、SB186の南東隅床面から出土した。時期：床面出土の土器から、6期の可能性を含む5期に帰属すると判断した。

SB186　位置：北部中　図版14・75

検出：当初はSB185とともに検出・精査されたが、本址はSB185の内側に掘り込まれた住居址であるこ

とが判明した。ⅡA層上面で褐灰色土の落ち込みとして検出され、西側の一部は調査区域外にかかる。カマド：東壁を大きく船底形に掘り込み床を浅く掘りくぼめて構築している。火床には焼土と炭化物が厚く堆積しており、中央奥寄りに石製支脚が据えられている。右袖部分に花崗岩礫が床に埋め込まれるように立って検出されたが、そのほかの袖構築材や抜き取り痕は認められない。床：SB185の覆土をそのまま床としており、とくに硬い部分などはなく、平坦である。埋没：単一層に拳大から人頭大の礫が多く含まれており、北側に集中する傾向が見られ人為的埋没の可能性が高い。遺物出土状況：カマド内(3・5・8・11・12)やカマド焚口左側の完形品(9・14・17)をはじめ北東に多く、床面からまとまって出土した。南壁に沿って16・18・24などがあり、またカマド焚口手前から刀子、覆土中より棒状鉄製品が出土している。SB185―1は本址に伴う。時期：SB185の混入と思われるものも多いが、床面出土土器から、8期と判断した。

SB187　位置：北部中　図版14・73

検出：ⅡA層上面において黒褐色土から暗褐色土の落ち込みとして検出された。ST119と切り合うが本址の覆土にST119の柱穴が明瞭に検出でき、本址が古いことが容易にわかった。カマド：東壁中央を大きく掘り込んで構築されているが、残存状況不良で火床・袖・煙道などの施設は確認できない。床：中央部からカマド周辺にかけて黄褐色粘質土の硬い貼床が残っており、ほかは礫層が露出している。埋没：3分層されレンズ状に堆積しており自然埋没と考えた。遺物出土状況：カマド左側の北東隅に近い床面から須恵器杯(9)、甕A(11)が出土した。本址出土の須恵器横瓶がSB178・180・183・184(図版183－29)と接合している。また棒状の鉄製品と鉄滓が覆土中より出土している。時期：上層に混入が認められるが、土器全体の状況から、4期と判断した。

SB188　位置：北部中　図版14・76

検出：ⅡA層の礫中で暗褐色土の落ち込みとして検出された。検出が難しく床面近くでのプラン確定になってしまった。カマド：北東隅に袖石と思われる花崗岩の平石が床面上に置かれるように出土したが、カマド施設や焼土は認められずカマド位置は明確にできなかった。床：地山の礫層をそのまま床としており、平坦であるが貼床はなされず軟弱である。埋没：鶏卵大から拳大の礫を多く含む単一層であるが、埋没状況は明らかにすることができない。遺物出土状況：南半からの出土が多く、南西隅を中心にして2・4～6・12などが壁に沿って1列に並んで出土した。また刀子が北半に3点(図版214－18)、南壁側に1点、鎌(同図版2)が北西側で出土した。いずれも床面に近い。帰属時期：床面出土の遺物を中心に判断して、8期に帰属させた。

SB189　位置：北部中　図版14・75・77

検出：ⅡA層中で礫層への灰黄褐色土の落ち込みとして比較的明瞭に検出できた。しかし北西隅で切り合うSB190とは覆土が類似しており、SB190の床面近くまで掘り下げて本址を切るラインが確定した。カマド：北壁を船底形に掘り込み床を浅く掘りくぼめて燃焼部が構築されている。火床には焼土が明瞭に残り、その上に暗褐色土の堆積がみられ、天井の構築材の崩落したものと思われる。袖の構築に使われた黄褐色土が両袖に残存し、同じ黄褐色土は奥壁にも貼り付けられて赤変していた。床：カマドの周辺は黄褐色粘質土で硬く貼床してあるのが確認され、他は平坦ではあるが礫層が露出していた。埋没：大きく3分層でき下層に礫が含まれる。遺物出土状況：カマド焚口手前の床面から須恵器杯B(5)が出土し、覆土には細片が散在していた。時期：床面出土の遺物などから、4期と判断した。

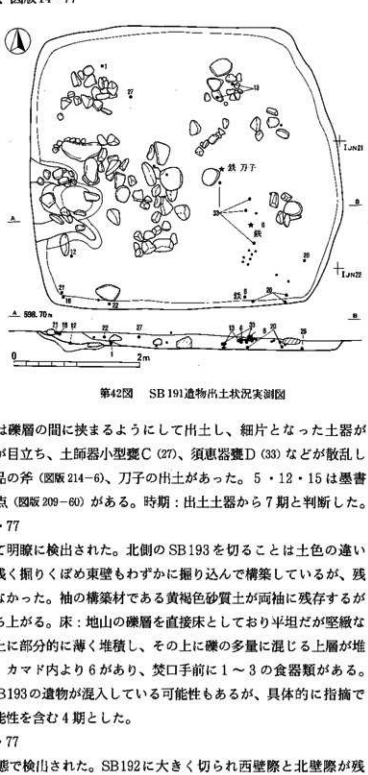
SB190　位置：北部中　図版14・77

検出：ⅡA層上面で検出されSB189を南東隅で切るが、そのほとんどは調査区域外に出てしまう。壁・床面の状態や規模から竪穴住居址と判断した。床：地山の礫層が露出する床であるが平坦である。埋没：細礫を含む単一層で埋没過程は明らかにならない。遺物出土状況：いずれも覆土中から出土した。灰釉陶

器陶器椀(1)が南東隅から、そのほかは小片で遺物量は少ない。時期：遺物の量は少ないが比較的まとまっており、土器から14期と判断した。

SB191 位置：北部中 第42図、図版14・77

検出：ⅡA層の礫中で褐色土の落ち込みとしてきわめて明瞭に検出できた。カマド：床を浅く掘りくぼめて直接火床としており焼土が厚く残っている。両袖に数個の礫が組まれた状態で残存しており、付近に礫が散乱しているので、礫を組んで芯とし黄褐色粘質土で固めたと想定される。奥壁から煙道は緩やかに登ると思われる。床：覆土を取り除くと礫層が露出する状況であるが、比較的平坦で貼床の痕跡は認められない。埋没：砂礫を大量に含む単一層であり礫の投棄が見られる。投棄された花崗岩礫のかなりのものが熱を受けており、本址のカマドに使われていたものだけとは考えにくい。人為的埋没と捉えた。遺物出土状況：カマド内から2・4・9・15・19・23・25、床面から12・26が出土した。それ以外の遺物は礫層の間に挟まるようにして出土し、細片となった土器が多い。黒色土器A杯Aと須恵器杯Aの出土が目立ち、土師器小型甕C(27)、須恵器甕D(33)などが散乱した状態で出土した。同じく礫中から金属製品の斧(図版214−6)、刀子の出土があった。5・12・15は墨書土器(図版209・210−58・59・61)で、さらに1点(図版209−60)がある。時期：出土土器から7期と判断した。



第42図 SB191遺物出土状況実測図

SB192 位置：北部中 図版14・77

検出：ⅡA層上面で褐色土の落ち込みとして明瞭に検出された。北側のSB193を切ることは土色の違いから、検出面で判断できた。カマド：床を浅く掘りくぼめ東壁もわずかに掘り込んで構築しているが、残存状態が悪く火床も明確な焼土層はみられなかった。袖の構築材である黄褐色砂質土が両袖に残存するがかなり崩れている。奥壁はやや急角度で立ち上がる。床：地山の礫層を直接床としており平坦だが堅緻な部分はない。埋没：細砂を含む下層は床面上に部分的に薄く堆積し、その上に礫の多量に混じる上層が堆積している。遺物出土状況：全体に少ない。カマド内より6があり、焚口手前に1～3の食器類がある。南西隅覆土中にも遺物(4)が多い。時期：SB193の遺物が混入している可能性もあるが、具体的に指摘できない。出土土器から判断して、3期の可能性を含む4期とした。

SB193 位置：北部中 図版14・77

検出：ⅡA層上面でSB192と切り合った状態で検出された。SB192に大きく切られ西壁際と北壁際が残存するのみである。カマド：確認できなかったが東壁に存在したものが切られたと想定できる。床：地山をそのまま床としており平坦だが全体に軟弱である。埋没：単一層で埋没状況は明らかにできない。遺物出土状況：土器片が少量覆土中より出土したのみである。時期：切り合いから4期以前と考えられるが、遺物などから時期を限定することはできない。

SB194　位置：北部中　図版14・77

検出：ⅡA層の礫中で砂礫の多量に混じった褐色土の落ち込みとして検出された。土層が酷似するためプラン確定には時間を要した。カマド：袖の部分の礫を掘り残して芯とし、黄褐色土で固めて袖の構築をしたらしい。火床は床面に直接設けてあり、貼りつけられた黄褐色土が赤く焼けている。奥壁から煙道は確認できない。床：礫層まで掘り込み平らにした後そのまま床としており、平坦だが貼床や堅緻な部分は認められない。埋没：上下2層に分かれ、その間に焼土と炭化物の薄い層が存在する。覆土が浅く埋没過程は明らかにならない。遺物出土状況：カマド内から土師器甕(5～7)がまとまって出土したほかは、細片が散在する程度である。時期：出土土器から5期と判断した。

SB195　位置：北部中　図版14・76・78

検出：ⅡB層上面の礫中に礫混じりの茶褐色土の落ち込みとして検出された。上面を現代の用水堰が流れ立木の根などもあって検出は手間取った。カマド：地山の礫を掘り残して袖の芯とし、黄褐色粘質土を貼り付けるようにして固めて袖を構築している。火床は床をわずかに掘りくぼめ細砂を薄く入れてつくっているらしいが、残存状況が悪くはっきりしない。奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、煙道は削平されて確認できない。床：礫を平らにしてそのまま床としており貼床などは認められない。埋没：上下2層に分かれるが覆土が浅く埋没過程は明確にならない。遺物出土状況：カマド内より土師器小型甕A・甕B(3・5)、みぎそでわきより須恵器杯(1・2)が出土したほかは細片が覆土中に散在する。時期：カマド内出土土器などより、2期に帰属すると判断した。

SB196　位置：北部中　図版14・76・78

検出：ⅡB層上面の礫中でにぶい赤褐色土の落ち込みとして検出された。土層が似ているため検出が難しかった。東側でSB197と切り合い、土層断面の観察の結果本址が切っていると判断できた。カマド：西壁際中央で床面が浅く掘り込まれ焼土層が残っていたので、これを火床と捉えたが、ほかの施設は確認できなかった。床：地山の礫層まで掘り込んで平らにして床としており、貼床などは認められない。埋没：礫の混じる単一層であるが覆土が浅く埋没状況は明らかにならない。遺物出土状況：カマド内(1)から左袖脇、北西隅(2)に遺物が多く、北壁中央からは緑釉陶器段皿(6)が出土している。時期：床面出土の土器から、9期に帰属すると判断した。

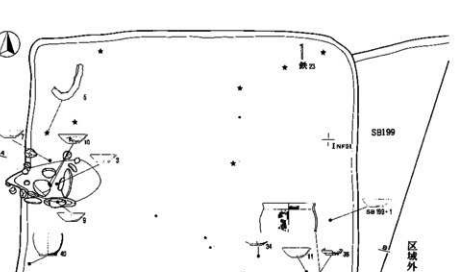
SB197　位置：北部中　図版14・76・78

検出：ⅡB層の砂礫中に暗褐色土の落ち込みとして検出された。上面を現代の用水堰が流れており、やや検出が難しかった。西側のSB196と切り合い、トレンチによる精査の結果西壁上部を切られていることが判明した。カマド：東壁際中央に床面をわずかに掘りくぼめた火床が位置する。円形に焼土層が認められるが、これ以外の施設は確認できなかった。床：地山の砂礫まで掘り下げて平らにし、そのまま床としており、貼床は認められないが比較的硬い。埋没：人頭大の礫も混じる単一層であるが埋没過程は明確にできない。遺物出土状況：カマド左袖脇床面から須恵器杯(2・3)が出土し、右袖脇から須恵器短頸壺(6)が出土したほかは細片で量も少ない。時期：出土土器は少ないが、床面出土の土器など比較的まとまっており、切り合いも考え合わせて、2期に帰属すると判断した。

SB198　位置：北部中　第43図、図版14・76

検出：Ⅱ層中の砂礫に暗褐色土の落ち込みとして検出されたが、東側のSB199と切り合うこともあって、プランが確定しなかった。先行トレンチによる土層観察を繰り返し、礫の含有量の違いを根拠に本址が切られると判断した。当初東側の床下に本址に切られた土坑が存在すると考えたが、遺物の接合などを検討して本址に付属する床下土坑とした。カマド：床をわずかに掘りくぼめ西壁を船底形に掘り込んで構築されている。火床に焼土・炭化粒の混じった土が層をなすが焼けた部分はない。左袖に4個の石が組まれて

いるが袖土は判別できず、右袖もまったく確認できなかった。火床上に3個の礫が転がっており、そのうち手前の1個は天井石の崩落と思われる。奥壁から煙道は緩やかに登っている。床：礫の上を暗褐色粘質土で貼床しており、平坦だがやや軟弱である。諸施設：東壁に沿って大きな床下土坑が存在する。遺物が多く覆土の遺物と接合するものもあるので開口していた可能性があるが、その性格などを明らかにできなかった。埋没：指頭大から拳大の礫を多量に含む単一層で、人為的に一気に埋め戻された可能性が強い。遺物出土状況：カマド内から土師器杯A（3・7・9・10）と黒色土器A杯（14・16）・椀（26）が出土したほかは、出土個体数は多いものの、ほとんどは破片で、礫に混じるようにして覆土中より出土した。床下土坑からの遺物は多く、11・17・19・21・23・27・36・37があり、このうち19・21・27は覆土内出土と接合している。また覆土中に鉄滓が散在しており、カマド右袖脇より鉄製鋤・鍬先（図版214−5）が出土した。鉄製品の出土は多く、釘（図版214−23）、刀子、棒状・塊状鉄製品があわせて8点出土した。墨書土器の出土も多く、16点がみられる（図版210−62〜77）。本址で判読された文字はSB183でも出土しており、両住居址から出土した灰釉陶器長頸壺（41）が接合している。また床下土坑出土の土師器杯A（図示せず）はSB209出土のものと接合した。時期：切り合うSB199と接合する土器片がいくつか存在することも原因してか、土器でみるかぎり両住居址ともに8期であり、時期的な差は見出せない。



第43図　SB198・199遺物出土状況実測図

SB199　位置：北部中　第43図、図版14・76

検出：SB198と切り合う状況で検出され、断面観察によってSB198を切る本址のプランが確定した。東側半分が調査区域外となり、カマドなどは検出できなかった。上面からSK418・419が覆土に掘り込まれている。床：礫層の上を平らにした後に直接床として使っており、平坦だが貼床などは認められない。諸施設：本址の廃絶後に、小鍛冶址として使われたSK419が覆土中に構築されている。埋没：礫を多量に含む下層と礫をほとんど含まない上層に、大きく2分層される。下層は人為的埋没と思われる。遺物出土状況：土器の出土量は多いものの細片が多く、床面からは土師器杯（1）があり、そのほかは覆土中より出土した。ほかに鞴の羽口小片、刀子、棒状鉄製品がある。のまとまった出土はなかった。時期：出土土器から8期に帰属し、切り合うSB199と時期的な差異は認められない。

SB200　位置：北部中　図版14・77

検出：Ⅱ層の礫中に礫混じりの褐色土が落ち込んでおり、プランの確定は比較的容易であった。すぐ北側でSB201のカマド部分だけが検出され、本址と切り合う可能性が大きいが、切り合い関係は確認できな

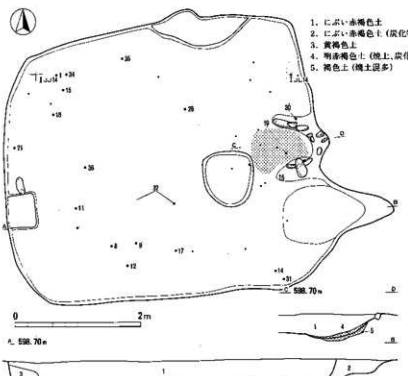
かった。本址が切っていた可能性が高い。カマド：床を楕円形に掘りくぼめそのまま火床としており、良く焼けて焼土がしっかり残っていた。両袖に黄褐色粘質土が部分的に残り、石が使用された痕跡は認められない。奥壁が急角度で立ち上がり、煙道は削平されて確認できなかった。床：覆土を取り除くと礫層が露出する状態で、明確に検出することができなかった。凸凹があり貼床は認められない。埋没：覆土は砂利層と同じくらい多量の礫を含む単一層だが、埋没状況は明らかにできない。遺物出土状況：細片が覆土中に散在する。カマド内からは6・7があり、覆土中とも接合する。2はカマド右袖上に、4は左袖手前覆土中より出土した。時期：出土土器から5期に帰属すると判断した。

SB201　位置：北部中　図版14

検出：SB200の北側の礫上で焼土のきれいに残った火床と思われる施設が検出され、プランなどはまったく確認できないが竪穴住居址として扱った。カマド：径約50㎝の浅い掘り込みに良く焼けた焼土が残り、その上に焼土と炭化粒の混じった褐色土がのっていた。他の施設は確認できない。遺物出土状況：火床の上に土師器甕Bと須恵器杯Bが残っていた。時期：不明確ではあるが、切り合いと出土土器から、4期あるいは5期と判断した。

SB202　位置：北部中　第44図、図版14・79

検出：トレンチによる遺構確認作業中に、ⅡB層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出された。ST64と切り合い、本址の覆土にST64の柱穴が認められないことから、本址が切っていると判断した。カマド：東壁に2基のカマドが並んで検出された。南側のカマドは東壁を大きく掘り込んで構築している。袖などの施設はきれいに取り除かれており、奥壁から煙道は壁のラインまで埋め戻され、再度壁を構築している。北側のカマドは比較的残存状況が良い。床と東壁を船底形に掘り込んで燃焼部を構築し、袖には芯として使われた花崗岩平石が2個ずつ据えられている。袖土として使われた褐色粘質土が部分的に残り、周辺に散乱する石は、カマド石として組まれていたものと捉えた。大きな火床に焼土が厚く堆積し、奥壁は急角度で立ち上がる。北側にカマドを作り替えたと考えた。床：礫層の上に黄褐色粘質土を薄く貼床しており、全体に平坦で堅緻である。諸施設：カマド焚口手前に大きく浅い掘り込みがあり、焼土と炭化物をともなう。西壁中央やや南寄りの位置に、黄褐色土で構築したテラス状の施設が検出され、上面が非常に硬かったことや位置から、出入り口部に関係する施設の可能性がある。埋没：単一層であり、中央部に人頭大の礫の投棄がみられるので、人為的埋没の可能性が強い。遺物出土状況：土器の出土量は多い。床面からは26があり、カマドからは2・4・5・13・15・19・24・25・



第44図　SB202カマド実測図

30・34が出土しており、30・34は覆土出土と接合している。不明鉄製品がカマド左側にあり、また1・2・18は墨書土器（図版210－78・79・81）で、ほかに1点（図版210－80）がある。時期：古い時期の遺物がいくつか認められるが、土器から6期と判断した。

SB203　位置：北部中　図版14・79

検出：トレンチによる遺構確認作業中に、焼土が認められたので付近を精査して本址の存在が明らかになった。ほとんどが西側の調査区域外にかかり、カマドもトレンチで削平され、南東隅付近が検出できたにとどまる。ⅡB層上面で赤褐色土が落ち込む。カマド：東壁付近で火床と思われる焼土が認められたのでカマドと想定したいが、削平により確認できない。床：部分的で判然としないが、粘質土を薄く貼床しており平坦である。埋没：単一層であるが覆土が薄く、埋没状況は明確にできない。遺物出土状況：住居址中央のカマド寄り付近の床面より須恵器杯蓋(2)が完形で出土した他は出土遺物が少ない。時期：床面出土土器などから5期と判断した。

SB204　位置：北部中　図版14・79

検出：トレンチによる遺構確認作業中、ⅡA層中で礫混じりの褐色土の落ち込みとして検出された。北東部分でSB205と切り合い、検出面で切り合い関係を確認すると、土色の違いから本址が切られていることが明確に判明した。西壁の一部がトレンチによって削平されている。カマド：東壁で地山を掘り残して袖の芯とし、床をわずかに掘りくぼめて火床を構築している。袖は地山に類似する土を芯に用いており、石の使用は認められない。火床に焼土が薄く残されており、その上に天井の崩落と思われる褐色土がのっている。垂直に立ち上がる燃焼部奥壁から、ほぼ水平の煙道が長く伸びる。床：砂利層まで掘り込み、その上を平らにし礫を取り除いて床に使用している。埋没：礫の多く含まれた単一層であり、検出が低いこともあって埋没過程ははっきりしない。遺物出土状況：カマド付近で土師器甕Bが出土し、南西隅で土師器甕F(1)が出土した。時期：SB205との切り合いも考え合わせ、2期の可能性を含む1期と判断した。

SB205　位置：北部中　図版14・79

検出：ⅡB層中で褐色土の落ち込みとして検出された。南西隅でSB204と、北西部分でSB206と切り合う。土色の違いで本址がSB204を切ることが判明し、土層観察の結果SB206に切られると判断した。カマド：東壁を箱形に掘り込んでほぼ床面上に燃焼部が構築され、全体が良く焼けている。袖は抜き取り痕などを含めてまったく検出できなかった。右側壁の上部に天井の残痕と思われる褐色土の張り出しが認められ、内面はきれいに焼けていた。奥壁は垂直に立ち上がり、長い煙道が水平に伸び、その先に円形の浅い掘り込みが検出された。床：カマド焚口付近から中央にかけて硬い貼床がわずかに確認できるが、他は平坦にした礫面が露出している。埋没：覆土は上下2層に分かれ、水平堆積をしている。自然堆積を想定した。遺物出土状況：カマド内から土師器甕B(5)が出土したほかは、細片がわずかに出土した程度である。時期：SB204・206との切り合い関係と出土土器より、2期に帰属すると判断した。

SB206　位置：北部中　図版14・79

検出：ⅡB層中で礫混じりの褐色土の落ち込みとして検出され、土層断面の観察の結果、南側のSB205を切ることが明らかになった。当初は覆土中の焼土面を床と誤認し、2軒の建て替えと判断して調査を進めたが、遺構の検出状況や遺物の接合関係から、1軒の竪穴住居址であるという結論に達した。誤った判断で調査を続けたため、一部不明確な部分が生じた。カマド：西壁をわずかに掘り込み、床を楕円形に浅く掘りくぼめて、燃焼部を構築している。両袖の位置の地山を掘り残して芯としていることが確認された。火床には焼土が薄く広がり、その中央に風化した石製支脚らしい花崗岩礫が転がっていた。奥壁はほぼ垂直に立ち上がり、煙道は急角度で登っていく。土層観察用に残したセクションベルトに煙道の一部がかかり、煙道先は床面から80cmほど上位であった。床：礫の上を黄褐色土で硬く貼床しており、中央部では

残るが周辺は軟弱である。諸施設：壁にそってテラス状の施設が設けられていた可能性があるが、明確にならない。埋没：上下2層に分かれ、その間に焼土と炭化物を含む薄い層がある。廃絶後下層が埋まった段階で、凹地で火が燃やされ、その上にＩＤ層が堆積したと思われる。遺物出土状況：火床の焼土に混じって須恵器杯Ｂ(3)が出土したが、他は細片であった。覆土中から「咸平元寶」が出土し、混入の可能性がある。時期：出土土器から5期と判断した。

ＳＢ２０７　位置：北部中　図版14・79

検出：ⅡＢ層の礫に暗褐色土が落ち込み、北壁を除いてはプランは明確に確認できた。北壁は断面観察によって確定した。カマド：東壁際のやや南寄りに焼土とカマド石として使用されたと思われる礫が集中していたことから、この付近をカマド位置と想定したが、カマドの形態などは明確にならない。床：東側で貼床らしい部分がわずかに確認できるだけで、ほかは地山の砂利が露出する。諸施設：南東隅でごく浅いピットが検出され、中から炭化材が出ている。埋没：礫を非常に多く含む単一層である。遺物出土状況：遺物は礫とともに覆土から出土している。7は墨書土器（図版210－82）でカマドと想定される南東隅壁際より出土した。時期：出土土器から5期と判断した。

ＳＢ２０８　位置：北部中　図版14・79

検出：Ⅱ層の砂礫中で礫を多量に含む褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：東壁を函形に掘り込んで燃焼部を構築しており、火床は床面上に位置する。袖はまったく検出できず、袖石抜き取り痕なども認められない。火床および奥壁は良く焼けて焼土が残っていた。奥壁はほぼ垂直に立ち上がるが、煙道は削平されて検出できなかった。床：覆土を取り除くと、地山の礫が露出する状態で、堅緻な部分や貼床は認められない。埋没：単一層であるが、礫を大量に含む部分とそれほどでない部分に分かれる。周囲の地山の状況に左右されたと思われるが、埋没過程は不明である。遺物出土状況：カマド内から土師器甕Ｂ(4・5・7・8)、カマド焚口手前から小型甕(3)が出土するなど、カマド周辺の床面からの出土が多い。時期：混入と思われる遺物があるが、床面出土の土器から2期と判断した。

ＳＢ２０９　位置：北部中　図版14・79

検出：付近を用水堰が流れていたこともあり、カマド石と焼土の検出まで本址の存在が明らかにならず、検出が遅れた。砂礫中ににぶい黄褐色土が落ち込み、西壁は用水堰で切られている。カマド：南東隅に寄った東壁を掘り込み、床を楕円形に掘りくぼめて燃焼部を構築している。両袖は花崗岩を床に突き立てるように据えて、それを芯として褐色粘質土で固めて構築している。火床に厚く焼土が残り、奥壁は急角度で立ち上がる。床：地山の礫層の上をそのまま床としており、平坦だが堅緻な部分はない。埋没：覆土が浅いので明確にならない。遺物出土状況：カマド焚口付近から右袖脇で土師器杯(1・2)、黒色土器Ａ椀(3～5・8)、灰釉陶器皿(10)、土師器甕Ｂ(11)、須恵器(12)などが出土した。2・8は墨書土器（図版211－83・84）である。またSB198床下土坑から出土した土師器杯Ａ（図示せず）と接合している。時期：カマド付近の良好な残存状態の出土土器から、8期に帰属すると判断した。

ＳＢ２１０　位置：北部中　図版14・78

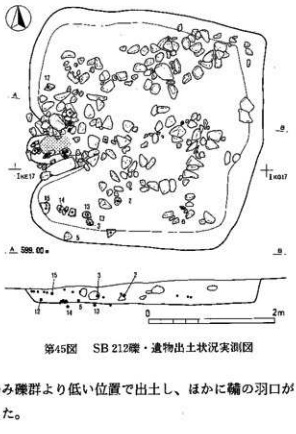
検出：ⅡＢ層上面で礫を多く含む褐色土の落ち込みとして検出された。プランがやや変形なことやカマドが検出できないことから、竪穴住居址とするには問題がある。規模や壁と床面の状態から住居址として扱うことにした。床：礫層が露出しているが、ほぼ平坦で大きな石は取り除かれており、踏み固められたような状態である。埋没：小礫を多量に含む単一層で、焼土や灰色土がブロック状に入るので、人為的埋没の可能性が高い。遺物出土状況：土器片が覆土中に散在する。1は南東隅床面から出土した。時期：出土土器から判断すると、8期あるいは9期とした。

SB211 位置：北部中 図版14・78

検出：Ⅱ層の砂層中に暗褐色土の落ち込みとして検出された。東側部分は調査区域外にかかり、カマドなどは検出できなかった。床：礫層の上面をそのまま床に使用しており、平坦であるがやや軟弱である。埋没：小礫の混入する単一層で、拳大から人頭大の礫もかなり混じるが、埋没状況は明らかにできなかった。遺物出土状況：覆土中に土器片が少量散在する。時期：やや不明確であるが、出土土器から8期と判断した。

SB212 位置：北部中 第45図、図版14・78

検出：ⅡB層上面の礫層に礫を多量に含む褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：床面と壁を船底形に掘り込んで燃焼部を構築し、礫を芯として褐色粘質土で固めて袖を築いている。袖の石は崩れ船底型に掘り込んで燃焼部を構築し、礫を芯として褐色粘質土で固めて袖を築いている。袖の石は崩れているものが多く、覆土に投棄された礫と判別できないものもある。火床には焼土が厚く堆積しており、急角度で立ち上がる奥壁へと続く。床：礫の上面を平らにして床としており、平坦で硬く締まった感がある。埋没：単一層であるが黄褐色土などがブロック状に入っており、拳大の礫を主に覆土中への大量投棄がみられることから、人為的埋没の可能性が高い。遺物出土状況：南東隅の床面上(5・13・14)とカマド内(7)から土器のまとまった出土があり、両者から出土した土師器甕B(15)が接合している。その他は礫に混じって破片が出土した。



第45図 SB212礫・遺物出土状況実測図

また1・4・9は墨書土器(図版211−85～87)あり、1のみ礫群より低い位置で出土し、ほかに鞴の羽口が出土している。時期：床面出土の土器から7期と判断した。

SB213 位置：北部中 図版14・80

検出：ⅡA層上面で褐色土の落ち込みとして検出され、断面観察によってプランを確定した。カマド：北西隅で焼土と炭化物の広がっている部分があったが、火床と思われるほどの焼土の堆積ではない。北東隅にも炭化粒が散っており、カマド位置を特定できなかった。床：黄褐色土と暗褐色土の混ざった地山の土の上を床としており、平坦で硬く締まっている。諸施設：東壁際北寄りの地点で、小ピットが1基検出されたが、完形の土師器杯(8・9)が2個正位で入れられており柱穴とは考えにくい。埋没：単一層で、大小の礫が多量に投棄されており火を受けたものも目立つ。黒褐色土や灰色土が混入しており、人為的埋没の可能性が強い。遺物出土状況：北側部分からの出土が多く、特に北東隅付近の床面から土師器杯(1・4)、黒色土器A椀(11)などが出土し、北西隅からは土師器杯(2・6)、黒色土器A椀(12)が出土している。覆土中からは砥石が出土していた。時期：床面出土の土器から、14期に帰属すると判断した。

SB214 位置：北部北 図版14・81・82

検出：ⅡB層上面で検出した。覆土と地山の土が良く似ており、プランの確定は困難であった。やや茶色がかった褐色土の落ち込みであり、北西部分が調査区域外にかかる。カマド：床と東壁をわずかに掘りくぼめて構築しているが、袖はまったく確認できなかった。火床にも焼土がほとんど認められず、奥壁は垂直に立ち上がる。ほぼ水平に長く伸びる煙道は、先に円形の掘り込みをもち、そのなかに土師器甕B(5)

の大きな破片が入っており何らかの施設とされた可能性がある。床：地山の礫の上を黄褐色粘質土をごく薄く貼床しており、全体に平坦で堅緻である。埋没：単一層であるが埋没過程などは明らかにならない。遺物出土状況：煙道先ピット出土の甕B (5) は覆土出土のものと接合している。1・4はカマドからの出土である。そのほかは細片が覆土中に散在する程度である。時期：出土土器から判断して、4期の可能性を含む3期とした。

SB215　位置：北部北　図版14・82

検出：ⅡB層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして比較的明瞭に検出できた。カマド：南西隅を掘り込み、床面を浅く掘りくぼめて構築しているが、火床にはほとんど焼土が認められず、袖などの施設も確認できなかった。床：黄褐色土を貼床しているが、薄くやや軟弱なため部分的にしか残存していない。カマド付近は堅緻であり、北側ほど軟弱であった。諸施設：カマド焚口右側で大きく浅いピットが検出され、中には焼土と灰が詰まっていた。埋没：単一層であるが、埋没過程は明らかにできなかった。遺物出土状況：東側半分の床面に遺物が集中し、黒色土器A椀 (2)、須恵器四耳壺 (8)、土師器小型甕C (4・5) などが出土し、カマドからは黒色土器A杯A (1)、須恵器杯A (3) のほか土師器小型甕C (5)、須恵器D (8) も出土している。4・8は東側床面出土とカマド出土が接合している。時期：床面出土土器から判断して、7期に帰属するとした。

SB216　位置：北部北　図版14・15・82・83

検出：東側のSB217と切り合う状態で検出され、土層断面観察の結果、本址が切られていることが判明した。東側はカマドを含めて、床面近くまでSB217に削られている。Ⅱ層の礫に礫混じりの褐色土が落ち込む。カマド：焼土のきれいに残った火床と、その中央に支脚抜き取り痕が検出できたが、他は削平されて確認できない。床：地山の礫の上面を平らにして床としており、平坦だが軟弱である。埋没：単一層であり、灰色土がブロック状に混入し礫の投棄がされているので、人為的埋没と考えたい。遺物出土状況：須恵器杯蓋 (1) がカマド内にあったほかは、すべて破片であり覆土中に散在する。時期：出土土器から4期と判断し、切り合いもそれを裏付けている。

SB217　位置：北部北　図版14・15・82・83

検出：Ⅱ層の礫層に褐色土が落ち込んでおり、西側のSB216を切ることが土層観察から判明した。カマド：東壁を函形に掘り込み、床を掘りくぼめて構築しているが、袖はまったく検出できなかった。火床の上には炭化材が残っていたが、焼土はほとんど認められない。床：礫の多い地山をそのまま床としており、礫が露出しているが、全体には平坦である。埋没：礫混じりの単一層であるが、埋没状況は明らかにできなかった。遺物出土状況：西壁際から住居址中央・カマドにかけて遺物がみられ、中央床面から須恵器杯A (3)、西壁際覆土から黒色土器A杯A (1)、カマド内からも杯A (2) が出土した。鉄製品では鎌が出土している。時期：床面出土土器から、7期と判断した。

SB218　位置：北部北　図版15・83、PL24

検出：ⅡB層の黄褐色土中に暗茶褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：床面をわずかに掘りくぼめた火床には、焼土・炭化物の厚い堆積がみられ、上下2面の焼土層が確認できた。袖は壁際に黄褐色土の痕跡を残すのみだが、袖石抜き取り痕が左右2か所ずつ検出できた。奥壁は急角度で立ち上がり、長い煙道へと続く。煙道の先には、直径70㎝深さ30㎝の大きなピットが存在する。床：黄褐色土を1～3㎝程貼床しており、柱穴の内側が特に硬化している。柱穴：ほぼ同規模の掘り方を持つ主柱穴4基が床下精査の段階で検出できた。埋没：上下2層に分かれる。上層には多量の土器片・炭化物がみられ、中央下部には焼土が部分的に面をもって広がっていた。下層は土器片・炭化物をわずかに含むのみである。上層は人為的埋没であるが、下層はどちらか良く解らない。遺物出土状況：遺物出土量は多く、覆土上層を中心

に散在する。覆土中では西半に多い傾向にある。カマド内から土師器甕Bなどが出土した。時期：個体数の多い出土土器から、4期と判断した。

SB219 位置：北部北 図版15・83

検出：ⅡB層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出される。東側のSB220にほとんどを切られる。カマド：東に位置すると思われるが、その存在を確認できなかった。床：地山の上に数㎝のオリーブ褐色土を入れているが、硬く締まってはいない。SB220床面下にも部分的に床が残っていた。柱穴：西側の2基が検出できた。深くしっかりとした掘り方をもつが、柱痕跡などは確認できなかった。東の柱穴は検出できなかったが、SB220の柱穴と重複している可能性もある。遺物出土状況：単一層中に遺物が散在している。時期：遺物が少なくやや不明確であるが、土器から5期と判断した。本址を切るSB220とは、土器から新旧を見出せない。

SB220 位置：北部北 図版15・83

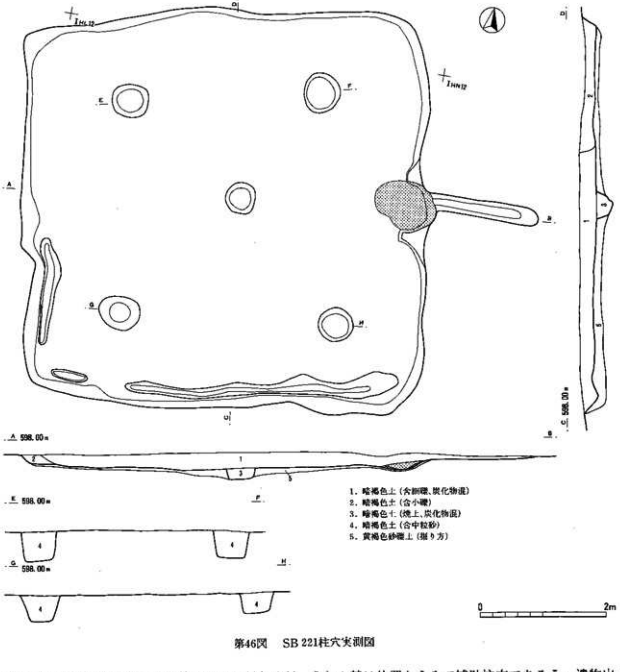
検出：ⅡB層上面でにぶい赤褐色土の落ち込みが認められ、不整形な西側部分は、土層断面観察の結果、SB219と切り合い、本址が切られることが判明した。カマド：火床は床面を10㎝程掘りくぼめ細砂を入れており、焼土と炭化物が堆積していた。黄褐色粘質土で構築されている袖の、奥寄りに袖石が一対検出された。花崗岩の平石で、床面に据えられていた。袖石の下などに焼土の層がみられることから、袖部分は作り替えられたと理解したい。袖石が倒れていることなどから、住居址廃絶時に破壊した可能性もある。奥壁は東壁を少し掘り込んでおり、急角度で立ち上がる。床：白黄褐色粘質土を基調に、全面にわたり厚く貼床しており、中央部を中心に良好な遺存状態であった。柱穴：位置から主柱穴と判断できる四基の柱穴が、貼床をはがした段階で検出された。柱痕跡などは認められない。諸施設：南西隅と南壁際に長軸が15～25㎝の不整形な礫が集中している部分が床面にあった。遺物出土状況：18がカマドから、須恵器杯A(8)が北西の柱穴より、土師器小型甕Dが南西の柱穴から出土しているほかは覆土中から出土している。総じてSB219と切り合う西壁際に遺物が多い。鉄製品では刀子（図版214－11）がカマド左袖脇東壁際から出土し、ほかに棒状・塊状の鉄製品が覆土中にみられた。時期：出土土器から5期と判断した。

SB221 位置：北部北 第46図、図版15・83、PL24

検出：ⅡB層に相当する礫層に暗褐色土が落ち込んでいる。カマド：床面をわずかに掘りくぼめた火床に焼土・炭化材が部分的に残る。袖は覆土との判別が難しく、壁際で暗褐色土と黄褐色土の混在する袖構築土が確認できた。右袖下に抜き取り痕が1か所検出された。奥壁は東壁をわずかに掘り込み、緩やかな傾斜をもって長い煙道にいたる。床：地山の礫上に暗褐色土と黄褐色土の混在する土を入れて平坦な床を構築している。中央部付近が高く、比較的硬い。柱穴：ほぼ同規模のピットが5基検出された。四隅のピットが深いのに対して、中央は礫の上面で止まっており中には焼土・炭化材が集積しているので、補助柱穴あるいは別の機能を持った穴と捉えた。諸施設：南壁から西壁南半にかけて周溝が認められた。溝中には覆土と同質の土が入っている。深さは5～10㎝と浅くとぎれる部分もある。遺物出土状況：単一層にわずかな遺物が散在する程度である。カマドから出土した土器（10など）の中には、構築材として袖に貼り付けられた可能性のあるものが存在する。時期：出土土器の量は少ないもののまとまっており、それから判断して3期とした。

SB222 位置：北部北 図版15・83・84・86

検出：ⅡB層に暗褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：火床は床面とほぼ同じ高さで、焼土が薄く堆積する。袖はほとんど破壊されているが、黄褐色のブロックを含む土が袖部分に残存する。左袖奥に袖石抜き取り痕が1か所、火床中央に支脚抜き取り痕が検出された。奥壁から煙道入り口がわずかに確認できる。床：地山の礫のうえに黄褐色土を貼床している。カマド正面から中央部が硬く締まっている。柱



第46図　SB 221柱穴実測図

穴：同規模の掘り方をもつ五基のピットがあるが、うち1基は位置からみて補助柱穴であろう。遺物出土状況：覆土がほとんど残っていない。カマド内から1～4・6が出土し、煙道先ピット内から5と須恵器甕Dが出土した。須恵器甕D（図示せず）はSB224から同一個体が出土している。また7は補助柱穴から出土した。ほかに刀子2点（図版214－7・8）、不明鉄製品がある。時期：出土土器から4期と判断した。

SB223　位置：北部北　図版15・85

検出：不鮮明ながらⅠD層で落ち込みが見え、ⅡA層で暗褐色土の落ち込みとしてプランを捉えることができた。カマド：床面を5cmほど掘りくぼめた火床は焼土が比較的厚く堆積しており、焼土の上には扁平な袖石が横たわり、その下に土師器甕B（7・8）が押し潰されたように出土した。袖部分には構築材の黄褐色砂質土が残存し、その下から左袖に2か所、右袖に1か所の抜き取り痕が認められる。急角度で立ち上がる煙道がわずかに確認できた。床：地山をそのまま床としており、平坦であるが貼床は明らかにならなかった。諸施設：南東部床下にピット2基検出され、中から焼土・炭化物が多出した。埋没：3分層で

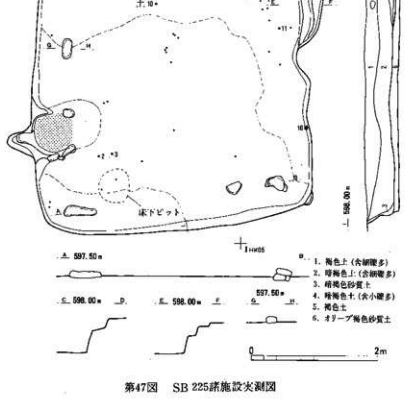
き自然堆積の様相を示している。遺物出土状況：カマド内の土師器甕B (7・8)、覆土中から須恵器 (1～6・9・10)、鉄鏃 (図版214－27) が出土した。時期：床面出土の土器から判断して、4期の可能性を含む5期と判断した。

SB224　位置：北部北　図版15・83・85

検出：ⅡB層中で黄褐色土の落ち込みとして検出されたが、プランが明確にならず手間取った。カマド：遺存状態が悪く、わずかに掘りくぼめた火床と、袖に用いられた褐色粘質土の緩やかな高まりが確認できた。奥壁から煙道への傾斜はごく緩やかである。床：地山の上に黄褐色粘質土の貼床がされている。中央部ほど硬く締まっていたが、壁際はほとんど貼床が残存していない。柱穴：四か所で主柱穴を検出した。大きく深い掘り方であったが、柱痕跡は確認できなかった。遺物出土状況：単一層だが出土量は比較的多く、カマド焚口内 (4・10・11)、右袖脇 (1) や左袖脇 (9) に集中した。また同一個体かと思われる須恵器甕D (図示せず) がSB222から出土している。時期：混入と思われる遺物がみられるが、土器全体から3期と判断した。

SB225　位置：北部北　第47図、図版15・85

検出：ⅡB層上部で褐色土の落ち込みとして検出された。カマド：比較的遺存状態は良い。右袖は地山のⅡB層を掘り残し、左袖は黄褐色土で構築されている。左袖からは4個の良く焼けた花崗岩が出土し、床面下に据え付けられている2個が中核をなす。右袖にも花崗岩が位置するが、その下に抜き取り痕が検出されたので、元の位置から動かされていると判断した。火床は全体に良く焼けており、底に淘汰のよい細礫を敷きつめている。柱穴：貼床の下で2か所にピットが検出され、位置的には柱穴とも思われるが、掘り込みは浅い。西から南の壁際に、硬砂岩の平石が床に置かれるように位置する。南東隅の石は、下に小礫を根石のように入れており、これらの石が礎石になる可能性がある。床：ⅡB層に相当する青灰色小礫層まで荒ぼりした後、黄褐色砂質土を貼床している。床面は平坦で硬く締まっており、特にカマド周辺から南東隅では貼床が検出できた。覆土中に黄褐色砂質土が水平に堆積しており、最初これを床面と考えたが、検討の結果自然堆積した薄い間層と捉えた。諸施設：北壁から東壁にかけてテラス状に壁が立ち上がっている。崩落とも考えられるが、ほかの壁はほぼ垂直に検出されていることから、何らかの施設と考えたい。遺物出土状況：大きく上下に2分層されるが、第2層からの出土量が多く、カマドからは土師器甕B (20・21)、黒色土器A杯A (1)、須恵器杯A (14) が出土した。カマド焚口手前と北



第47図　SB 225諸施設実測図

西隅に遺物が集中する。また床下から7・13・16・18、床下のピット1基（カマド左脇）より9が出土している。ほかに刀子1点（図版214－10）、土製紡錘車（図版216－20）が出土している。時期：出土土器から5期と判断した。

SB226　位置：北部北　図版15・85・87・88、PL25

検出：ⅡB層中の礫にオリーブ褐色土が落ち込む。SK584と切り合う。本址の床面断ち割り調査時に検出されたので、本址よりは古いと考える。カマド：右袖部分に径30cmの花崗岩平石が直立して検出され、その周辺に焼土混じりの粘質土がわずかに認められた。煙道は大きく掘り込まれているが、掘り方との区別がつかなかった。火床はわずかにくぼんでおり薄い焼土が確認できた。床：地山の礫層上にわずかに褐色粘質土が遺存しており、貼床の可能性が高い。埋没：2分層でき、上層は自然堆積と考える。下層にはカマド袖石を含む礫の大量投棄がされており、その間に須恵器甕A（6）の大破片、須恵器杯（1～4）、黒色土器A杯Aなどが混じっていた。遺物出土状況：カマド焚口焼土上より土師器甕B（5）が一括出土した。3は墨書土器（図版211－88）である。時期：出土土器から判断して5期とした。

SB227　位置：北部北　図版15・86

検出：ⅡB層に褐色含礫土が落ち込む。カマド：袖は明確に検出できなかったが、わずかに掘りくぼめた火床の右袖部分に礫の高まりがあり、袖を掘り残したと思われる。袖石の抜き取り痕は認められず、構築材とした黄褐色砂質土が残存していた。煙道は奥壁からすぐに立ち上がる。床：平坦な地山のうえに黄褐色粘質土の貼床がわずかに残存する。埋没：4分層されたが基本的にはⅡA層主体の土で、自然堆積と判断した。遺物出土状況：カマド火床上より土師器甕B（9）が出土した。住居址の北半に多く、3は墨書土器（図版211－89）で、中央より北西寄りから出土した。不明鉄製品1点のほか、鉄滓が覆土中に多くみられ、西半に集中する。時期：カマド付近出土土器などより、4期に帰属すると判断した。

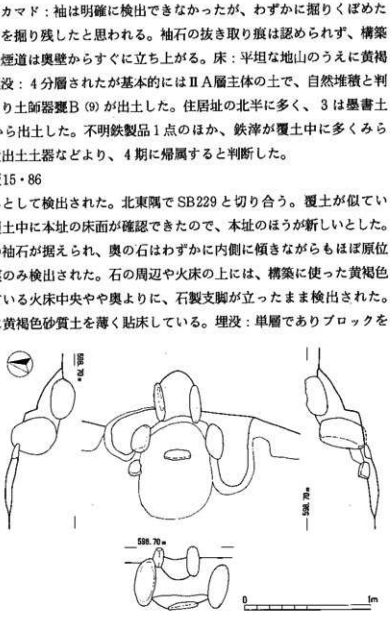
SB228　位置：北部北　図版15・86

検出：ⅡB層の礫中で褐色土の落ち込みとして検出された。北東隅でSB229と切り合う。覆土が似ていて新旧の判断が難しかったが、SB229覆土中に本址の床面が確認できたので、本址のほうが新しいとした。カマド：石組カマドで両袖に2個ずつの袖石が据えられ、奥の石はわずかに内側に傾きながらもほぼ原位置を保っている。また手前は抜き取り痕のみ検出された。石の周辺や火床の上には、構築に使った黄褐色土が残存していた。焼土が厚く堆積している火床中央やや奥よりに、石製支脚が立ったまま検出された。煙道は急角度で立ち上がる。床：礫層に黄褐色砂質土を薄く貼床している。埋没：単層でありブロックを含むので埋められた可能性がある。遺物出土状況：カマド周辺に半完形土器（1・4・5・7・9～11・13～16）などが出土したほかは少ない。時期：切り合いと出土土器から判断して、5期とした。

SB229　位置：北部北

第48図、図版15・86・88

検出：ⅡB層の礫中で褐色土が落ち込み、SB228に切られている。覆土にSK594が掘り込まれている。カマド：比較的遺存状態は良い。荒掘りの際左袖に当たる部分の地山の砂



第48図　SB229カマド実測図

利を袖状に残し、芯材としている。袖石は両側に一つずつ掘り方に据えられた状態で検出された。なだらかに立ち上がる奥壁から煙道にかかる位置に、花崗岩平石が一対立っていた。石の内側は煙道の幅と一致し、掘り方は持たない。袖石を包むように黄色粘質土を貼っており、特に右袖は残りが良かった。火床はわずかに掘りくぼめてあり、中央焚口寄りに支脚の抜き取り痕と思われる小ピットがある。床：カマドから西にむかってわずかに傾斜している。黄褐色粘質土が残存しており貼床されていたと考える。柱穴：床面下に4基の主柱穴を検出した。いずれも深くしっかりとした掘り方を持っているが、柱痕跡は認められない。遺物出土状況：カマド内より3・4が出土し、4は覆土出土のものと接合している。そのほかは覆土中からの出土である。時期：出土土器を、切り合うSB228と比較すると、本址出土の土器が若干古い要素をもっている。そこから、4期の可能性も含む5期と判断した。

SB230　位置：北部北　図版15・86・88

検出：ⅡB層直上で褐色土が落ち込む。カマド：地山の礫を掘り残して袖の芯としている。袖掘り残し部分の内側に、一対の扁平な袖石抜き取り痕を検出した。付近には構築に用いたと思われる黄褐色土が残存している。火床は床面より数㎝掘りくぼめ細粒砂をほぼ全面に厚さ1㎝程度敷き詰めている。火床中央やや奥壁寄りに支脚石が位置する。花崗岩製で下部は径15㎝深さ10㎝程の掘り方に埋められて、頭を少し西に傾けて立てられている。床：床面は地山の礫が顔を出し、凸凹があるが、かすかに黄褐色土が残存するので貼床の可能性がある。カマド南側から南東隅にかけて高さ数㎝の棚状の高まりが検出された。遺物出土状況：カマド火床上に土師器甕Bが出土したほかは土器片が散在する程度であった。時期：出土土器から4期と判断した。

SB231　位置：北部北　図版15・87・88

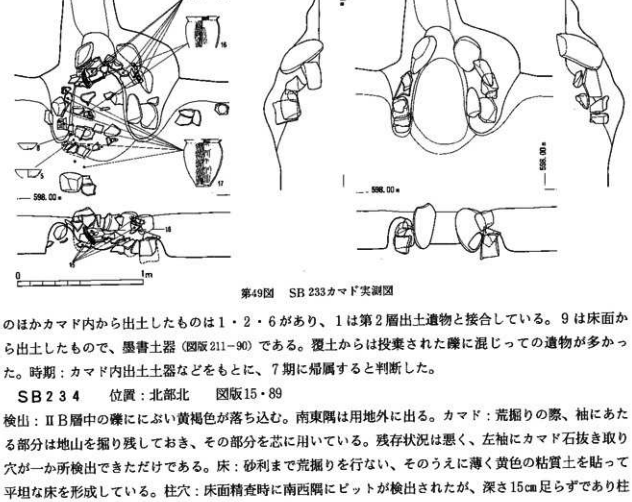
検出：ⅡA層で褐色土が落ち込む。西側をトレンチで大きく削平される。カマド：確認されない。床：ⅡB層中まで掘り下げた面を床とし、平坦でやや軟弱である。遺物出土状況：わずかな土器細片のみ。竪穴住居址と認定できるか疑問がある。時期：出土遺物などから時期を特定することはできない。

SB232　位置：北部北　図版15・88

検出：ⅡB層中でカマド石と焼土を認め、プラン等の確認をしたが検出面が低く、カマド周辺の床面が明確になったのみである。カマド：火床の両側に花崗岩の大きな袖石が一つずつ、周辺にも火を受けた礫が残存していたが、いずれも原位置を保っていない。火床には焼土がしっかり残っており、ほぼ中央に石製支脚が直立していた。床：カマド西側で暗褐色土を2～3㎝貼床している。遺物出土状況：袖石の内側から須恵器杯(3)、土師器甕B(6)が出土している。時期：少数ながらカマド内の土器から6期に帰属すると判断した。

SB233　位置：北部北　第49図、図版15・89、PL25

検出：ⅡB層に暗褐色土が落ち込む。検出面でカマド袖石が顔を出し、カマドからプランを追って検出した。カマド：東壁にカマド奥壁と煙道を掘り込み、袖部分にいくつかの石を据えて、その脇に褐色粘質土を入れながら構築していくようである。奥壁から左袖にかけて袖土に貼り付けるように土師器甕(15・17)の破片が検出された。さらに火床上には袖から剥落した土器片(16)が重なるように出土している。貼り付けられた土器片は表面を燃焼部に向けているものがほとんどで、直接火を受けた形跡はない。土器片と袖石の間に焼土が認められることから、カマドの補修の構築材として土器が使われたらしい。焚口付近は褐色土を土手のように盛りあげてあり、補修後火床が高くなった際に手直ししたとも考えられる。煙道は径50㎝と規模が大きく、礫は荒掘りした内側に据え、礫の間から煙道をトンネル状に構築している。床：地山の礫でかなりでこぼこしており、貼床の痕跡は認められなかった。埋没：2分層でき、下層にはカマド石を含む礫の投棄がみられる。遺物出土状況：カマド内から大量に出土した土器の状況を図示した。こ



第49図　SB 233カマド実測図

のほかカマド内から出土したものは1・2・6があり、1は第2層出土遺物と接合している。9は床面から出土したもので、墨書土器（図版211−90）である。覆土からは投棄された礫に混じっての遺物が多かった。時期：カマド内出土土器などをもとに、7期に帰属すると判断した。

SB234　位置：北部北　図版15・89

検出：ⅡB層中の礫ににぶい黄褐色が落ち込む。南東隅は用地外に出る。カマド：荒掘りの際、袖にあたる部分は地山を掘り残しておき、その部分を芯に用いている。残存状況は悪く、左袖にカマド石抜き取り穴が一か所検出できただけである。床：砂利まで荒掘りを行ない、そのうえに薄く黄色の粘質土を貼って平坦な床を形成している。柱穴：床面精査時に南西隅にピットが検出されたが、深さ15cm足らずであり柱穴と確定できない。諸施設：南側床下でピット2基が検出され、内部から焼土・炭化物と須恵器杯A（16）が出土している。埋没：覆土上部において火を受けた花崗岩が多数投棄されていた。遺物出土状況：覆土中に遺物多い。上部より黒色土器A杯片、下部より須恵器杯の出土が目立った。床面直上の遺物は少ない。床下から須恵器杯A（11）、土師器甕（22・23）が出土している。墨書土器が3点出土しており、11（図版211−91）が床下から出土したほかは、覆土中からの出土である（同図版92・93）。時期：出土土器より6期と判断した。

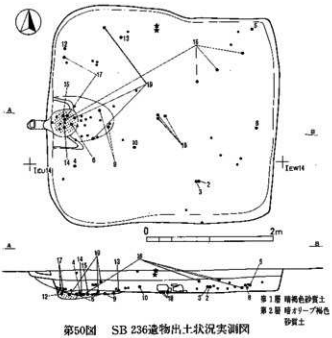
SB235　位置：北部北　図版15・89

検出：ⅡB層上面の礫層中に暗褐色土が落ち込む。カマド：北側袖として黄褐色の粘性のある細砂粒土が部分的に残るのみで、ほかは全て破壊されている。構築石材なども除去され、火床両側に袖石抜き取り痕が検出されたのみである。火床の下は深さ20cm程の掘り方がある。床：ⅡB層まで荒掘りを行ない、薄く粘質土を貼って平坦な床を形成している。遺物出土状況：全体に少ない。カマド内から土師器甕B（7）がつぶれた状態で出土したほか杯類（1・4）も出土している。須恵器長頸壺は焚口手前より、北壁中央床面からは須恵器甑（9）が出土している。本址出土の須恵器長頸壺・甑は、SB236出土の破片が接合している。時期：出土土器から判断して7期とした。

SB236　位置：北部北　第50図、図版15・90・91

検出：ⅡA層で暗褐色土が落ち込む。カマド：袖は覆土と全く区別できなかったが、袖石の掘り方が火床の両側で1か所ずつ検出された。火床は焼土ブロックが斑点状にみられる程度である。西南隅にカマド石

らしき扁平の花崗岩が出土した。床：中央部は黄褐色粘質土を硬く貼床し、壁際に向かって薄くなって地山の礫層が露出している。埋没：2分層でき、第1層下面に拳大から人頭大の礫が投棄される。遺物出土状況：覆土では礫に挟まれるようにほぼ同一レベルから集中して出土し、カマド火床上からは黒色土器AⅢB (6)、須恵器杯A (9) が半完形で、土師器甕B (15・17・19) がつぶされたように出土した。覆土出土のものと接合するものが多い。またSB235出土の須恵器長頸壺（図版201−8）、甑（同図版9）と接合する破片がある。時期：個体数の多い出土土器から、7期と判断した。

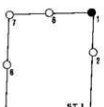


第50図　SB 236遺物出土状況実測図

2　掘立柱建物址

ST1　位置：南部南　図版6・23

検出：ⅡA層上面で、暗褐色土中に落ち込む柱穴掘り方が明瞭に検出できた。柱穴：東側の入側柱がやや北に位置するが、柱筋は通っている。柱間は桁行がやや広く、210cm前後を測る。掘り方の規模と深さは入側柱の規模が小さいがよく揃っている。掘り方埋土は黄褐色土ブロックを含む。P1・4・5の底にはピット状の柱痕跡が認められた。時期：時期決定の根拠に乏しいが、北側に隣接するSB5・6との位置関係や軸方向が一致することから、5期または13期と考えたい。

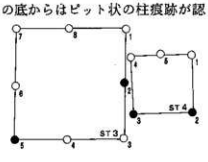


ST2　位置：南部南　図版6・23

検出：ⅡA層上面で黒褐色土の落ち込む柱穴が検出されたが、付近は現在の住宅の立ち退いた跡で攪乱が激しく、3基の柱穴を確認できただけであった。掘立柱建物址とするにはやや根拠が乏しいが、柱痕跡の認められる柱穴が存在することと柱穴の形況から判断した。柱穴：円形の掘り方はほぼ同規模であり、直角の位置に配されている。掘り方埋土には黄褐色土のブロックが混じる。北側の柱穴の底にはピット状の柱痕跡が認められた。時期：南側に位置するST1と同様に、5または13期の可能性が高い。

ST3　位置：南部南　図版6・24

検出：ⅡA層相当の砂層上面で、褐色土の落ち込む柱穴が明瞭に検出できた。切り合いは認められないが、東に接するST4とは近接することから同時存在はしない。柱穴：ほぼ等間隔の柱間寸法で配置されており、柱筋は良く通っている。柱穴の掘り方はほぼ同規模で深さも一定であるが、南側の中柱P4は規模が小さく非常に浅い。掘り方埋土は同質の単一層であり、P2およびP5の底からはピット状の柱痕跡が認められた。遺物出土状況：P5の柱痕跡から土師器杯・須恵器A・須恵器杯蓋Bの破片が出土し、掘り方から灰釉陶器椀 (2) が出土している。P7の掘り方からは土師器杯A (1)、P6・8の掘り方からは土師器甕の破片が出土した。時期：柱間寸法が300cm前後と広いことから8期以前とは考えられず、また出土遺物および西側のSB3・4との関係から13期と考える。



ST4　位置：南部南　図版6・24・25

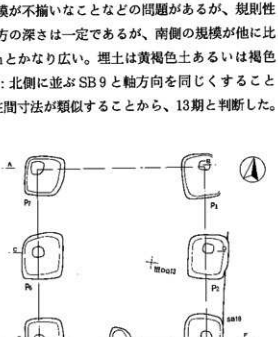
検出：ⅡA層相当の砂層で、褐色土の柱穴が明瞭に検出された。柱穴：掘り方は円形と方形の2通りがあるが、ほぼ同規模で同じ深さである。北側には中柱P5が存在するが、南側に対応する柱穴は確認できなかった。西側のST3のように浅い柱穴が存在し、削平されてしまった可能性がある。埋土はST3に類似する同質の単一層で、P2とP3の底にピット状の柱痕跡が認められる。時期：西に隣接するST3と形態や埋土が類似するので、柱間寸法の違いなどの問題はあるものの、その前後の時期と思われる。

ST5　位置：南部南　図版6・26

検出：ⅡA層相当の砂層で検出されたが、西側は遺構確認のためのトレンチによる削平を受けている。したがって、その部分の柱穴が検出できないことや、柱穴規模が不揃いなことなどの問題があるが、規則性をもった柱配置から掘立柱建物址と判断した。柱穴：掘り方の深さは一定であるが、南側の規模が他に比べてかなり小さい。柱間寸法も不揃いであり、280～330cmとかなり広い。埋土は黄褐色土あるいは褐色土の単一層であり、柱痕跡などは確認できなかった。時期：北側に並ぶSB9と軸方向を同じくすることから、6期の可能性もあるが、南のST3と規模や形状と柱間寸法が類似することから、13期と判断した。

ST6　位置：南部南　第51図、図版6・7・29

検出：ⅡA層中で、暗オリーブ褐色土の大きな柱穴が明瞭に検出できた。P2・3東側のSB19と切り合い、土層断面の観察の結果、本址が切ることが判明した。北東隅の柱穴は現代の用水路によって切られている。柱穴：形状、規模、深さが類似した掘り方であり、黒褐色土の柱痕跡も同様の状態で検出された。南側のP4だけは大きく異なり、規模の小さな浅い掘り込みで、柱痕跡は認められなかった。柱痕跡はすべて隅丸方形を呈し、柱筋は良く通り柱間寸法もほぼ等間隔である。埋土は灰色土などがブロック状に入る埋め戻した土であり、上下2分層できる柱穴もある。時期：切り合いから4期以降であることが判明した。大きくしっかりとした掘り方をもつことから、4期または5期に帰属すると思われる。



第51図　ST6断面図

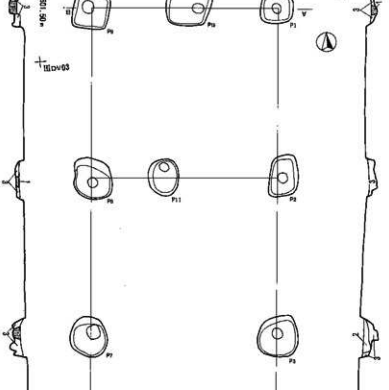
ST7　位置：南部南　図版7・31

検出：ⅡA層上面で等間隔に並ぶ3基の柱穴を検出し、周囲を精査したが、すぐ北にSB38が存在することや現在の道路にかかってしまい、他の柱穴は確認できなかった。柱穴の配置としっかりとした掘り方の状況から、掘立柱建物址と判断した。柱穴：深さは一様ではないものの、規模や形状が類似し柱筋も通る。埋土は、底に暗褐色土を入れその上にこぶい黄褐色土を埋めており、ブロック状に土が混じるが柱痕跡は認められない。時期：SB38に切られるので14期よりは確実に古く、南に位置するSB39と軸方向が同じことから5期の可能性がある。

ST8　位置：南部南　第52図、図版7・32・33、PL26

検出：ⅡA層上面でオリーブ褐色土が落ち込む大きな柱穴が検出された。規模が大きいこともあり、2棟の掘立柱建物址が並ぶ可能性も考えたが、柱穴の配置や埋土の状態から大形の南北棟とした。南側のSB

35・36・37と切り合い、いずれの覆土中にも本址の柱穴が明瞭に確認できるので、本址が一番新しいと判断した。柱穴：桁行の柱間が梁行の約2倍の間隔をもつが、それぞれはほぼ等間隔に配置され、柱筋もよく通っている。若干変形のものも認められるが、規模や形状はほぼ一致する。掘り方の土はⅠD層とⅡA層の土を混ぜて埋めており、暗褐色土の柱痕跡がすべての柱穴で確認された。柱痕跡は径20㎝前後で、隅丸方形あるいは円形を呈する。P11は浅い柱穴で、やや西側にずれて配置されており、束柱と思われる。遺物出土状況：いずれも掘り方からの出土であるが、P3とP5から土師器甕、P4から須恵器壺の破片が出土した。時期：切り合い関係から5期以降であることが判明し、出土遺物からも同様のことがいえる。掘り方の大きさなどから、それを大きく下らない7期までに存在したと考えたい。



第52図　ST 8断面図

ST9　位置：南部南　図版7・32・33

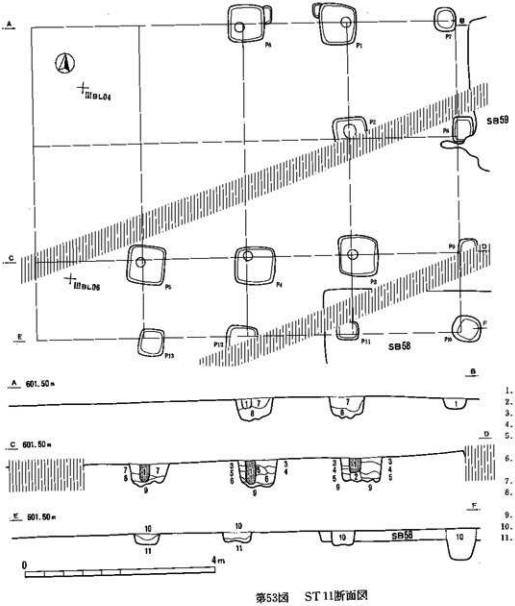
検出：ⅡA層中で暗灰褐色土が落ち込む柱穴が検出されたが、検出面が低く切り合う遺構が多いこともあって、明確にならない部分が多い。西側はSB46の煙道に柱穴の一部が切られ、南のSB34にも切られている可能性がある。SB46の床下に穿たれたピットも本址の柱穴と考えたが、掘り方の深さに違いがあり不明確である。掘立柱建物址とするには疑問も残るが、しっかりとした柱穴掘り方と配列から掘立柱建物址と判断した。柱穴：規模や形状などそれぞれの柱穴で異なる状況を呈する。掘り方には暗褐色土ブロックなどが混じっているが、柱痕跡は検出できなかった。時期：SB46に切られるので、4期よりは古いが、上限は明らかにできない。

ST10　位置：南部南　図版7・35

検出：ⅡA層上面でオリーブ褐色土が落ち込む柱穴が3基検出された。南にSD66が隣接し、現在の道路により調査が不能な場所も近接していることもあって、他のピットは検出できなかった。掘り方の規模や形状とその配列により、掘立柱建物址と判断したが、全体の規模や形態などは明確にならない。柱穴：規

模と深さはほぼ同一であるが形状の異なる柱穴が、等間隔で直角に配置されている。埋土は単一層で、柱痕跡は検出できない。遺物出土状況：いずれも掘り方から、黒色土器A杯・須恵器杯A・土師器甕の細片が出土した。時期：南東に近接するSB55・56と主軸方向が合うことと出土遺物の状況から、5期から7期に帰属すると判断した。

ST11　位置：南部南　第53図、図版7・35



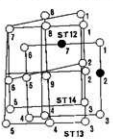
第53図　ST11断面図

検出：ⅡA層上面での検出となったが、現在の道路の下にかかるため水道管やガス管工事の攪乱などで明らかにできない部分がある。東側でSB58・59と切り合い、SB58の覆土に本址の柱穴P10・11が掘り込まれ、またSB59のカマドに切られる柱穴P8があることが、明確に判別できた。よって、切り合い関係は、SB58→ST11→SB59の順となる。柱穴：規模や形状が酷似する方形の掘り方が整然と配置されている。攪乱を受けて検出が不可能であったが、さらに西側に本址の柱穴が存在した可能性が高い。東側および南側にはひとまわり規模の小さな柱穴が巡り、その配列から庇部分と思われる。以上のことから、3×3間以上の東西棟で2面庇付き掘立柱建物が想定される。身舎の柱穴は、各種の土をサンドイッチ状に交互に入れて、径20㎝程の柱の周囲を固定していることが明らかになった。柱痕跡は円形を呈し、中柱 が

やや浅くなる傾向にある。庇の柱穴は全体に浅く、土をつき固める状況は類似するが、柱痕跡は確認できない。遺物出土状況：いずれも掘り方からの出土であるが、P1から須恵器杯A(1)・高杯・甕、P2から須恵器甕、P6から土師器甕が出土している。時期：切り合いからは、5期から7期までに限定され、出土遺物もそれを裏付けている。規模や柱穴の大きさ、北に位置する遺構との関係から、5期とするのが妥当と考える。

ST12　位置：南部北　図版8・36・37、PL26

検出：ⅡA層上面でオリーブ褐色土の落ち込む柱穴が容易に検出できた。直接柱穴は切り合わないが、ST13・14とほぼ重複する位置にあり、本址を含めて3棟の掘立柱建物址の建て替えが考えられる。柱穴：中柱P7がやや北に寄るが、ほぼ同規模の柱穴が対応する位置に整然と配置されている。掘り方の深さは中柱が若干浅く、埋土は黒褐色土のブロックを含む単一層である。P2及びP7で柱痕跡がわずかに確認できた。時期：軸方向や位置関係からSB61・62・63と同時存在した可能性が強く、3期から4期の間と判断した。柱穴の規模がやや小さいことから、その中ではやや新しいとも思える。



ST13　位置：南部北　図版8・36・37、PL26

検出：ⅡA層上面でST12・14と切り合う状態で検出された。検出面での観察の結果、ST14に切られる柱穴P1・2・6が確認でき、本址がST14よりも古いことが判明した。ST12とは直接切り合う関係にない。柱穴：ST14の柱穴との判別が難しかったが、P6・7・9は両址で共有していると考えて、柱配置は東に開く台形状を呈すと捉えた。桁方向の間隔がやや長いが、同じ規模と形状の柱穴が配置され、柱筋も通っている。掘り方の埋土は、黒褐色土ブロックを含む単一層で、柱痕跡は検出できなかった。遺物出土状況：P7の掘り方より須恵器杯B(1)が出土した。時期：切り合う3棟の中では一番古い可能性が高く、北側に隣接する3軒の竪穴住居址のうち、位置関係から3期に対応していると考えたい。

ST14　位置：南部北　図版8・36・37、PL26

検出：ⅡA層上面で検出され、柱配置などにややバラツキが見られるものの、ST13を切る2×2間の掘立柱建物址と判断した。柱穴：ST13のP6・7・9が引き続き使われていたと思われ、北と南の棟持柱がやや外側に位置しており、ST13と類似する規模と形状の柱穴が配置されている。掘り方の埋土は、黒褐色土ブロックを含むオリーブ褐色土で、柱痕跡は確認できない。時期：本址はST13からの建て替えと捉え、また北に隣接するSB62・63と軸方向を同じくすることから、4期に帰属すると判断した。

ST15　位置：南部北　図版8・37

検出：ⅡA層上面で検出したが、柱穴と地山の土が類似しており、検出がやや困難であった。柱穴：掘り方の規模は一定ではないが、柱間は等間隔であり柱筋も良く通っている。埋土は暗褐色であり、径10～20cmの円形の柱痕跡が検出された。時期：軸方向はST12～ST14と同一であり、周辺の遺構の時期も考え合わせると、4期前後であろう。

ST16　位置：南部北　図版8・37

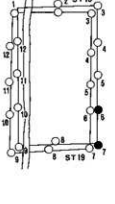
検出：ⅡA層上面で、オリーブ褐色土の落ち込む柱穴が明瞭に検出された。西側はSD61と切り合い、検出面での観察で、本址が切られることが容易に判断できた。柱穴：規模と形状の類似した柱穴が整然と配置されており、柱間隔は等間隔で柱筋も通る。掘り方の深さは中柱が浅いものが多く、柱痕跡は認められない。遺物出土状況：柱穴掘り方より土師器片がわずかに出土した。時期：北側のST18と軒を連ねるように位置しており、同時存在した可能性が強いことから、2期または3期と判断した。

ST17　位置：南部北　図版8・39

検出：ⅡA層上面で、暗褐色土の落ち込む柱穴が検出された。西側が調査区域外にかかるために、規模などは確定できないが、柱穴配置および柱間間隔から、2×1間の掘立柱建物址の可能性が高い。柱穴：同規模の隅丸方形の掘り方をもち、それぞれの中央に柱痕跡が認められた。柱痕跡は掘り方の坑底をわずかに穿つものが多く、柱筋は通り、等間隔に配されている。遺物出土状況：掘り方より土師器片1点が出土したのみである。時期：東に位置するST18と軸線や軒の並びを合わせているので、2期または3期に帰属すると判断した。

ST18　位置：南部北　図版8・39

検出：ⅡA層上面でオリーブ褐色土の入った柱穴を約30基検出した。その状況から、2棟以上の掘立柱建物址の切り合いが予想され、柱穴の配置や切り合いを検討した結果、4×2間の建物の建て替えと判断した。さらにもう1棟古い建物が存在し、2度建て替えられた可能性もあるが、はっきりしないので可能性の指摘に留める。西側の柱穴はSD61に切られることが検出面で明らかになった。柱穴：古い建物（ST19）と同規模・同構造のものを、北東方向にわずかにずらして建て替えをしている。中柱の規模が小さく掘り方の形状は楕々であるが、柱間は等間隔であり柱筋も通っている。北東隅の柱はST19と重複する。柱痕跡はP5・20・22で確認でき、掘り方の坑底をわずかに穿つものが多い。遺物出土状況：いずれも掘り方からの出土であるが出土量は比較的多く、須恵器杯A・杯B(1)・杯蓋Bと土師器甕が出土している。時期：ST19よりも新しく、軸線の方向をやや東に振ることから、周辺の遺構配置も考え合わせ、3期とするのが妥当と考える。



ST19　位置：南部北　図版8・39

検出：ST18と重複してⅡA層上面で検出され、P1はST18と共有している。本址が同じ位置に同規模・同形状でST18として建て替えられている。柱穴：掘り方の形状や中柱の小さいことはST18と類似する。柱痕跡は認められない。遺物出土状況：掘り方から須恵器片が2点出土している。時期：切り合いから3期と判断したST18の建て替え前の建物であることから2期頃と捉えられる。周辺の南・西・北に位置するST16・17・25とで、同一軸線上に計画的に配置されたと捉えられ、2期に同時存在していたと判断した。

ST20　位置：南部北　図版8・39

検出：ⅡA層上面でオリーブ褐色土の落ち込む柱穴が検出され、土色の違いなどで判別された。北東に位置するSB69と切り合い、SB69の覆土に本址の柱穴が確認できないことから、本址が古いと判断した。2×1間の掘立柱建物址で、北東の柱穴2基がSB69に切られている。柱穴：残った柱穴4基は、規模と形状が類似し深さもほぼ一定である。西側の柱列は中柱以外は柱痕跡が認められ、柱は掘り方の坑底をわずかに穿って埋められたことが観察できた。遺物出土状況：いずれも掘り方からの出土であるが、須恵器杯蓋と土師器甕の破片が出土している。時期：SB69に切られるので5期より古く、ST19・25などと軸線を合わせることや、位置関係、掘り方の大きさから判断して2期とした。

ST21　位置：南部北　図版8・38・39、PL26

検出：ⅡA層上面でオリーブ褐色土の落ち込む柱穴が明瞭に検出できた。南東の隅でSB64と切り合い、SB64の覆土に本址の柱穴が検出できたため、本址が新しいことが明確になった。柱穴：梁行が桁行の約2倍の距離をもつが、それぞれは等間隔に配置されており柱筋も良く通っている。ほぼ規模と形状の揃った柱穴で、深さは一定である。掘り方には黒褐色土ブロックが混じっており、柱痕跡らしき部分がわずかに認められた。時期：SB64を切るので2期よりは新しく、軸線を一致させ「L」字に配されているST22・

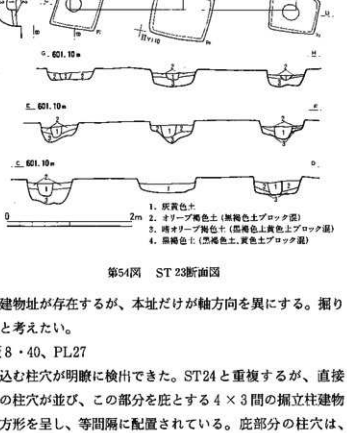
23とともに、3期に帰属すると判断した。

ST22　位置：南部北　図版8・38、PL27

検出：ⅡA層上面でオリーブ褐色土の落ち込む柱穴が、土色の違いから明瞭に検出できた。南側で、SB64の北壁を切って本址の柱穴が構築されていることが、検出面での観察の結果確認された。柱穴：四隅の柱穴が方形で大きいのに対して、中柱あるいは束柱と思われる3基の柱穴は、円形で少し小さく深さもやや浅い。梁行の方が長いが、各柱穴は等間隔に配置され柱筋も通っている。SB64と切り合う南側の2基の柱穴を除いて、掘り方の底につくように埋められた円形か楕円形の柱痕跡が検出された。時期：ST21と同様にSB64を切るので2期よりは新しく、ST21と同時存在するにはやや距離が近いが、3期に帰属すると判断した。

ST23　位置：南部北　第54図、図版8・39・40、PL27

検出：ST21・22と似た状況で検出され、柱穴の埋土も類似する。方形に整然と柱配置された、2×2間の総柱建物址である。柱穴：同規模で同形状の掘り方をもつ柱穴が等間隔に配され、各々のほぼ中央に柱痕跡が検出された。深さは一様ではないが、暗オリーブ褐色土を埋めて調節し、黒褐色土ブロック混じりのオリーブ褐色土で柱を固定している。遺物出土状況：黒色土器A杯・須恵器甕・土師器甕の細片が掘り方から出土した。時期：南のST21と軒を連ねる位置にあり、軸線を一致させることから、3期に帰属すると判断した。



第54図　ST23断面図

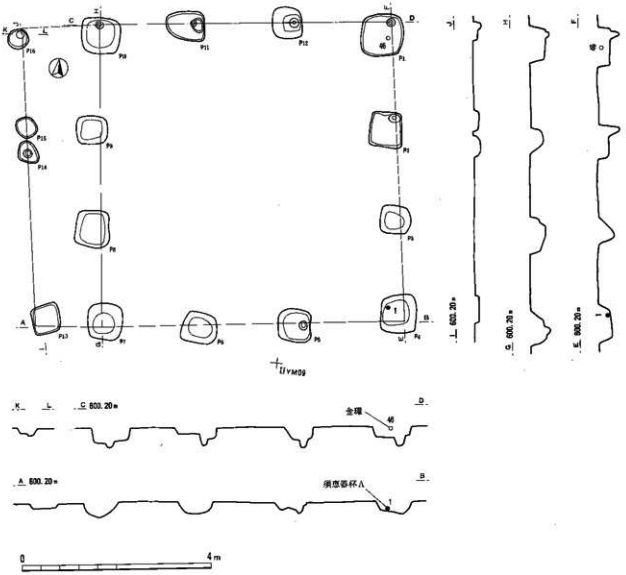
ST24　位置：南部北

図版8・40、PL27

検出：ⅡA層上面で検出され、直接切り合わないが、ST25と重複する位置にある。柱穴：中柱にやや小さいものがあるが、ほぼ同規模の円形に掘られた柱穴が配置されている。本址の北側に位置するP8も本址にともなうと思われるが、庇などとするには対応する柱穴がはっきりしない。柱穴の深さは、中柱が浅い傾向があり、柱痕跡は確認できなかった。時期：付近に数棟の掘立柱建物址が存在するが、本址だけが軸方向を異にする。掘り方の規模がやや小さいことなどから、4期以降と考えたい。

ST25　位置：南部北　第55図、図版8・40、PL27

検出：ⅡA層上面にて、オリーブ褐色土が落ち込む柱穴が明瞭に検出できた。ST24と重複するが、直接の切り合いは認められない。西側にやや小さめの柱穴が並び、この部分を庇とする4×3間の掘立柱建物と考えた。柱穴：身舎部分の柱穴は、同規模で方形を呈し、等間隔に配置されている。庇部分の柱穴は、円形を呈し柱間寸法が不揃いになる。柱痕跡は身舎のP1・2・5・9・10・11・12で検出され、いずれ



第55図　ST 25断面図

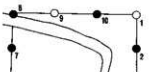
も円形を呈し、坑底には自重によるくぼみがみられる。遺物出土状況：いずれも掘り方からの出土であるが、P4から須恵器杯A (1)、P1・4・12から土師器甕の破片、P1から金環（図版215−46）が出土している。時期：出土土器は3期以前に帰属するものであり、南側の本址と同規模の竪穴住居址SB64と、軸線の方向を一致させて並ぶことから、2期に帰属すると判断した。

ST26　位置：南部北　図版8・41、PL28

検出：Ⅰ D層中で暗オリーブ灰色土の落ち込む柱穴が検出され、SB72と切り合う掘立柱建物址の存在が明らかになった。SB72の覆土に本址の南東隅の柱穴（P4）が認められず、床下精査中にその柱痕跡を検出したことから、本址が切られると判断した。柱穴：方形を呈するほぼ同規模の柱穴であり、南側のP7・8を除いてすべてに柱痕跡が認められた。掘り方の深さにはバラツキがあるが、深いものはサンドイッチ状に交互に土を入れて柱を固定している。柱痕跡は方形を呈し、下部に近付くと円形になる様子が観察できた。遺物出土状況：掘り方の遺物であるが、P2から須恵器杯B、P1・10から須恵器片の出土があった。時期：東に位置するST27・SB79と軸線を合わせていることと、出土土器から5期と判断した。

ST27 位置：南部北 図版8・42・43・44

検出：ID層中で、にぶい黄褐色土の落ち込む柱穴が明瞭に検出できた。P4・8がSD48に切られることが検出面での観察で明確になった。柱穴：中柱に不整形なものがあるが、ほとんどは方形を呈しほぼ同規模の柱穴が配されている。柱間間隔は、P4とP5の間が短く、対応する北側のP9とP10の間隔も同様に短い。P2・3・4・5・7・8・10から柱痕跡が検出され、そのいくつかは掘り方の底をわずかに掘り込む。遺物出土状況：黒色土器A杯・須恵器杯A・土師器甕などの細片が、いずれも掘り方から出土している。時期：SB79・ST26との軸線の一致や位置関係を根拠に、出土土器も考え合わせて、5期に帰属すると判断した。



ST28 位置：中部南 図版9・47

検出：ⅡA層上面で検出されたが、柱穴の土が地山と類似するためやや検出に手間取った。柱配置は平行四辺形になるが、柱痕跡がほとんどの柱穴から認められることなどから掘立柱建物址とした。柱穴：方形のやや小さめの規模をもつ柱穴が多く、中央のP8は不整形を呈するが、柱を抜き取ったあととも考えられる。P4・6のほかでは柱痕跡が検出され、そのほとんどは掘り方の坑底を掘り込んでいる。時期：時期を決定できる根拠はない。ST30などとの位置関係や、柱穴の規模から考えて、5期前後の可能性が高い。

ST29 位置：中部南 図版9・47

検出：ⅡA層上面で暗褐色土の落ち込みが検出されたが、地山との判別が難しかった。北東隅の柱穴がSB99と切り合い、本址の柱穴が住居址の壁を切って構築されていることが、観察の結果明確になった。柱穴：南西隅を除くすべての柱穴から円形の柱痕跡が検出された。掘り方の土は暗褐色土を主にサンドイッチ状に各種の土を入れて柱を固定しており、いずれの柱もほぼ同じ深さに埋められている。時期：SB99を切るので5期より新しいことは確実であるが、柱穴の規模や柱配置は古い様相を示し、5期あるいはその直後と思われる。

ST30 位置：中部南 図版9・47・49

検出：ⅡA層上面で検出され、ST31と重複する部分があるが、直接切り合わないため新旧関係は明らかにならない。柱穴：桁行の柱間が梁行の2倍ほどの長さをもつが、円形あるいは楕円形を呈するやや小さめの柱穴が、それぞれ等間隔に配置されている。規模と深さはほぼ同一で、南西隅の柱穴から柱痕跡が検出された。時期：ST31とは同時存在せず、柱穴の大きさからST31より新しい可能性があるので、遺構の配置を考え合わせて、5期前後と判断した。

ST31 位置：中部南 図版9・47・48・49

検出：ⅡA層上面で検出され、ST30と切り合うが新旧関係は明確にならない。柱穴：比較的大きな方形の柱穴を等間隔に配置しており、柱筋もきちんと通っている。柱間は梁行よりも桁行のほうがやや広い。P3・4・7で柱痕跡が検出され、P7では坑底よりも深く柱を入れている様子が観察できた。遺物出土状況：P5とP6から同一個体と思われる須恵器甕片が、P6で土師器甕片が出土しているが、いずれも掘り方からの出土である。帰属時期：柱穴の規模と柱配置、出土土器を考え合わせて、3期または4期と判断した。

ST32 位置：中部南 図版9・48・49

検出：ⅡA層中での検出であり、土坑に切られるほかは切り合う遺構はなかった。柱穴：方形で比較的規模が大きいという類似した柱穴が、等間隔に配されており、柱筋もよく通る。東側の中柱以外からは円形の柱痕跡が検出され、中柱が若干浅いが、ほぼ同じ深さに埋められていた。地山の暗褐色土を主に、サン

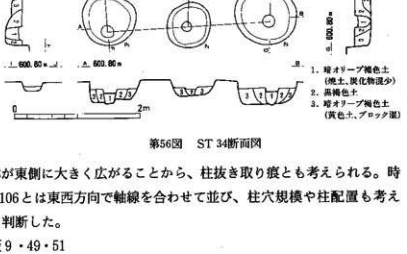
ドイッチ状に土を入れながら柱を固定している。時期：北側のST38と軸線を合わせ、南北に並ぶように位置するので、同時存在の可能性があり、柱穴の規模などの考え合わせ、3期前後と判断した。

ST33　位置：中部南　図版9・48

検出：Ⅱ A層上面で検出され、送電線の鉄塔設置にともなう攪乱を受けているが、比較的明瞭に捉えられた。柱穴：形状や規模はやや不揃いであるが、柱間寸法はほぼ等間隔である。平面および断面で柱痕跡の検出をしたが、痕跡は検出できなかった。しかし、柱穴の坑底に穿たれた小ピットが3か所で検出され、柱痕跡の可能性がある。時期：明確に時期を決定できる根拠に乏しいが、西に隣接するSB98と軸線を合わせ、東西に並ぶことから、5期の可能性がある。

ST34　位置：中部南　第56図、図版9・49・51、PL28

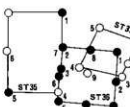
検出：Ⅱ A層上面で暗オリーブ褐色土の落ち込みとして、比較的明瞭に検出された。ST35北西隅の柱穴が本址の東側中柱P2と重複すると思われ、その柱穴が確認できないことから、本址がST35を切って構築された可能性もあるが、明確な切り合い関係はわからない。柱穴：付近の掘立柱建物址の中では、掘り方の規模が大きく深い。ただし、P9は極端に小さく、東柱と考えた。このP9を除く柱穴は、基本的には円形の掘り方をもち、中柱は浅くなるが柱痕跡はすべてから検出された。柱痕跡の観察から、柱は円形で径20cm内外である。黒褐色土と黄褐色土をサンドイッチ状につき固めて柱を固定している。北側の中柱P8は柱痕跡が東側に大きく広がることから、柱抜き取り痕とも考えられる。時期：SB103・104とは南北方向で、SB106とは東西方向で軸線を合わせて並び、柱穴規模や柱配置も考え合わせ、3期または4期に帰属すると判断した。



第56図　ST34断面図

ST35　位置：中部南　図版9・49・51

検出：Ⅱ A層上面で検出されたが、周辺には掘立柱建物址と土坑が密集しており、柱穴の判別などが難しかった。ST34・36と切り合い、ST36の柱穴を本址の柱穴が切っていることは、検出面での観察で判明したが、ST34との切り合いは明確にならなかった。柱穴：西側の桁行はP6が確認できただけで、北西隅の柱穴はST34に切られた可能性もあり、検出できなかった。P1・2・3・5で、やや不明確であるが柱痕跡が検出された。P4では柱痕跡が認められないが、柱の抜き取り痕と思える土が入っている。遺物出土状況：いずれも細片であり掘り方からの出土している。須恵器杯・壺・甕・土師器甕片がある。時期：判然としないが、ST36を切っていること、柱穴の規模や軸線の方向から、5期以降と思われる。



ST36　位置：中部南　図版9・49・51

検出：掘立柱建物址の密集する一角で検出されたが、暗オリーブ褐色土の落ち

込む柱穴が比較的明瞭に検出できた。ST35の柱穴P2が本址P7を切って構築されており、ST37のP3を切って本址のP2が掘り込まれていることが、検出面での観察の結果明確になった。従って、ST37→ST36→ST35の順になる。P2に重複がみられ、建て替えられたと思われるが、他の柱穴ではその痕跡が認められないので、ここでは1棟の建物址の柱替えと判断した。柱穴：大きく深い方形の掘り方をもち、ほぼ等間隔に配置され柱筋も通る。すべての柱穴で柱痕跡が検出され、黒褐色土と黄褐色土を交互に重ねて柱を固定し、柱穴の底をわずかに掘りくぼめて柱を建てており、柱の先端が尖っていることが観察された。坑底のくぼみは自重によってできたことも考えられる。時期：ST35を切ることと、ST34と規模や柱配置が類似することから、3期ないしは4期と判断した。

ST37 位置：中部南 図版9・49・51

検出：ⅡA層上面で検出され、南東隅の柱穴はST36に切られることが、検出面の観察の結果判明した。柱穴：規模の小さな円形の柱穴で、掘り方の埋土に焼土・炭化物の混在するのが特徴的である。東側のP2はやや小さく南に寄っている。掘り方はほぼ同じ深さで、柱痕跡は検出できなかった。時期：切り合い関係からは、ST36よりも古い4期以前であるが、軸方向や柱穴の規模からは、時期を限定できない。

ST38 位置：中部南 図版9・50・51

検出：ⅡA層上面で灰黄褐色土の落ち込む柱穴が、比較的明瞭に検出できた。北東隅の柱穴はSB103と重複しており、その部分では柱穴が見出せなかったので、SB103より本址が古いと考えられる。柱穴：規模の大小はあるが円形を呈し、等間隔に配置されている。中柱は規模が小さく掘り込みも浅い。東側の中柱以外で、円形の柱痕跡がわずかに認められた。帰属時期：SB103に切られることと、ST32との位置関係から、3期と判断した。

ST39 位置：中部南 図版9・51、PL28

検出：ⅡA層上面で検出され、ST40およびSD13と切り合う。検出面での観察の結果、両方とも本址が切っていることが判明した。柱穴：規模や形状に違いが目立つが、柱穴はそれぞれ等間隔に配置され柱筋も通っている。すべての柱穴から径20cm前後の柱痕跡が検出された。その半数以上は掘り方の底面よりも深く柱を入れており、黒褐色土を主体に土を重ねて柱を固定している。遺物出土状況：須恵器杯A・杯蓋・短頸壺、土師器甕など、いずれも破片で掘り方からの出土しているが、出土量は比較的多い。時期：遺構の配置からみると、SD12の南にある3期に帰属するSB106とは南北に並ぶ位置にあり、出土遺物や柱穴の規模、軸線の方向も考え合わせ、3期と判断した。

ST40 位置：中部南 図版9・51、PL28

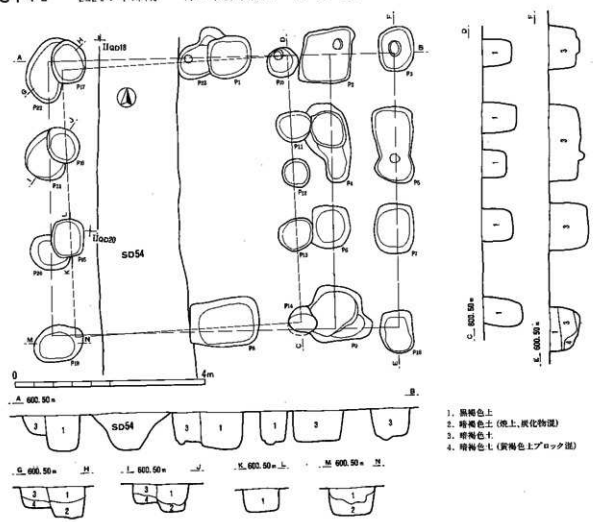
検出：ST39とほぼ重なる状態で、ⅡA層上面で検出された。南側の柱穴P3・4がST39に切られることは、検出面での観察の結果明確になった。柱穴：ほぼ同規模の隅丸方形の掘り方をもち、中柱がやや浅いものの深さもほぼ一定である。P2・4・5・6で柱痕跡が検出され、P3では柱抜き取り痕らしき痕跡が認められた。遺物出土状況：いずれも掘り方の遺物であるが、須恵器杯Aと土師器甕の細片が出土した。時期：切り合い関係から、ST39はST40を北と西に拡張するように、建て替えていると思われる。したがって、ST39の帰属する3期のわずか前に、SD13などと一緒に本址が存在したと考えられる。

ST41 位置：中部南 第57図、図版9・10・52・53

検出：ⅡA層上面で黄褐色土の落ち込む柱穴が明瞭に検出できたが、不整形のものが多く、精査の結果2棟の掘立柱建物址が重複していることが判明した。ほぼ同位置に建て替えられたST42に切られることがP1・23などの切り合いから明らかになった。本址は3×3間の東庇付き建物である。柱穴：柱の抜き取りなどの影響もあってか、柱穴の規模や形状にバラツキが目立つが、庇の柱穴がやや小さい。各柱穴の深

さはほぼ一定である。柱痕跡は検出できなかったが、P2・3・5・23で掘り方の底にピットが認められ、柱の据えられた跡と考えられる。P4・5・9は柱穴の重複とも想定できるが、明確なラインは引けなかった。遺物出土状況：P2～9のいずれからも土器片が出土し、須恵器杯A(1)・甕、土師器甕(2)などがあり、ほかに不明鉄製品が出土している。時期：軸線の方向を合わせ、規格性をもつ遺構の配置から、本址はSB110やST43・45と同時存在した可能性が高く、SB110の帰属する2期に属すると判断できる。出土遺物からも該期への帰属が裏付けられる。

ST42　位置：中部南　第57図、図版9・10・52・53



第57図　ST41・42断面図

検出：ST41に重複してⅡA層上面で検出された。ST41よりも東西方向の長さを縮小して建て替えていることが、検出面での精査で確認された。南西部の柱穴はST41のP8・19と重複していると思われる。SD54が中央やや西を南北に横切っており、この位置に存在した柱穴が切られる。P12は他の柱よりも浅く、補助的な柱と思われる。このことから、本址は3×3間の掘立柱建物である。柱穴：ST41の柱穴よりもひとまわり小さいが、ほぼ同じ規模と形状を呈する。P8・19の一部を掘り込んで本址の柱穴が存在しているが、精査を繰り返してもST41と判別することはできなかった。中柱がやや浅く、P10で坑底の一部を掘りくぼめた柱痕跡が検出されたのみで、他では認められなかった。遺物出土状況：P1より非ロクロの土師器杯(1)、P10から非ロクロの土師器杯(2)が出土したが、いずれも掘り方からである。時期：ST41の建て替えであるので、時期的には2期をあまり下らないと思われる。本址はSB111やST44と軸線の方向や遺構配置に規格性が認められることから、3期に同時存在したと判断した。

ST43　位置：中部南　図版9・10・53・54

検出：ⅡA層上面で、灰黄褐色土の落ち込む柱穴が明瞭に検出できた。直接切り合う遺構はないが、上面の中世の掘立柱建物址ST87が東側に掘り込まれ、そのためかこの位置の柱穴は検出できなかった。柱穴：規模・形状・深さともに類似した柱穴が、等間隔に配され柱筋も通っている。南側の柱穴では、やや径の大きな柱痕跡が検出された。時期：SB110と軒を連ねる位置に建てられているので、同時存在した可能性が高く、2期と判断した。

ST44　位置：中部南　図版9・10・52

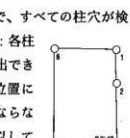
検出：ⅡA層上面で、東側部分の柱穴が検出されたが、西側部分は上面から中世のSB257が掘り込まれていることもあって検出は困難であった。西側の柱はSB257に切られている。柱穴：西側は検出が難しかったこともあって、柱穴の形状は不安定だが、基本的には方形の掘り方と思われる。ほぼ同じ深さに掘り込まれている。柱痕跡は検出できなかった。時期：東西に並ぶSB111や軸線の方向の一致するST42と同時期と思われ、3期に帰属すると判断した。

ST45　位置：中部南　図版9・10・52・53

検出：ⅡA層上面で一部検出されたが、全体が明確になったのはⅡA層中位である。SD54などの中世の遺構が掘り込まれていることや、現代の攪乱で西南部の柱穴は検出できず、北側の一部は現在の道路の下にかかり調査不能であった。柱穴：不明確な部分が残るが、ほぼ同規模で方形を呈するものが多い。掘り方の埋土は、灰黄褐色土に黄褐色土などのブロックが混じる土であり、柱痕跡は検出されない。時期：南に位置するST41・42と軒を並べており、軸線がほぼ一致することや柱穴の規模が類似することから、2期あるいは3期に帰属すると判断した。

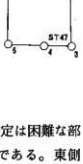
ST46　位置：中部南　図版9・10・54

検出：ⅡA層上面で検出されたが、ほとんどの部分は現在の道路の下にかかり、南側の一部が検出できたのみで全体は明らかにならない。P1からP6で1棟の掘立柱建物址の南側を構成しているととらえられ、東西4間の西庇付きの建物と想定できる。さらに、これを切って同じような柱穴が北に存在しており、1ないし2回の建て替えも考えられるが、明確にできなかった。柱穴：P3・4・5・6はいずれもほぼ同じ形状と規模をもち、直線状に等間隔で並ぶ。P5とP6は、これに直角に位置するやや小さく浅い柱穴であり、西庇の南側部分であると捉えた。時期：軸線の方向が他の遺構とやや異なるが、柱穴の大きさなどから、2期あるいは3期と判断した。



ST47　位置：中部北　図版10・11・56

検出：ⅡA層中で褐色土の落ち込む柱穴が検出された。上層を流れたNR9の影響で、すべての柱穴が検出できていないが、柱穴の配置と掘り方の状況から掘立柱建物址と判断した。柱穴：各柱穴の掘り方は規模と形状が類似し、深さもほぼ一定である。四隅の柱穴は明確に検出できたが、その他の柱はP2とP5を除いて検出できなかった。西側のP2に対応する位置にピットが位置するが、やや内側に入りすぎており、本址への帰属については明確にならなかった。時期：時期決定の根拠は不明確であるが、ST48と形状や軸線の方向が類似しており、同時期に存在した可能性がある。周囲の遺構の時期から判断して、5期から7期の間としたい。



ST48　位置：中部北　図版10・11・57

検出：ⅡA層上面で検出されたが、付近一帯が遺構の密集地であり、検出および柱配置の決定は困難な部分があった。西側をSB118と切り合っているため、梁行が2間であることのほかは不明確である。東側

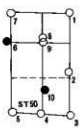
の柱穴がST49の柱穴を切っている。SB118とも切り合う位置関係にあるが、その覆土や周囲に柱穴が認められないことから、SB118のほうが新しい可能性が高い。柱穴：検出できた5基の柱穴は、規模に大小があるものの円形を呈しており、掘り方の深さもほぼ一定である。柱痕跡は検出できなかった。時期：切り合いからSB118よりも古いと判断されるので、6期以前となるが時期を限定することはできない。

ＳＴ４９　位置：中部北　図版10・11・57

検出：ⅡＡ層中に黄褐色土の混じる暗褐色土が落ち込む柱穴が明瞭に捉えられた。北西隅の柱穴がST48の柱穴に切られていることが、検出面での観察で判明した。本址の北側に柱痕跡をもつ柱穴がいくつか検出されており、それを含めて建物が建つかどうかの検討も加えたが、１×１間の掘立柱建物址という結論に達した。柱穴：形状は異なるが同規模の柱穴であり、深さも一定である。すべての柱穴で柱痕跡が検出され、いずれも掘り方の底より深くまで柱が入っているのが観察できた。時期：切り合いの関係からST48よりも古いことは確実であり、5期以前と判断できる。

ＳＴ５０　位置：中部北　図版10・11・57

検出：ⅡＡ層中に落ち込む暗褐色土の柱穴が比較的明瞭に検出された。ST47同様に検出できない柱穴があるが、３×２間の掘立柱建物址と捉えた。柱穴：柱穴の掘り方は規模、形状ともによく揃っており、深さもほぼ一定である。東、西、北側には確認できなかったが、さらにそれぞれ１基の柱が存在したと考えられる。全体に柱筋も通っているが、Ｐ８・９・10はやや位置がずれており、束柱として使用された可能性がある。Ｐ６およびＰ10で隅丸方形の平面形をもつ柱痕跡が不明確ながら検出できた。時期：ST47と類似することと周囲の遺構の状況などから、5期から7期と判断した。

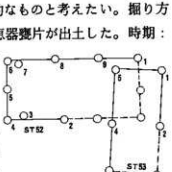


ＳＴ５１　位置：北部南　図版12・64

検出：ⅡＡ層相当の礫層中に砂質土の落ち込む柱穴が検出されたが、礫層のなかで柱配置などの確定は困難であった。周辺の土坑も含めて検討した結果、２×１間の掘立柱建物址を考えた。柱穴：ほぼ同じ規模と形状であり、等間隔に配されている。柱列線上に位置するＰ７・８は、規模が小さく浅いことから補助柱穴と考えられる。いずれの柱穴からも柱痕跡は検出できなかった。遺物出土状況：Ｐ５より土師器甕、Ｐ７から須恵器杯が出土したが、いずれも細片である。時期：根拠に乏しいが、西に位置するSB143と東西に並ぶので、時期を同じくすると思われ、出土遺物や柱穴の大きさも合わせて、6期と判断した。

ＳＴ５２　位置：北部南　図版12・64

検出：ⅡＡ層相当の礫層中に、褐色砂質土の落ち込む柱穴を検出した。ST51・53と同じく礫層での検出となったため、やや不明確な部分もあるが、３×２間の東西棟を想定した。東側でST51と重なるが、直接の切り合いが認められないため、前後関係ははっきりしない。柱穴：南東部の柱穴はST53と共有している可能性もあるが、明確に検出できなかった。柱間間隔が不揃いでゆがみのある配置であるが、ほぼ同じ形状と規模の柱穴であり、東西方向の柱筋は通っている。Ｐ３・７は補助的なものと考えたい。掘り方の深さは一定であるが、柱痕跡は認められない。遺物出土状況：Ｐ３から須恵器甕片が出土した。時期：軸線の方向がST51とほぼ一致することと、柱穴の大きさや全体の遺構配置から、6期に前後する時期と思われる。



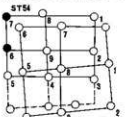
ＳＴ５３　位置：北部南　図版12・63・64

検出：ⅡＡ層の礫層中で検出され、ST52と重複するが、前後関係は明確にならない。柱穴：南東隅の柱穴は、SB152に近い位置と思われるが、検出できなかった。形状は異なるが同規模の柱穴が、柱間をほぼ等間隔にして配置

されている。掘り方の土は砂質土で、柱痕跡はまったく検出できなかった。時期：時期を決定できる根拠に乏しいが、柱穴の大きさや軸方向からは、付近の掘立柱建物址と同様6期前後の可能性が高い。

ST54　位置：北部南　図版12・65

検出：ⅡA層に相当する礫層中で、灰黄褐色砂礫土の落ち込む土坑が多数検出された。柱痕跡の認められるものもあるので、対応する柱穴などを検討した結果、掘立柱建物址として本址を確定した。ここでは2×2間の東西棟を想定したが、さらに南側に伸びて3×2間の南北棟の可能性もある。ST55と重複するが、直接の切り合いがないので前後関係は明確にできない。柱穴：形状や規模にややバラツキがあるが、ほぼ対応する位置に柱穴が存在し、柱筋も通っている。掘り方の深さはだいたい一定であるが、P9は浅く柱穴規模も小さいので、束柱と考えたい。P6・7で掘り方の底まで達する柱痕跡が検出された。遺物出土状況：P6・7の掘り方から須恵器杯A(1)・甕、土師器甕C(2)などの破片が出土した。時期：軸線の方向や遺構の配置および出土遺物から、5期前後と判断した。

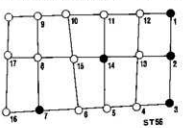


ST55　位置：北部南　図版12・65

検出：ST54と重複して検出されており、北東隅の柱穴が検出されないことと、ゆがみをもつ柱配置や柱穴規模の不揃いなどの問題があるが、2×2間の総柱建物址と想定した。柱穴：礫中に構築されるためか、形状・規模・深さはかなりバラツキがあり、検出の難しさから不明確な部分も残った。柱痕跡や裏込めの石らしきものも検出されているが、明確には捉えられなかった。時期：軸線の方向はST56・57と一致することから、3期または4期と判断した。

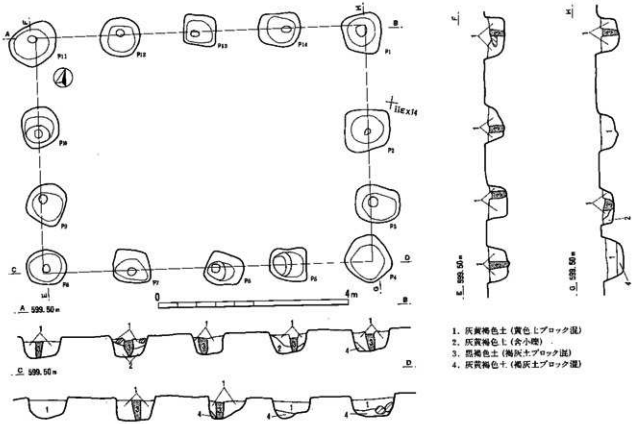
ST56　位置：北部南　図版12・67

検出：ⅡA層相当の礫層中に、小礫を含む灰黄褐色土の落ち込む柱穴が検出された。当初は2棟の建物が並立すると考えたが、ST57を南西方向へわずかにずらして建て替えたものと判断した。ST57と重複するが、柱穴の切り合いはないので、前後関係はわからない。柱穴：西側の柱穴にやや小さなものがあるが、ほぼ同規模であり円形と方形の二種の平面形が認められる。P1・2・3・7・14で柱痕跡が検出され、先端の尖った柱が、掘り方の底あるいは底より深くまで入れられていたことが観察できた。P4・5・6では柱の建て替えが認められた。桁方向の柱間間隔は一定しない。P16・17は小さく浅い柱穴であり、底部分と思われる。遺物出土状況：土師器甕B(1)の破片がいくつかの柱穴から出土しているが、いずれも掘り方からである。時期：ST57と規模や軸線の方向が類似しているが、柱穴規模が小さくなり柱間間隔が一定しないので、ST57の建て替えと考えた。出土遺物も考え合わせて、5期と判断した。



ST57　位置：北部南　第58図、図版12・67

検出：ⅡA層下部で灰黄褐色土の落ち込む柱穴が明瞭に検出された。ST53と重複するが、切り合いからの前後関係は判断できない。柱穴：規模と形状の類似する大形の掘り方をもち、柱間寸法は等間隔で柱筋も通っている。掘り方の深さは一定しており、ほとんどの柱穴から柱痕跡が確認された。柱痕跡は掘り方の底に接するものが多く、坑底を穿っているものもある。柱を建てる際の裏込めの石とも思える礫の入る柱穴もいくつか存在する。何種類かの土を入れ、つき固めながら柱を固定しているものもみられる。遺物出土状況：P11の掘り方から須恵器杯A(1)・高杯(2)が出土している。時期：柱穴の状況などから、ST53よりも古いと思われ、遺構の配置や出土遺物も合わせて考え、3期から4期に帰属すると判断した。



第58図　ST57断面図

ST58　位置：北部南　図版13・69

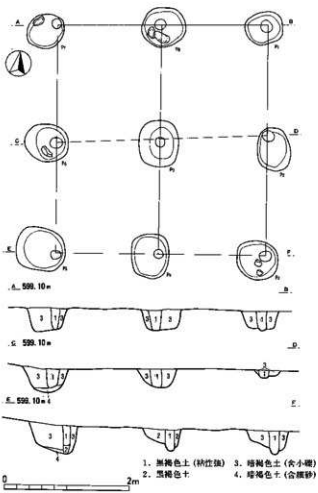
検出：ⅡA層に相当する礫層中で検出されたが、検出面が低く、北側の柱穴は確認できなかった。柱穴規模と形状の類似する柱穴が、直角に曲がりながら等間隔に配置されている。すべての柱穴から円形の平面形をもつ柱痕跡が検出され、掘り方の底まで達しているものが多い。時期：本址の全体が明らかになっておらず、付近に軸線の方向を同じくする遺構などは存在しないが、軸線がST56・57とほぼ一致することや、柱穴の形状や規模から、5期以前と考えたい。

ST59　位置：北部中　第59図、図版13・69

検出：ⅡA層に相当する礫層中で、小礫を含む暗褐色土の落ち込む柱穴が明瞭に検出された。柱穴：規模と形状の類似する大きくしっかりとした柱穴が、ほぼ等間隔に配され柱筋も通る。すべての柱穴で柱痕跡が検出され、掘り方の深さは一定しないが、掘り方の底より深くまで柱を入れるなどして、柱の深さは一定にしていることが観察できた。ただし、東側のP2はやや浅い。時期：軸線の方向や遺構配置から、北西に隣接するSB169と同時期と思われ、柱穴の規模や柱配置なども考え合わせて、2期に帰属すると判断した。

ST60　位置：北部中　図版13・74

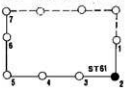
検出：ⅡA層中で褐灰色土の落ち込む柱穴を検出した。ややゆがみのある柱配置であるが、柱痕跡があることなどから、2×2間の総柱建物址と判断した。柱穴：ほぼ同一規模で深さも一定であり、比較的規模の小さな円形の柱穴すべてから柱痕跡が検出された。柱痕跡の観察から、隅丸方形の柱を掘り方の底まで入れていたことが明らかになった。南側の中柱が張り出すなど、柱間や柱筋の不揃いが目立つ。遺物出土状況：須恵器と灰釉陶器の細片が、いずれも掘り方から出土している。時期：周囲の竪穴住居址の時期と覆土の状況、出土土器から判断して、8期とした。



第59図 ST59断面図

ST61 位置：北部中 図版13・14・74

検出：ⅡA層中で検出され、北側で切り合うSB183の覆土中に柱穴が認められないことから、SB183に切られると判断した。3×2間の東西棟の掘立柱建物址と考える。柱穴：規模と形状が類似しており、深さもほぼ一定である。柱痕跡の確認は難しかったが、南東隅のP2でピット状に掘り込まれた柱痕跡が認められる。P7は掘り込みが浅く、位置的にも本址の柱穴であるかどうか疑問が残る。遺物出土状況：P2とP4の掘り方より黒色土器A杯と須恵器杯蓋の破片が出土した。時期：SB183に切られることから、8期より古く、柱穴の規模や軸方向、周囲の竪穴住居址の時期と出土遺物から、5期前後と判断した。



ST62 位置：北部中 図版14・75

検出：ⅡA層中で褐灰色土の落ち込む柱穴が検出された。北西隅の柱穴が検出されないことや柱間が不揃いなことなどの問題があるが、すべての柱穴に柱痕跡が認められることから、掘立柱建物址を想定した。柱穴：規模や形状はやや不揃いであるが深さは一定で、掘り方の底まで達する柱痕跡がいずれの柱穴でも認められた。柱痕跡には炭化粒の混入が認められ、掘り方とは明確に判別できた。遺物出土状況：掘り方から黒色土器A杯と土師器甕の細片がわずかに出土した。時期：時期を明確にする根拠に乏しいが、柱穴の規模や柱の配置、周囲の竪穴住居址の時期から、5期前後と考えたい。

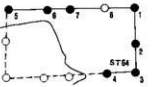
ST63 位置：北部中 図版14・78・79

検出：ⅡA層上面で、灰黄褐色土の落ち込む柱穴が検出された。北西隅の柱穴が検出されないことや、やや位置のずれる柱穴もあるが、柱痕跡の認められるものが多いことから、2×2間の掘立柱建物址と考えた。柱穴：規模は不揃いであるが円形の掘り方をもち、P1・3・4・6では掘り方の底まで達する柱痕跡が検出された。柱痕跡は炭化粒と焼土粒を含むが、判然としない部分もある。P2・6は片寄った位置に柱穴が配されている。遺物出土状況：P7より軟質須恵器杯(1)が出土した。時期：柱の配置と出土遺物から、8期前後の可能性が強い。

ST64 位置：北部中 図版14・79

検出：ⅡA層相当の礫層に灰褐色土の落ち込む柱穴が検出されたが、西側ではSB202と切り合う。検出面での精査の結果、SB202の覆土に本址の柱穴が認められないことから、本址が古いことが判明した。4×2間の東西棟と考える。柱穴：規模や形状は不揃いであり深さもまちまちであるが、P8を除く柱穴からは柱痕跡が検出され、柱筋も通っている。柱痕跡の観察から、柱は径15㎝ほどの円柱であり、掘り方の底まで達するものと中途まで入れられたものがあることがわかった。遺物出土状況：P3の掘り方より

土師器の細片が1点出土したのみである。時期：SB202に切られるので6期よりは確実に古く、SB203とは近接していて同時存在が難しい。北側の竪穴住居址との関係も考え合わせ、2期前後と判断した。



ST65　位置：北部北　図版14・81

検出：ⅡB層上面で、暗オリーブ褐色土の落ち込む柱穴を検出した。土色の違いから検出は容易であったが、不明確な部分がある。柱穴：規模と深さの揃った柱穴がほぼ等間隔に配置されている。P1・4・5からは掘り方の坑底をピット状に穿った柱痕跡が検出されている。P3は建て替えられた柱とも考えられるが、本址に伴なうかどうか明確にできない。時期：軸方向を同じくする遺構が周囲に存在せず、遺物や切り合いも認められないことから、帰属時期の決定が難しい。柱穴の規模や北西に位置するSB214と軸線の方向が近いことから、3期から4期の可能性を考えた。

ST66　位置：北部北　図版14・82

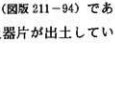
検出：ⅡB層上面で、暗褐色土の落ち込む柱穴が検出された。すでに削り取られてしまった柱穴の存在も考えられ、P1・2が本址に帰属するかを含め明らかにならない部分が多い。柱穴：規模と形状はバラツキがみられるが、P3・4・5・6はほぼ同規模で柱間間隔も等しい。P1の坑底からはピット状の柱痕跡が検出されている。時期：ST65と同じく帰属時期の決定根拠に乏しいが、埋土や柱穴規模と軸線の方向から、7期前後の可能性を指摘したい。

ST67　位置：北部北　図版15・85

検出：ⅡA層中で周囲の多数の土坑とともに検出され、柱痕跡の認められる柱穴を中心に2×2間の掘立柱建物址を想定した。本址の北東隅の柱穴P1は、ST68およびSK575と切り合い、検出面での観察の結果、両遺構を切ることが明確になった。柱穴：北側の中柱が存在しないが、規模と形状はほぼ類似しており、柱間寸法は等間隔で柱筋も通っている。P5以外の柱穴からは、掘り方の底を深く掘り込んだ柱痕跡が検出された。遺物出土状況：P2の掘り方より須恵器杯A(1)・杯B・甕の破片が出土した。須恵器甕片はP7の掘り方出土の破片と接合し、SB226に同一個体片がみられる。1は墨書土器（図版211－94）である。時期：切り合う遺構の中で一番新しいこと、5期に帰属するSB226と同一個体土器片が出土していること、遺構の配置状況や柱穴の大きさなどから、5期と考えるのが妥当であろう。

ST68　位置：北部北　図版15・85

検出：ST64とともに、ⅡA層中で多数の土坑に混じって検出された。ST67との切り合い関係は、北東隅の柱穴が切られることで明確になり、東側の残りの柱穴はST64と共有している。したがって、本址を西側に拡張して建て替えたのがST67である。柱穴：切り合いで判然としないものが多いが、残存する柱穴はほぼ同じ規模と形状を呈しており、ほとんどから掘り方の底を深く掘り込んだ柱痕跡が検出されるなど、ST67の柱穴と類似している。時期：建て替えられたST67が5期に帰属するので、その直前の4期であろう。



ST69　位置：北部北　図版15・87

検出：ⅡA層上面で比較的容易に検出されたが、柱穴の配列はかなりゆがんでいる。当初は柵列と考えたが、それぞれの柱穴が対応しており、北に隣接するST67と類似することから、2×1間の掘立柱建物址を想定した。柱穴：類似する円形の小規模な柱穴で、東西の柱列はそれぞれ等間隔に配されており、柱筋も通っている。掘り方の土は暗褐色土で、柱痕跡は検出されなかった。時期：明確な根拠はないが、周囲の遺構の状況から、6期あるいは7期と思われる。

ＳＴ７０　位置：北部北　図版15・87・91

検出：ⅡＡ層中で褐色土の落ち込む柱穴が土色の違いから明瞭に検出された。柱穴：規模と形状の類似する柱穴が、南側の中柱が西に寄るほかは柱間寸法を同じくして配置されており、柱筋も通る。掘り方の深さもほぼ一定であるが、柱痕跡は検出されなかった。時期：時期を決定する積極的な根拠に乏しいが、周囲の遺構の時期や柱穴の大きさなどから、６期から７期と判断した。

ＳＴ７１　位置：中部北　図版11・60

検出：ⅡＡ層上面で、灰色系の土の落ち込む２×２間の掘立柱建物址が検出された。当初は中世の遺構と考えたが、柱穴の規模が大きいことから、古代の建物として扱うという結論に達した。中世のＳＫ1475に切られ、西側の柱穴では検出できないものもあった。柱穴：検出できた柱穴は６基であり、平面形と規模の類似する柱穴が、ほぼ等間隔に位置している。掘り方の土は暗褐色土ブロックを含んでおり、東と北側の中柱で柱痕跡が確認できたが、両者の埋土が酷似しているためやや不明確であった。時期：南に隣接するＳＢ131と南北に並んで位置し、軸線の方向も一致するので、５期と判断した。

３　溝　址

ＳＤ１　位置：南部南　図版６・７・27

規模・形状：ＩＤ層下部で際礫を含む細長い落ち込みとして検出されたが、幅50㎝長さ12ｍ程が、部分的に把握できただけで詳細は不明である。深さ30㎝程度を測り、断面が「Ｕ」状を呈し東に傾斜しており、溝の底に酸化鉄の沈殿が認められることから、溝中を水が東に向かって流れていたと思われる。やや南に湾曲しながら、東に向かって流れるが、その先は削平されて判然としない。時期：本址がＳＫ36を切り、また西側のＳＢ11に切られるので、４期よりも古いと判断した。所見：すぐ南を同方向に向けて流れる自然流路（ＮＲ３）は、溝の氾濫と思われ、本址と何らかの関連のある可能性があり、付近一帯の凹地を用水が流れていた可能性があると考えたい。

ＳＤ２　位置：南部南　図版７・35

規模・形状：ⅡＡ層上面で検出されたが、底面まで10㎝内外しかなく、東側は検出できなかった部分がある。西側も道路の下に入り検出不能であり、長さ11ｍ程が確認できただけである。幅は50～100㎝で、東に寄るにしたがい広くなる。鍋底形の底面に、水が流れた痕跡と思われる、酸化鉄の沈殿が認められた。傾斜の状態から、緩やかに西から東へ流れ下ったと想定される。時期：ＳＢ57を切るので、６期よりは新しいが、時期の限定はできない。所見：周囲に７期から８期にかけての竪穴住居址が展開するので、その中を流れた用水路が想定できる。

ＳＤ３　位置：南部南　第60・61図、図版７・８・34・36、ＰＬ29

規模・形状：ⅡＡ層上面で砂質の暗黄褐色土の落ち込みとして検出された。断面が「Ｖ」字形に近い深い溝であり、ほぼ東西方向に直線的に伸びる。西側は削平によって検出できない。土層断面の観察から、大きく上下２層に分けることができ、層の分かれ目で段差ができていることより、一度埋まりかかった溝を少し幅を広くして再び使用したものと考えられる。また、上層の下部に小礫の堆積と酸化鉄の沈殿が認められることと、その上は砂がラミナ状に堆積していることから、溝内を水が流れたことが判明した。下層はさらに二分され、上層のように水が流れた痕跡は認められない。このことから、本来空堀であった溝を、後に用水路として再利用したものと考えた。さらに、これに重複するより古い溝が存在する。底面に礫の堆積が認められるため、最初の溝も水が流れたと判断した。時期：切り合う遺構や時期の判明する遺物はないが、南側に同方向で構築されている柵址（ＳＡ１）や掘立柱建物址（ＳＴ11）とは、ある段階で同時期に存在していたと思われ、北側の遺構とも方向を合わせている。何度も作り直されていることを考え合わせて、

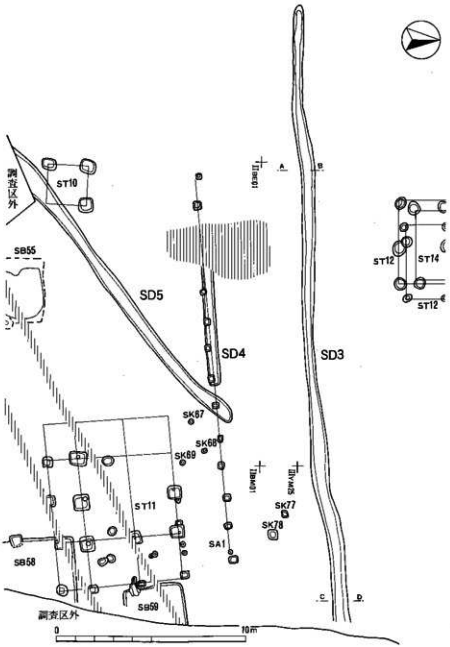
2期から5期の間の長い間存在したと判断した。所見：大きな掘立柱建物址ST11の塀とも想定されるSA1と、約5mの間隔を置いて平行して構築されていることから、SA1との間の空白部分を含めて、単なる用水路だけでない性格が想定される。この位置には、中世以降も10条以上の溝が繰り返し構築されていることも、溝の性格を考える重要な視点になりそうである。

SD4　位置：南部南

第60図、図版7・35・36

規模・形状：ⅡA層上面で、暗オリーブ褐色土が落ち込むが、長さ約8mと部分的な確認に留まった。SA1と同方向の東西方向を向く直線的な溝であり、本址のなかに掘り込まれるピットがいくつか認められるため、SA1の掘り方の可能性も追及してみたが、本址の壁を切るものもあり、SA1に切られる別の遺構と判断した。幅は70cm、断面は鍋底形で底面まで10cm程を残すだけである。砂や礫の堆積がみられないなど、水が流れた痕跡は認められない。

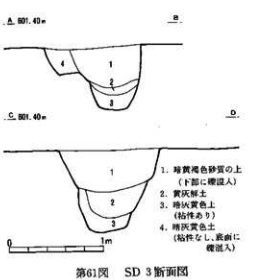
時期：SA1に切られることから5期以前であるが、時期を限定することはできない。所見：SD3と方向を合わせているので、SA1が構築される前に、SD3と対応した遺構として存在した可能性が高い。



第60図　SD3・4・5実測図

SD5　位置：南部南　第60図、図版7・35・36

規模・形状：ⅡA層上面で、暗オリーブ褐色土の落ち込みとして明確に検出された。多少蛇行しながら南西から北東方向へ向かうが、道路の下に入り部分的な検出に終った。SA1のピットが本址を切ることは明確に判断できた。SD4との切り合いは直接確認できなかったが、本址がSD4の延長上



第61図　SD3断面図

を横切ることから、本址が新しい可能性が強い。幅60～80cmを測り、断面「U」字形の底面は深さ15～20cmである。ⅡA層起源の黒褐色土ブロックを含む粘性の強い覆土であり、水の流れた痕跡は認められない。時期：SA1に切られ、SD4を切ると思われるので、4期前後と判断した。

SD6　位置：南部北　図版8・38・40

規模・形状：ⅡA層上面でオリーブ褐色土の明瞭な落ち込みとして検出されたが、底面まで5cm程ときわめて浅く、判然としない部分が多い。幅80cmで長さ約4mが検出でき、南北方向からやや東に向く。水の流れた痕跡などは確認できない。

時期：時期を限定できる切り合いや出土遺物はない。

SD7・8　位置：南部北

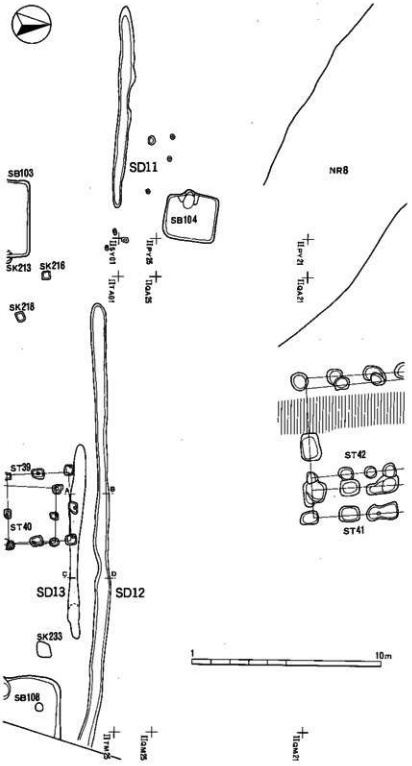
図版8・40

規模・形状：SD6同様の検出状況であり、部分的検出に留まった。160cm程の間隔を置いて、東西方向からやや北に向いて直線的に走る、2条一対の遺構と捉えた。ともに、幅50～70cm、深さ5cm前後であり、長さ5m程が確認できた。覆土は、黒褐色土ブロックの混じる粘質土で、水の流れた痕跡は認めない。時期：時期を決定できる根拠に乏しいが、ST25のすぐ東から構築されていることより、2期前後と思われる。所見：平行する2条の溝は、SD3・5、SD9・10などでみられ、溝の間を道と想定することもできる。

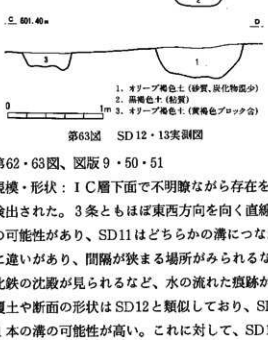
SD9・10　位置：南部北

図版8・42・44

規模・形状：ⅡA層上面で、灰黄褐色土の落ち込みとして検出された。100～150cmの間隔をもって北から南へ併走する2条一対の遺構である。南側では大きくカーブしながら徐々に東に向きを替え、調査区域外に出てしまう。北側は、徐々に浅くなり確認できなくなるので、どこまで続くのかは明確にできない。幅は50～90cm、深さは15～30cmであり、中央が深く、



第62図　SD11・12・13実測図



第63図　SD12・13実測図

南で再び浅くなる傾向が認められる。「U」字形の断面を呈し、覆土は黒褐色土の小ブロックを含む砂質土である。底面に酸化鉄の沈殿がわずかに認められるので、一時的な滞水などの可能性がある。遺物出土状況：SD10覆土中より土製紡錘車（図版218－19）が出土している。時期：本址がSB82を切るので、6期より新しいが、時期を限定することはできない。所見：南北方向に走る道の可能性を考えたい。

SD11・12・13　位置：中部南

第62・63図、図版9・50・51

規模・形状：ⅠC層下面で不明瞭ながら存在を捉えていたが、平面形が確定されず、ⅡA層上面で全体が検出された。3条ともほぼ東西方向を向く直線的な溝で、東へ傾斜する。SD12・13は2条で一対の遺構の可能性があり、SD11はどちらかの溝につながると思われる。しかしSD12・13は、深さや覆土の状況に違いがあり、間隔が狭まる場所がみられるなどの問題点がある。SD12は細粒砂を主体とする土で、酸化鉄の沈殿が見られるなど、水の流れた痕跡が認められ、幅の狭い所ほど深くなる傾向がある。SD11の覆土や断面の形状はSD12と類似しており、SD12と同様に水の流れた痕跡が確認できることから、同じ1本の溝の可能性が高い。これに対して、SD13では水の影響が認められず、全体的に浅い覆土は、埋められたと判断できる。時期：SD13は3期に帰属すると思われるST39に切られるので、2期から3期と考えられ、SD11・12は方向や位置関係から、ST39と同時期の3期と思われる。所見：ST40とSD13が同時に存在し、ST39への建て替えに際してSD13が埋められ、新たにSD11・12が構築されたと考える。

SD14　位置：中部北　図版10・55

規模・形状：ほぼ東西方向に直線的に走る大きな溝あるいは自然流路と思われるが、南側は道路の下にかかり、判然としない部分がある。幅が5m以上もあることから、自然流路の可能性が強いが、覆土に砂利や礫が目立たないこととと直線的な形状から、ここでは溝としてあつかった。時期：切り合う古代の遺構をすべて切ることから、5期以降であるが時期を限定することはできない。

SD15　位置：北部北　図版14・81

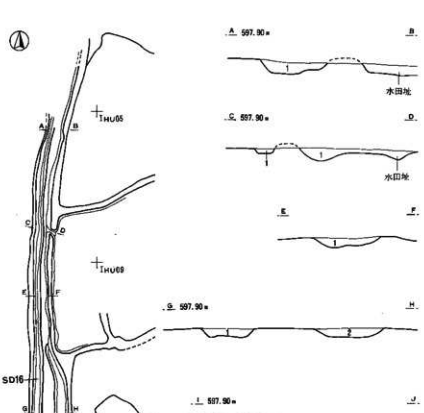
規模・形状：ⅡA層中で検出されたが、覆土のにぶい黄褐色砂質土が地山の土と判別しづらく、底面まで数cmを残すだけである。大きくカーブしながら北西から南東に向かっており、北は徐々に浅くなって消えてしまい、南端はSK477に切られて先は明確にならない。ごく浅い覆土に砂が入っていることから、水が流れていた可能性を指摘できる。傾斜は緩やかであり、幅は50cm前後を測る。時期：東側のST65と方向が一致することと、周辺の遺構配置から、3・4期以降と考えた。所見：自然流路と直角に交わる方向に流れた用水路であろう。また、水尻に位置するSK477との関係が注目されるが、明確にできなかった。

SD16　位置：北部北

第64図、図版15・84・86

規模・形状：ⅠD層中で、淡茶褐色土の地山に濃暗茶褐色土の2条のライン（畔）が、150cmほどの幅で南北に平行して延びているのが明瞭に検出された。2条間には、青灰色の粗い砂質土が認められた。覆土は粗い砂質土の単層で、底面に近付くにつれて粗砂になっている。また、断面「U」字形の溝の壁と底面に酸化鉄の集積が明確に確認できることから、水の流れた痕跡と判断した。底面の比高差をみると、北側が約10cm低く、この部分では南から北に水が流れたことが判明した。南側では一旦枝別れして2本となった流路が、10m程で再び合流することが確認され、その先は溝の底面が二つ存在するように観察できる

ことから、流路を部分的に変えたと想定できる。南端と北端は、いずれも検出が低くなって不明瞭になってしまい、部分的な検出にとどまるが、緩やかに蛇行しながら、北に流れる流路である。両側の畔には、高さ5㎝の高まりが観察され、その幅は西側が15～30㎝、東側が20～35㎝で、東がやや規模が大きい。上部を削平されている。東側の畔は水田址の畦畔でもある。中央やや北寄りでは30㎝程畔の途切れる部分がある。途切れた部分に粗砂が堆積していたことや、水田との関係から、これを水田への水口と判断した。時期：時期の限定は難しいが、北端に近い溝中から出土した須恵器杯A(1)と水田址の出土遺物、西側に位置する住居址の存続時期から、5期から7期と判断した。所見：東側に広がる水田址の用水路として構築された溝である。すぐ北では東に流れるNR10が存在し、そこから引かれた該期の用水路が西から東に流れるなかで、本址は地面との傾斜にも逆向して北から南に流れることは、この時期の自然流路の位置や集落内の水利とも関連する、注目すべき事実であろう。



第64図　SD16・SL1実測図

SD17　位置：北部北　図版15・86

規模・形状：ⅠD層で検出され、水田址を切って構築された溝である。溝の底まで10㎝が確認されたのみであるが、底面の傾きから、北から大きくカーブしながら南東方向へ向かう。「U」字形の断面を呈し、覆土は砂質土で底には粗砂が堆積し、酸化鉄の集積が認められることから、溝内を水が流れたことが明らかになった。時期：水田址を切るので7期より新しいと思われるが、時期を限定することはできない。所見：位置と流れの方向から、境沢付近を流れた自然流路(NR10)から引きこんだ用水路であろう。

SD18・19　位置：北部北図版15・88

規模・形状：ⅡA層相当の礫層上面で検出されたが、検出レベルが低く、全長5m程が明らかになっただけである。覆土は粗砂で小礫が混じり、酸化鉄の集積も認められるなど、水が流れた痕跡が残る。全体の形状は判然としないが、蛇行しながら北西から南東へ向かっていたと思われる。時期：わずかな出土遺物などからは時期を限定することはできなかった。所見：流れの方向などから、北のNR10から引き込まれた用水路と判断でき、SD18は東でSD17とつながる可能性がある。

SD20～23　位置：北部北　図版15・90・91

規模・形状：いずれもⅡA層相当の礫層上面で検出された、形状や方向の類似する溝である。SD20はSD21と平行するように位置するが、数m程が検出できただけである。覆土は細礫の混入する暗褐色砂質土であり、溝中を水が流れた可能性が強い。SD21は中途からSD22に切られて判然としなくなるが、おそらくSD22と重複する位置にあったものと思われ、ゆっくり蛇行しながら北西から南東へ延びている。覆土は細礫・小礫を多く混入する黄褐色砂質土であり、溝中を水が流れた痕跡が残る。SD22は大きくカーブして東から南東へ延びる溝で、全長約40mと比較的長く検出できた。礫を多く含む砂質土であることや酸化鉄の集積から、流路であることが明確になった。幅は20～90cmで、広い部分ではオリーブ褐色土と暗灰褐色土の2筋の流路が認められる。SD23はSD22を切って東へ直線的に流れる流路で、他の流路よりやや規模が大きく、礫の混入率も高い。時期：切り合いからSD21→SD22→SD23の順で新しくなるが、いずれも時期の限定はできない。所見：北側の旧境沢（NR10）から水を取り入れた用水路が、つくり替えられながら継続使用された跡であろう。

4　柵　址

SA1　位置：南部南　図版1・35・36、PL29

検出：ⅡA層上面で、暗オリーブ褐色土の落ち込みが明瞭に検出された。SD4・5と切り合い、覆土が酷似することから新旧の判別が難しかったが、本址が溝の壁を切っていると判断できるので本址が新しいと考えた。規模・形状：約20mに渡って十数基のピットがほぼ東西の直線上に並ぶ。東は調査区域外になることを考えると、さらに続く可能性がある。ピットの間隔は140～170cmで、ほぼ等しく配置されている。各々のピットは一辺30～40cmの方形を呈し、深さは10～20cmとやや不定であるが、底面は平坦なものが多い。覆土は単一層であり柱痕跡は認められない。時期：南に隣接するST11と同一方向をもつことから、同時期の5期と判断した。所見：ST11の塀など遮蔽的構造物の基礎部分の可能性が強く、同方向の溝とともに、北側の遺構群との境界でもあったと思われる。

SA2　位置：中部南　図版9・48

検出：ⅡA層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出された。規模・形状：南北方向で約10mの間に5基のピットがほぼ等間隔に並ぶ。ピットは径30cm前後の円形であり、深さは20cm程のものが多いが、いずれからも柱痕跡は検出できなかった。時期：南端のピットが西側のSB96の南壁の位置と並ぶことと方向の一致から、5期に帰属すると判断した。所見：SB96の南東コーナー付近の柱穴を加え、住居址を取り囲むように直角に曲がる構造物の可能性もある。東側の掘立柱建物址群と竪穴住居址群を区画する位置と方向に存在する。

SA3・4　位置：中部南　図版9・47

検出：ⅡA層上面で、暗オリーブ褐色土の落ち込む径30cm程の円形ピットがいくつか検出され、NR6に切られて不明確な部分もあるが、同方向に並ぶ2条の柵址と判断した。規模・形状：SA3は3基のピットが等間隔で直線上に並び、SA4は5基のピットが間隔不定で直線上に並ぶ。覆土は砂質土の単一層であり、柱痕跡が1基で認められたが不明瞭であった。時期：時期の限定は困難であるが、北側の住居址群の存続時期である5期から8期に構築されたものであろう。所見：本址に隣接して同方向にNR6が流れており、北側の集落と自然流路との間に位置することから、水防的な目的の構造物の一部と想定される。

SA5　位置：中部南　図版9・49

検出：ⅡA層上面で、掘立柱建物址とともに検出された。掘立柱建物址に帰属しない落ち込みの中で、ほぼ直線上に並ぶ4基のピットが存在し、柱痕跡が認められることから柵址とした。規模・形状：南北4の

間に、規模や形状の異なるピットが間隔不定で並ぶ。いずれも掘り方の西寄りに柱痕跡をもつ。時期：切り合いなどがみられず、時期の限定はできない。所見：掘り方の形状は掘立柱建物址の柱穴に類似するなど、柵址とするにはやや問題がある。

SA6 位置：中部南 図版9・50

検出：ⅡA層上面で、南北方向に直線的に並ぶ多数のピットを検出し、付近に他の遺構が存在しないことから、1条の柵址と判断した。規模・形状：約13mの間に径20～40cmの円形ピットが不定間隔で並ぶ。北側では2基対で位置するものもあり、建て替えられた可能性を残す。覆土はほとんど単一層であり、柱痕跡が確認できたのは1基だけであった。所見：時期や性格などは明確にならないが、東に隣接する中世のSD50・52が同方向であり、この溝が既に古代にも存在していた可能性のあることから、それと関連する構築物であったとも考えられる。

SA7・8 位置：北部中 図版13・72

検出：ⅡA層上面で検出された。付近はⅡA層の凹地の南向き傾斜面で、SA7は等高線に沿って南西から北東に直線的に並び、SA8はそれと直交する。規模・形状：SA7は全長約30mに渡り、円形で径15～45cmの十数基のピットがほぼ一定間隔に並び、SA8は8mの間に同様の4基のピットが等間隔で位置するが、東側は調査区域外に続いている。両址の交点付近には同規模同形状のピットが散在するが、建て替えなどとの関係は明確にできなかった。各ピットの深さは5～15cmで差異があり、覆土は礫を含む褐色土の単一層で柱痕跡は認められない。時期：土器片がわずかに出土しているが、時期を限定することはできない。所見：付近は遺構の空白域であり、ⅡA層の凹地に存在し、また、北部北地区では古代水田址（SL1）が営まれたのと同じⅠD層が堆積していることから、傾斜面に構築された生産址に関係する遺構の可能性がある。

SA9 位置：北部北 図版15・90

検出：砂利層をⅡB層近くまで掘り下げて、直線上に並ぶ褐色土の落ち込み4基を検出した。規模・形状：いずれも径20cm程の円形を呈し、深さや断面の形状も一定で、等間隔に並ぶ。覆土は礫混じりの砂質土で、柱痕跡は検出できなかった。所見：集落域から離れ、周辺に同一方向を示す遺構もないことから、時期や性格は明らかにならない。

5 墓 址

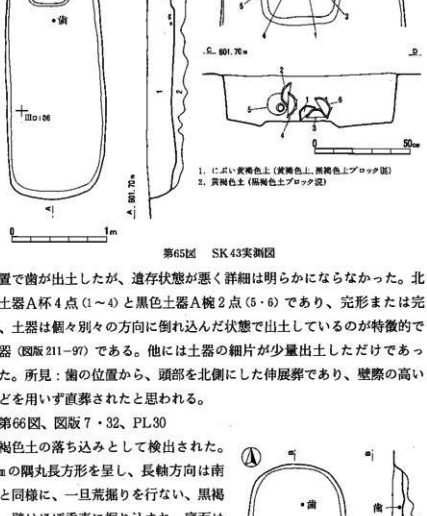
SK22 位置：南部南 図版6・25

検出：住居址SB5の南東隅壁外より遺物が出土したことから、ⅡA層中で精査したところ本址の存在が明らかになった。SB5とわずかに切り合うが、覆土が酷似していることもあり、新旧を明らかにできなかった。規模・形状：長辺140cm短辺50cmの長方形を呈し、長軸は南北軸線にほぼ一致する。底面までの深さが10cmと浅く、壁や土層堆積の状況は明確にならない。底面は平坦軟弱であり、覆土は炭化粒をわずかに含む褐色砂質土である。遺物出土状況：北壁際に上・下歯が残存しており、覆土中にも微細な骨片がわずかに認められる。上歯はほとんど散乱していたが、下歯は10本程が確認できた。北壁に接するように径20cmの円形のわずかな凹みがあり、赤褐色の泥粒土が入っている。頭蓋骨の存在する位置に当たるが、骨片などは認められない。時期：付近出土の灰釉陶器椀が本址に帰属する可能性があるが、明確に時期を限定することはできない。所見：骨や歯の出土から、北に頭を向けて伸展させた土葬墓と判断できる。同様の形状を有する墓址は、近接する場所には検出されなかった。

SK43 位置：南部南 第65図、図版7・31、PL30

検出：ⅡA層上面で、にぶい黄褐色土の落ち込みとして明確に検出できた。規模・形状：長辺234cm・短

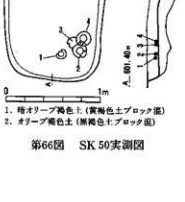
辺103㎝の隅丸長方形を呈し、長軸は南北軸線に一致する。壁はほぼ垂直に掘り込まれており、底面は平坦で軟弱である。土層断面の観察から、荒掘りの後黄褐色土を埋め戻して底面を形成していることと、覆土は黒褐色土と黄褐色土のブロックを含む、人為的に埋められた土であることが判明した。また、北壁際底面が長辺25㎝・短辺15㎝の長方形状に数㎝高くなっており、その上から土器が出土した。遺物出土状況：北壁底面の高まりの南で、底面からわずかに高い位置で歯が出土したが、遺存状態が悪く詳細は明らかにならなかった。北壁底面から出土した土器は、黒色土器A杯4点（1～4）と黒色土器A椀2点（5・6）であり、完形または完形に近い残存状況である。しかし、土器は個々別々の方向に倒れ込んだ状態で出土しているのが特徴的である。4の黒色土器A杯は墨書土器（図版211－97）である。他には土器の細片が少量出土しただけであった。時期：出土土器から8期とした。所見：歯の位置から、頭部を北側にした伸展葬であり、壁際の高い部分は枕のように用いられ、棺などを用いず直葬されたと思われる。



第65図　SK43実測図

SK50　位置：南部南　第66図、図版7・32、PL30

検出：Ⅱ A層上面で、暗オリーブ褐色土の落ち込みとして検出された。規模・形状：長辺182㎝・短辺96㎝の隅丸長方形を呈し、長軸方向は南北軸線に一致する。住居址の構築と同様に、一旦荒掘りを行ない、黒褐色土と黄褐色土を埋め戻している。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、底面は平坦軟弱である。覆土は黄褐色土ブロックを含む単一層で、人為的に埋められたことが分かる。遺物出土状況：頭骨および歯が北壁に近い位置で認められたが、遺存状況は不良で散乱していた。ただし、歯については、上下2列に分かれていることが観察でき、仰臥の状態が想定できる。南東隅から土師器杯A（1・2）・盤B（3）、灰釉陶器椀（4）の4点が出土した。いずれも正位での出土であるが、床面からは数㎝高く位置する。また、覆土中より不明鉄製品が出土しているが、混入の可能性もある。時期：出土土器から14期と判断した。所見：頭部を北にする伸展葬で、時期は異なるがSK43と類似する。



第66図　SK50実測図

SK98　位置：南部北　図版8・41

検出：SB72の床下精査中に、灰褐色土の落ち込みとして検出され、副葬品と思われる遺物の出土と形状から墓址として扱った。規模・形状：長辺152㎝短辺50㎝の長方形を呈し、長軸は東西方向から10度程北に振れる。壁は斜めに掘り込まれ、底面は平坦軟弱である。覆土は黒褐色土・黄褐色土ブロックを含む灰褐色土の単一層である。遺物出土状況：北壁際中央から黒色土器A椀（1）、南東隅から土師器杯が、各1個体づつ床面よりわずかに高い位置で出土した。時期：切り合いと出土土器から、8期と判断した。所

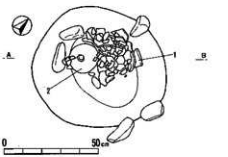
見：骨の出土がないので墓址として確定することはできないが、同形状・同方向の土坑が付近に存在する。

ＳＫ１０３　位置：南部北　図版８・43

検出：ⅡＡ層上面で検出され、規模・形状がSK98に類似することと、覆土が人為的埋没であることを根拠に墓址と判断した。規模・形状：長辺144㎝短辺60㎝の長方形を呈し、長軸方向は東西から北へ10度程振れる。壁は垂直に掘り込まれ、底面は平坦である。深さ65㎝を測り、覆土は黒褐色土・黄褐色土ブロックおよび炭化粒の混在する単一層である。所見：骨や副葬品の出土がなく、墓壙としての形態や、帰属時期などは明確にならない。

ＳＫ３３３　位置：北部中　第67図、図版13・69、PL30

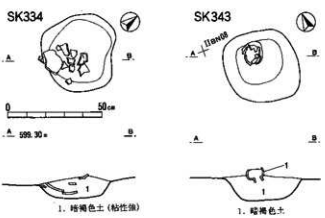
検出：ⅡＡ層相当の礫層中に、土器を伴なう暗褐色土の落ち込みとして検出された。規模・形状：長径72㎝・短径60㎝の楕円形で、鍋底状に落ち込み、底面は丸く壁ははっきりしない。礫を含む単一層の覆土中より、須恵器杯蓋(1)・長頸壺Ａ(2)土師器甕Ｂが出土した。長頸壺は底面より10㎝ほど高い位置に正位で埋納されているが、頸部から上は残存していない。土師器甕は、微細な破片を重ねるように入れてあり、接合しないが同一個体片と認められるものが多い。時期：出土土器から、４期あるいは５期と判断した。所見：長頸壺を蔵骨器とする再葬墓を想定したが、土器内からは骨等の出土は認められない。付近に再葬墓と思われる土坑が３基存在する。



第67図　SK 333実測図

ＳＫ３３４　位置：北部中　第68図、図版13・69

検出：ⅡＡ層相当の礫層中で、土器を伴なう小規模の落ち込みを検出した。規模・形状：径30㎝前後の円形を呈し、底面まで鍋底状に掘り込まれる。覆土は粘性の強い褐色土で、内面を上に向けた土師器甕Ｂの大破片が、底面に沿うように出土した。そのほかに須恵器細片が点在する。時期：土師器甕Ｂの出土から８期以前と思われるが限定はできない。所見：土器の埋納方法や骨の存否等は明確にならないが、SK333と同様の再葬墓を想定した。



第68図　SK 334・343実測図

ＳＫ３４３　位置：北部北

第68図、図版13・72、PL31

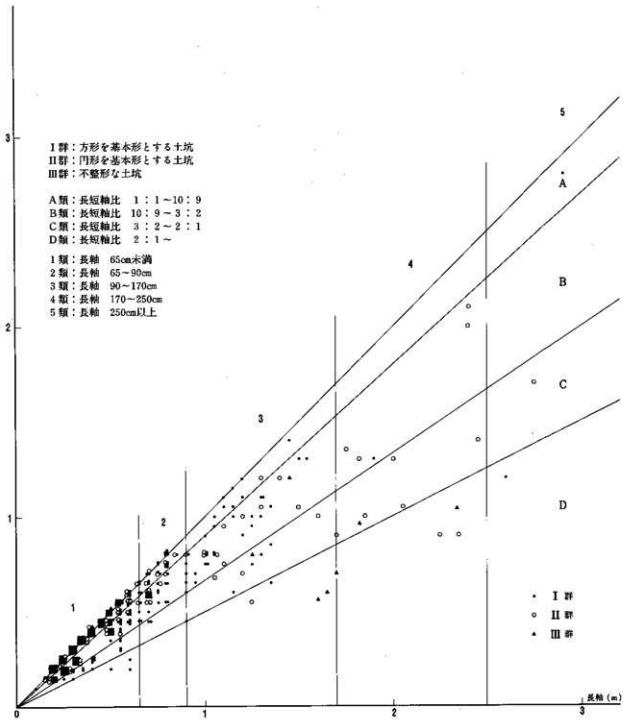
検出：ⅡＡ層相当の礫を掘り込む暗褐色土の落ち込みが明瞭に検出された。規模・形状：径40㎝程の円形を呈し、壁は凸凹が激しく、坑底は鍋底状である。礫をほとんど含まない単一の覆土中に、須恵器短頸壺が逆位で出土した。底面より約10㎝高い位置に埋納されており、底部は破損して土が流入している。短頸壺の中に入っていた土は少量で、骨などは確認できなかった。時期：出土土器から時期を確定することはできない。所見：周辺の土器を埋納した土坑と同様に、再葬墓を想定した。

古代

	A					小計	B					小計	C					小計	D					小計	計
	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		
Ⅰ	21	7	2	1	0	31	22	7	9	4	0	42	0	0	3	4	1	8	0	0	1	2	0	3	84
Ⅱ	202	24	9	0	1	236	139	23	27	1	0	190	14	2	5	0	0	21	5	1	2	0	1	9	456
Ⅲ	4	2	1	1	0	8	5	3	4	3	3	18	6	0	0	1	0	7	0	0	1	0	3	4	37
計	227	33	12	2	1	275	166	33	40	8	3	250	20	2	8	5	1	36	5	1	4	2	4	16	577

基址9基は含まない

第1表　土坑形態分類表（古代）



第69図　古代土坑の長軸と短軸関係図

6 土 坑

本遺跡で検出された全土坑は1461基に及ぶ。その大半は、時期を特定する要因は限られ、古代、中世、近世に大別することも難しいものも存在する。時期の判明した遺構との切り合い関係や、覆土・形状・分布などを比較検討することで、古代に帰属すると判断した土坑は、総数で577基を数える。それを、分類基準に従って類別すると第1表・第69図に示したような構成になる。

(1) Ⅰ群の土坑

Ⅰ群の土坑は総数84基を数えるが、そのほとんどが方形に近い形状(A類・B類)で長辺90㎝以下の小形のもの(1・2種)で占められる。その分布は、南部北地区から中部地区にやや集中する傾向が認められ、掘立柱建物址の存在する周辺に多く位置する。形状からも、一部には掘立柱建物址の柱穴の可能性が高いと思われるものがある。それに対し、長方形を呈するものは規模の大きくなるものが多く、竪穴住居址や掘立柱建物址とともに検出される例が多いが、北部中地区の一角では集中して認められる。形状のうえからは、基址に近似するものが相当数存在すると思われる。

SK233(Ⅰ群A類2種) 位置:中部南 図版9・51

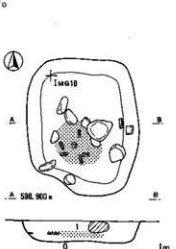
検出:ⅡA層上面でSB108の煙道を挟んで、規模・形状の類似するSK235と対になる位置に検出された。規模・形状:75×70㎝の平行四辺形に近いプランで、深さ55㎝を測る深い土坑である。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は東側が低くなる二段底を呈している。覆土は焼土と炭化物を多量に含み、黄褐色土ブロックの混じる人為的な堆積である。所見:SK235およびSB108の煙道先ピットは、本址と規模や覆土などが類似し、南北に等間隔に並ぶ。掘立柱建物址の柱穴の可能性もあるが、柱痕跡などは認められず、覆土の焼土・炭化物も掘り方の土としては問題を残す。類例:煙道を挟んで対になる例としてSB101とSK165・166がある。Ⅰ群A類1・2種は、掘立柱建物址の周辺に分布し、小ピット群を形成する例が多い。

SK55(Ⅰ群A類4種) 位置:南部南 図版7・33

検出:ⅡA層上面で、オリーブ褐色土の落ち込みが明瞭に検出できた。規模・形状:NR4に北側の一部を切られるため長辺が不明確であるが、およそ200×160㎝の長方形を呈する。底面まで15㎝程しか残存しないが、壁は斜めに立ち上がり、底面には凸凹がみられ硬化した部分はない。西壁際中央に、不整形の浅い掘り込みが認められ、中から焼土・炭化物とともに、火を受けた痕跡の残る黒色土器A杯(1・2)と小型甕D(3・4)などの破片がまとまって出土した。時期:出土土器から7期または8期と判断した。類例:竪穴住居址より一回り小さい方形の土坑は、Ⅰ群A・B類の3・4種のものが、数は多くないものの、住居址と混在する位置にみられる。本址のような掘り込みを伴なう例は少ない。

SK379(Ⅰ群B類3種) 位置:北部中 第70図・図版13・14・74

検出:ⅡA層上面において炭化物を含む褐灰色土の落ち込みとして検出された。規模・形状:140×120㎝の隅丸長方形を呈し、南壁の東側がやや張り出す。深さ約25㎝で、壁は垂直に立ち上がり、底面は軟弱だが平坦である。底面より少し高い位置で、径20～30㎝の礫が十数個出土し、それとともに丸太状の炭化材と黒色土器A杯(1)や軟質須恵器杯A(2)の破片がみられた。時期:出土遺物から8期と判断した。所見:礫と炭化材の出土状態は、竪穴住居址の焼絶状況と類似している。類例:一方の壁を張り出させる土坑は、同形態のSK424をはじめ、Ⅲ群B類5種などが含まれ、付近にいくつか存在する。



第70図 SK379実測図

SK443(Ⅰ群B類4種) 位置:北部中 図版14・78

検出:ⅡA層中で、小豆大から鶏卵大の礫を多量に含む褐灰色土の落ち込

みを検出した。規模・形状：北壁が丸く張り出すが、240×210㎝の隅丸長方形を呈する。底面は硬く締まっているが、中央がやや低い鍋底形であり、壁は斜めに立ち上がる。覆土は黄褐色土ブロックを含む人為的埋没であり、土器（1・2）が出土した。1は墨書土器（図版211－100）である。時期：時期を限定する根拠に乏しいが、出土土器と覆土の状況は近隣する7期のSB212に類似するので、7期前後を考えたい。所見：竪穴住居址と類似するが、規模が小さいこととカマドの欠如や不整形な形状から、土坑の中で扱った。類例：本類型の土坑は、長方形を呈するものと、楕円形に近い隅丸長方形に2大別される。

SK440（Ⅰ群C類4種）　位置：北部中　図版14・78

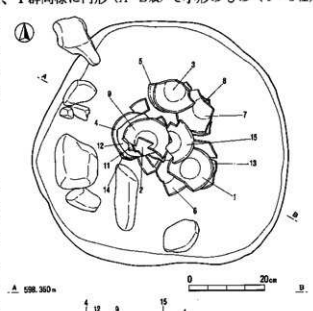
検出：ⅡA層中で、大小の礫の混入する褐灰色土の落ち込みとして、隣接するいくつかの土坑とともに検出された。規模・形状：180×110㎝の楕円形に近い隅丸長方形を呈し、底や壁は凸凹が目立つ。深さ約25㎝で、鶏卵大から人頭大までの礫が多数混在している。中央やや南寄りの底面より少し高い位置に、径30㎝程の円礫が出土し、その上に置かれるように銅鋺（図版215－44）の破片が認められた。時期：時期を限定できないが、周囲の遺構や類似する土坑から8期前後が考えられる。類例：形状は異なるが、最大径180㎝ほどのやや不整形を呈する土坑は同様の性格の遺構の可能性が高い。

SK104（Ⅰ群D類4種）　位置：南部北　図版8・43・44

検出：SB81の床下から焼土が土坑状に巡って認められた掘り込みとして、住居址覆土とは明瞭に判別されて検出された。規模・形状：長辺110㎝・短辺70㎝の長方形を呈し、長軸の方向は南西から北東である。底面まで10㎝程度残存するだけであるが、壁は焼土化して硬く締まっており、底は平坦で焼けた痕跡はほとんど認められない。覆土は焼土と炭化材の多く混じる褐色土の単一層である。時期：SB81に切られるので14期よりも古いが、出土遺物は存在せず、時期を限定することはできない。所見：壁が火を受けていることから、火葬墓も想定されるが、焼けた骨などは確認できなかった。類例：規模・平面形・方向は近接する墓址のSK98・103に類似する。同類型の土坑としてSK100・101・105等があげられるが、これらは墓址とする明確な根拠が認められない。

（2）Ⅱ群の土坑

土坑総数の80％近くを占める円形の土坑（Ⅱ群）は、Ⅰ群同様に円形（A・B類）で小形のもの（1・2種）が圧倒的に多い。特に、北部北地区の掘立柱建物址に近接して密集しており、そのかなりの部分は掘立柱建物址に係る柱穴であろう。その他の地区においても、掘立柱建物址の近くにこの形状の土坑が分布しており、やはり柱穴の可能性のあるものが多い。



第71図　SK435実測図

SK435（Ⅱ群A類2種）　位置：北部北

第71図、図版14・78、PL31

検出：ⅡA層相当の礫を掘り込んだ、土器を多数伴なう褐色土の落ち込みとして検出された。規模・形状：径70㎝前後のほぼ円形のプランであり、底面まで10㎝程度である。礫層を掘り込んでいるため、壁や底は凸凹が目立つ。覆土は、大小の礫を多く混入した黄褐色土ブロック混じりの単一層で、人為的埋没を窺わせる。中央部底面上から、土師器杯A15個体（1～15）が、正位に重ねられて集中出土した。2ないし3個体ずつ重ねて寄せ合わせてあり、燈明

皿として用いられた痕跡をもつものが多い。時期：出土土器から9期と判断した。所見：同一器種・同一法量の土器を埋納した土坑は、南東に位置するⅡ群A類3種のSK450（PL31）がある。時期や埋納された土器の種類も同じで、両土坑とも性格を同じくすると思われる。骨等が認められないことと土器の出土状態や土坑の規模からは、墓址の可能性は低く、収納施設あるいは祭祀に関わる施設を想定したい。類例：Ⅱ群A類2・3種の土坑は北部北地区を中心に存在するが、土器を多数埋納している例はこの2基だけである。

SK598（Ⅱ群A類2種）　位置：北部北　図版15・88

検出：ⅡB層相当の礫層中から、礫の多く混じるオリーブ褐色土の落ち込みとして検出された。規模・形状：径約80cmの円形を呈し、壁はほぼ垂直に掘り込まれており、深さ20cmで平坦な底面に達する。壁と底に沿うように、径1cm程の焼土粒を多量に混入した明黄色土が、数cmの厚さで堆積していた。直接火を受けた痕跡は認められない。焼土層中に土器細片がわずかに入っていた。時期：遺物や切り合いからは、時期を特定できない。所見：Ⅱ群A類の小規模土坑である1・2種は、北部北地区の掘立柱建物址周辺に集中するが、本址と同様、施設や遺物から性格の判明する例はなく、小ピット群を構成するものが多い。

SK602（Ⅱ群B種3類）　位置：北部北　図版15・88

検出：ⅡB層相当の礫層中から、土器を伴なう暗褐色土の落ち込みとして検出された。規模・形状：やや不明確であるが、150×130cm程の楕円形プランであり、鍋底状の底面はかなり凸凹がみられる。覆土は大小の礫を含む砂質土であり、底面より数cm上で須恵器甕C(2)と土師器甕C(1)の破片が出土した。2は同一個体片が、隣接するSK601と接合して完形に近く復元できた。時期：出土土器から、5期前後に帰属すると判断した。所見：遺構間で接合したことや出土状況から、埋納された土器ではなく、破損した土器を投げ込んだと思われる。類例：Ⅱ群B種の小規模土坑もA種のものと同様に、北部北地区に集中して小ピット群を構成する。やや規模の大きい3種では、本址のように遺物の投棄される土坑（SK589）も存在する。

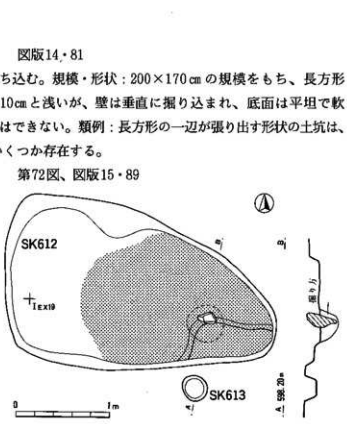
（3）Ⅲ群の土坑

SK478（Ⅲ群B種4類）　位置：北部北　図版14・81

検出：ⅡA層中でにぶい黄褐色土が不整形に落ち込む。規模・形状：200×170cmの規模をもち、長方形の一辺が張り出す形状の土坑である。底面まで10cmと浅いが、壁は垂直に掘り込まれ、底面は平坦で軟らかい。出土遺物はなく、時期を限定することはできない。類例：長方形の一辺が張り出す形状の土坑は、B種5類のSK477など、Ⅰ群の土坑を含めていくつか存在する。

SK612（Ⅲ群D種5類）　位置：北部北　第72図、図版15・89

検出：ⅡA層相当の礫層に、暗赤褐色土が不整形に落ち込む。規模・形状：290×160cmの隅丸三角形を呈し、底面はほぼ平坦で南東隅が数cm高くなる。覆土は焼土粒の混入する砂質土で、深さは10cm程しか残存しない。焼土は東側半分で特に密であり、炭化材を伴なう。東側の底面が高くなる位置に、径30cmを越える角礫が、焼土の多量に入った掘り方に半分埋められて立っている。焼土の量に比較して底面や壁が火を受けた痕跡は少ない。また、南に隣接するSK613の覆土も同様に



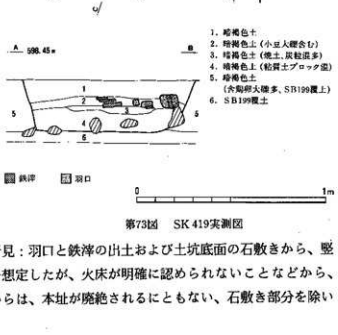
第72図　SK612・613実測図

焼土が多量に入っており、本址と何らかの関係があるものと思われる。覆土内から土器小片が少量出土したほかには遺物は認められない。時期：出土土器等からは時期を限定することはできない。所見：立てられた礫は何らかの施設の一部と考えられ、工房址等が想定される。類例：同様の形状で焼土の多量に入る土坑としてSK619がある。

7　鍛冶址

SK419　位置：北部北　第73図、図版14・76、PL31

検出：SB199の検出時に覆土中より羽口破片と鉄滓が出土したことから、付近を精査したところ、やや不明瞭ではあるが、覆土に掘り込まれた円形の落ち込みが検出された。規模・形状：落ち込みは径90㎝程の円形を呈し、深さ25㎝で平坦な底面に達する。底面は住居址の床面より約10㎝高い位置にある。暗褐色土の埋土の中位に焼土粒と炭化粒を多く混入した間層が存在し、その上に羽口と鉄滓が散在している。間層にみられる焼土は、火床のように直接火を受けた状況を示していない。羽口は間層に接して出土したものが多いが、いずれも破片であり、鉄滓は羽口よりも高いレベルで出土している。間層の下は、底面上に大礫が敷きつめられ、その間に粘質土が認められた。礫は円礫と角礫が混じるが、径15㎝前後のもので揃えられている。隣接するSB198の覆土などを含め、周囲から羽口片や鉄滓が散見されたが、本址との関係は明らかにできなかった。時期：SB199の覆土が完全に埋まりきらない間に構築されていることから、8期あるいはその直後と思われる。所見：羽口と鉄滓の出土および土坑底面の石敷きから、竪穴住居址廃絶後の凹地に設けられた小鍛冶の跡を想定したが、火床が明確に認められないことなどから、鍛冶址と断定することはできない。遺物の状況からは、本址が廃絶されるにともない、石敷き部分を除いて破壊された可能性がある。



第73図　SK419実測図

SK461　位置：北部北　第74図・図版14・81

検出：ⅡA層上面で焼土と炭化材を多量に含む不整形のピットが検出され、西側は調査区域外に位置するため全体は明らかにしえなかった。規模・形状：楕円形に近い不整形を呈すると思われ、短径約180㎝・長径は250㎝を越えそうである。断面は鍋底形を呈し、底面は中央に向かって傾斜している。壁および底面は良く焼けて赤変していた。底面まで15㎝程が残存するだけだが、土層断面は大きく2分層される。上層は炭化材が集中し、下層は砂質土を挟むようにして焼土が堆積していた。下層を中心にかなりの量の鉄滓が出土し、2か所に集中する。上層からは須恵器片と鉄滓が散在的に出土した。壁の赤変をたよりにプランを確定したが、明確にラインの引けない部分が多かった。壁が崩落しているものと思われる。周囲に本址に関係する遺構等は存在しない。時期：時期を限定することはできないが、出土土器からは5期前

後の可能性がある。所見：火を使用した掘り込みの中に鉄滓が多く認められたことで鍛冶址を想定したが、上屋構造を含め明確にできず、羽口などの出土も認められない。

8 水田址

SL1 位置：北部北

第75図、第2表、図版15・84・86、PL29

検出：トレンチでＩＤ層に水田土壌とアゼを確認した。土壌断面は、第1層が斑鉄が沈着する灰色化土層で、ＩＤ層の上部を占める。第2層は鉄の集積層で、ＩＤ層の下部またはⅡＡ層最上部に当たる。第3層はマンガンの集積層で、ⅡＡ層の上部を占める。第1層をＩＤ１層、第2層をＩＤ２層とした。アゼは、やや集積の程度が低く、礫を含むＩＤ２層が台形状に盛り上が

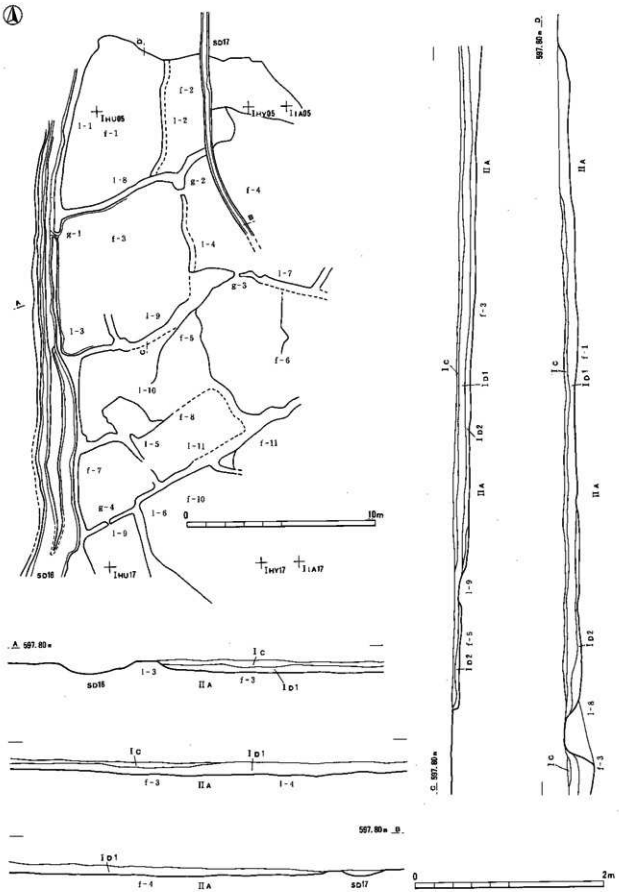
第74図 SK461実測図

層 名	GB数/ g	植 物 名	PO/ GB	PO数/ g	仮 比 重	PO数/ cc	植物乾物量 t/ 10a.cm	地上部乾重 t/ 10a.cm	イネ籾重 t/ 10a
Ｉ Ｃ 下 部	313498	イ ネ ヨ シ タ ケ	0/ 181 0 1	0 0 1732	1.465	0 0 2538	0.000 0.000 0.122	0.000	0.000
Ｉ Ｄ	312703	イ ネ ヨ シ タ ケ	3/ 152 0 0	6172 0 0	1.390	8581 0 0	2.523 0.000 0.000	0.884	7.070
Ⅱ Ａ	301791	イ ネ ヨ シ タ ケ	0/ 144 0 0	0 0 0	1.263	0 0 0	0.000 0.000 0.000	0.000	

第2表 SL1 プラント・オパール結果抄表

り、上底部がＩＣ層・ＩＤ層の境界面より上位に突出する。本遺跡西縁で、ＩＤ層上面より南北に走る2本の帯状プランとその間の溶脱した土を認め、畝畝と推定した。この高さでアゼの存在で水田址認定の必要条件は満たされたが、合わせてプラント・オパール分析を宮崎大学農学部に依頼した。結果を第2表に示す。本址中央の断面のＩＤ層より8,600個／ccと多量のイネのプラント・オパールが検出されたが、上・下位のＩＣ・ⅡＡ層からは検出されず、肉眼観察の結果が支持された。しかし、検出面の8地点から採取した試料からは1,700～2,500／ccと少量のイネのプラント・オパールが検出され、うち5試料からはまったく検出されなかった。この原因について、ＩＣ・Ｄ層の境界面の識別が難解であることに加え、上位層の荷重や浸食に伴なうと思われる境界面の不規則な凸凹が存在し、このために採取地点の層準が微妙に上下したか、またはイネのプラント・オパールの含有量に、面的に疎密があったことが予想される。検出の結果、長短のアゼ11、田面11(13?)、水口4、畝畝1を確認した。それぞれ１－１～11、ｆ－１～11、ｇ－１～4、ｄ－１とした（第75図）。アゼ：総じて、東北東－西南西方向のアゼ（1－8～11）が長く通り、１－９を除く3条のアゼはきわめて直線的に走る。またこれらは走向がN67±7°Ｅの範囲でまとまり、幅も全体に大形の傾向にある。しかし、これに交わるアゼ（1－1～7）は、検出が困難であったこともあるが、短小で走向に統一性がなく、東北東－西南西方向のアゼにずれて交差する。ただ１－２のみは直線的で通りがよく、やや大形である。なお、現水田のアゼの走向はＮ－ＳとＥ－Ｗであり、Ｅ－Ｗ方向が主体的なアゼである。従って、アゼの走向だけからみると、現水田は本址に対して約30°時計回りに回転したと言える。

田面：田面部の主体を構成するＩＤ１層は、淡黄色極細砂の小ブロックを含み、全体に粘性が高く礫をほ


SD17
SD16
IHU05
IHV05
IIA05
IHU17
IHV17
IIA17
0
10m
597.80m
I C
I D1
I D2
II A
f-3
f-4
f-5
f-6
f-7
f-8
f-9
f-10
f-11
f-1
f-2
1-1
1-2
1-3
1-4
1-5
1-6
1-7
1-8
1-9
1-10
1-11
g-1
g-2
g-3
g-4
0
2m

第75図　SL 1実測図

とんど含まい。ｆ－３からｆ－４にかけて最も厚く、南北は薄化・消滅に向かい、本址を巡る地形環境をきわめて調和的である。ｆ－１・９・10ではＩＤ１層直下が礫質のⅡＡ層となっている。一方、ｆ－５は低位にあるにも拘らず、田面部に礫が多く混入し、溶脱の痕跡も見当たらないので、耕作が行なわれなかった可能性が高い。目安として推定標高からみると、東部中央のｆ－４・６・11と、１－２そして１－11東縁部にかけての湾曲するラインの西側にあるｆ－７・９の３段にグルーピングできる。各段間には10±３㎝ほどの落差があり、ちょうどｆ－４辺りを中心に同心円状に上り階段が取り巻くような形態をしている。ところが、現地形の等高線は東西に引き伸ばされた半長楕円形を描いており、主に東－西から東南東－西南西方向に走っている。田面に水を湛えることを主目的とすれば、なるべく等高線に沿うように主体的なアゼを配すべきであろうが、本址では最も低い方向へ斜走させ、東北東－西南西方向をとる。つまり「水がかり」を迅速に行なうことを主目的にしたと想像され、主体的なアゼを東北東－西南西方向に配して幅をもった水みちをつくり、水平を保てる範囲で設置した区画（梯子状区画水田）の集合体とみることができる。したがって微地形に合わせて水の便を優先したために、面積・形状ともに不規則になったと考えられる。

諸施設：ｄ－１は本址西縁にあってほぼ南北方向に走り、北・南端が東・西方へ小さく曲がる。幅20㎝ほどの２本の畝部とその間の溝部（SD16）で構成される。溝部の覆土は溶脱したシルトにしばしば川原砂が挟まれ、縦断面形が北へ傾斜することから、流水があり北へ流れていたと推測される。溝部は南縁で１本のものが南半で２本に分かれ、北半で再び１本に合流する。主体的な分流した部分の溝底は段を持っており、東側が浅く西側が深い。水口は４地点で推定され、いずれもアゼが途切れる部分である。このうちｇ－１は、川原砂がｆ－３内に放射状に広がっていたもので、明かにｄ－１よりの水の流入口である。他の３地点ではこのような状況はみられなかったものの、ｇ－１と同じ形態をしていたもので水口である可能性がある。また、１－５は北から延びる部分が中央で途切れるが、南から延びる部分が同様に途切れるか否かは明確に捉えられなかったため、水口と断定しなかった。水口の可能性のある形態がすべてのアゼで確認されるとは限らない点について、本址の「水がかり」に水口による配水と「田越し」を併用していたか、水口による配水をしていたか、年々移動した水口に関しては検出不能であったかが考えられる。

時期：SD16から土師器甕Ｂが出土し、水田址検出面から須恵器杯Ａ、土師器甕Ｂが出土している。いずれも小片であるため時期の限定はできないが、本址の西側に広がる集落址との関連も合わせて考慮して３期から７期の間には存在していたと捉えられる。

9　自然流路

水の流れた痕跡が認められる溝状の掘り込みのうち、蛇行の激しいもの、流路を何回も変更しているもの、流路の幅が一定せず礫を多量に伴なうものなどを、自然流路として遺構とは分別した。しかし、幅を大きく変えることなく存続していることや、氾濫の結果として最終的に現況を呈していると仮定するならば、この内のいくつかが用水路として管理されていた可能性は高いと考える。また、存続時期の特定も難しいが、現用水堰と一致する例もある。

ＮＲ１　位置：南部南　図版６・７・25・27・28・29

検出：ⅡＡ層上面で検出したが、さらに上面でも部分的に見えており、ＩＤ層より高い面から切り込んでいたものと思われる。切り合うほぼすべての古代の遺構を切る。規模・形状：北西から南東へ大きく蛇行しながら流れており、一時期途中から東に方向を変えていた可能性がある。平均２ｍの幅をもつが、南端では８ｍ近くに広がる。時期：東を流れる現在の用水堰と方向が一致することやすべての遺構を切ることから、中世以降に構築されたものであろうが、東に向けての流れはSB17に切られるので、古代に起

源をもつ可能性もある。

NR2　位置：南部南　図版6・26

検出：ⅡA層上面で砂の入る蛇行した溝を部分的に検出した。全体が判然としないが、SB8に切られる。規模・形状：部分的ではっきりしないが、ほぼ直角に近い蛇行をしながら、凹地を西から東へ流れる。幅は2～3mで、「U」字形の底面まで浅い。時期：SB8に切られることから、6期以前である。

NR3　位置：南部南　図版6・7・27・28・30

検出：ⅡA層上面で検出され、SB9・21・22を切りSB23・NR1に切られる。規模・形状：ゆっくりと蛇行しながら、凹地を西から東へ流れる。幅は2m前後であり、礫が部分的に混じる砂が入っている。時期：切り合いから6期から11期までの間に存在したと判断した。所見：竪穴住居址の間を縫うように流れており、この流れが付近に水を供給していたと想定される。

NR4　位置：南部南　図版7・33・34・35

検出：ⅠD層中で検出された幅の広い流路であり、SK55を切るのをはじめ古代の遺構を大きく削り取っている。規模・形状：幅20m以上深さ2m近い大きな流路で、北西から南東に流れる。かなり大きな礫を伴なっており、流路が何度も変わった状況は認められない。時期：灰釉陶器椀(1)が覆土中から出土している。古代末以降と思われるが、時期を限定できない。所見：規模の大きさと方向から、南を流れる堀川が短期間流れた旧河道であろう。

NR5　位置：南部北　図版8・36・38

検出：ⅡA層上面で部分的に検出され、SB66を切る。規模・形状：幅は15mに及ぶが浅く、方向などは判然としない。時期：土師器甕(1)が出土し、切り合いからは2期以降であるが時期は限定できない。

NR6　位置：南部北・中部南　図版8・9・43・44・45・47・49

検出：ⅡA層上面で検出された、位置を変えながら南西から北東に流れる流路を一括した。SB74を切り、SB89に切られる。規模・形状：幅10mに及ぶ部分から1m程の部分も種々あり、分流も認められる。ゆるやかに曲がりながら南西から北東に向かうが、分流には東向きのものもある。礫を多く伴なう流路から砂っぽい流路まで変化に富む。時期：14期のSB74を切り、北東側の分流が14期のSB89に切られる。SA3・4の関係や14期の住居址に切られている箇所があることから、流路幅のなかで形を変えながら14期以前から存在していたと思われ、古代を通して周辺に水を供給していたのであろう。

NR7　位置：南部北　図版8・9・17・45

検出：ⅡA層上面で検出された東西方向の流路で、SB87・NR6を切る。少なくとも3回以上流路を変えているが、一括した。規模・形状：最大8mを測るが、2m前後の流路がその間を移動している。ほぼ東西方向に直線的に流れる。時期：切り合いから14期よりは新しく、この部分が中世の遺構の空白域になることから、中世には確実に存続したと思われる。

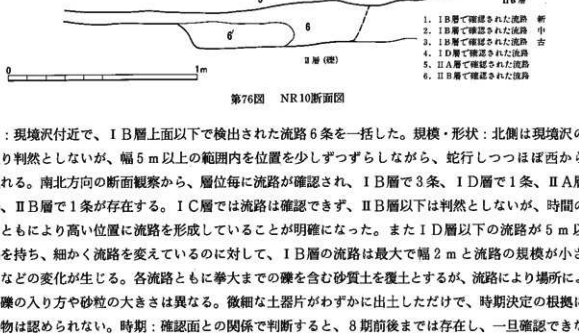
NR8　位置：中部南　図版9・10・52

検出：ⅡA層上面で検出され、SB109・ST44や中世の遺構に切られる。規模・形状：部分的な検出でやや不明確であるが、幅10m近い流路が、北西から南東に向かって流れる。時期：ST44に切られるので、3期以前であり、古い時期の流路であるが上限は特定できない。

NR9　位置：中部北　図版10・55・56

検出：ⅡA層上面で検出され、SB115・ST47・SD14に切られる。規模・形状：部分的な検出にとどまるが、幅8m程の流路が大きく蛇行しながら、南西から北東方向に流れる。時期：切り合いから5期以前であることが判明したが、時期を限定できない。

NR10　位置：北部北　第76図、図版15・90・91



第76図　NR10断面図

検出：現境沢付近で、ⅠB層上面以下で検出された流路6条を一括した。規模・形状：北側は現境沢の下に入り判然としないが、幅5m以上の範囲内を位置を少しずつずらしながら、蛇行しつつほぼ西から東に流れる。南北方向の断面観察から、層位毎に流路が確認され、ⅠB層で3条、ⅠD層で1条、ⅡA層で1条、ⅡB層で1条が存在する。ⅠC層では流路は確認できず、ⅡB層以下は判然としないが、時間の経過とともにより高い位置に流路を形成していることが明確になった。またⅠD層以下の流路が5m以上の幅を持ち、細かく流路を変えているのに対して、ⅠB層の流路は最大で幅2mと流路の規模が小さくなるなどの変化が生じる。各流路ともに拳大までの礫を含む砂質土を覆土とするが、流路により場所によって、礫の入り方や砂粒の大きさは異なる。微細な土器片がわずかに出土しただけで、時期決定の根拠になる遺物は認められない。時期：確認面との関係で判断すると、8期前後までは存在し、一旦確認できなくなった後、中世後半以降規模を小さくして現在の境沢まで存続する。所見：ⅠD層以下の流路に取り入れ口を持つと思われる用水路（SD20～23）が何条も存在することから、古代から周囲の集落や水田に水を供給してきた流れの一つと捉えられる。

第4節　中世の遺構

中世の遺構は、古代に比べるとその分布範囲が限定される。中部南地区から中部北・北部南地区にかけて集中して検出されたほかは、南部南と北部中の2地区にいくつかの遺構が散在する程度である。また、前半の中世1期の遺構は、中世の遺構分布域全体に広がるのに対して、後半の中世2期の遺構は、中部北地区の一角に分布が限定され、密度も稀薄である。検出された遺構の総数は、竪穴住居址27軒（付表3）、掘立柱建物址37棟（付表4）、溝址39条、柵址7条、墓址40基、土坑861基などである。

中世1期でも古い段階では、竪穴住居址と少数の掘立柱建物址が溝址や土坑とともに検出された。その次の段階になると、南北あるいは東西の軸線にほぼ一致する方向の溝址と、それに方向を合わせて掘立柱建物址群などが展開するようになる。さらに中世2期には、墓址を中心とする種々の形態の土坑が存在するという状況を示す。

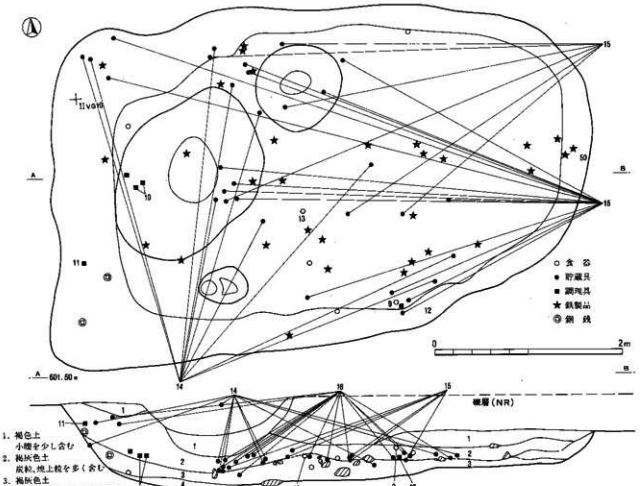
1　竪穴住居址

SB251　位置：南部南　図版93、PL32

検出：ⅡA層上面で、暗オリーブ褐色土の落ち込みが容易に検出できた。規模・形状：385×335cmの長方形を呈する。壁は垂直に掘り込まれ、床面は地山の礫が部分的に露出するが、平坦で貼床などは認めら

れない。中央部の床面上に、径100cmほどの楕円形の範囲に厚さ2mmで炭化物粒の分布がみられる。覆土は、オリーブ褐色土が壁際に堆積し、その上に暗オリーブ褐色土の堆積が認められるので、自然堆積を想定したい。遺物出土状況：北東隅近くの床面上から、捏鉢(70)が出土した。時期：出土土器から中世1期と判断した。

SB252　位置：南部北　第77図、図版17・96、PL32



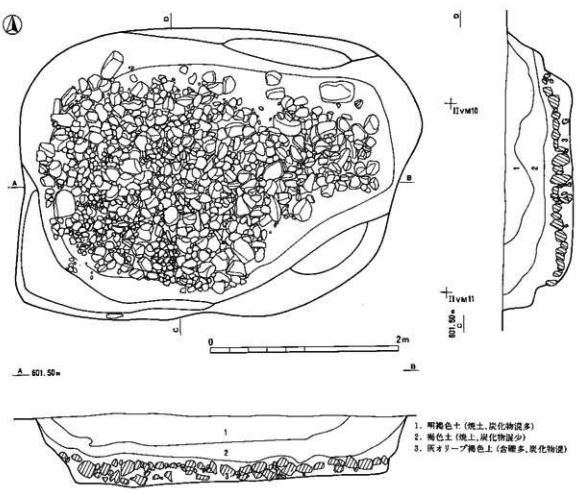
第77図　SB 252遺物出土状況実測図

検出：ⅠD層中で褐色土の大きな落ち込みが認められた。複数の遺構が切り合っていることもあって、検出に手間取った。礫の含有量などの質的な違いでプランや切り合いを確定した。その結果、本址がSK876・881を切り、NR 6を切ることが判明した。規模・形状：510×320cmの規模をもち、東側を丸くつくり出す隅丸長方形のプランを呈する。壁はほぼ垂直に掘り込んでいるが、西壁は斜めに掘り込まれている。床面は西が低いなど平坦ではないが、硬化している。覆土は、大きくは褐灰色土の単一層と捉えられるが、礫の混入度合いと焼土・炭化物・灰の含有量によって、3層に細分される。第2層に焼土・炭化物粒と灰が大量に入っており、第3層から床面上にかけては、人為的に砕かれた角礫が敷詰められたように大量投棄されている。礫の上面である第2層と第3層の境から多くの遺物が出土した。遺物出土状況：古瀬戸系陶器四耳壺1個体(14)と常滑系甕2個体(15・16)、土師器の皿(1～8)も破片ではあるが数多く出土し、白磁椀・青磁碗や中国産緑釉陶器盤(9)の破片も出土した。鉄製品の出土も多く、刀子(図版223－52)、鉄釘4点、鉄滓が出土した。時期：廃絶後時間を置かずに投棄されたと思われる出土土器から、中世1期と判断した。

SB253 位置：南部北 図版17・96、PL33

検出：ID層中で検出されたが、SB254と切り合うことや、上面が自然流路と思われる砂利に覆われていたこともあって検出が難しかった。プランの確認を繰り返して行なった結果、SB254に切られる本址の全体が明らかになった。規模・形状：平面形は基本的には370×250cmの隅丸長方形であるが、壁は段をつくるように斜めに掘り込まれており、床面の形は東が丸く張り出すSB252・254に類似する形状である。床はほぼ平坦で、踏み固められたように硬く締まっている。覆土は褐色土の類似する土が上下2分層され、上層には焼土・炭化物粒が混入しており、西半分に鶏卵大から拳大の礫が投棄されていた。遺物出土状況：上層と下層の間付近から、青磁・青白磁梅瓶(151)の破片、釘・鉄滓、鞴の羽口が出土しただけで量は少ない。青白磁梅瓶はSB265出土の花文をもつ破片と同一個体である。時期：切り合いと出土遺物から、中世1期と判断した。

SB254 位置：南部北 第78図、図版17・96、PL33



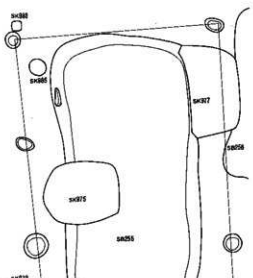
第78図 SB254礫出土状況実測図

検出：ID層中で、上を覆う砂利を取り除いて精査をし、SB253を切る本址が検出された。規模・形状：380×250cmの東側が丸く張り出す隅丸長方形を呈し、深さは75cmである。壁は段をつくるように斜めに掘り込まれる部分が多いが、床面に近づくと垂直に掘られる。床は硬く平坦であるが、貼床などは認められない。覆土は大きく3分層される。上層は焼土を多く含む明褐色土であり、砂質で礫の混入は少ない。中層は焼土と炭化物を少し含む褐色土で、礫はほとんど伴なわない。下層に入ると、中層と同質の褐色土に、礫が敷き詰められたように大量に混入する。人頭大以上の礫が多数入り、その間を埋めるように人為的に砕かれたと思われる角礫が無数に入っている。礫の多数に煤の付着がも認められ、炭化物の存在から

ので火を受けた痕跡と判断した。遺物出土状況：礫中および上、中層から常滑系甕・土師器皿（17・18）・青磁碗（19）、苧引鉄（図版223－53）・棒状鉄製品などの破片が出土した。量は少ないが、SB252と出土状態や出土遺物の種類が似ている。時期：出土土器から中世1期と判断した。

SB255　位置：中部南　第79図、図版17・98・99

検出：ⅠC層で遺構の存在は認められたが、切り合いが激しいこともあってプランを確定できず、ⅡA層上面まで下げて、ようやくプランと切り合いを確定した。検出面での観察から、SK975・977に切られることが判明した。規模・形状：405×185㎝の細長い隅丸長方形を呈し深さ55㎝を測る。南東隅が張り出すが、切り合う別の遺構が存在していた可能性もある。壁は垂直に掘り込まれ、床は平坦である。壁面と床面に酸化鉄の集積が認められ、そのこともあってか床面は硬化している。覆土は灰褐色土ブロックを混入しており、人為的埋没と判断した。付属施設：本址を取り囲むように、17基の小さな土坑が存在し、本址に伴なう柱穴の可能性を追究してみた。柱痕跡は確認できず柱筋や柱間も不揃いであるが、東西の土坑の位置から3×1間の規模の上屋を想定することができる。遺物出土状況：鬱の羽口破片（図版225－22）が覆土中より出土している。時期：覆土出土の捏鉢（21）がSB256と接合することや銭貨の出土、切り合いと検出面を考え合わせ、中世1期と判断した。



第79図　SB 255実測図

SB256　位置：中部南　図版17・98・99

検出：SB255と同様にⅠC層中ではっきりせず、ⅡA層上面まで下げて検出した。多数の遺構と切り合っており、トレンチを入れて断面観察などを行なって、SB90・SK1006～1008を切りSK977・1009に切られることが判明した。規模・形状：320×245㎝の南西隅が張り出す隅丸長方形を呈するもので、深さは約60㎝を測る。壁は斜めに掘り込まれ、床は南西部に向かってやや高くなるがほぼ平坦である。壁および床面には酸化鉄の集積が認められる。覆土は灰褐色土ブロックの入る暗褐色土で、北側の床面上には数十個の礫の投棄がみられる。遺物出土状況：礫とほぼ同じ高さで土師器皿（20）・捏鉢（21）・青磁碗の破片や銭貨「熙寧元寶」、鉄釘2点、鉄滓などが出土した。捏鉢はSB255と接合している。時期：出土遺物と検出面や切り合いから、中世1期と判断した。

SB257　位置：中部南　図版18・102

検出：ⅡA層上面で、にぶい黄褐色土の細長い落ち込みが明瞭に検出された。土質の違いからST44およびNR8を切ることが判明した。規模・形状：755×230㎝の細長い隅丸長方形を呈し、北壁中央が部分的に張り出す。壁は垂直に掘り込まれ、床は平坦であるがやや軟らかく貼床などは認められない。覆土はにぶい黄褐色土であるが、部分的に薄い炭化物混入層が入る。埋没過程は明らかにならない。時期：微細な土器片が少量出土しただけで、出土遺物からは時期を限定できない。形状や覆土の状況から中世の遺構と判断した。

ＳＢ２５８　位置：中部北　図版18・105

検出：ⅡＡ層中で暗褐色土の落ち込みが明瞭に検出された。プラン確認の際に、SK1099・1151に切られることが覆土の違いから判明した。規模・形状：455×240㎝の北側がやや広くなる隅丸長方形を呈する。壁はほぼ垂直であり、床は平坦で硬く締まっている。覆土からは埋没過程を明らかにできない。時期：出土遺物は無く時期の特定は難しいが、覆土と形状から中世に帰属する遺構と判断した。

ＳＢ２５９　位置：中部北　図版18・107

検出：ⅡＡ層中で検出したが、覆土と地山が類似しており、プランの確定はかなり困難であった。SK1180・1187に切られることは、覆土の違いから比較的明瞭に判明した。北壁がSB260と接するが、切り合いは確認できない。規模・形状：355×235㎝の隅丸長方形を呈する。壁は斜めに掘り込まれ、床面は平坦で東側部分は締まって硬い。覆土は炭化物粒と黒褐色土ブロックの混じる単一層であり、人為的埋没ととらえた。遺物出土状況：南壁際中央床面上に、内耳鍋(23)が出土し、接合してほぼ1個体になった。時期：出土土器から中世2期と判断した。

ＳＢ２６０　位置：中部北　図版18・107

検出：SB259ともに検出されたが、北壁は調査の際の削平で確認できなかった。覆土中にSK1186が掘り込まれる。規模・形状：一辺335㎝で対辺は確認できないが、SB259と同規模・同形状と想定される。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、床面は平坦で締まっている。覆土は炭化物粒と黒褐色土ブロックの混じる単一層であり、人為的埋没と思われる。遺物出土状況：床面近くで古瀬戸系陶器天目茶碗(23)・捏鉢・白磁の椀・皿(PL67－26)破片が出土した。時期：南に隣接するSB259と形状や覆土が類似することと出土土器から中世2期と判断した。

ＳＢ２６１　位置：中部北　図版18・105、PL34

検出：ⅡＡ層上面で不明確ながら検出されたが判然とせず、さらに検出面を下げてプランを確定した。東壁でSK1164と切り合い、断面観察などからも新旧関係を明らかにすることはできなかった。規模・形状：425×290㎝のやや不整な隅丸長方形を呈する。壁の立ち上りは明確にならない。床面は平坦ではあるがやや軟弱である。覆土は浅いために明確に捉えられないが、炭化物を含むにぶい黄褐色土である。南側部分では床面に接して径100㎝ほどの範囲で炭化物粒を多量に含む薄い層が確認されたが、床面に焼土等は認められない。遺物出土状況：中央で馬歯が出土し、そこから1ｍ程南で銅鏡の松鶴鏡（図版224－59）が鏡面を表にやや斜めの状態で出土した。さらに、北壁際中央からは鉈が壁に沿うようにして発見された。いずれも床面から10㎝前後高い位置で出土し、同じレベルで常滑系甕と土師器皿が破片で出土した。常滑系甕はSD59と接合している（図示せず）。ほかに不明鉄製品が出土した。時期：出土遺物から中世1期と判断した。

ＳＢ２６２　位置：中部北　図版18・107、PL34

検出：ⅡＡ層上面で、暗褐色土の細長い落ち込みとして検出された。規模・形状：750×270㎝の隅丸長方形を呈す。床はほぼ平坦であり、中央部では酸化鉄の集積もあって硬化している。覆土は炭化物を含む暗褐色土の単一層であり、拳大から人頭大の礫が20個程投棄されていた。壁および床に沿って炭化物を多く含む層が確認できたが、直接火を受けた痕跡はない。諸施設：床面から4基のピットが検出され、本址外側の西壁沿いにも数基の小さな土坑が位置する。やや浅いことや対応する掘り込みが存在しないなどの問題があるが、本址を覆う上屋の柱穴の可能性がある。遺物出土状況：いずれも覆土中であるが、土師器皿(24～29)・捏鉢(30)、不明鉄製品2点が出土した。時期：出土土器から中世1期と判断した。

ＳＢ２６３　位置：中部北　図版18・107

検出：ⅡＡ層中で黄褐色土のプランが明確に検出されたが、北壁は攪乱のため確認できなかった。SK1213

・1214を切ることが、覆土の違いから判明した。規模・形状：一部不明確であるが、500×200㎝程の細長い隅丸長方形を呈し、北側が狭くなる。壁や覆土の状況は明確にならない。床面はほぼ平坦であるが、やや軟弱であり貼床等は認められない。時期：切り合いと形状や周囲の遺構の状況から、中世に帰属することは明確だが、出土遺物はなく時期の限定はできない。

SB264　位置：中部北　図版18・19・107・109

検出：Ⅱ A層上面で褐色土の落ち込みとして検出された。東側半分をSD60に切られ、西側のSB266・SK1279を切ることは、トレンチによる土層断面の観察等で判明した。規模・形状：505×440㎝の隅丸長方形を呈するが、東側がやや狭まる。壁は垂直に掘り込まれ、床面は平坦で硬く締まっており、酸化鉄の集積や貼床らしい黄褐色土が部分的に認められる。覆土は、炭化物や白黄褐色土ブロックの混入度合いで3分層されるが、下層に礫を投棄した人為的埋没ととらえた。遺物出土状況：土師器皿（33～49）の出土量が目立って多いが、いずれも破片で接合するものは少ない。その他、捏鉢（50）、白磁椀・合子（31）、青白磁蓋（32）、青磁碗などや釘が1点出土している。捏鉢はSB265・SD60出土のものと、白磁合子はSK1279出土のものと接合している。時期：切り合いと出土遺物から、中世1期と判断した。

SB265　位置：中部北　図版18・19・107・109

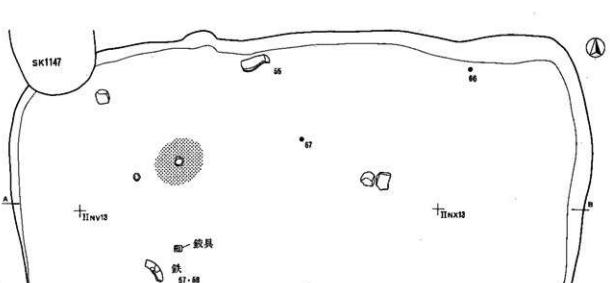
検出：Ⅱ A層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出された。トレンチによる土層断面の観察の結果、SB266を切ることが判明し、東壁をSK1271に切られる。規模・形状：420×255㎝の隅丸長方形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれるが、北壁はやや斜めの掘り込みである。床面は南半部が一段低くなっており、全体に軟弱である。覆土は炭化物と白黄褐色土ブロックが混入し、床面上に拳大の礫の投棄が認められるので、人為的埋没とした。諸施設：西壁際中央から南にかけて、幅50㎝程がテラス状に一段高くなっている。特に硬化している部分などは認めないが、入り口部施設の可能性がある。遺物出土状況：破片ではあるが、花文をもつ青白磁梅瓶（149・150）と渦文が施される梅瓶と2種類が出土し、前者はSB253出土のもの（151）と同一個体で、後者はST100出土（147）と同一個体である。そのほかSB264出土と接合した青白磁蓋（32）や、青磁碗（157）、白磁椀（図版206－11）、土師器皿（51）、捏鉢（50・52・53）なども覆土から出土した。50の捏鉢はSB264・SD60と接合している。時期：切り合いと出土遺物から、中世1期と判断した。

SB266　位置：中部北　図版18・19・109

検出：Ⅱ A層上面で、東西をSB264・265に切られる状態で検出された。北側のSK1279を切ることを含め、切り合いの判断は土層断面の観察に基いた。規模・形状：東西方向の規模は不明であるが、南北330㎝を測り、長方形プランを呈すると思われる。壁は垂直に掘り込まれ、床面は平坦でやや軟弱である。覆土は、炭化物や青灰色土ブロックを含むにぶい黄褐色土の単一層であり、人為的埋没の可能性が高い。遺物出土状況：覆土中に散在して出土しているが、土師器皿（54～62）の破片が多い。ほかに白磁合子（図版206－11）・椀（PL80－172）、不明鉄製品が1点みられる。時期：切り合いと出土遺物から、中世1期と判断した。

SB267　位置：中部北　第80図、図版18・19・108、PL35

検出：Ⅱ A層上面で、褐色土の細長い落ち込みが明瞭に検出された。プラン確定時に、北西隅で切り合うSK1157の存在が明らかになった。覆土が類似しており新旧の判断が難しかったが、土層断面での観察の結果本址が切られることが明確になった。規模・形状：590×285㎝の隅丸長方形を呈する。壁は斜めに掘り込まれ、床面は平坦だが全体に軟弱である。覆土は炭化物を含む褐色土の単一層であり、灰黄褐色粘質土ブロックが混入していることから、人為的埋没と判断した。諸施設：中央やや西寄りの床面が径50㎝程火を受けて焼土化しており、その上に炭化物が多量に分布していた。周囲に礫がいくつか存在するが、焼けた痕跡はなく、施設と思われるものは検出できなかった。カマドや炉等の火処としての施設が取



第80図 SB 267実測図

り除かれた跡であろう。遺物出土状況：北壁際中央の床面上で、壁に寄りかかるように鉄製鞭当（図版223－55）が出土し、南壁際からは大きな板状の鉄製品（同図版57・58）と馬に使用されたらしい鉸具が、やはり床面に接して出土している。さらに、土師器皿（63～65）と捏鉢（66・67）が、破片であるが床面上より出土している。時期：出土遺物から中世1期と判断した。

SB268 位置：中部北 図版19・110

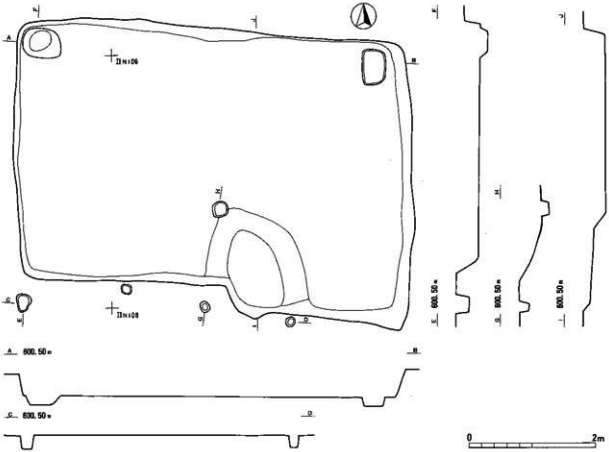
検出：ⅡA層上面でにぶい黄褐色土の落ち込みとして検出したが、東壁は調査区域外のため調査できなかった。覆土の違いから、北側をSB269に切られることが明確になった。規模・形状：長辺が確定できないが、520×345㎝程度の隅丸長方形プランが想定できる。壁は垂直に掘り込まれ、床は平坦で硬く締まっている。覆土は灰色粘質土ブロックの混入する単一層であり、人為的な埋没の可能性が高い。諸施設：中央やや西側で、床面上に炭化物が分布しており、その下の床面が所々焼土化している。SB267同様の火処としての施設が存在した跡と思われる。遺物出土状況：砥石（図版224－31）が覆土より出土した。時期：出土遺物などから時期を限定できないが、SB267に規模・形状や施設が類似するので、中世1期に帰属させたい。

SB269 位置：中部北 図版19・110

検出：ⅡA層上面で検出され、やや不整形であることから複数の遺構の切り合いを想定したが、土層断面の観察などの結果、SB268を切る1軒の竪穴住居址であることが判明した。規模・形状：長方形のプランの南壁が張り出す平面形をもち、最長部分で280×270㎝の規模をもつ。壁は垂直に掘り込まれ、床面は平坦でやや軟らかい。覆土は3分層でき、いずれも灰色粘質土のブロックが混入する。時期：出土遺物などから時期を限定することはできないが、切り合いや覆土から判断すると中世1期以降である。

SB270 位置：中部北 第81図、図版18・19・109

検出：ⅡA層上面で、やや不整形の大きな落ち込みとして検出された。古代のSB118・ST48を切る。規模・形状：南壁東半分が60㎝程張り出すが、基本的には615×380㎝の規模をもつ隅丸長方形のプランで



第81図　SB270実測図

ある。壁はほぼ垂直に掘られ、床面は平坦であるが堅緻な部分は認められない。褐灰色土に暗褐色土ブロックの混じる覆土は、単一層でもあり人為的埋没と判断した。諸施設：南壁際中央部分が床面より一段壇状に高く、踏み固められた痕跡などは認められないが、入り口部の施設が想定される。また、北西・北東両コーナーと中央南寄りにピット状の落ち込みが検出され、南壁外にも小さな土坑がいくつか存在する。柱配置としては対応せず、掘り込みが浅いなどの問題もあるが、本址に伴なう柱穴の可能性が高い。遺物出土状況：いずれも覆土中からの出土で破片であるが、古瀬戸系陶器四耳壺、捏鉢、山茶碗、常滑系甕、白磁椀、青磁碗など多種類の土器・陶磁器がみられる。床面近くから銭貨が出土している。時期：出土遺物から中世1期と判断した。

SB271　位置：中部北　図版19・111

検出：ⅡA層上面で暗褐色土の落ち込みとして検出されたが、東側をSD60に切られ西側は調査区域外に出るため、明確にならない部分が多い。規模・形状：ほぼ垂直に掘り込まれる壁と、やや凸凹があり軟弱な床面が部分的に明らかになっただけである。時期：SD60に切られることから、中世1期以前であり、覆土から中世に帰属すると考えた。出土遺物はなく明確にできない。

SB272　位置：中部北　図版19・112、PL35

検出：ⅡA層上面で、にぶい黄褐色土の落ち込みが明瞭に検出できた。規模・形状：480×295cmの隅丸長方形を呈する。壁は垂直に掘り込まれ、床面は平坦で硬い部分は認められない。覆土は炭化物や灰色土ブロックを含んでおり、床面近くに拳大の礫の投棄がみられる。礫は砕かれた角礫が多く、東側に密集している。遺物出土状況：礫に混じるように、古瀬戸系陶器平碗(68)と内耳鍋(69)の破片が出土した。時期：出土遺物から判断して、中世2期とした。

ＳＢ２７３　位置：中部北　図版19・112

検出：ⅡＡ層上面で検出を進めたが、付近は遺構の密集する区域で、相互の切り合いの確認が困難であったが、検出面を下げながらプランと切り合いを確定した。東側で土坑５基が本址と切り合うが、覆土の違いからいずれも本址を切ることが判明した。規模・形状：一部不明確なところがあるが、430×375㎝の隅丸長方形を呈する。床面は平坦で、貼床や堅緻な部分は認められない。灰色土ブロックの混入するにぶい黄褐色土の覆土には、焼土と炭化物が少量混じる。遺物出土状況：遺物はほとんどみられないが、SK1336と接合する常滑系甕（図示せず）の破片が出土した。時期：形状などから、当初は古代に帰属すると考えたが、出土遺物には中世のものがあり、中世と判断したが、切り合いが激しいこともあり、確実な時期の特定はできない。

ＳＢ２７４　位置：中部北　図版19・112

検出：ⅡＡ層上面で灰褐色土の落ち込みとして検出された。本址も切り合いが激しいが、新旧は覆土の違いから比較的容易に判別できた。SB138を切り、SK1420～1424・1426に切られる。規模・形状：切り合いのため判然としないが、425×340㎝程度の隅丸長方形を呈する。壁は緩やかに立ち上がり、地山の砂礫をそのまま使用した平坦な床である。覆土は暗褐色土ブロックの混入度合いなどによって分層できるが、埋没過程は明確にならない。北壁際の床面上に炭化物の集中する範囲が認められた。時期：時期を限定できる遺物の出土などはないが、形状と覆土から中世に帰属すると判断した。

ＳＢ２７５　位置：中部北　図版19・114・116

検出：ⅡＡ層中で灰褐色土の落ち込みとして検出された。SK1510・1512と切り合い、トレンチによる土層断面の観察によって本址が切られていることが判明した。規模・形状：切り合いで不明確であるが、420×400㎝程度のやや不整形な隅丸方形を呈している。壁は斜めに掘り込まれており、地山の砂礫を平らにしてそのまま床として使用している。覆土は焼土と炭化物を含む単一層で、鶏卵大の礫が多量には入っている。時期：形状などから中世に帰属すると判断したが、時期の限定はできない。

ＳＢ２７６　位置：中部北　図版19・114・116

検出：ⅡＡ層上面で暗褐色土の落ち込みが明瞭に検出された。覆土をSK1512・1516が掘り込むことが、検出面での観察と覆土の違いで判明した。規模・形状：340×220㎝の隅丸長方形を呈する。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、床は地山の砂礫をそのまま使用しており、北東隅に一段高い部分がある。覆土は壁際に褐色土が堆積した上に暗褐色土が堆積しており、自然堆積と思われる。遺物出土状況：内耳鍋片など土器の細片が少量覆土中より出土しただけである。時期：出土遺物から中世２期と判断した。

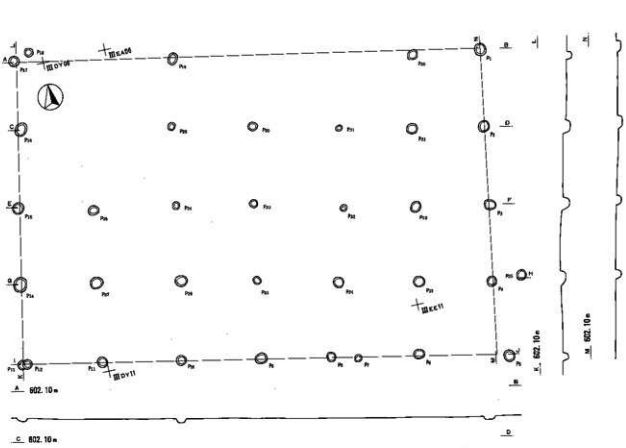
ＳＢ２７７　位置：中部北　図版19・116

検出：ⅡＡ層中で検出されたが、調査の進行上２度に分けて精査がなされたこともあって、不明確な部分が生じた。SK1543を切ることが断面観察から明確になった。規模・形状：310×300㎝程度の隅丸方形プランが想定される。壁はほぼ垂直に掘り込まれ、床面は平坦で硬い部分は認められない。暗褐色土ブロックを含む褐灰色土が覆土である。時期：形状と覆土から中世に帰属すると判断したが、銭貨１枚、不明鉄製品１点が出土しただけで、遺物などから時期の限定はできない。

２　掘立柱建物址

ＳＴ８１　位置：南部南　第82図、図版93

検出：ⅡＡ層中で、褐灰色土の落ち込む柱穴が比較的容易に検出できたが、灰色系の覆土をもつ竪穴住居址SB28～33にかかる柱穴は困難を要した。しかし、いずれの竪穴住居址も本址に切られていることが、



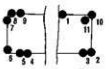
第82図　ST 81実測図

検出面での観察の結果明らかになった。大規模な掘立柱建物址の割り合いに柱穴が小さいことや、付近に中世の遺構が存在しないことから、建物址としての適否を検討したが、整然とした柱配置などから6×4間の南北棟を想定した。柱穴：内側の柱のなかには直径20cmほどのものもあるが、径30㎝程度の円形の柱穴が多い。掘り方の深さはほぼ一定であるが、柱痕跡は認められない。柱間の間隔はほぼ等間隔であり、柱筋は比較的良く通っている。西側で柱穴の確認できない場所があるが、その位置には柱穴が構築されなかったと考えたい。時期：切り合うすべての竪穴住居址より新しいこと、また形状や柱穴の規模から、中世に帰属すると思われるが、細かな時期決定はできない。

ＳＴ８２　　位置：南部北　　図版17・95

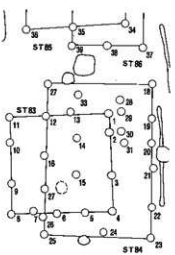
検出：ＩＤ層上面で、規模の小さい柱穴が比較的明瞭に検出できた。中央をSD48が横切るため不明確な部分もあるが、ほとんどの柱穴に柱痕跡が認められるので、２×１間の掘立柱建物址と判断した。柱穴が２基対になるものが多いので、建て替えられた可能性もある。柱穴：規模と形状は類似するが、深さは15～30cmとやや不揃いである。検出できた柱痕跡は、径10㎝前後の円柱であり、柱の木口を尖らすものと平らなものの２種があることが観察できた。また、柱が掘り方の底に接して埋められるものと、さらに

深く突き立てられるように埋められるものとがある。遺物出土状況：P２の掘り方より青磁碗(71)の破片が出土した。時期：SD48に切られることや出土遺物から、中世１期と判断した。



ＳＴ８３　位置：中部南　図版18・104

検出：ⅡＡ層上面で多数の小ピットが検出されたが、発掘調査中には掘立柱建物址として捉えることができなかった。後の検討によって、ST83からST86までの４棟の掘立柱建物址を想定した。本址は４×３間あるいは３×３間の建物址と考えたが、内側の柱穴が明確にならない。ST84と重なるが、直接の切り合いは認められない。土坑ではSK1023を切っている。柱穴：規模の小さな円形の掘り方をもつが、柱痕跡は検出できなかった。南側の梁間はＰ４からＰ８まで３間をほぼ等間隔に配するのに対して、北側は２間で柱間隔の不揃いが目立つ。東西の桁行も間隔は不定であるが、柱筋はいずれも良く通っている。内側の柱穴は、対応できるものがP14からP17に限られるが、検出できなかった柱穴の存在も含めて、総柱建物址と考えたい。時期：ST84と同時存在しないことは明らかで、軸線の方向やほかの掘立柱建物址の配置から、ST84に先行すると思われ、中世１期と判断した。



ＳＴ８４　位置：中部南　図版18・104

検出：ST83と同じくⅡＡ層上面で検出され、検出できない柱穴もあるが、５×３間の南北棟を想定した。ST83と重なり、大形の土坑SK1025を切っている。SK1024は位置的には本址に伴なう可能性があるが、切り合いから古い時期のものと判断した。柱穴：ST83よりやや大きめで円形を呈するものが多い。東西の桁行は、柱間寸法は不揃いであるが、ほぼ対応する位置に５間分の柱穴が配されている。対する梁方向の柱穴は、P24が可能性を指摘できるのみで明確にならない。しかし、P28～32とP33・14・15の２基の柱穴列が認められるので、梁行３間の総柱建物と想定した。時期：取り囲むSD54やST86・87と軸線の方向を合わせ、軒を並べる位置に存在するので、中世１期末から２期初頭に同時存在したと考える。重複するST83の建て替えによって、本址が構築されたのであろう。

ＳＴ８５　位置：中部南　図版18・104

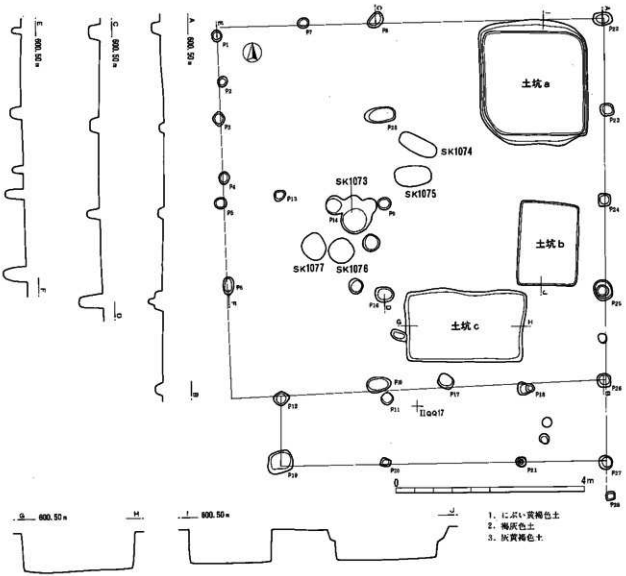
検出：ST83・84の北側で、同様にⅡＡ層上面で検出された。北側が道路部分で調査不能であったため、部分的な検出にとどまった。ST86と重複するが、直接切り合う柱穴は認められない。柱穴：同じ規模と形状の柱穴が３基、等間隔に並んでおり、南端の梁方向の柱穴列と考えた。したがって、梁行２間の南北棟が、ここから北に存在したことになる。時期：南に位置するST83と軸線の方向を合わせ、さらに軒も並べているので、両者は同時存在した可能性が高い。中世１期に帰属する。

ＳＴ８６　位置：中部南　図版18・104

検出：ST85と重複して、同じくⅡＡ層上面で検出された。ST85よりも若干南に寄るが、北側のかなりの部分は道路の下で調査できなかった。柱穴：ST85よりも大きめの円形の柱穴が、ST85同様に３基が等間隔に並んでいる。南側の梁間を構成する柱穴と考えられ、ST85に帰属するP35は本址の西側の桁を支える柱として使われた可能性もある。時期：南側のST84と軸線や軒を合わせているので、中世１期末から２期初頭に同時存在したと考えたい。ST83の建て替えがST84とすると、ST85の建て替えによって本址が構築されたことになる。

ＳＴ８７　位置：中部南　第83図、図版18・104

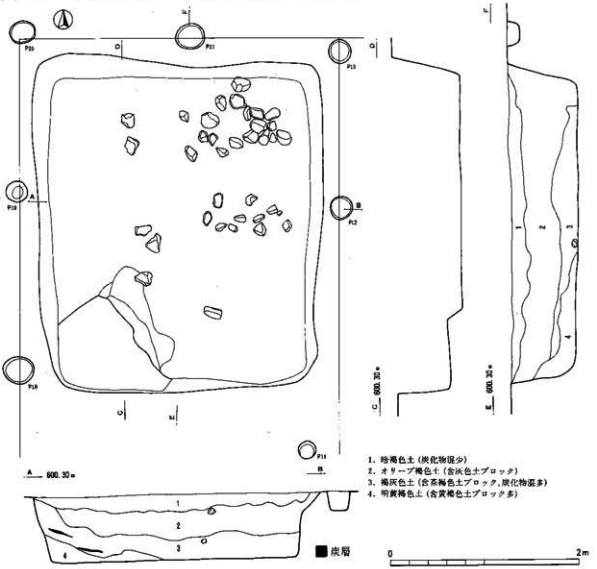
検出：ⅡＡ層上面で褐灰色土の落ち込む長方形の大形土坑と、それを取り囲むように整然と配された小ピッ



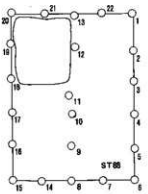
第83図　ST 87実測図

トを検出した。3基の土坑をともなう5×4間の南北棟、あるいは4×4間の身舎の南に1間分の庇あるいは下屋が付属すると想定した。柱穴：全体に小さな円形の柱穴が、等間隔に配されており柱筋も比較的良く通っている。深さは個々の柱穴でかなり不揃いである。南西隅の柱穴はやや内側に位置し、北端のP8とP22の間の柱は、土坑の存在と関係するのか、穿たれていない。また、P8とP20の間に棟木を支える位置で、柱穴が1間置きに検出されたほかは、内側の柱は、P13・14など限られたものだけである。東側の桁方向の延長線上にP28・29、北側梁方向の延長線上にはP30・31のピットが存在するが、本址に帰属するかを含めてその内容は明確にできなかった。付属施設：3基の土坑は、ともに柱穴の内側に函形に掘り込まれており、建物の方向に軸方向を合わせている。平面形と規模はまちまちであるが、深さは70～80cmでほぼ同じであり、底は平坦で軟弱である。埋土は基本的にはブロックを含む単一層で、機能をうかがわせる構造物や遺物は認められない。遺物出土状況：土坑cから古瀬戸系陶器天目茶碗（72）と内耳鍋の破片が出土したが、本址に伴なうものかはっきりしない。時期：西側のST84とは軸線を合わせて軒を連ねるように位置しており、本址を取り囲むSD54とも方向が一致するので、これらと同一時期と思われる。土坑からの出土遺物と内側の柱が間引かれている状況などから、中世1期でも新しく、2期にかかる可能性もあると判断した。

ST88　位置：中部北　第84図、図版18・106、PL36



第84図　ST88付属土坑実測図



検出：ⅡA層上面で比較的明瞭に検出することができたが、土坑周囲の柱穴の中には検出し難いものもあった。SB114・SK1111・1112と切り合うが、いずれも本址が切っていることが検出面での観察で明らかになった。柱穴：ほぼ同じ規模をもつ円形の柱穴が、柱間を等間隔にして配されており、柱筋も通っている。棟木を支える位置に、P8～P13がほぼ1間毎に検出された。P11は土坑との関係からか南に寄っている。柱痕跡は検出できなかった。掘り方の深さは、かなり異なるが、桁方向では対応する柱穴の深さがほぼ等しくなる傾向がある。また、四隅および棟木を支える位置の柱穴は深く、その間の柱穴は浅く掘られている。付属施設：北西部に位置する長方形の土坑は、2×2間の柱穴の内側にきちんと函形に掘り込まれている。北壁はP21を意識して、中央部が内側に張り出す。深さは70cmほどで、底面は平坦であるがあまり締まった感じはない。南西隅に10～15cm高い部分があり、入り口部施設などが想定される。北東部を中心に、底面からやや浮いた状態で拳大の礫が投棄されている。遺物出土状況：土坑と柱穴から、捏鉢(74)・山茶碗(73)・常滑系甕・内耳鍋・白磁椀（図版206-6）など、細片ではあるが比較的多くの出土がした。時期：柱配置や出土遺物から、ST87との共通性が指摘でき、SD60と軸方向が一致することから、区画溝およ

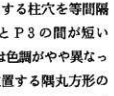
びこれに軸を合わせる建物と同時存在していたと思われる。中世1期と判断したが、ST87に類似することから、2期初頭の可能性もある。

ST89　位置：中部北　図版18・106

検出：ⅡA層上面で、灰黄褐色土の落ち込む柱穴が比較的明瞭に検出できた。東側のSK1119を伴なう建物址の可能性も考えて付近を精査したが、相当する柱穴は検出できず、2×1間の南北棟とした。柱穴：規模と形状の類似する柱穴が、柱間間隔をほぼ等間隔にして配置され、柱筋も通る。掘り方の深さは30㎝前後でほぼ一定であるが、柱痕跡は検出されなかった。時期：西に位置するST88と軸線の方向が一致することから、溝（SD54）に囲まれた建物群と同時期の中世1期あるいは2期初頭と考える。

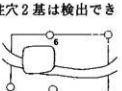
ST90　位置：中部北　図版18・106、PL36

検出：ⅡA層上面で検出され、にぶい黄褐色土が落ち込む柱穴と、その一角に位置する同様の覆土をもつ土坑で構成される、2×2間の規模の掘立柱建物址である。柱穴：形状や深さを同じくする柱穴を等間隔に配しており、ほぼ柱筋も通る。P1・7に接するように浅い小ピットが存在し、P2とP3の間が短いが、これらは補助的な柱穴や入り口部施設の可能性がある。掘り方の土はST88・89とは色調がやや異なっており、単一層であるが柱痕跡は検出できなかった。付属施設：建物址の北東部分に位置する隅丸方形の土坑がある。ほぼ垂直の壁で約45㎝の深さをもち、底部は平坦であるが軟弱である。埋土は色調で上下2層に分けることができ、水平に堆積している。遺物出土状況：土坑より須恵器の細片が少量出土したが、混入と思われる。時期：西に隣接するST88・89とは軸線の方向や掘り方の土が異なるので、時期を別にする遺構と思われる。軸線の方向は、南に位置するST83などと一致するので、中世1期と判断した。



ST91　位置：中部北　図版18・107

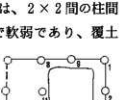
検出：ⅡA層上面で方形の土坑が検出され、ⅡA層を平面的に下げていくなかで柱穴が検出されたので、当初は別の遺構と考えていたが、後の検討により土坑を伴なう3×2間の掘立柱建物址を想定した。土坑がST93を取り囲む溝（SD64）を切ることは、検出面での観察で明瞭に判断できた。柱穴：周囲は遺構の密集する場所であり、検出できない柱穴がいくつか存在した。棟木を支える位置の柱穴P6～9はすべて検出でき、土坑の位置との関係からか、北側の柱間がやや広いものの、ほぼ等間隔に位置し柱筋は良く通る。その両側に桁方向にP1・2・3・5が対応する位置で検出され、西側ではその中間にP4が存在する。南側の梁方向の柱穴では、P9が南に張り出す。北側で隅を支える位置にあたる柱穴2基は検出できなかった。付属施設：北西部に、函形に掘り込んだ、一辺1.5mほどの長方形の土坑が位置する。地山の礫層まで掘り込んでおり、深さ約20㎝で礫の露出した中央部のやや高い底面が検出できた。掘り方の土は青灰色土ブロックを含む単一層である。時期：切り合いからST93よりは確実に新しい。軸線の方向はST88・92と同一であり、この2棟とほぼ軒を並べる位置にある。また、溝（SD54）に囲まれた建物址群（ST84・85）とも軸方向を揃えていることから、同時期の2期初頭の可能性を含む中世1期と考える。



ST92　位置：中部北　図版18・19・107・109

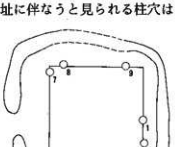
検出：ⅡA層上面で灰黄褐色土の落ち込む長方形の土坑と、それを取り囲んで整然と並ぶ柱穴を検出し、3×3間の南北棟と想定した。本址の土坑と柱穴が、ST93を取り囲む溝（SD64）を切っている。柱穴：北西部の柱穴2基が、ST93の溝と切り合うため明確にならないが、同規模の柱穴が整然と配列されており、柱筋も通っている。西側の柱穴が浅いなど、掘り方の深さは15～40㎝と不揃いであり、柱痕跡は検出できなかった。桁方向の延長線上北側に、柱穴と同様の落ち込みが位置しており、補助的な柱穴あるいは何

らかの施設とも考えられる。付属施設：北西部分に函型に掘り込まれた長方形の土坑は、2×2間の柱間に合わせて構築されている。壁は垂直に掘られており深さ60㎝を測る。底面は平坦で軟弱であり、覆土は分層できないがレンズ状の堆積が観察できた。遺物出土状況：土坑壁際の底からやや高い部分で銭貨7枚（図版224－60～64）がまとまって出土し、捏鉢と青磁碗のほか、鉄釘2点（図版223－52）・環状鉄製品（同図版56）、不明鉄製品が各1点出土した。時期：軸線の方向と建物の配置からST91などと同時期と思われ、出土遺物も考え合わせて中世1期と判断した。



ST93　位置：中部北　図版18・19・107・109

検出：Ⅱ A層中での検出作業で、10×7.5ｍほどの長方形に巡る溝（SD64）が検出され、その内側の精査も行なったが、明確に遺構を捉えることはできなかった。後に各遺構を整理していくなかで、溝に囲まれた掘立柱建物址の存在が明らかになった。遺構が密集して切り合うこともあり、検出できない柱穴も多いが、ほぼ溝の内側いっぱいに溝と方向を合わせて構築されている。柱穴：本址に伴なうと見られる柱穴は8基で、柱の配置など不明確な部分が残るが、かなり柱間の長い3×2間程度の南北棟が想定される。SK1258を土坑として伴なう可能性があり、西側の溝のとぎれる位置にある2対の土坑4基（SK1249～1252）は付属する施設とも思われる。付属施設：取り囲む溝は、幅60～100㎝深さ20～50㎝の規模であり、西側中央は途切れ、出入口部分と想定される。溝の断面は「U」字形を呈し、底面に酸化鉄の沈殿は認められない。遺物出土状況：取り囲むSD64から、捏鉢（90・91）・常滑系甕・山茶碗（88・89）・土師器Ⅲ（87）などが出土した。時期：ST91・92をはじめ切り合う遺構のすべてに切られていることから、これらよりも古い時期の遺構であり、SD64出土遺物も考え合わせて、中世1期でもやや古い時期と判断した。



ST94　位置：中部北　図版18・19・104

検出：Ⅱ A層上面で検出され、当初柵址と考えたが、規模と柱配置の酷似するST97との比較で、4×1間の掘立柱建物址を想定した。柱穴：桁方向の中柱がほとんど確認できないので、柱配置などを明確にできないが、検出できた柱穴は整然と配されており、規模や形状・深さは類似する。時期：明確にならないが、軸方向と本址の位置やST97との共通性から、溝（SD60）の東に配置された建物址群（ST91・92など）と同時期の中世1期と考えたい。

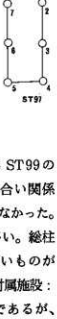
ST95　位置：中部北　図版18・19・109

検出：Ⅱ A層上面で灰色土の落ち込む柱穴が検出された。梁行の間隔の広い3×1間の東西棟である。柱穴：規模と形状の類似した柱穴が整然と並んでおり、柱間は等間隔で柱筋も良く通る。梁方向の中柱は検出できなかった。掘り方の深さは30㎝前後で良く揃っているが、柱痕跡は確認できなかった。P8を北西に延長した位置に、柱穴と同様の落ち込みが検出でき、補助柱あるいは付属施設の一部と考える。時期：軸方向はST91・92と同一であるが、柱穴の土はやや異なる。明確にできないが、中世1期に周囲の建物址と同時存在したと考える。

ST96　位置：中部北　図版19・110

検出：Ⅱ A層上面で、2×2間分の柱穴が、比較的明瞭に検出できた。柱穴：梁方向の中央の柱（P4・8）はやや北に寄り、柱穴の規模も小さいが、他の柱穴は同じ規模と形状であり、柱間もほぼ等間隔である。深さは20㎝程度で大きな違いはなく、柱痕跡は確認でき

ない。時期：ST90・98とほとんど同様の軸線の方向であることから、これらと同時期に存在した可能性が高い。中世1期と判断した。

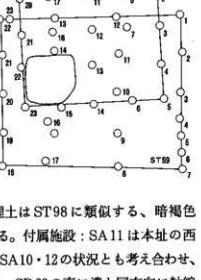


ST97　位置：中部北　図版19・110

検出：ⅡA層上面で検出され、初めは2×1間の建物址と考えたが、ST94と比較検討するなかで4×1間の細長い南北棟を想定した。ST94と規模や形状が酷似する。柱穴：東側の桁方向P1とP2の間の柱穴が1基確認できないが、同規模・同形状の柱穴を構築して、柱間は等間隔に配置してあり、桁方向の柱筋は良く通る。柱痕跡は検出できなかったが、P7が深さ10㎝足らずと浅いほかは20㎝前後でほぼ一定に掘られている。時期：明確に時期を限定できないが、ST91・92・94などと軸線をほぼ同じくすることから、中世1期と考える。

ST98　位置：中部北　図版19・111

検出：ⅡA層上面で、整然と並ぶ柱穴群と、柱穴に囲まれた大形の土坑が検出された。重複するST99の柱穴との判別が難しかったが、土坑を伴なう4×4間の総柱の建物址を考えた。ST99との切り合い関係は、柱穴と土坑との切り合う部分が攪乱のため明確にならず、切り合いからの新旧の判断はできなかった。柱穴：柱穴の大きさはバラツキがみられ、柱間の間隔もやや不定だが、柱筋は良く通るものが多い。総柱ではあるが、P6とP7の間には柱穴が存在しなかった可能性がある。掘り方の深さは中柱に浅いものがみられる。埋土は黄褐色土ブロックを含む灰色土で単一層であり、柱痕跡は検出できなかった。付属施設：南西隅に、柱穴の内側に合わせて、土坑が掘り込まれている。攪乱のため、形状が一部不明確であるが、函形に掘り込まれた方形に近い平面形と思われる。深さ約60㎝を測り、底面は平坦でやや軟弱である。底に置かれるように平石が検出され、位置から礎石とも考えられる。また、西側のSA10・12は本址に関わる施設であろう。時期：軸線の方向の一致や位置関係から、ST100は同時期の建物と考えたい。出土遺物などから時期を明確にできないが、ST99とは新旧がはっきりしないものの建て替えの関係にあると思われ、中世1期と判断した。



ST99　位置：中部北　図版19・109・111

検出：ST98同様ⅡA層上面で検出された、4×3間あるいは3×3間の東西棟である。柱穴：柱穴の規模・形状はやや違いがあり、深さは20～40㎝と一定しない。柱間は梁行がかなり長いが、桁・梁それぞれはほぼ等間隔に配置されており、柱筋はよく通る。南側の中柱は、P8とP18の間の柱が1基抜けているか、P17の位置にずれていると思われる。P4・6・23は、柱間にある補助柱と思われる。掘り方内の埋土はST98に類似する、暗褐色土ブロック混じりの灰色土で、柱痕跡らしき部分が認められるものもある。付属施設：SA11は本址の西側部分の柱穴とも考えられるが、柱穴の位置や大きさ、一緒に存在するSA10・12の状況とも考え合わせ、本址と直接係わる何らかの施設と捉えた。時期：ST91・92および本址は、SD60の東に溝と同方向に軸線を合わせ、軒を並べるように位置しており、一定の規格のもとに建てられた建物址群である。したがって、これと軸方向の合致する建物を含め、建物群を取り囲む同じ軸方向の溝などは同時期と考える。中世1期に帰属すると判断した。

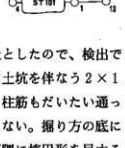
ST100　位置：中部北　図版19・110・111

検出：ⅡA層中で、長方形の大きな土坑が検出され、同様の形状の土坑が建物址に伴なう例が多いのでその可能性を探ったが、付近は梓川系と鎖川系の堆積の接触域にあたり、柱穴の検出などはかなり難しかった。よって、検出できない柱穴も多く、規模や柱配置も明確にならないが、土坑を取り囲む柱穴を組み合

わせ、掘立柱建物址を想定した。柱穴：西側の3基の柱穴P1～3は、同じ規模と形状をもって、直線上に等間隔に並ぶ。P4～6の3基を合わせ、計6基が本址に伴なう柱穴として確認できた。P6は土坑に接するように位置する柱穴であり、P10・11も土坑の脇の柱穴と思われるので、これらの東側にもう1間分の柱穴列が存在したと考える。付属施設：東側部分に位置する土坑は、函形に掘り込まれ、壁はほぼ垂直で底面は平坦である。覆土は上下2分層され、下層は人頭大から拳大の礫の間に灰と炭化粒を多く含む白っぽい灰色土で、そのうえに黄褐色土ブロック混じりの灰色土がレンズ状に堆積している。遺物出土状況：土坑内から灰や炭化物に混じって、鉄釘5点と不明鉄製品3点、青白磁梅瓶(147)の破片が出土した。青白磁梅瓶はSB265出土のものと同一個体である。骨片らしきものの出土もあったが、微小で判然としない。時期：軸線の方向や位置関係から、ST98と同時期と思われ、出土遺物から中世1期と判断した。

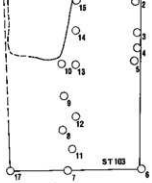
ST101　位置：中部北　図版19・111

検出：ⅡA層中での検出であるが、当初は明確に掘立柱建物址とは捉えられず、二つの堆積域の接触地点ということもあって、検出が難しかった。柱穴の位置などにやや問題も残るが、後に土坑を伴なう3×2間の建物と判断した。柱穴：土坑を取り囲む6基の柱穴は、規模・形状などが類似し深さも15㎝内外と一定しており、等間隔に配されている。北側の2列の梁方向の柱列P8～13は、桁方向の柱筋が通らない。さらに、P1が南東隅の柱穴とすると、柱配置が台形を呈してしまう。建物に比べて規模の大きい土坑を伴なうことが、このような変則的な柱配置の理由とも考えられる。東側にはさらに柱穴が存在したと思われるが、検出できなかった。柱穴の深さは土坑を取り囲むものとほぼ同じくらいのものが多い。柱痕跡は確認できなかった。付属施設：北西の2×1間の間に函形に掘り込まれた、長方形の大きな土坑が本址に伴なう。底面は平坦で軟弱であるが、深さは柱穴の深さと同じ25㎝ほどで、他の同形状の付属土坑に比べて浅い。覆土は暗褐色土ブロックの混じる灰褐色土である。遺物出土状況：土坑より銭貨がまとまった状態で6枚（図版224-65・66）出土し、山茶碗片が1点出土した。時期：出土遺物からは中世1期に帰属し、建物の方向と位置関係から、ST99と同時期と考える。



ST102　位置：中部北　図版19・113

検出：ⅡA層上面で灰色土の柱穴を検出したが、後に柱穴の配置をみて掘立柱建物址としたので、検出できなかった柱穴の存在や、さらに規模が大きくなる可能性もあるが、ここでは小さな土坑を伴なう2×1間の東西棟を想定した。柱穴：形状などがほぼ類似する柱穴が、等間隔に配置され、柱筋もだいたい通っている。内側の柱穴が、本址の補助的なものか、他の建物が存在したのかはっきりしない。掘り方の底にくぼみのあるものも見られるが、明確な柱痕跡は確認できなかった。付属施設：北西隅に楕円形を呈する小形の土坑が付属する。壁はやや緩やかであるが、底面は平坦で軟弱である。時期：軸線の方向と位置関係から、北に隣接するST103と同時期と思われ、溝（SD60）の東に配された建物址群と時期を同じくすると考えられる。従って、中世1期のなかで捉えられる。



ST103　位置：中部北　図版19・113

検出：ⅡA層上面で検出された。付近は遺構の密集地であり、西側の調査区域外にかかることもあって、柱配置などは明確にならない部分がある。ここでは北西部に大きな土坑を伴なう6×4間程の南北棟を想定したが、規模の小さな建物址2棟となる可能性もある。柱穴：P1・6・7・16・17が隅と棟木を支える位置の柱穴であろう。P11～15はやや東にずれるが棟木を支える位置の柱

穴で、ほぼ等間隔に配置され、これに対応する東側の桁方向の柱穴としてP2～5が位置する。P8・9・10は、大きな土坑を支えるものか建て替えの柱穴、または別の遺構の柱穴など、いくつかの可能性が指摘できるが、明確に捉えることはできなかった。掘り方は円形を呈するが規模には大小がみられ、40㎝前後と比較的深いものが多い。付属施設：長方形を呈すると思われる土坑が、P13～15に沿うように構築されている。函形よりもやや緩やかに掘り込まれており、底面は平坦でやや軟弱である。深さは50㎝ほどであり、覆土は暗褐色土の単一層で地山との判別が難しかった。時期：ST88・91・92・99と同様に、SD60の東に建物の方向を合わせ軒を並べるように位置している。したがって、これらと同時期の中世1期に存在したと考える。

ST104　位置：北部南　第85図、図版20・119・121、PL37

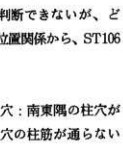
検出：ⅡA層中で、灰黄褐色土の落ち込む大きな土坑を検出し、その周囲には土坑と同じ土質の落ち込む整然と並ぶ柱穴を検出した。土坑は北東部に位置するもので、5×5間の大規模な掘立柱建物址である。ほぼ同位置でST105と重複するが、切り合い関係を明らかにすることはできなかった。柱穴：規模と形状の類似する柱穴が、等間隔に配置されており、柱筋も良く通っている。礫層まで掘り込まれるためか、深さにはかなり不揃いであり柱痕跡は確認できなかった。柱穴の脇に、柱穴と同様の落ち込みが位置する例がいくつかあり、柱の建て替えあるいは補助的な柱穴と思われる。付属施設：北東部の3×2間の内に、函形に掘り込んだ長方形の土坑が本址に伴なう。礫層まで掘り込んで深さ約50㎝を測り、底面は平坦である。覆土は焼土と炭化物を含む層が入るなど、複雑な状況が見られるが、礫を多く含む暗褐色土の上に灰黄褐色土が自然堆積していると観察できた。遺物出土状況：土坑の覆土上層から、土錘3点（図版225－35～37）、棒状鉄製品2点・銭貨の出土があり、山茶碗(76)・常滑系甕・土師器皿などの破片も出土している。山茶碗はST112と接合している。時期：出土遺物から中世1期に帰属すると判断した。切り合いからは判断できないが、軸線の方向の一致する建物は周囲になく、ST105・106・107などとは時期を別にすると思われる。

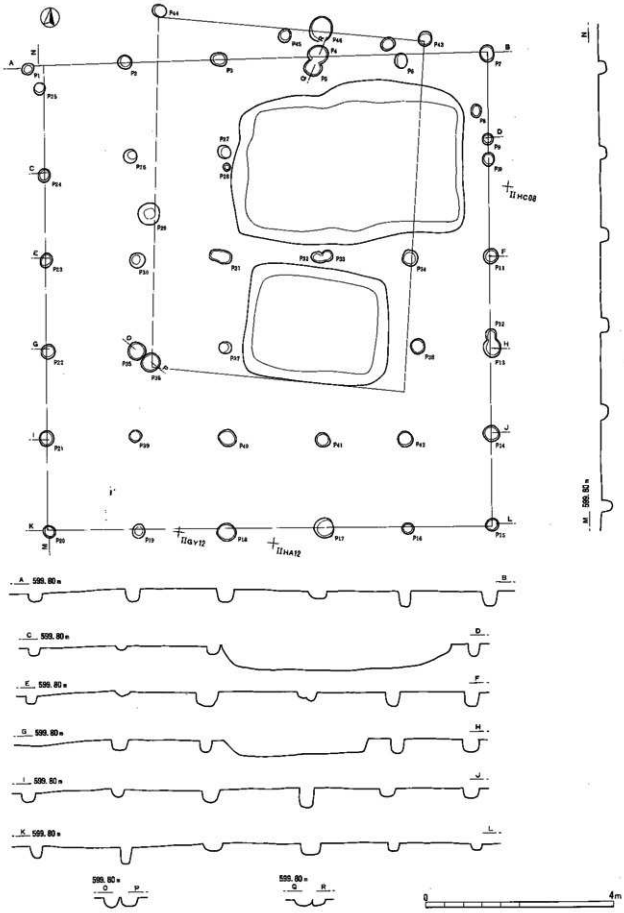
ST105　位置：北部南　第85図、図版20・119・121、PL37

検出：ST104とともにⅡA層中で検出され、当初はST104に2基の土坑が付属すると考えたが、検討の結果、やや軸線の向きを異にするもう1棟の掘立柱建物址が存在し、それに伴なうものと判断した。検出できない柱穴もあって、柱配置などに不明確なところがあるが、南東部に土坑を伴なう3×3間の南北棟と想定した。柱穴：南東隅の柱穴が確認できなかったり、ST104の柱穴との判別ができないなどから、P36、P43～46が本址の柱穴として明らかになっただけである。しかし、P27・28・31～34は、隣接するどちらかの柱穴が本址に伴なったり、柱穴の重複の可能性が考えられる。付属施設：長方形の函形に掘り込んであるので、壁は垂直で底面は平坦である。深さ約35㎝を測り、覆土は灰色を基調とするが、暗褐色土ブロックの混じり具合により、3層に分層できた。時期：ST104・との新旧は判断できないが、どちらかが建て替えられたと考えられることから、中世1期と判断した。軸線の方向と位置関係から、ST106・107と同時期と考える。

ST106　位置：北部南　図版20・119、PL37

検出：ⅡA層上面で検出され、西側に土坑を伴なう3×2間の東西棟を想定した。柱穴：南東隅の柱穴が検出できず、柱間も不揃いであるが、柱筋は比較的良く通っている。棟木を支える柱穴の柱筋が通らないのは、土坑が建物にくらべて大きいことと関係しているとも思われる。柱穴の規模と形状は類似するが、深さは10～25㎝と不定である。柱痕跡は検出できない。付属施設：土坑はST105と形状が酷似しており、建物の南半を占める。埋土は褐灰色土の単一層で、礫をいくらか含んでいる。時期：ST104とは軸線が異なることや



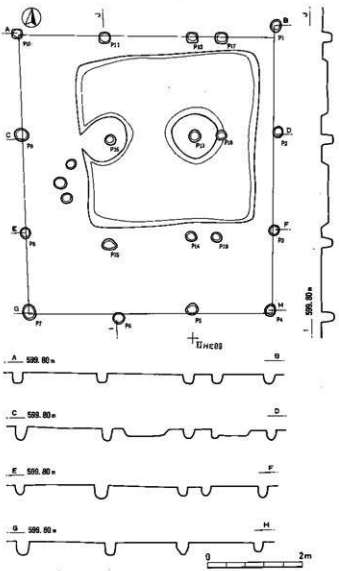


第85図　ST 104・105実測図

近接しすぎることから、同時存在は考え難い。同じくST107とも近接するが軸線の方向は一致し、ST105とともに同時期に存在した可能性もある。軸線の方向や覆土から、中世１期と判断した。

ＳＴ１０７　位置：北部南　第86図、図版20・119・121、PL38

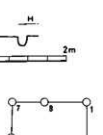
検出：ⅡＡ層上面で、褐色土ブロックの混じる灰色土の落ち込む大きな土坑と、それを取り囲んで整然と並ぶ同質の土の落ち込む柱穴を検出した。土坑の覆土を一部掘り残して、そこに柱穴を構築してあり、建物の柱穴に確実に帰属するので、土坑が掘立柱建物址に伴なうことを具体的に証明する例となった。柱穴：北側の梁方向の柱穴が隅丸方形を呈するほかは、ほぼ同じ形状で、深さも揃っている。土坑の北と南のP11・12・14・15が少しずれるが、だいたい等間隔の柱配置で、柱筋も通っている。P17・18・19は土坑に対する施設の一部とも思える。付属施設：北東部に２×２間の範囲で掘り込んだ、大きな土坑を伴なう。柱穴を掘った後、内に取り込まれる位置にあるP13・16・18の周りを円形に掘り残しており、柱穴に沿って掘り進めて構築したと思われる。底までの深さ15㎝と浅いが、拳大より大きめの円礫が隙間のないほど詰め込まれており、底面は比較的平坦であった。時期：時期を明確にすることはできないが、軸線の方向と位置関係から、ST105・106と同時期と考え、中世１期とした。



第86図　ST107実測図

ＳＴ１０８　位置：北部南　図版20・121

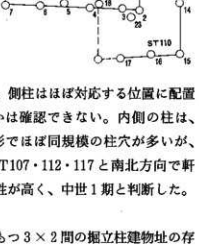
検出：ⅡＡ層上面で、小礫混じりのにぶい黄褐色土の落ち込みがいくつか検出され、上を自然流路が流れることもあって確認できない柱穴もあるが、４×２間の南北棟を考えた。柱穴：不足する柱穴や柱間の不揃いが目立つが、南東隅の柱穴を除いて、側柱はほぼ対応する位置に存在する。Ｐ９・10は補助的な柱穴よりも、建物の構造に関係する柱配置と考えたい。掘り方の深さも不揃いであり、柱痕跡は検出できなかった。時期：軸線の方向からST110などと同時期と思われ、SD60の方向とも一致するので、溝の東に配された建物群とも時期を同じくする中世１期と考える。



ＳＴ１０９　位置：北部南　図版20・121

検出：本址付近ではⅡＡ層上面で、灰黄褐色土を基調とする落ち込みが多数密集して検出され、掘立柱建物址の存在が予想されたが、明確に捉えることはできなかった。後の検討により、確認できない柱穴があるものの、４×２間の東西棟と判断した。東側のST110と重複するが、直接切り合う柱穴はなく、新旧の判断はできなかった。柱穴：規模や形状は類似するものが多いが、桁方向では柱間間隔が不定であり、柱筋も通らない。東西の梁間の中柱が検出できず、内側の柱もP12が検出できたのみ

である。柱穴の深さは15～20cm程度であり、P10・12で円形の柱痕跡が検出された。時期：ST110とは同時存在せず、軸線の方向は、西に位置するST108と合致する。明確な時期決定はできないが、中世1期と判断した。

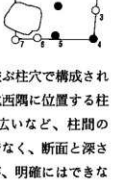


ST110　位置：北部南　図版20・121

検出：ST109同様に、後の検討により、多数の落ち込みの中から掘立柱建物址を判別した。明確にならない柱穴もあるが、2×2間あるいは4×2間の南北棟を想定した。柱穴：南西隅の柱穴が検出できないが、側柱はほぼ対応する位置に配置されている。東西の桁方向の中柱が、P14・18のほかに存在したかどうかは確認できない。内側の柱は、棟持柱の位置にP22・23が存在するが、側柱の位置と対応しない。円形でほぼ同規模の柱穴が多いが、深さは10～30cmほどで一定ではない。時期：建物址の配置をみると、ST107・112・117と南北方向で軒を連ねるように整然と構築されており、これらが同時期に存在した可能性が高く、中世1期と判断した。

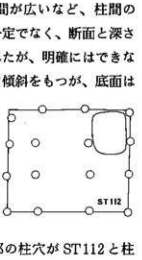
ST111　位置：北部南　図版20・122

検出：ⅡA層上面で灰色がかった落ち込みが検出され、南東部に土坑をもつ3×2間の掘立柱建物址の存在が明らかになった。柱穴：棟持柱の柱穴がやや北に寄るなど、全体に柱筋が通らず、柱間の間隔も一定でない。西側の桁方向P7とP8の間は、土坑に切られる落ち込みが存在するのみであり、P5とP7の中間にP6が補助的に位置する。いずれも土坑の構築と関連しての柱配置であろう。柱穴の規模にかなり大小があり、深さも20～40cmと一定しない。P4・5・11・12で不明確ながら柱痕跡が認められ、先端が細くなることが観察できた。付属施設：南西部に、土坑が西側部分を柱列よりもやや外に張り出すようにして構築されている。平面は隅丸長方形を呈するが、軸線の方向は建物と一致せず、壁はかなり斜めに掘り込まれている。深さは約50cmで、底は礫層に達しており、底面は比較的平坦である。覆土は、人頭大の礫10数個を含む単一層である。遺物出土状況：土坑より鉄が1点出土した。時期：時期を明確にする根拠に乏しいが、軸線の方向からは、ST112と時期を同じくする中世1期の可能性が高い。



ST112　位置：北部南　図版20・122

検出：ⅡA層上面で、灰黄褐色土の落ち込む長方形の土坑と、それを取り囲むように並ぶ柱穴で構成される掘立柱建物址を検出した。北東隅に土坑を伴なう、3×3間の東西棟を想定した。北西隅に位置する柱穴は、土坑との切り合いで確認できない。柱穴：桁方向の中央の柱P8とP12の間が広いなど、柱間の間隔は一定せず、柱筋も通っていないところがみられる。柱穴の大きさや形状は一定でなく、断面と深さもまちまちである。掘り方底面のピットなど、柱痕跡らしきものも一部で認められたが、明確にはできなかった。付属施設：北東部の1×1間の内に掘り込まれており、壁はやや緩やかな傾斜をもつが、底面はほぼ平坦である。底面までの深さ65cmを測り、覆土は灰色土を基調とするが細かくは4分層できる。遺物出土状況：土坑より山茶碗(76)・土師器皿(77)、砥石(図版224－32)、鉄釘・不明鉄製品、漆製品が出土した。山茶碗はST104と接合している。時期：ST107・117などと建物の方向を同じくし、軒を並べるように位置するので、これらと同時存在すると考える。中世1期に帰属すると思われる。

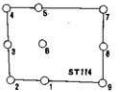


ST113　位置：北部南　図版20・122

検出：ST112と同じくⅡA層上面で、灰黄褐色土の落ち込みとして検出した。一部の柱穴がST112と柱筋が通ることや、隣接するという位置関係から、ST112の北側部分とも考えたが、ここでは2×1間の東西棟を想定した。柱穴：柱間はやや不揃いであるが、柱筋は通っている。掘り方の断面が「V」字形を呈

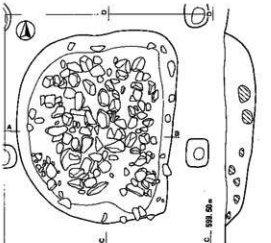
するものが多く、深さも30㎝前後で一定しているが、柱痕跡は確認できなかった。時期：ST112との軸線の方向の一致や位置関係から、両者が同時存在したと考え、中世1期とした。

ST114　位置：北部南　図版20・123



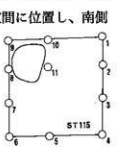
検出：ⅡA層上面で灰色土の落ち込みがいくつか検出され、当初は西側部分の2×1間の掘立柱建物址を想定した。その後、北に隣接するST115とも考え合わせて、東側の3本の柱穴を含め、やや歪みのある2×2間の南北棟と想定した。柱穴：桁方向東側の柱間が2間分に相当するほどの長さをもつ。ST115でもまったく同様の柱配置がみられ、この間に柱穴は存在しなかったと思われる。北西隅の柱穴は、土層観察のベルトの下に入り、しっかりと検出できなかった。柱穴の平面形は隅丸の方形あるいは長方形を呈し、断面は「V」字形をなすものが多い。柱穴の深さはP7が10㎝と浅いほかは20㎝前後であった。時期：北側のST115と2棟のほぼ同じ規模の建物が、方向を合わせきちんと並んで位置するので、同時存在したと考えたい。建物の形状と方向、他遺構との位置関係から中世1期と判断した。

ST115　位置：北部南　第87図、図版20・123

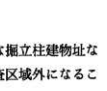


第87図　ST115付属土坑実測図

検出：ⅡA層上面で、ST114と類似する灰色土の落ち込む大きな土坑と、その周りに位置する柱穴を検出した。北西部に土坑を伴なう3×2間の南北棟を想定した。P4は西半分が攪乱を受けており、P5とP11の間の柱穴は土層観察用ベルトのため明確にできなかった。柱穴：東側の桁行の間隔が広く、梁行も南ほど広くなる傾向にあり、土坑の位置と関係しての柱配置とも考えられる。同規模の柱穴が並ぶが、平面形は円形と隅丸方形がある。掘り方の深さは15～20㎝とほぼ一定で、断面には「V」字形を呈するものがいくつか見られるが、柱痕跡は確認できなかった。付属施設：土坑は北西隅の1×1間の柱穴間に位置し、南側に張り出して構築されている。壁は緩やかな傾斜であり、底面はほぼ平坦である。深さ約30㎝を測り、覆土には拳大から人頭大の礫が多数入っているが、敷き詰められたような状態ではない。時期：南側のST114とは、軒を並べての同時存在であろう。軸線の方向は、ST111・112・117などとほぼ一致し、同時期に存在した可能性があることから、中世1期とした。



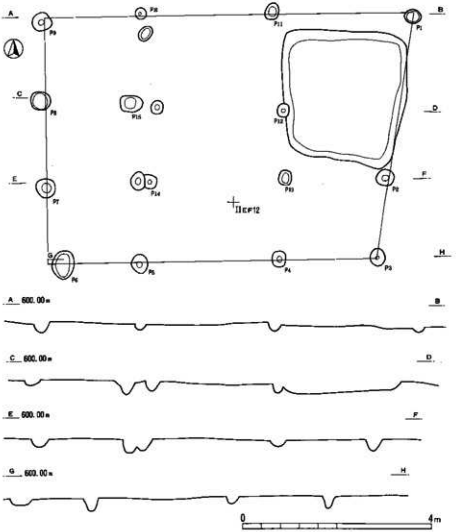
ST116　位置：北部南　図版20・122・123



検出：本址付近では、大形の土坑やピット状の落ち込みが密集する。土坑を伴なう大きな掘立柱建物址などの存在する可能性もあるが、検討の結果明確にできたのは本址だけである。西側が調査区域外になることもあり、不明確ではあるが2×2間の南北棟を想定した。柱穴：北西隅の柱穴は検出できず、棟持柱の位置には柱間が不定であるがP4・7・8・9の4柱穴が存在する。規模や形状はほぼ類似し深さもほぼ一定であるが、P7は大きく浅い掘り方をもつ。時期：時期を明確にできないが、軸線の方向がST111・117などと同一であることから、中世1期とした。

ST117 位置：北部南 第88図、図版20・123・125

検出：ⅡA層上面の一部礫層の露出する面で、灰色土の落ち込みとして比較的明瞭に検出できた。北西隅に土坑を伴なう3×3間の東西棟である。柱穴：桁行の柱間の中央の間隔が広いなど、柱間間隔は一定しない。P1とP2の間の柱穴が欠けることやP12が南に寄ることは、内側に掘り込まれた土坑と関係があると思われる。P10・14・15には、柱替えないし補助的と思われる柱穴が隣接する。柱穴の大きさが不揃いであり、深さにも10～40cmと一定ではない。検出面が低いこともあって、断面形は「V」字を呈するものが多く、柱痕跡は検出できなかった。付属施設：北西部の2×1間の内側に掘り込まれており、やや変形の長方形を呈する。礫層に掘り込まれ、底面がほぼ平坦であるが、覆土が浅いので土層の状況などは明確にならない。遺物出土状況：土壙から青磁碗(75)の破片が1点出土した。時期：ST107・112とは、南北にほぼ等間隔の位置に軒を並べ、建物の方向も一致するので、同時期に存在したと思われる。建物の形状や出土遺物などを考え合わせ、中世1期と判断した。

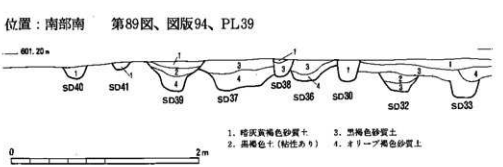


第88図 ST117実測図

3 溝 址

SD30～46 位置：南部南 第89図、図版94、PL39

検出：ⅠD層上面で、礫や砂を含む最大幅4m程の溝状の落ち込みとその両側に土手と思われる高まりが検出されたが、何条かの流路が交錯しているため、切り合いや形状を明確にできなかった。ⅡA層上面まで下げて検出をしたところ、20cm



第89図 SD30・32・33・36～41断面図

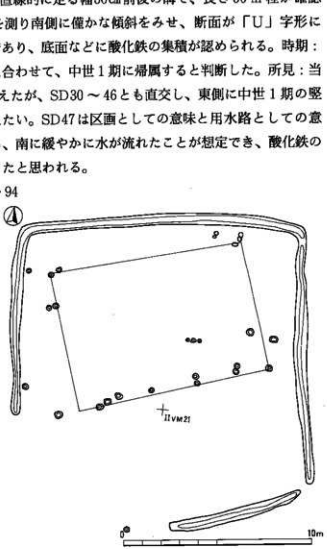
から1mの幅の同方向の溝が重複して検出された。合計17条の溝が認められている。規模・形状：長さは最長30mから数mのものまでがみらる。幅は50cm内外のものが多く、ほぼ同じ幅で東西に直線的に延びている。残存する深さは10～40cmで「U」字状に掘り込まれ、東に向かって僅かな傾斜をみせる。暗褐色土やオリーブ褐色土などの砂質土の入る覆土は、それぞれの溝で微妙に異なる。いずれも底面に小砂利の堆積が認められ、水が流れていたことがを窺うことができる。時期：溝の機能していた層はⅠD層上面から上であることが想定されることと、覆土の特徴から、中世以降に存在したと考えられる。しかし、時期幅の限定はできない。近代以降、南側に新たな道路ができるまでは存在していた可能性がある。所見：両側に土手状の部分が存在すること、その中をわずかに位置を変えながら繰り返し流れていること、東西に直線状に流れ下ることから、中世以降位置を変えずに使用され続けた用水路であろう。また、古代の溝址SD3がすぐ北に同方向で位置しており、古代以来この地点に水路が流れ、東西方向のある種の境界線として意識され続けてきたと思われる。

SD47　位置：南部北　図版8

検出：ⅠD層中で一部検出できたが明確にならず、ⅡA層上面まで下げて検出をすると、オリーブ褐色土の溝状のプランが明瞭に判明した。断面観察ではⅠD層上面からの掘り込みが確認できた。古代の遺構をいくつか切っている。規模・形状：ほぼ南北方向に直線的に走る幅50cm前後の溝で、長さ50m程が確認でき、北側は調査区域外に延びる。深さは約20cmを測り南側に僅かな傾斜をみせ、断面が「U」字形に掘り込まれる。やや粗い砂の多量に混入した覆土であり、底面などに酸化鉄の集積が認められる。時期：切り合いや掘り込み面、中世の遺構配置などを考え合わせて、中世1期に帰属すると判断した。所見：当初古代のSD3と関係から本址は古代の遺構とも考えたが、SD30～46とも直交し、東側に中世1期の竪穴住居址や土坑群が広がることから中世として捉えたい。SD47は区画としての意味と用水路としての意味があったと考えられる。覆土や溝底面の状況から、南に緩やかに水が流れたことが想定でき、酸化鉄の集積が少ないことから、使用は比較的短期間であったと思われる。

SD48　位置：南部北　第90図、図版17・94

検出：ⅠD層上面において青灰色をおびる溝状の落ち込みが検出され、プランを追及して溝が方形に巡る遺構であることが判明した。SB79など古代の遺構を切り、SK731・785に切られることが、検出面での土色の違いから明確になった。規模・形状：南北16.8m東西15.8mの規模をもち、わずかに中央の張り出す方形を呈している。南西部がかなりの部分途切れ、北西と南東の隅も確認できない部分がある。中央が深く隅に向かって浅くなるので、上面が削平された結果確認できなかったものと思われるが、南西部は溝が掘り込まれなかった可能性が強い。幅60cm前後最深部で50cmを測り、断面は一部「V」字形の掘り込みが認められるものの、ほとんどは「U」字形を呈する。覆土は中粒砂に粘質土の混じるにぶい黄褐色土であり、下部に黒褐色土ブロックが入り、底面などに酸化鉄の集積がわずかに認められる。時期：切り合いやSD47と同方向を向くことから、中世1期と判



第90図　SD48と想定掘立柱建物址模式図

断した。中世の遺構に切られていることから、中世1期でも古い時期とも考えられる。所見：方形に区画された内側には、中世の小規模な土坑が存在する。直線的に並ぶものや、柱痕跡の認められるものがあることから、掘立柱建物址の可能性を追及してみた。覆土が類似する古代の竪穴住居址がいくつか切り合って、規模などを確定できないが、北側部分に1棟の掘立柱建物址が構築されていたと想定できる。

SD49～51・53　位置：中部南　図版17・99・100・101・102

検出：IC層上面で、現用水堰の位置とほぼ一致するように検出された。東西・南北の軸線方向に沿い、溝相互に交錯し切り合う。SD52・SK1012を切り、NR9に切られる。規模・形状：幅1m前後で、深さは20cm程と浅く、直線的に延び直角に曲がる。粗い砂や小礫の混じる覆土で、底面に酸化鉄の付着した砂利が堆積している。時期：切り合いからは中世以降であり、近・現代まで用水堰として使用されてきたが、中世の遺構が流路の部分を避けて構築されていることから、起源は中世1期と判断した。所見：流れの方向が現条里景観と一致することは、条里の南限と関係して注目される。

SD52　位置：中部南　図版17・99・101・102

検出：IC層上面で検出された。古代の遺構およびSD59・NR8を切る。また、南側はSD53に削り取られている。規模・形状：南北に直線的に走り、北は現在の道路の下に入り確認できない。幅は4m程を測り、底面に凸凹が見られることから、その中を何条かの流路が重複すると思われるが、明確にできなかった。深いところでも20cmと浅く、南から北に傾斜している。覆土下部に礫が混入するなど、水が流れた痕跡が認められる。遺物出土状況：いずれも細片であるが、山茶碗・青磁碗・白磁碗などが覆土中より出土している。ほかに須恵器製の泥堵と思われる破片（第128図3）が出土している。古代のものと思われ、SB109に近い箇所から出土していることからSB109の覆土中にあった遺物と考えられる。時期：出土遺物や切り合いと東側に展開する遺構などの時期を考え合わせ、中世1期起源と判断した。所見：道路の北では本址を確認できないことから、道路の下で直角に曲がるか東西方向の溝と直交すると想定される。SD54・60などと方向を合わせる溝の一つで、北に流れる用水路としても使用されたであろう。

SD54　位置：中部南　第91図、図版18・103・104、PL39

検出：IIA層上面で、灰褐色土の直角に曲がる溝状の落ち込みが明瞭に検出された。古代のST42を切る。規模・形状：北から南に走る溝が東に直角に曲がり、調査区域外に延びていく。幅は125～195cmで南側が広くなる傾向にある。深さは50～80cmを測り、東に向かって傾斜しているが、南北ではほとんど水平である。断面は基本的には「V」字形を呈し、覆土は砂質土が基調であるが、底面などに酸化鉄の集積は認められず、下部に焼土や黄褐色土のブロックが混じっている。遺物出土状況：白磁椀2個体、土師質擂鉢や内耳鍋の微細な破片が少量出土した。白磁は出土状況より混入の可能性もある。時期：本址に囲まれて位置するST83～87の時期や出土遺物から、中世1期から2期初頭と判断した。所見：北側のSD60は、同方向であるが位置が東に5m程ずれており、SD52同様本址は道路の下で直角に曲がるか東西方向の溝と直交し、SD60とは直線的には結ばれない。底面や覆土からは、滞水の可能性はあるものの恒常的に水

第91図　SD54断面図

が流れた痕跡は認められない。幅30～40mの方区画の中に掘立柱建物址群が位置しており、いわゆる用水路としての溝とはやや趣を異にする。

SD55～57　位置：中部南　図版18・103・104、PL40

検出：ⅡA層上面で灰黄褐色土の細長い落ち込みが明瞭に検出された。SD56がSK1052に切られることは、土色の違いから検出面で判別できた。規模・形状：SD56・57は、1m弱の間隔で南北に並走する、2条一対の遺構と思われる。また、SD55はやや形状に問題があるが、2条の溝に直交する方向に位置する。いずれも幅20cm前後深さ15cm程であり、断面は「U」字形に掘り込まれる。細粒砂を基調とする覆土であり、底面に近くなると酸化鉄の集積が認められる。時期：位置や方向から、SD83～86と同時期の中世1期と判断した。所見：SD56・57はST83～86とST87を東西に区画し、SD55は建物群と南側の遺構空白域とを区画する溝と考える。SD54によって形成された区画を、さらに細分する役割を果たしている。恒常的に水が流れた痕跡は認められず、SD56・57は道路の側溝の可能性がある。

SD58　位置：中部南　図版18・104

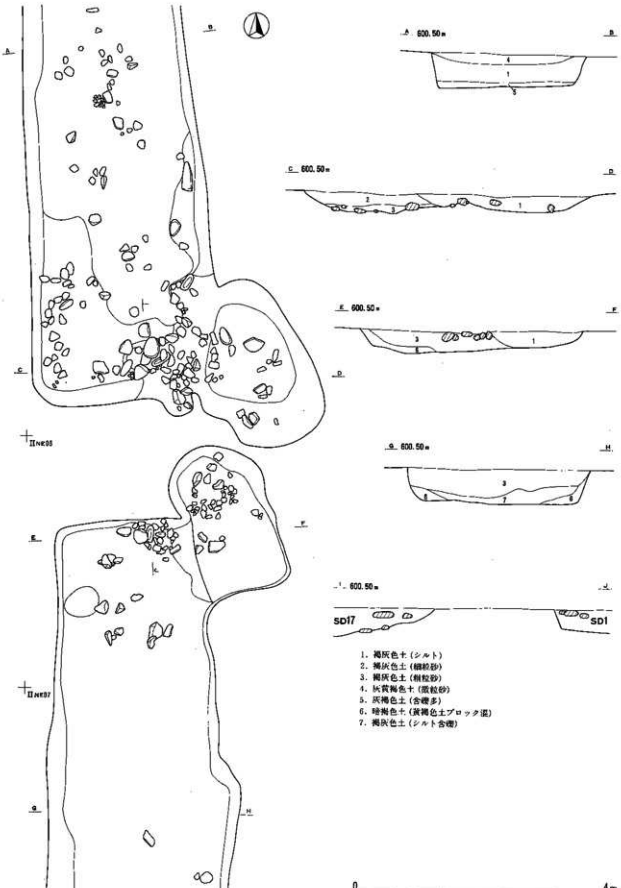
検出：ⅡA層上面で明瞭に検出され、ST87およびSK1072に切られることは土色の違いで判断できた。規模・形状：北西から南東に約10m直線的に延び、北側は現在の道路の下に入って確認できなかった。幅約30cm深さ15cm程で、底面レベルは北西がいくぶん低い。覆土はSD55～57に酷似し、断面も「U」字形を呈する。時期：切り合いから、中世2期初頭以前である。所見：形状等はSD55～57に酷似するものの、方向は大きく異なっており、同時に存在した区画溝ではない。溝底面の傾斜が地形と逆であることから、用水路とは考えにくいが、正確や内容は明らかにならない。

SD59　位置：中部南　図版9・18・52・102

検出：ⅡA層上面で遺物がまとまって出土し、精査をしたが明確にすることができず、ⅡA層の途中まで掘り下げてようやくプランが確定した。検出面の観察から、NR8を切りSD52に切られることが判明した。規模・形状：西側は調査区域外に延び、北は現道路の下に入って、部分的な検出にとどまるが、西から東に走る溝が直角に曲がって北に向かう。幅は150cm前後深さ25cm程度であり、広さの割に浅い。底面のレベルは西よりも東が低く、さらに北が低い。覆土は炭化物粒を含む灰黄褐色細粒砂が基調で、底面には酸化鉄の沈着した小礫が堆積していた。遺物出土状況：白磁椀5個体（図版206－2・7・12・18・21）常滑系甕(81)や青磁椀(79)・皿(80)などの破片が、直角に曲がる部分を中心に出土している。また、81の常滑系甕とは別個体の甕がSB261出土のものと接合している（図示せず）。時期：切り合いと出土遺物から、中世1期と判断した。所見：SD54等と同様の方区画する溝の一部の可能性もあるが、道路の北側に本址が存在しないことと、底面の状態から流路であると判明したことから、クランク状に屈曲しながら東流する用水路と判断した。

SD60　位置：中部北　第92図、図版18・19・105・107・109・111、PL40

検出：ⅡA層上面で、ほぼ南北方向に走る大きな溝状の落ち込みを検出した。南側ほど検出し難くなる傾向があるが、途中に長さ2m程途切れる部分がある。中世を中心とする多数の遺構と切り合うが、SK111・1247、SD65などに切られ、SB264などを切ることが、検出面での観察や土層断面の観察から判明した。さらに、ほぼ同位置の上面を流れる現代の用水堰に上部を削り取られる。規模・形状：途中に陸橋状の途切れる部分を持つ、南北にまっすぐに延びる溝で、北は調査区域外にかかり南は道路の下になって検出できず、その間約65mが調査できた部分である。幅2.5m前後、深さ50cm程の規模をもち、側壁は垂直で底面は平坦に掘り込まれている。覆土の上層は灰色の砂質土に暗褐色土ブロックが混じっており、下層から底面には青灰色のシルトや酸化鉄の沈着した小礫の堆積が認められる。緩やかな水の流れの痕跡であろう。付属施設：陸橋部分の東側に、隅丸長方形の大きく浅い掘り込み2基が対の状態で向かい合って位置



第92図　SD60断面図

する。その覆土および周辺に人頭大かやや小さめの礫が大量に散乱している。陸橋の補強を目的とする施設や石垣の残存などが想定できるが明確にならない。遺物出土状況：破片ではあるが、白磁椀５個体（図版206－5・19）・捏鉢（50・84・85）・土師器皿（83）・青磁椀（82）の出土がみられ、内耳鍋片が北側部分で少量出土した。中世１期の遺物の多くは混入と考えられる。50に図示した捏鉢はSB264・265と接合するが、SB264からの混入である可能性が高い。ほかに土錘３点（図版225－38～40）、砥石３点（図版224－33～35）が覆土中から出土している。時期：切り合いと出土遺物から、中世２期初頭の可能性を含む中世１期と判断した。その後、北半分は用水堰として使われた可能性が高い。所見：陸橋が存在しながら、水の流れた痕跡が認められる点はやや矛盾があるが、陸橋の北側から東に伸びるSD62は、浅いことから部分的な検出にとどまったが、本址とSD66を結んでいる溝と思われ、北からSD62を通って東への水の流れが想定できる。本址の限界は、南の道路の下と北の現用水堰田の沢付近で、東西に曲がるか直交すると思われ、その間の長さは110～120ｍを測る。本址を境として、東側に掘立柱建物址群が建ち並んでおり、集落等を大きく区画しながら用水路としても使用されていた溝であろう。

ＳＤ６１　位置：中部北　図版18・19・108・110・112・113・115、PL41

検出：ⅡＡ層上面で検出したが、同位置の上面を現代の用水堰が流れており、検出が難しく不明確な部分が多い。SD66と切り合い、覆土が類似するため新旧の判別が困難で、土層断面から本址が新しいと判断した。覆土にSK1313が掘り込んでいる。規模・形状：軸線より10°程北西から南東の方向に振って直線的に延びている。南北両端は確認できなくなるが、この間約65ｍが明らかになった。中途で１ｍ程途切れる部分があり、陸橋状の施設が想定される。幅１ｍ深さ40㎝程度で断面は「Ｕ」字形を呈し、南東へ向かってわずかに傾斜している。覆土は灰褐色砂質土であり、下部に青灰色のシルトが認められる。時期：切り合いと本址の西に並ぶ墓址の時期を考え合わせて、中世２期と判断した。北側は用水堰として同位置に現代まで継続されている。所見：西に位置するSD60と類似するが、溝の規模が小さく方向も異なる。この溝による区画を意識しているのは、墓址を中心とする土坑群であるが、どのような性格をもつ溝かは明確にならない。

ＳＤ６２・６３　位置：中部北　図版19・109・110

検出：ⅡＡ層上面で検出されたが、現代の用水堰が上面を削り取ることから、部分的に確認できただけである。SD62をSD63が切りながら１条の溝となり、SD66の上を東に流れていく。途中でSD61と切り合うが、新旧を明らかにすることはできなかった。規模・形状：現在の用水堰に削り取られ、底面近くが部分的に明らかにされただけであり、判然としない。最大幅1.5ｍ・最深30㎝で、東に直線的に走る。SD60の西では検出できないことから、SD60の東流する部分とも考えられる。覆土は灰色のシルトで、場所によって小砂利が混じる。遺物出土状況：山茶碗が１点出土している。帰属時期：出土遺物と切り合いからは中世１期以降であるが、継続して使われているため、時期を限定できない。

ＳＤ６４　位置：中部北　図版18・19・107・109、PL40

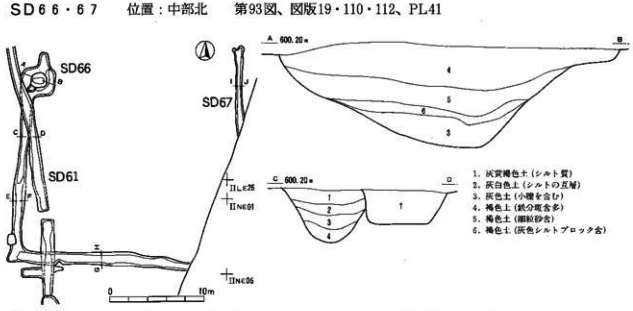
検出：ⅡＡ層上面で部分的に検出されたが明確にならず、方形に巡る溝の全体がはっきりしたのはかなり検出レベルを下げてからである。断面観察などによって、ST91・92およびSK1257に切られることが判明した。また、ST93が本址の内側に存在し、溝に囲われた掘立柱建物址と理解した。規模・形状：南北12ｍ東西９ｍの、中央部のやや張り出す隅丸長方形に溝が巡る。西側のほぼ中央が1.5ｍ程途切れており、四隅は中央に比べて浅い。幅は80㎝内外あり、深さは最深で50㎝であり、断面は「Ｕ」字形を呈する。覆土は灰黄褐色の砂質土であり、人頭大の礫がいくつか認められた。遺物出土状況：破片であるが比較的多くの出土があり、白磁椀・捏鉢（90・91）・常滑系甕・山茶碗（88・89）・土師器皿（87）が目立った。時期：切り合いと出土遺物から、中世１期の比較的古い時期と判断した。所見：類似する溝としてSD48があげ

られ、時期的にも合致しそうである。

SD65 位置：中部北 図版18・107・109

検出：ⅡA層上面で検出された。SD60と直交して切り合っており、本址が新しいことが検出面での観察で判明した。規模・形状：長さ10m足らずが検出されただけだが、ほぼ東西方向に走る幅60cm程の溝である。底面でみると東から西への傾斜になるが、部分的であり判然としない。暗褐色あるいは灰色のシルトが覆土であり、水が緩やかに流れたと考える。時期：SD60を切るので中世2期以降であるが、時期の限定はできない。

SD66・67 位置：中部北 第93図、図版19・110・112、PL41



第93図 SD66・67平面図・断面図

検出：ⅡA層上面で直角に出がる溝状の落ち込みSD66を検出し、東側に南北に平行に走るSD67が検出された。両址の北側が揃っていることから、北側を除く三方が「コ」の字形に掘られた溝として、一つの遺構ととらえたい。断面観察等からSD61・SK1321・1435のいずれにも切られることが明らかになった。規模・形状：全体が一つの遺構とすると、一辺約23mの方形で、三方に溝が巡る形状であり、南東側は調査区域外で確認できない。東側は検出レベルが低く底面部分が検出できただけだが、幅1.5m深さ70cmほどの規模である。底面レベルはほとんど一定で、南西隅はやや浅くなる。断面は「U」字形に近いが西側は「V」字を呈し、覆土は白あるいは灰色シルトが互層をなすように堆積しており、下部ほど酸化鉄の集積が認められる。南側の溝の東側半分で、底から炭化した状態の稲藁および籾が、薄い層状になって出土した。諸施設：西側の溝の北端に、径4m程の円形に近い掘り込みが伴なう。擂鉢状に掘り込まれ、最深部で深さ110cmを測る。下層に青灰色のシルトが堆積しており、底面には礫が敷詰めたようにみられる。礫は地山をそのまま利用している可能性もあるが、滞水あるいは静かに水が流れ込んでいた痕跡が認められることから、水溜めのような施設と思われる。周囲に小規模な土坑が多数存在し、上屋がかかっていたと想定される。遺物出土状況：南側の溝の覆土中位（3層）から、漆椀2点（第129図1・2）、窯業期の天目茶碗(93)・平碗(94)・蓋(95)、大窯期の天目茶碗(92)、山茶碗(96)などがまとまって出土した。大窯期の天目茶碗は、上を流れる用水路の遺物の可能性がある。時期：出土遺物と切り合いから、中世1期と判

断した。所見：北側は現水田が一段低くなる部分にあたり、溝が存在したかどうか確認できないが、西側北端の施設から考えると存在しなかった可能性が高い。覆土の状況から、溝内は滞水していたと思われるが、水の供給源がはっきりとせず、常時水が入っていたかどうかも不明である。溝の内側は、掘立柱建物址など大きな遺構が存在せず、どのような状況であったか明確にならない。なお、中世2期以降、SD62・63を流れる用水堰が本址の上面を削る。

SD68　位置：中部北　図版19・113

検出：ⅡA層上面で検出されたが、底面まで10㎝程を残すだけであり、僅かな部分を確認したにすぎない。規模・形状：南から東へほぼ直角に曲がる小規模な溝が、全長約3ｍ検出されただけで、全体は明らかにならない。幅30㎝で断面は「U」字形を呈し、灰色がかった砂質土が覆土である。時期：周囲の遺構などから、中世の可能性があるが、時期決定の根拠はない。所見：覆土から用水路とは考えられず、区画の溝としても遺構との関係が明確にならない。

4　柵　址

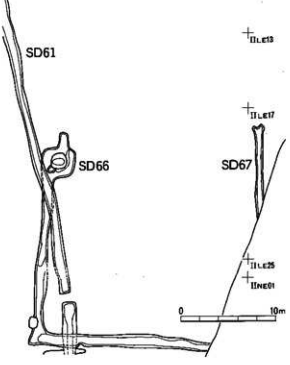
SA10～12　位置：中部北　図版19・109・111

検出：ⅡA層上面で、SD60の東側に多数の小さな土坑が検出され、SD60に平行して並ぶ3条の柵址と判断した。掘立柱建物址の柱穴とも考えたが、並びが不揃いなことや長さが建物址をうわまわることから、それとは関係するものの別の遺構とした。規模・形状：SA10は、径20㎝前後の掘り込みが4基ほぼ直線状に並び、少し方向を替えてさらに南に延びる可能性もある。全長は7.3ｍを測り、間隔は2～3ｍの間でやや不揃いである。SA11はST99の西側部分とも考えられ、20～30㎝の径をもつ円または方形の掘り込みが、SD60の陸橋近くまで6基以上並ぶ。全長は10.2ｍを測り、ほぼ直線上に並ぶが間隔は不揃いである。SA12は6基の径20～40㎝の掘り込みが、全長約6ｍの間に間隔1～1.5ｍと他よりも狭く並ぶ。いずれも覆土は暗褐色土・黄褐色土ブロックを含む灰褐色土であり、柱痕跡などの確認できたものはない。時期：SD60・ST99など周囲の遺構と同時期の中世1期と判断した。所見：区画溝SD60と建物址の間に位置する、塀などの遮蔽目的の構造物を想定した。

SA13　位置：中部北

第94図、図版19・115・116

検出：ⅡA層上面で検出され、径40㎝前後の円形の掘り込みが直線上に並ぶ。規模・形状：南北方向からわずかに北東に振る方向に延び、全長約26ｍの間に9ないしは10基の掘り込みが2.2～4ｍの間隔で並んでいる。東側のP7～10は重複または一対の状態で検出されており、部分的な建て替えの可能性がある。また、P6・9は規模が大きく形状も異なっており、抜き取り跡などが想定される。深さは20㎝ほどのものが多く、底面のレベルはほぼ同一である。覆土は褐色の粘質土であり、柱痕跡等は認められない。時期：南側のSD66・67と関係の深い遺構であることから、



第94図　SA13実測図

中世1期と判断した。所見：SD 66・67の北に、東西は溝の両端にほぼ対応し、溝の南北間距離と同じ距離を置いて位置する。方向も一致することから、両遺構は密接に関係すると思われ、その場合SD66・67と同規模・同形状の空間が、北側の一段低い面でSA13に区切られてできる。中側にいくつかの土坑以外の遺構が存在しないので、この空間部分の性格や、本址がどのような施設なのか等は明確にならない。

SA14　位置：北部南　図版20・121

検出：ST109・110付近では、ⅡA層上面で多数の小土坑が検出された。建物址の柱穴の可能性のあるものが多いが、北側部分に東西に直線上に並ぶ11基の落ち込みがあり、これを柵址とした。規模・形状：約20mの間を3m前後の間隔で、7基の掘り込みが東西軸線方向に並ぶ。その脇や中間に位置する掘り込みもあり、これらも本址に含めた。径20cm前後の円形の掘り方で、深さも20cmほどのものが多い。覆土は灰黄褐色土などの単一層であるが、柱痕跡は確認できなかった。時期：周囲の掘立柱建物址群と同時期に存在していたと考え、中世1期とした。所見：位置や方向から、付近の掘立柱建物址群を南北に区画する、垣や塀などの施設であろう。

SA15・16　位置：北部南　図版20・122・123

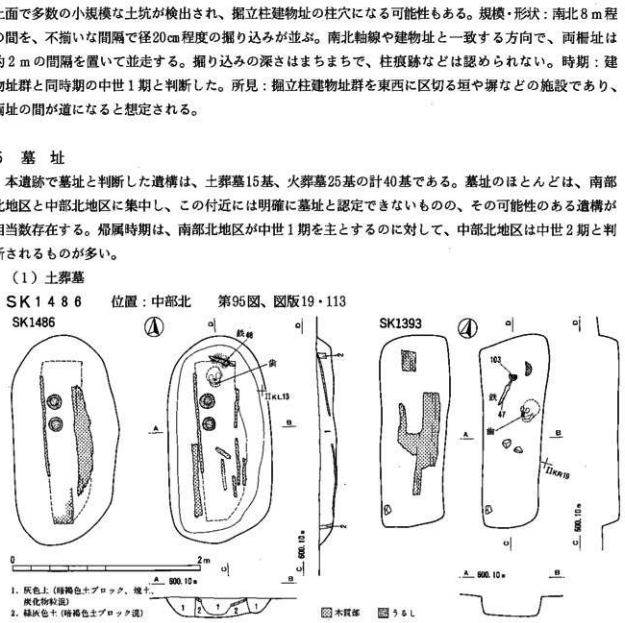
検出：ST111とST112・113の間にある小さな土坑を、平行して走る2条の柵址とした。付近ではⅡA層上面で多数の小規模な土坑が検出され、掘立柱建物址の柱穴になる可能性もある。規模・形状：南北8m程の間を、不揃いな間隔で径20cm程度の掘り込みが並ぶ。南北軸線や建物址と一致する方向で、両柵址は約2mの間隔を置いて並走する。掘り込みの深さはまちまちで、柱痕跡などは認められない。時期：建物址群と同時期の中世1期と判断した。所見：掘立柱建物址群を東西に区切る垣や塀などの施設であり、両址の間が道になると想定される。

5 墓 址

本遺跡で墓址と判断した遺構は、土葬墓15基、火葬墓25基の計40基である。墓址のほとんどは、南部北地区と中部北地区に集中し、この付近には明確に墓址と認定できないものの、その可能性のある遺構が相当数存在する。帰属時期は、南部北地区が中世1期を主とするのに対して、中部北地区は中世2期と判断されるものが多い。

（1）土葬墓

SK1486　位置：中部北　第95図、図版19・113



第95図　SK1486・1393実測図

検出：ⅡA層上面で、長方形の落ち込みが認められ、プランの確認をしたところ、長方形の落ち込みを囲むように隅丸長方形の掘り込みが検出された。内側の長方形のラインに沿って板状の木質部が残存しているのが確認でき、木棺墓と推定された。規模・形状：218×110㎝の隅丸長方形の掘り方に、170×50㎝程度の長方形の木棺が納められている。掘り方は壁を比較的緩やかに掘り込んであり、底面は中央部がやや深いが平坦である。覆土は2層に分かれ、木棺の内の土と掘り方および木棺内に入り込んだ土に判別できるが、基本的には暗褐色土ブロックを含んだ同質の土であ人為的な埋土である。構造：木棺は掘り方の中央に水平に置かれており、上蓋と長辺の側板が比較的良好に残存していた。底板は、わずかにそれらしき部分が認められたが、残存状況不良で蓋板と区別できない部分が多い。また、短辺の板材は認められず、土の変化と樹皮らしいものが断片的に存在することで、掘り方との判別をした。上蓋が中央に押し潰されるように入り込み、底に着くくらいへこむが、側板はほとんど動いていないことが観察できた。木棺の材質はコウヤマキ（Sciadopitys verticillata Sieb.et Zucc）と同定され、薄く圧着された柾目が確認された。遺物出土状況：北側の側板に接するように大形の刀子（図版223－48）が東西方向に置かれ、そのすぐ南に漆製の箱または盆が位置する。漆製品の上に乗るかたちで、頭骨と歯の一部が確認されたが、きわめて遺存状態が悪い。さらに南に西側板に沿うように南北に並んで、2点の漆椀が正位で出土した。いずれも下に板材が認められ、木棺の上に置かれたことも否定できないが、出土状況からは棺内に入れられた状態をとどめていると判断できる。時期：溝の西側に同様の木棺墓が存在することと出土遺物などを考え合わせ、中世2期と判断した。所見：明確に木棺墓と確認できるのは後述するSK1393があげられるが、出土遺物や土坑の位置・形状からその可能性のある土坑がいくつか付近に存在する。木棺そのものの形態は明らかにならないが、鉄釘は認められない。

SK1393　位置：中部北　第95図、図版19・112、PL44

検出：SK1486と同様に、木質部の残る長方形の落ち込みがⅡA層上面で検出された。規模・形状：190×55㎝の掘り込みが確認できたが、木質部分の残存状況が悪いこともあって、掘り方と木質部を判別することが難しく、その形状や規模を確定することはできなかった。壁と底面は垂直に凹凸なく掘り込まれる。覆土は暗褐色土と緑灰色土がブロック状に入り、人為的に埋められた状況を呈している。構造：残存状態が悪く全体の構造を明確にできないが、底板と思われる板状木質部は150×45㎝の長方形に残っており、これに近い規模と形状の木棺墓であろう。用材としてコウヤマキが使われており、圧着した柾目が認められるなど、SK1486とよく似た状況である。遺物出土状況：中央やや北側に頭骨の一部と歯が認められたが、遺存状況は悪く埋葬状態などを明らかにすることはできない。頭骨の北側に漆椀2点と刀子（図版223－47）、不明鉄製品が出土した。その下に板状の木質部が水平に広がるので、そのほとんどは底板の残存と思われる。時期：明確に時期の限定はできないが、周辺の同類の墓壙や出土遺物から中世2期とした。所見：向きはやや異なるものの、形状や木棺の状態、副葬品の種類や位置などはSK1486と酷似しており、位置的にも両址の密接な関係が窺える。類例：近接して人骨が認められ、漆椀と盆状漆製品が出土したSK1469は、掘り方の向きや形状から木棺墓の可能性が高く、同様にSD61に沿って位置するSK1493・1521などもその可能性がある。

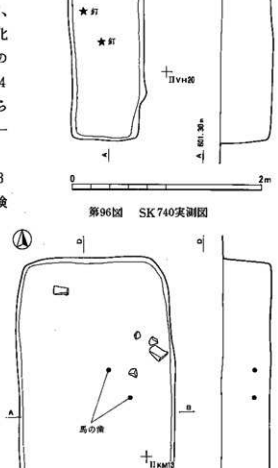
SK740　位置：南部北　第96図、図版17・95

検出：ⅠD層上面で、長方形の掘り込みが明瞭に検出された。規模・形状：186×70㎝のきちんと隅まで掘り込む長方形を呈し、壁は垂直に立ち上がり底面は平坦である。深さ55㎝を測り、覆土は青灰色の砂質土に暗褐色土・黄褐色土のブロックが多量に入る単一層で、人為的な埋没状況を示している。量は多くないが炭化物粒が混入している。遺物出土状況：北側の覆土中位から石硯（図版225－36）が、中央やや西の同じく覆土中位から鉄釘2点が出土した。時期：覆土と周辺の同類の遺構から判断して、中世1期に帰

属するものと思われる。所見：骨の出土など直接の根拠はないが、銭貨を副葬させたと思われる土坑が同形態であることや、石硯が副葬された可能性があること、掘り込みの状態などから墓址とした。類例：南部北地区の同類の墓址として、炭化物粒が層状に入り銭貨の出土したSK878、同じく炭化物粒が入り鉄製品の出土したSK901があげられる。土坑の形状や向きから可能性のあるものとしてSK742・743・784などがある。中部北地区にも同様の形状と炭化物粒の認められる土坑がいくつか存在し、SK1380・1470・1477などが一定のまとまりの中に分布する。

SK1483 位置：中部北 第97図、図版19・113

検出：ⅡA層上面で、灰色がかった土の大きな落ち込みを検出した。規模・形状：352×168㎝の隅丸長方形を呈する。壁および底面は丁寧に掘られており、凸凹があまり認められず、壁は垂直に立ち上がり底面は平坦である。覆土の深さは60㎝程で、褐色土ブロックの混入する単一層であり、人為的に埋められている。遺物出土状況：中央わずかに北側の底面より20㎝程高い位置で、馬の歯が40㎝の距離を置いて2か所で出土している。一方の遺存状態が悪いので、同じ馬の歯かどうかの確認ができず、周囲に骨片等は認められない。須恵器などが混入しているが、他に出土した遺物はない。時期：時期を決定する根拠に乏しいが、覆土の状況や周囲の遺構から中世に帰属すると判断した。所見：馬の歯の出土した遺構としてSB261があるが、馬の墓として構築された掘り込みとしては規模が大きく、底面なども他に使用された結果、平坦でやや硬化していたと思える。他の目的で使用された竪穴に、馬の遺骸を葬ったと考えるのが妥当であろう。



第96図 SK740実測図

第97図 SK1483実測図

（2）火葬墓

SK1534 位置：中部北

第98図、図版19・116、PL44

検出：ⅡA層上面で、赤い焼土のラインが長方形に巡る落ち込みが明瞭に検出された。検出面で火葬墓と認識できたので、構造に注意を払いながら精査を進めた。規模・形状：128×85㎝の長方形を呈し、壁はほぼ垂直に立ち上がり底面は平坦である。深さは約35㎝を測り、覆土は3分層される。上・中層は灰色土ブロックと小礫を含み、下層に多量の炭化材と焼土・骨片が混じる。壁は最下部を除いて全面が火を受けて焼土化しており、西壁中央に半円形の張り出しが認められる。構造：底面に接して3本の丸太材が、東西方向に等間隔に並べられており、炭化して検出された。その周囲および上面に、焼土と大小の炭化材が認められ、その間に細片になった骨片が混じる。西壁の張り出し

第98図　SK1534・1533実測図

は、底面からわずかに高い位置から急角度で立ち上がる。遺物出土状況：骨片は、量は比較的多いが微細なものが大多数で、部位の判定や埋葬姿勢などの復元はできない。中央の底面上に銭貨2枚が出土したが、他に出土遺物は認められない。時期：遺構の形状や他遺構との位置関係、出土遺物などを考え合わせて中世2期と判断した。所見：掘り込みの中に丸太を組み、その上で遺骸を焼いた火葬の跡と考えた。西壁の掘り込みは通風の施設であろう。しかし、骨片が微細なもので、1体分が残存しているか明確にならず、焼骨をそのまま埋めて墓としたかは明らかにならない。類例：同じく丸太を組んで火葬にしたことが確認できる遺構としてSK1523がある。形状や残存状況などは酷似しており、銭貨3枚の出土があった。

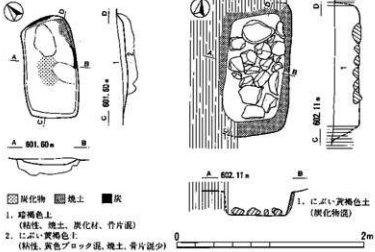
SK1533　位置：中部北　第98図、図版19・115、PL44

検出：ⅡA層上面で、焼土化した壁が巡る長方形の落ち込みを検出した。規模・形状：156×80㎝のやや胴の張った長方形を呈し、深さ約30㎝を測る。壁は垂直に掘り込まれ、東西両壁のほぼ中央に半円形の張り出しがある。壁は全面にわたって火を受け、硬く焼土化していた。床は比較的平坦で、火を受けた痕跡はほとんど認められない。覆土は3分層され、上・中層は小礫の多量に混入した褐色土であり、下層は大きな礫とともに焼土・炭化物粒と骨片が混じる。構造：礫は底面上に敷詰めたように置かれており、角礫が多く人頭大の礫の間に拳大程度の礫を詰め込むようにして入れている。礫は一面に置かれ積み上げられるような部分は少なく、その上面に全体に炭化材と骨が認められる。炭化材・骨ともに細かな破片であり、木材の組み方や火葬された姿勢などは明確にならない。東西二つの張り出しは、底面から10～15㎝程高い位置から壁と同様に急角度で立ち上がっている。時期：同形態の火葬墓や周囲の遺構の時期を考え合わせ、中世2期と判断した。所見：間隔があって通気の良好な石敷きの上に材木を置き、遺骸を焼いた火葬施設であろう。SK1534同様に骨が微細片であり、そのまま埋めて墓としているかどうか明確にならない。両方の壁に通風の施設をもつ本遺跡唯一の例である。類例：通風用の施設を壁に確認できた火葬墓または火葬施設は8基であり、そのうち底面に丸太を組んでいるものが前述のように2基存在し、不明が1基、残りは礫を置きその上に材木を置いている。うちSK1018（PL43）・1522は拳大から人頭大の礫20個程度を敷詰めており、SK1044（PL42）・1271は人頭大以上の礫を数個置いている。SK1044・1271ともに銭貨が副葬されており、SK1271から出土した「永楽通寶」（初鋳年1406年）によって中世2期以降への帰属が明確になった。SK1247は同様に通風施設をもち壁なども火を受けた痕跡が明瞭に認められるが、底面近

くに炭層と礫一つが認められるだけで、炭化材・骨片の出土はまったくなかった。火葬された後、骨などが取り出される明確な例であろう。

SK703 位置：南部南 第99図、図版93

検出：ⅡA層上面で検出したが、すでに炭化材や骨片が落ち込み内に散乱していた。規模・形状：後世の削平により深さは10cm程度が残存していた。100×57cmのやや歪んだ隅丸長方形を呈する。壁から底面中央にゆるやかに傾斜して、船底形の底面を形成している。覆土には炭化材・焼土と骨片が混じり、火を受けた粘土が2か所にまとまって出土した。壁に接して粘土が貼り付けられた状態で出土し、壁および底面には火を受けた痕跡はあまり認められない。構造：丸太状の炭化材は細片になり崩れているが、西と北の壁際では壁に沿い、中央部では東西方向を向くものが多い。火熱を受けた粘土は、壁に貼り付けられていたものが崩落したと思われ、本址の掘り方と判断した下面の掘り込み中に、炭化物と骨片が認められることから、同一の掘り込みを何度も使用し、その際に粘土を貼り付けた可能性がある。時期：中世以降の可能性が高いと思われるが、時期の限定はできない。所見：丸太を組んで遺骸を火葬しているが、底面近くだけの残存であり、詳細な内容は明らかにならない。熱を受けた粘土は、本址中央部より層状に出土していることから、天井部の崩落の可能性もある。類例：本址に類似した丸太を組んでの火葬が確認できるのはSK1211があり、崩落した粘土塊が認められるのはSK1253である。



第99図 SK701・703実測図

SK701 位置：南部南 第99図、図版93、PL42

検出：ⅡA層上面で検出されたが、部分的に残った土層断面の観察では、さらに上面から掘り込まれていることが判明した。壁を巡る焼土と骨片の出土により、検出の段階で火葬墓と想定された。規模・形状：125×70cmの隅丸長方形を呈し、主軸を北西から南東方向にとる。壁はやや斜めに掘り込まれ、平坦な底面を形成している。覆土はにぶい黄褐色砂質土で、底面近くの礫に挟まれるように焼土・炭化物・骨片が出土している。構造：削平されて確認できない西壁を除いて、壁は良く焼けて3cm程焼土化し硬化していた。底面に拳大から人頭大の扁平な円礫19個を、一面に敷詰めている。骨片は細片が北側部分に集中して認められ、残存している量は少ない。時期：明確にならないが、遺構の形態と掘り込み面などを考え合わせ、中世と判断した。所見：礫を敷詰めた上で遺骸を火葬した施設であり、骨は相当量が拾い集められ、取り出されたと思われる。類例：底面に角礫が敷詰められていた例としてSK1017がある。壁が焼土化している150×100cm前後の規模の隅丸方形を呈する土坑としてSK767・815・1456・1494・1506・1737があり、骨片などが認められないが火葬墓と判断した。

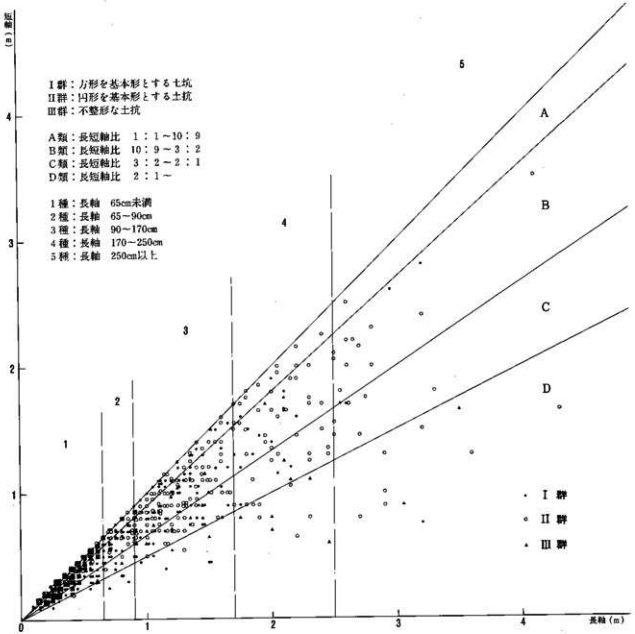
SK1321 位置：中部北 図版19・110

検出：ⅡA層上面で検出されたが、上部は削平されており、底面までは20cm程が残るだけである。規模・形状：110×95cmの隅丸方形を呈し、底面は鍋底状である。灰色がかった単一層で礫をいくつか含み、下部に丸太状の炭化材が多量に入る。炭化材の間に微細な骨片が散在している。時期：銭貨が1枚副葬されて出土したことと遺構の形態から、中世に帰属する墓址と判断した。所見：壁面や底面が火を受けた痕跡

がまったく無いことや焼土が認められないことから、火葬施設とは考えられず、別の場所で火葬したのちに骨片や炭化材を当遺構に埋めたものと判断した。類例：火葬骨を再葬したと思われる遺構として、古瀬戸系陶器香炉(125)が副葬されているSK1504をはじめ、径50cm程度の円形を呈する小形の墓址SK702・1297・1367・1488がある。

6　土　坑

本遺跡で検出された中世に帰属する土坑は861基を数える。しかし、実際には時期を明確に限定できる土坑が限られているため、切り合いや覆土の状態、時期の特定できる他の遺構との位置関係などを総合的に判断して中世の土坑と捉えた。したがって、時期決定の根拠が乏しいものが多く、さらに中世1期と2期に細分して時期を明らかにできる土坑もきわめて数が少ない。これらを形態分類した結果は、以下の第100図、第3表に示した。



第100図　中世土坑の長軸と短軸関係図

中世

	A					小計	B					小計	C					小計	D					小計	計
	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		
Ⅰ	5	17	14	8	1	45	10	5	51	18	8	92	1	1	17	12	7	38	0	0	0	6	7	13	188
Ⅱ	277	17	20	3	0	317	180	30	42	11	2	265	34	5	16	3	2	60	6	4	5	0	1	16	658
Ⅲ	0	1	1	0	0	2	0	2	3	1	1	7	1	1	1	0	1	4	1	0	0	0	1	2	15
計	282	35	35	11	1	364	190	37	96	30	11	364	36	7	34	15	10	102	7	4	5	6	9	31	861

墓址40基は含まない

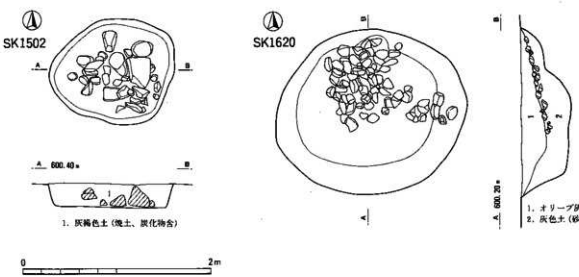
第3表　土坑形態分類表（中世）

（1）Ⅰ群の土坑

SK1499（Ⅰ群B類1種）　位置：中部北　図版19・114

検出：ⅡA層上面で検出したが、上部はほとんどが削平されて底面近くが確認できただけである。規模・形状：60×50㎝の楕円形を呈し、平坦な底面まで約10㎝を測る。覆土は青灰色粘土ブロックの混じる暗褐色土であり、炭化物を多く含む。底面に接して人頭大の角礫2個が入っている。時期：明確にならない。類例：Ⅰ群の小規模な土坑は、径30㎝程の柱穴状のものとそれより大きくて比較的浅いものに大別され、後者には礫や炭化物を伴なうもの（SK1497・1591等）がある。

SK1502（Ⅰ群B類3種）　位置：中部北　第101図、図版19・114



第101図　SK1502・1620実測図

検出：ⅡA層上面で灰色がかった落ち込みとして検出された。規模・形状：110×96㎝のやや不整形の楕円形を呈し、底面まで約20㎝を測る。壁はほぼ垂直に立ち上がり、底面は平坦である。覆土は炭化物・焼土を多く含む単一層で、径5～20㎝程の大小不揃いの礫が、底面よりやや高い位置に入れられている。被熱を受けた礫があり、砕いて入れたと思われるものも多い。壁などには火を受けた痕跡は認められない。時期：周囲の中世の遺構と覆土が類似することから、中世に帰属すると判断した。類例：同規模・同形状で大小の礫を伴なう土坑が周囲にいくつか（SK1498・1601）存在するほか、SK1620（第102図）のように小円礫が覆土中に間層状に入る例もあり、3種の規模の方形（Ⅰ群）の土坑には焼土・炭化物を伴なう例も多い。

SK1591（Ⅰ群B類4種）　位置：中部北　図版19・118、PL45

検出：ⅡA層上面で灰色がかった落ち込みとして検出された。規模・形状：216×184㎝の南側がやや尖

る楕円形を呈する。ほぼ平坦な床面まで15㎝程であり、壁は斜めに立ち上がる。拳大の礫が中央から西側に集中して出土し、覆土は灰色土ブロックの混じる暗褐色土で、炭化物粒が混入している。時期：覆土の状況と周囲の遺構の帰属時期を考え合わせ、中世と判断した。類例：Ⅰ群の比較的規模の大きい土坑は、SK1505などがあるが数は少ない。

（2）Ⅱ群の土坑

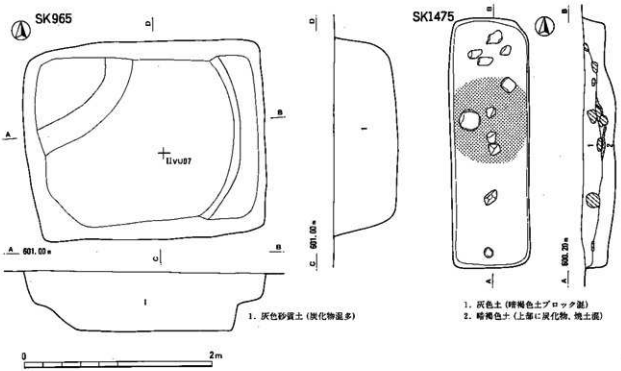
SK1707（Ⅱ群B類2種）　位置：北部南　図版20・124

検出：ⅡA層上面で、灰色を帯びた落ち込みとして明瞭に検出された。規模・形状：90×60㎝の規模をもって長方形に掘り込まれており、長軸は南北軸線に一致する。壁は垂直に立ち上がり、底面は平坦である。底面まで15㎝を測り、褐灰色土の単一層である。時期：覆土から中世と判断した。所見：規模・形状・軸方向の一致するSK1708が、南側の南北に並列する位置に存在する。類例：Ⅱ群の2種の規模の土坑は、礫を伴なうものなどがあるが、ほとんどは施設や遺物を持たない。

SK1148（Ⅱ群B類4種）　位置：中部北　図版18・105

検出：覆土と地山の色調が類似していることからプランの確定が難しく、ⅡA層中で検出された。規模・形状：230×200㎝の隅丸長方形を呈し、かなり凸凹があり軟弱な底面まで20㎝程の深さである。覆土は鶏卵大の円礫を多く含む褐色土の単一層である。時期：覆土の状況と周囲の同形状の土坑の時期を考え合わせ、中世と判断した。所見：掘立柱建物址に付属する土坑と規模や形状が類似しており、南側の小土坑などが本址と関係する可能性もある。類例：竪穴住居址や掘立柱建物址の付属土坑に類似する、施設や遺物をほとんど伴なわない土坑（SK1446・1580）は、中部北地区に比較的多い。

SK965（Ⅱ群B類5種）　位置：南部北　第102図、図版17・97、PL43



第102図　SK965・1475実測図

検出：ⅡA層上面で、青灰色の方形の落ち込みとして検出された。規模・形状：250×205㎝の長方形プランであり、やや軟弱であるが平坦な底面まで約70㎝を測る。東壁および北西隅に高さ30㎝程のテラス状の高まりが設けられ、この部分の壁は階段状になる。覆土は青灰色砂質土の単一層であり、炭化物粒が

多く含まれる。時期：覆土の状況と周囲の同形態の土坑の時期から、中世1期に帰属すると判断した。類例：Ⅱ群4種・5種の底面や壁の状態が竪穴住居址に類似する土坑のなかに、階段状の施設を持つもの(SK902・916)や壁の一部が張り出すもの(SK934)などが目立ち、南部北地区に集中する。

SK1475（Ⅱ群D類5類）　位置：中部北　第102図、図版19・113

検出：ⅡA層上面で、灰色がかった細長い落ち込みとして検出された。北側のSK1476を切ることが、トレンチによる土層断面観察の結果判明した。規模・形状：270×80㎝の隅丸長方形を呈し、南北軸線にほぼ方向を合わせる。底面はやや中央部が低くなる船底形であり、深さは約30㎝を測る。覆土は上下2分層され、層の間に焼土と炭化物が広がり、その上に置かれるように拳大程度の礫が位置する。礫の下に炭化物などが付着するが、直接火を受けた痕跡は認められない。時期：覆土の状況と周囲の遺構の時期から、中世に帰属すると判断した。所見：火葬墓に近い状況を呈するが、焼土はわずかで強い火を受けていないことと骨片が認められないこと、掘り込みの形状が異なることなどから、別の性格をもつ土坑と考えた。類例：Ⅱ群C・D類の細長い土坑には、東西や南北の軸線に方向を合わせるもの(SK1371・1380・1476・1477)が多く、墓址の特質と一致する。

（3）Ⅲ群の土坑

Ⅲ群の土坑は極めて数が少なく、Ⅰ・Ⅱ群の土坑が部分的に変形したり、複数の土坑とも捉えられるものがすべてで、Ⅲ群としての特質を備えた土坑は存在しない。

7　自然流路

NR11　位置：中部北　図版19・117・118、PL45

検出：ⅡA層中で検出されたが、さらに上面から掘り込まれていた可能性が強い。中世の土坑多数と切り合うが、そのすべてに切られている。規模・形状：幅2m前後で蛇行しながら西から東へ流れる。砂礫のを多く含む覆土で、西側は削平されて検出できない。時期：検出面などから中世に帰属すると判断したが明確にならない。土坑のすべてに切られるので、中世1期以前に存在した可能性が高い。所見：すぐ北を現代の用水堰田中沢が同方向に流れるので、それとの関連が考えられる。

NR12　位置：北部南　図版20・121

検出：ⅡA層上面で、ほぼ東西方向を向く礫混じりの溝状の落ち込みとして検出された。規模・形状：西から東へ流れ、大きくカーブしてやや南へ方向を変えており、幅は2～4mで場所によって変化する。深さ30㎝と浅く、断面は「U」字形を呈する。礫の混入した暗オリーブ褐色の砂質土が入っており、特に西側では礫が多量に混じる。時期：明確にならないが、検出面や遺構の時期を考え合わせて、中世以降と判断した。所見：中世に帰属する遺構は、すべてこの流れより南に位置することから、集落などを画する境界線の性格をもち、人為的に掘られた溝の可能性もある。

NR13・14　位置：北部南　図版20・121

検出：ⅡA層上面で、各々ST108、ST110の検出時に流路の痕跡が確認された。NR13はST108の柱穴に切られる。規模・形状：幅はNR13が1.6m、NR14は0.4mあり、東西は削平され規模は不明である。時期：2者は幅が相違するが、同じ東西方向の直線状にあることから、同一のものである可能性がある。ST108が中世1期頃と考えられていることから、それ以前といえる。

第5節　近世の遺構

近世の遺構として明確に把握できるものは、北部南地区から北地区の限定された範囲に分布する。掘立柱建物址3棟（第4表）と土坑23基、それを取り囲むように位置する溝址11条と生産址として水田址3か所である。他地区でも近世を通じて存続した可能性のある溝址などがみられるが、近世と限定できる根拠を持たない。

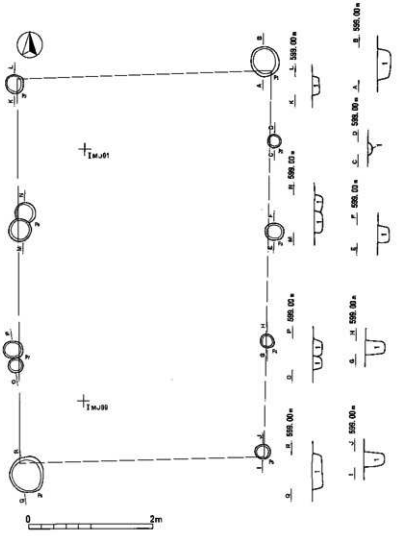
ST	位置	棟方向	規模			柱間間隔		柱穴掘り方		備考	図版
			桁行×梁行	桁行×梁行	面積	桁行	梁行	形	規模（径）		
118	北部中	N1°W	4×2	6.24×3.98	24.83	(1.76)	1.30～1.76	円	0.30～0.50		21・126
119	北部中	N2°E	2×2	3.56×3.12	11.10	1.52～1.58	1.60～1.96	円	0.22～0.34		
120	北部中	N1°E	4×3	6.84×4.78	30.11	1.40～2.02	1.14～1.64	円	0.15～0.32		

第4表　掘立柱建物址一覧表（近世）

1　掘立柱建物址

ST118　位置：北部中　第103図、図版21・126

検出：ⅠD層上面でP2～4が検出され、ⅡA層上面でP1・5～10の柱穴が確認された。P3がSD73内で検出され、本址がSD73を切って構築されていることが判明した。4×1間の南北棟と判断した。柱穴：西側と東側で桁行の間数が異なる変則的な柱配置であるが、それぞれでは柱間ははほぼ等間隔で柱筋も通る。掘り方の規模は大小不揃いであるが、円形を呈し、P2を除いて深さも一定である。P7・8は柱穴が重複しており、柱を替えた可能性がある。覆土はにぶい黄褐色砂質土で、柱痕跡は検出できなかった。遺物出土状況：P4より刀子が出土した。時期：検出面や覆土の状態、周囲の遺構の時期と出土遺物などから、近世（18～19世紀）に帰属すると判断した。

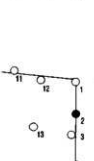


第103図　ST118実測図

ST119　位置：北部中　図版21・126

検出：ⅡA層上面で検出されたが、ST118同様さらに上面から掘り込ま

れた状態で検出できた可能性が高い。古代の竪穴住居址を切って構築されている。北側の梁行の中の柱が確認できないが、2×2間の南北棟を想定した。柱穴：柱間は等間隔に配置されており、柱筋も通っている。掘り方はほぼ同規模・同形状で、深さも15㎝前後で揃っている。覆土はにぶい黄褐色砂質土で、柱痕跡は確認できなかったが、P1・7では底面に柱痕跡と思われるピット状の掘り込みが認められる。時期：覆土や建物の方向がST118と一致するので、近世の同時期に帰属すると判断した。



ST120　位置：北部中　図版21・126

検出：ⅡA層上面まで掘り下げたところで検出されたが、もっと上面で検出できたものと思われる。検出面が攪乱を受けていることもあり、北西部分の柱穴が明確にならないが、4×2間の東西棟を想定した。柱穴：全体に柱配置は整わず、柱間や柱筋は不揃いである。掘り方は径25㎝前後の円形を呈するものが多く、深さも15～20㎝とほぼ揃っている。覆土はにぶい黄褐色砂質土で、P2底面から柱痕跡らしいピット状の掘り込みが確認された。SK1738は本址に付属する土坑の可能性があるが、南側が建物址の外に出てしまうことから、別の遺構とした。時期：覆土と建物の方向が他の2棟の掘立柱建物址と同様なので、近世の同時期に存在した可能性が強い。

2　溝　址

SD69～71　位置：北部南　第105図、図版20・21、PL41

検出：SD69は現耕作土中（ⅠA層）で、SD70・71はⅠB層上面で検出された。SD71が大きく蛇行するが、全体としては東西に直線的に延びる。SD70・71は削平された部分が多く、西側が確認できないため、それぞれの切り合い関係を直接明らかにできない。各溝の掘り込みのレベルから判断すると、SD69・70・71の順に新しく構築されていると捉えられる。規模・形状：SD71は幅1ｍ前後深さ約30㎝の規模であるが、断面を観察すると、幅2ｍ、深さ50㎝とさらに大きな規模である。ほぼ東西軸線方向に、東に向けて直線的に走る。覆土は灰色の砂質土で、底面に荒砂や酸化鉄の付着した小礫が堆積しており、水の流れた痕跡と認められる。本址の北側に沿って、約2ｍの幅で硬く締まった土が存在する。SL2の畦畔と同様に溶脱を受けておらず、水田耕土とは色調で判別できる。SD69・70は幅50㎝前後、深さ20㎝程が確認できただけであるが、SD71と同じく規模は相当大きかったことが土層断面から確認できる。やや蛇行が認められるが、基本的には東に向かって延びており、SD71のように水の流れた痕跡が認められる。時期：SD71から銭貨と近世の陶磁器（第130図1～3）が出土しており、SD71の初源は近世と判断した。SD69・70はそれよりも古いことは確実だが、掘り込み面等から判断して、近世の溝とした。所見：SD71は現在の用水堰であるくぬぎ沢の真下に位置するので、くぬぎ沢の旧流路であることは確実である。なお、このくぬぎ沢は境沢より南へ2本目の、島立条里的遺構の東西坪界線に当たっている。また、現くぬぎ沢は小穴喜一氏によって幅1ｍ深さ40㎝の規模であることが明らかにされているが（小穴1985）、それよりかなり規模が大きい。北側部分は土手および道と思われ、合わせて4ｍ程の幅の東西直線が坪界の実態であろう。SD69・70はさらに古いくぬぎ沢の旧流路と思われ、条里的遺構の坪界の溝であろう。

SD72・73　位置：北部中　第106図、図版21・126、PL42

検出：ⅠD層上面で検出されたが、さらに上部から掘り込まれていたものと思われる。削平および部分的に確認できただけであるが、切り合う遺構のうち、古代の遺構をすべて切り、SD73は近世のST118に切られる。規模・形状：緩やかに蛇行しながら、両址とも同方向の南北方向から15°程度東向きに走る。SD72は長さ10ｍ程が明らかになっているだけであるが、幅30㎝深さ10㎝程の規模の溝が直線的に延び

る。覆土は淘汰の良い砂質土で、ゆっくりとした水の流れが想定できるが、流れの方向は明確にできなかった。SD73は大きくカーブして徐々に向きを東に変え、SD74に合流するように切られる。その先は明らかにならないが、SD74と同方向を流れた可能性が高い。幅50㎝深さ30㎝程度の規模であり、覆土は小礫混じりの砂質土である。底面の傾きから、北から南へ向けての水の流れが明らかになった。時期：切り合いから、古代以降近世以前に限られ、掘り込み面や周囲の遺構の時期などを考え合わせて、中世の可能性を含む近世と判断した。所見：形状や方向から用水堰と思われ、条里的遺構の南北坪界と想定されるSD74構築以前に、比較的短期間使われた用水路であろう。

SD74　位置：北部南　第106図、図版21・126、PL42

検出：ⅠD層上面で検出されたが、上面は削平されており、さらに上部より掘り込まれていたものと思われる。古代の竪穴住居址SB184を切る他、SD75・76を切ることが検出面での土色の違いから判明した。また、本址に重複あるいはわずかに東にずれて現代の用水堰が流れている。規模・形状：多少の屈曲は認められるが、基本的には南北軸線方向に直線的に延びる。幅1.5m前後深さ約25㎝の規模で、断面は「U」字形を呈する。覆土は上面の現用水堰の影響と見られる酸化鉄の付着した砂質土であり、底面など部分的に礫の堆積が認められた。底面の傾斜から、北から南へ水が流れたと想定される。本址に沿って、地形的に低い東側に、硬く締まった土が幅3m程の帯状に存在する。西側にも不鮮明ながら同様の50㎝程の帯が認められる。道あるいは土手と想定される。また、断面観察のために深くトレンチを掘ったところ、本址付近の下面に、かなり大規模で大きく蛇行するものの、ほぼ同方向に流れる溝状の落ち込みが確認された。ⅡA層上面で2条、ⅡB層上面で1条存在し、酸化鉄の付着した礫が多量に入っている。SD74構築以前に流れていた自然流路と思われる。時期：東側に位置し、本址と関係すると思われるSL3の時期から、近世に帰属すると判断した。所見：近世以降現代まで、境沢から取水して付近の水田に水を供給し続けた用水路が本址である。本址は島立条里的遺構の南北坪界線に当たっており、直交するSD71と良く似た様相を呈している。すなわち、幅1m以上と比較的大きい用水路の片側に2m以上の道あるいは土手を付属させ、これを坪界として配している。本址の帰属時期は近世と判断できるが、それ以前の中世または古代にも、ほぼ同位置に流れが存在したことは注目される。

SD75・76　位置：北部中　第106図、図版21

検出：SD74と同じくⅠD層上面で検出された、南北方向よりもいくぶん北東から南西に振れる溝状の落ち込みである。ゆるやかに蛇行しながら、南側はSD74に合流するように切られる。規模・形状：両址ともに幅50㎝前後深さ15㎝程の規模であり、SD74の土手の範囲を蛇行しながらも、基本的には南北方向へ延びる。覆土は小礫の混じる砂質土であり、底面付近には酸化鉄の付着が認められた。底面の傾きから、北から南へ水が流れたことが明らかになった。時期：切り合いからSD74より古いことは確実だが、時期を限定する根拠に乏しい。掘り込み面や周囲の遺構の状況から、中世の可能性を含む近世と判断した。所見：SD74の土手の部分を流れており、古い時期に流れた用水路（SD74）と考えられる。いずれにしても、SD74構築以前に、条里東西坪界の位置に、やや蛇行する用水路が開鑿されていたことは、東西坪界線に当たるSD69・70と同様の状況である。

SD77・78　位置：北部中　第106図、図版21・126、PL42

検出：ⅠC層上面で、SL3の畦畔に挟まれるように検出された。土層断面の観察から、ⅠB層中より掘り込まれていることが確認できた。SD74と直交する位置にあり、上部を削平されていることもあって直接の切り合い関係は明確にはできなかったが、一応SD74に切られると考えた。両址のすぐ北側を現代の小さな用水路が流れる。規模・形状：SL3の畦畔の中央に構築された溝であり、東西軸線方向に直線的に延びる。SD77は幅1～1.5m、SD78は幅60㎝前後であり、深さは10㎝以内と浅い。覆土は淘汰の良

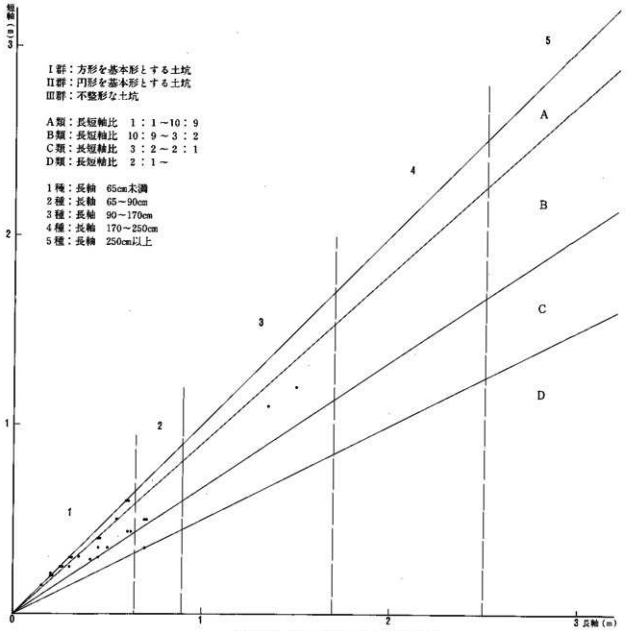
い暗褐色砂質土で、底面付近は酸化鉄の付着した小礫が部分的に認められる。底面の傾きから、西から東へゆっくりと水が流れたと想定される。時期：SL３と同時期の近世（18世紀前後）と判断した。所見：位置関係や覆土から、SD74から取水して東に流れ、SL３を始めとする水田に水を供給した細い用水路である。現条里的景観と一致し、わずかに北に位置を変えただけで、同様の用水路が現在も流れている。

SD79　位置：北部北　第107図

検出：ＩＣ層上面より検出された。溶脱粘土と鉄の集積する部分が南北に走る溝状の落ち込みと、その東西両側に併走するアゼ部が同時に検出され、SL４の畎畝と判断された。規模・形状：幅約20㎝の小規模な溝である。南北にほぼ直線に走り、北流していたと考えられる。時期：SL４の検出状況と合わせて近世と捉えられる。

3　土　坑

北部南地区においてＩＤ層より上面で検出された土坑は、近世陶器の出土したSK1733（図版21）の１基



第104図　近世土坑の長軸と短軸関係図

を除いて、近世として扱う根拠を持つものはない。しかし、土坑が近世の掘立柱建物址、溝址、水田址の周囲に分布することと、付近の検出面で近世の陶磁器が集中的に出土することから、この地区で検出された23基の土坑は近世に帰属すると判断した。

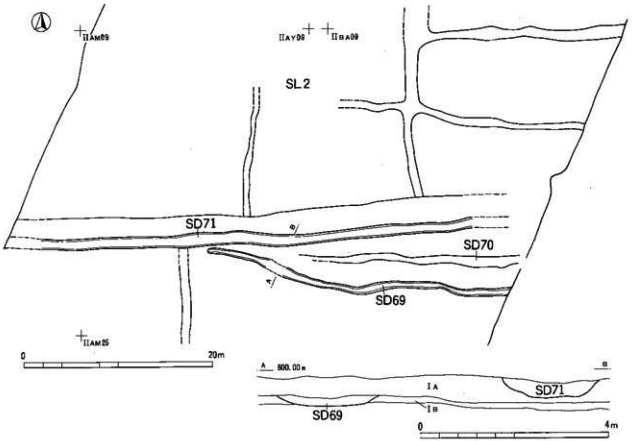
土坑は以下の第104図・第5表のように分類される。圧倒的にⅡ群の小規模な（1・2種）土坑が多く、施設や礫・炭化物の認められる土坑は、前述のSK1733の1基を除いてみられない。それ以外の土坑も、Ⅰ群4種のSD1738（図版21）が掘立柱建物址に付属する可能性が認められるほかは、性格などを想定できる所見は得られなかった。

	A					小計	B					小計	C					小計	D					小計	計
	1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		1	2	3	4	5		
Ⅰ	0	0	0	0	0	0	0	1	1	0	0	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	2
Ⅱ	11	0	0	0	0	11	6	1	1	0	0	8	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	21
Ⅲ	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	11	0	0	0	0	11	6	2	2	0	0	10	1	0	0	0	0	1	0	1	0	0	0	1	23

第5表　土坑形態分類表（近世）

4　水田址

SL2　位置：北部南　第105図、第6表、図版20・21



第105図　SD69～71・SL2実測図

検出状況：トレンチによる断面観察で、ⅠD層上限より逆グライ化土壌が認められた。上位のⅠC層は層厚15～20cmで下限が中央にややたわむように堆積しており、鉄とマンガンが集積している。下位のⅡA層は層厚10～20cmで小礫が散点し、マンガンが集積する。ⅠD層は層厚0～10cmで小礫を塊状に含み、

層 名	GB数/ g	植 物 名	PO/ GB	PO数/ g	仮 比 重	PO数/ cc	植物乾物量 t/ 10a.cm	地上部乾重 t/ 10a	イネ籾重 t/ 10a
Ⅰ A	336871	イ ネ	3/ 164	6162	1.454	8961	2.635	0.923	23.075
		ヨ シ	0	0		0	0.000		
		タ ケ	2	4108		5974	0.287		
Ⅰ B	304933	イ ネ	3/ 97	9431	1.434	13524	3.976	1.393	15.323
		ヨ シ	0	0		0	0.000		
		タ ケ	1	3144		4508	0.216		
Ⅰ C	314306	イ ネ	4/ 316	3979	1.315	5233	1.539	0.539	2.695
		ヨ シ	0	0		0	0.000		
		タ ケ	0	0		0	0.000		
Ⅰ D	311837	イ ネ	3/ 185	5057	1.367	6912	2.032	0.712	9.967
		ヨ シ	0	0		0	0.000		
		タ ケ	0	0		0	0.000		
Ⅱ A	307953	イ ネ	2/ 162	3802	1.339	5090	1.496	0.524	
		ヨ シ	0	0		0	0.000		
		タ ケ	0	0		0	0.000		

第6表 SL2 プラント・オパール結果抄表

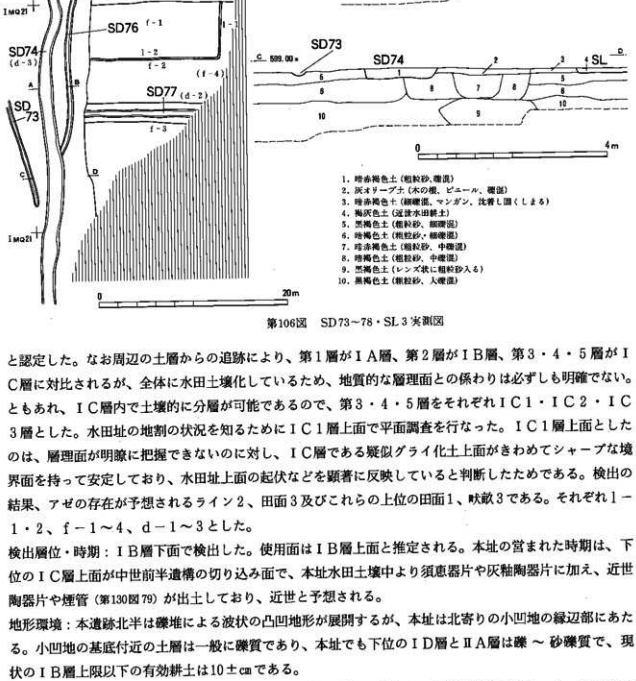
上部が溶脱層、下部が鉄の集積層でその境界はシャープに水平をなしており、ⅠC層とは土壌的に不連続関係にある。水田址認定の条件の1つであるアゼが断面では認められなかったので、宮崎大学にプラント・オパール分析を依頼した。結果を第6表に示す。ⅠC層の5233個／ccに対して、ⅠD層では6912個／ccのイネのプラント・オパールが検出され、ⅠD層でのプラント・オパール量が1つのピークを示している。これはⅠD層のプラント・オパールが上位層からの落ち込みではないことを暗示しており、かつ5000個／cc以上と多量であり、現位置での稲作が予想される（藤原1976）。なお、ⅡA層のプラント・オパールはⅠD層よりの落ち込みの可能性が考えられる。遺構が空白であることについて、その果たした役割に対して様々な演繹が可能だが、小凹地にイネのプラント・オパールを多量に含むⅠD層が分布し、しかもⅠD層が水田土壌化している事実からここで水田耕作が行なわれた、すなわち水田址と解釈することが最も妥当と考えた。

アゼ・田面：断面・平面調査の結果、アゼなどの遺構は明確にすることができなかった。この原因について、① 本来アゼなどがあったがⅠC層の堆積に係わって耕作土を含めた軟質部が削剥されたか、② 上位層からの土壌化の浸透や本址そのものの土壌化の特異性によりアゼが検出されなかったか、または ③ 本址ではアゼや他の施設を作らないで耕作したことが予想される。このうち ① は上位のⅠC層の下限がたわむように堆積していること、ⅠD層が著しく薄いことから最も可能性が高く、この場合ⅠD層上部かそれより上位部が鋤床と考えられ、さらにその上位約20cm程の耕作土など（軟質部）が高密度の流体によって削り去られたと推定される。

時期：本址と係わりの深い用水路と考えられるSD71より、近世の遺物（第130図1～3）が出土していることから、近世に営まれたと推定される。但し、プラント・オパール分析や、断面観察によって、より下位の土層よりプラント・オパール量が多く、グライ化土壌があることから、近世より古い時期（平安時代前半？）から連続もしくは不連続に水田利用されていた可能性がある。

SL3 位置：北部中 第106図、図版21、PL45

検出状況：トレンチによる断面観察によって水田土壌を確認した。第1層は現耕作土と下部の鉄集積層、第2層がマンガン斑の沈積する細砂層、第3層が疑似グライ化（三土1978）したシルト層、第4層がマンガン斑が若干みられる極細砂層、第5層がマンガンの集積する細砂層である。集積層が2セット認められることから、第2層付近に旧水田面を推定した。また、アゼは確認できなかったものの南・北部に畦畝が認められ、中央では第3層上限の明瞭な段差が認められた。これらをアゼそのものの代替条件とし、水田址



第106図　SD73～78・SL３実測図

と認定した。なお周辺の土層からの追跡により、第１層がＩＡ層、第２層がＩＢ層、第３・４・５層がＩＣ層に対比されるが、全体に水田土壌化しているため、地質的な層理面との係わりは必ずしも明確でない。ともあれ、ＩＣ層内で土壌的に分層が可能であるので、第３・４・５層をそれぞれＩＣ１・ＩＣ２・ＩＣ３層とした。水田址の地割の状況を知るためにＩＣ１層上面で平面調査を行なった。ＩＣ１層上面としたのは、層理面が明瞭に把握できないのに対し、ＩＣ層である疑似グライ化土上面がきわめてシャープな境界面を持って安定しており、水田址上面の起伏などを顕著に反映していると判断したためである。検出の結果、アゼの存在が予想されるライン２、田面３及びこれらの上位の田面１、畦畝３である。それぞれ１－１・２、ｆ－１～４、ｄ－１～３とした。

検出層位・時期：ＩＢ層下面で検出した。使用面はＩＢ層上面と推定される。本址の営まれた時期は、下位のＩＣ層上面が中世前半遺構の切り込み面で、本址水田土壌中より須恵器片や灰釉陶器片に加え、近世陶器片や煙管（第130図79）が出土しており、近世と予想される。

地形環境：本遺跡北半は礫堆による波状の凸凹地形が展開するが、本址は北寄りの小凹地の縁辺部にある。小凹地の基底付近の土層は一般に礫質であり、本址でも下位のＩＤ層とＩＩＡ層は礫～砂礫質で、現状のＩＢ層上限以下の有効耕土は10±cmである。

アゼの走向・規模：１－１・２は走向がＮ－Ｓ及びＥ－Ｗで、ともにアゼ幅は不明である。１－２の断面では疑似グライ土（ＩＣ１層）上面に約３cmの段差が認められ、旧水田面に３cm以上の段差があったことを暗示している。つまりｆ－２がｆ－１より高い田面であり、段差のある地点に灌水目的を兼ねたアゼが走っていたと推定される。１－１も同様に存在したと思われるが、後のｆ－４造成にあたって削平されたと考える。なお、本址付近の地形面の傾斜方向は北東方向が予想されるが、アゼの走向はこれを無視しているように見受けられる。

田面の規模・形状：ｆ－１～３は南北に整然と配列し、ｆ－４は前３枚に重なりながら東側へ広がる。検出所見から、ｆ－１～３が営まれた後、アゼやｄ－１・２を削平して新しい畦畝ｄ－３が築かれ、田面が

ｆ－４に拡張されたと推定する。いずれも各辺が直線に走る長方形とみられ、方角が意識されているようである。ｆ－１～３の範囲は、疑似グライ土（ＩＣ１層）の分布域と重なり、ここが細粒の土壌からなる「水持ち」の良い田であったことを示している（三土1978）。しかしｆ－４では疑似グライ土の分布しない部分まで広がっており、ｆ－１～３からｆ－４の間に湛水に関する技術的な向上があったことが推測される。

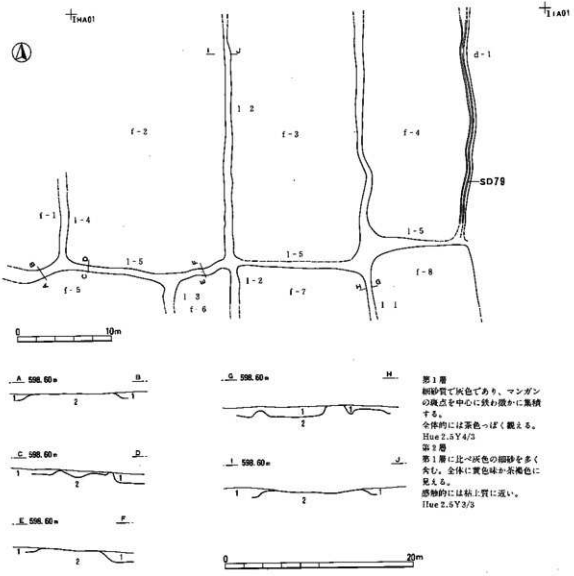
諸施設：畎畝と推定されるｄ－１～３が検出されている。特にｄ－３の上位には現在の用水が配されており、地割の基本が現在まで生き続けていることを表わしている。ｄ－１のアゼ部の幅は100～130㎝、溝部（SD78）の幅が80～140㎝で、全幅が約320㎝に整備されているのに対し、ｆ－２のアゼ部の幅は北側が約90㎝を南側が約80㎝、溝部（SD77）の幅が約50㎝、全幅が約210㎝に整備されており、ｄ－２の方がやや規模が小さく整然としている。ｄ－１・２間の距離は10.9ｍで、これは条里区画の間隔に一致する。なお両方とも溝部底は東方へ緩傾斜しており、水はｄ－３付近から東流したと考えられる。ｄ－３は、ｄ－１・２の両側を切って構築され、アゼ部の幅が210～420㎝、溝部（SD74）の幅が90～150と規模を大きくしている。アゼ部上には２条の溝（SD75・76）が北東方へ走り、北側にも水田が存在したことを示している。東西方向のｄ－１・２を切って南北方向のｄ－３に改築された要因については必ずしも明らかではないが、田面を拡張したことに加え、北方の水田への用水の確保が係わった可能性がある。つまり、ｆ－１～３が営まれていた段階では、北方が部分的な荒地であったか、ｄ－３に沿って存在したと思われる旧水路から傾斜に対して斜方向に用水を流入していたために「水まわり」の能力が低かったと思われる。それがｆ－４が営まれる段階に北方が新たに開田されたか、「水まわり」を良くするために傾斜の方向に支線を変更したことが予想される。いわば耕地整理に際して用水路の付け替えがなされたのではないかと思われる。

ＳＬ４　位置：北部北　第107図

検出状況：トレンチでＩＣ層上限付近より水田土壌を確認した。ＩＣ層は南から北へ、西から東へ細粒となっており、西・南部では（三土1974）の「褐色低地水田土壌」、中央では「灰色低地水田土壌」に変化する。特に東部では灰色低地水田土壌化が著しく、また新しい時代の削平も加って層序区分が難しい。アゼの確認を目的にＩＣ層上部で平面調査を行なったところ、全体に灰色土が広がり、南縁部から西縁部にかけて集積層が認められた。灰色土と集積層の境には、淡く斑鉄がとぶ灰色化した土壌が帯状に東西に走り、断面観察で集積層のわずかな高まりがみられた。また、これと直交して中央でやはり灰色化した土壌により帯状ラインが認められ、周囲より土が締まっていた。帯状ラインが落ち込みなのか、高まりを反映するものなのかを判定するために、各ラインを断ち割って観察した。その結果、いずれも灰色化した土壌の底部がはっきりせず、砂による葉理等の構造が認められなかった。したがって溝でもなく水流の痕跡もないと判断し、帯状の高まり、すなわちアゼと解釈した。以上のように水田土壌とアゼの存在が明らかとなったことにより、水田址と認定した。検出された遺構はアゼ５、田面８、畎畝１である。それぞれ１－１～５、ｆ－１～８、ｄ－１とした。

検出層位・時期：ＩＣ層上部～中部付近で検出した。使用面はＩＣ層上面と思われる。ＩＣ層は北東方へ若干傾斜しており、南・西縁部ではＩＣ層中部付近の集積層まで、中央から北寄りでは土質の特性から層準の特定は難しいがＩＣ層中部付近でから上部にかけてまで、東部では中部付近まで掘り下げた。本址の営まれた時期については、本址の検出中に上位のＩＡ層より近世陶磁器が出土している。また、周辺の遺構検出所見から、ＩＣ層上面が中世前半以降、ＩＢ層上面が近世中頃遺構の遺構切り込み面とみられていることから、中世後半～近世初頭頃と推定される。

地形環境：本遺跡北半のＩＣ層上面の微地形は、緩やかな起伏を持ちながら北東へ傾斜していたと考えら



第107図　SD79・SL4実測図

れ、本址は最北部の境沢沿いに位置する。前代にあった小凹地から小凹地にかけての箇所であり、本址の中央から東部にかけて透水性が低くＩＣ層が厚くなる傾向にあるのは、埋没した旧地形を反映したためである。

アゼの規模・走向：走向から端的に指摘できることは、アゼがそれぞれ東西南北に整然としていることである。しかも１－５を除くと他はすべて直線的に走る。現水田のアゼはやはり東西南北に直走し、特に東西方向が主体的に通る。また、本址のアゼはどちらかと言えば南北方向が主体的で、これは地形の傾斜が北東方向であることから勘案すると、東方への水の流れをさえぎって田面に湛水することを目的としたことによると思われる。つまり、南北方向の支線から、水を支線沿いの田面へ分配して、順次下方（東方）の田面へ落していった灌水システムが想起されるのである。

田面の規模・形状：検出層位から推してもｆ－１・５～８がｆ－２～４よりもかなり高かったことが予想される。したがって１－４・５を境に、水がかり系で別々のグループに属していた可能性も考えられる。形状はわずかな部分しか検出できなかったものも含め、南北に長い長方形であったと思われる。短辺はｆ－２～４で11～17ｍ、平均で14ｍである。規格化したと言うより傾斜に合わせてアゼの位置を決めた感がある。長辺については確かな考察を示せないが、１－５から境沢まで50ｍほどあり、この間の落差が

5㎝以下であれば長辺が50ｍあったことになる。しかし、境沢に沿っては砂礫堆状の高まりがあり、現在の地表面で約50㎝、平安時代で20㎝前後の落差があったと予想される。したがって本址の営まれた時期には20～50㎝の落差があったはずで、1－5から境沢まで1～数条の東西方向のアゼがあったと思われる。よって長辺は20数ｍほどであったと推定され、田面1枚あたり275～500㎡程の面積が見込まれる。

諸施設：畎畝（支線）と推定されるｄ－1が本址東縁で検出されている。検出面では整削が下位に及び過ぎ、溝部（SD79）と東のアゼ部のみは観察できるがベルトでは東・西2条のアゼ部とそれらに挟まれる溝部が確認できた。溝部底はアゼ部に対して10㎝ほど低く、下位には二価鉄と溶脱粘土による不規則な大理石模様が認められ、滞水していたことを物語っている（三土1978）。ｄ－1は小刻みに屈曲するが大局として真北方向へ流れていたと考えられる。機能としては、ｆ－1～8より低い位置にあって、ｄ－1東側にも水田土壌が広がることから、東側の低位の田面を潤していたと予想される。とすると、ｆ－1～8を潤した畎畝（支線）がさらに西方に北流した可能性が高い（現在でも本址西方約50ｍを支線が南北方向に走る）。以上のような南北方向に支線に水を配した幹線はどこにあったか。それは古代に存在した礫堆による小凹地（該期には周囲の埋積により若干の高まりをみせる程度だったと思われる）付近を東流していたと考えられ、小凹地は本址南方約60ｍにあって現在も同地点を幹線（鬼沢）が東流していしる。この場合、南の幹線と北の境沢の間は110ｍほどの間隔があったと思われる。すなわち、まず東西方向に幹線を導き、ここから南北方向の支線を分岐して東側の田面に灌水したシステムが想定され、これは現在の支線系が水量に対し、より整然として原初的な規格性が生きているように見受けられる。なお、ｄ－1は、本址より下位の水田址SL1の畎畝の位置にほぼ重なる。

5 不明遺構

SX1 位置：北部南 図版19・20・119・120

検出状況：ＩＣ層上面で検出された。溶脱した灰色砂と、鉄の集積した硬い褐色土からなる。小礫や炭化物などを含む質的な差から、溶脱した灰色砂をST104・SK1621・1624・1625が切ると判断したが、色調はともに灰色を呈していた。ST104と3基の土坑の覆土は、上層からの溶脱の沈積の影響により灰色化したと考えられ、実際にはそれらよりSX1が新しいと判断した。東西は調査区外にのび、南部分は現田中沢によって調査ができなかった。北側は溶脱した灰色砂と、鉄の集積した褐色土が北へいくに従って自然と薄くなり、検出できなかった。規模・形状：5.7ｍ前後の幅で東西方向に灰色砂と褐色土が走る。SX1の西側ではさらに南北両側に2.8ｍの幅で灰色砂がのび、東側では1.9ｍの幅で南にのびる。所見：結果的には大きな矩形の一部分が検出されたと考えられ、水田址の可能性が高い。水田址とする根拠に乏しいことや、全体を知るには至らなかったこと、不詳な部分が多いことから不明遺構とした。時期：中世のST104などよりは新しく、また本址が営まれた面はＩＢ層以上と推定されることから、おそらくは近世以降の所産と考えられる。

第3章　遺　　物

第1節　縄文時代の遺物

1　土　器（図版127－1～9・PL46）

前期から後期の土器が総数106点出土している。時期ごとにみていくと、前期から中期前半に属するものとしては摩滅した土器が4点確認された。前期に属す2は羽島下層式土器にある竹管文と様相が似るが、条痕が施されていない点や、胎土・色調ともに相違して赤褐色を呈するなどそのものではない。3は諸磯b式土器である。中期になると五領ヶ台式土器併行期と阿玉台Ⅰb式土器が各1点みられ、これらは出土地点が点在することや遺存状況から、原位置をとどめず、積極的に生活域を捉えることはできない。

次期に至って、多くの遺物をみることができる。中期としては、1は加曽利EⅡ式土器かⅢ式土器、4は曽利式土器、5・6は同一個体で曽利Ⅳ式～Ⅴ式土器、後期にはいって7・8の称名寺式土器や、9の堀之内Ⅰ式土器が確認される。このほかには曽利Ⅲ式土器とそれに併行する時期の唐草文系土器も多く、量的には中期後半が大半を占め、主にその後葉（曽利Ⅳ～Ⅴ式期）が中心となる。

出土地点は、中期後半が南部北区の南側（調査区Ⅱ区Y南側からⅢ区B北半）の、特に東半に集中している。ここでは縄文の遺構として、SK1から6が検出されているが、直接その落ち込みからの出土はなく周辺に土器が散布していた。また後期の土器は、称名寺式土器が中期集中域の北に隣接して存在し、堀之内式土器は発掘域の南端、堀川に近いところに分布している。これらは主にⅡB層から出土している。

2　石　器（図版127－1～4）

石器14点、剥片5点、石核3点が検出されている。総数22点のうち約半数が古代遺構に混入しており、中世遺構には混在していなかった。遺構外出土のものは、中期後半と後期の土器が集中している南部北区の南側付近から出土し、ⅡB層から得られている。石器は石鏃2点（無茎凹基）、石匙かスクレーパーと思われるもの1点、スクレーパー3点、打製石斧7点、敲石1点がある。小形石器の2点がチャートのほかは黒曜石であり、大形石器は結晶片岩（2～4）が4点、頁岩（1）が2点で、凝灰岩が1点ある。1は片面が自然面、その裏面は第一次剥離面のままで、調整も着柄部のみにみられる単純なものである。全く同じ作りのものが、頁岩製のものでもう1点ある。2～4などの結晶片岩製のものは脆弱感のあるもので、小形のものが多い。

第2節　弥生時代の遺物

1　土　器（図版127－1～13・PL46）

弥生時代の遺構として唯一確認されたSB1は、遺物がほとんど無く、わずかに1に示した1点のみである。住居址の埋甕炉として使用された甕で、口縁部と頸部がおおよそ残っている。頸部あたりに櫛描波状文が描かれ、体部には施されない。箱清水式期に併行する後期の土器である。

これと同じ時期のものとして9～13がある。9は古代SB109から、10～12は同一個体で中世SD52から出土しているが、いずれも混入である。13はSB109の東側（Q区）から検出された。

この一群より古い中期の土器も、古代の遺構に混在して同量程度出土している。SB114から出土した5は庄ノ畑式土器に通じるもので、中期のなかでも古手となる。2～4は条痕文系の土器で、SB113から

出土した。同一個体の破片で、2の口縁部には刻みが入れられている。SB51出土の6・7は口唇部に刻みを入れ、沈線文と刺突文をめぐらせており、SB64出土の8も同様である。5を除く2～8は、中期の栗林式期より先行する時期か、あるいは7・8が栗林Ⅰ式期に併行するものであろう。

出土地点を総合してみると、住居址は調査区の南端に位置し、また破片が中期から後期まで通じて県道高綱線の両側（Ⅱ区の中程）に集中し、その以北には分布しない。

第3節 古代の遺物

1 土 器

（1）概観

ア 土器の事実記載

北栗遺跡では竪穴住居址・掘立柱建物址・土坑などの古代の遺構を始めとして、遺構外の包含層などから出土した古代の土器は膨大な量にのぼる。

本報告書では、この膨大な量の土器の事実提示を、限られた紙幅のなかで行うために、実測図と文章記載・遺構別古代土器一覧表の三者で記載することとした。実測図では図示可能な土器について法量・調整などを示し、文章記載では実測図に示せなかった情報を中心に必要最小限の記述をおこなった。また、主要な遺構の土器については出土土器の構成表を加え補足した。構成表では、土器分類の細別に従って、器種それぞれの推定個体数と重量、個体数の構成比率、実測図番号を示してある。さらに巻末の古代土器一覧表（付表6）では遺構出土の土器を推定個体数で表わし、遺構出土の土器が網羅できるようにした。

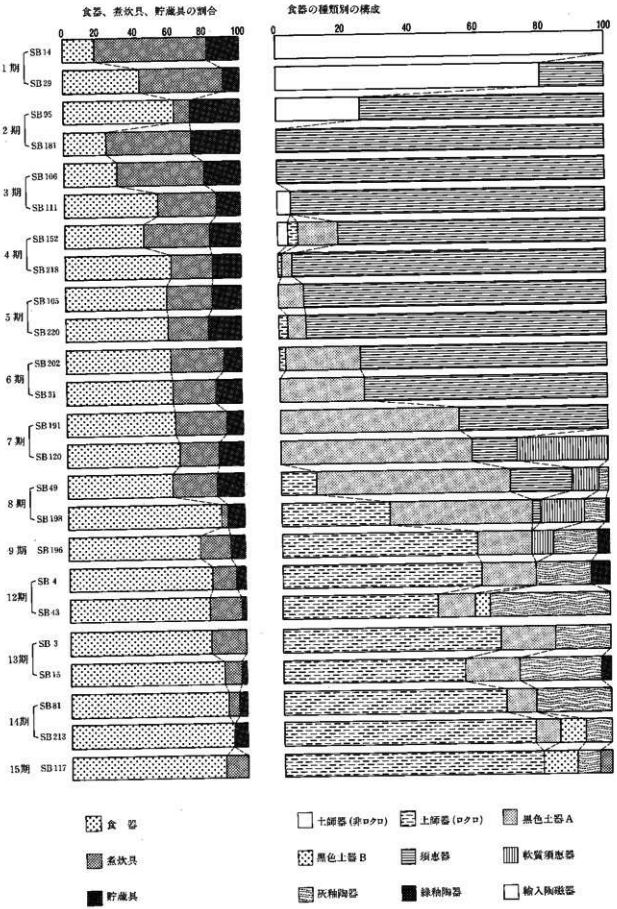
なお、土器の出土状態については、遺構の章に記述してある。

イ 北栗遺跡の古代の土器（第108図）

北栗遺跡では、古代1期から古代15期まで途中遺構がなくなるため土器がない1・2の時期を除いて、古代各期の遺構の多寡に応じ多量の土器が出土した。総論編でそれぞれの器種の分類の詳細や型式変化・時期区分について述べているので、ここでは北栗遺跡の古代各期の土器様相についてその概要を述べる。

1期：当期の土器を出土する遺構、特に竪穴住居址は少なく、まとまってこの時期の土器様相をとらえられる遺構は皆無であるといってよい。SB14・29などがこの時期にあたるが、これらの遺構では食器が少なく、土師器の甕類の煮炊具が目立つ構成をとる。食器は非ロクロ調整の土師器と須恵器があるが、須恵器は少なく、土師器が圧倒的で、土師器の半球状の杯D、口径が大きく器高の浅めの杯E、体部に稜をもって屈曲する杯F、高杯、多様な形態の鉢がある。これらは次の2期にも基本的には継続して存在するが、杯Fはこの時期で消滅する。須恵器は量が少なく明確にはとらえられないが、杯Aと杯蓋Aのセットが主体になるものと思われる。煮炊具は土師器甕A・甕B・甕F・甕G・小型甕A・小型甕Bがあるが主体となるのは甕Aである。また甕Fは球胴形を呈し内外面ともにヘラで磨き上げられたもので、貯蔵具としての用途を想定すべきかもしれない。須恵器の貯蔵具が普及する2期以降には漸減し3期ではほとんど見られなくなる。甕Gも甕Fと同様に考えられる。須恵器貯蔵具は少なく甕類とフラスコ形瓶等が少数あるに過ぎない。

2期：土器全体のなかで食器の占める割合は依然として低く、土師器の甕A・甕Bを主体とする甕類が出土量の大半を占めている。食器は1期が非ロクロ調整の土師器を主体としていたのに対し、この時期では須恵器が急増しSB181では食器のすべてを須恵器が占めるにいたる。器種は杯A・杯B・杯蓋B・皿A・鉢Bなどがある。主体をなす杯Aは底部回転ヘラ切り未調整を基本としており、口径13.5～14.5㎝・器高3.5～4.5㎝の比較的大型のものが主体で、口径11.5㎝前後のやや小型のものも認められ、大小の2法



第108図　竪穴住居址出土土器の構成

量とも考えられるが、現在の段階では明瞭に分化した2法量とは言い難い。非ロクロ調整の土師器は、杯D・杯E・高杯などである。煮炊具は1期の構成を引き継いでいるが、甕A・甕F・甕Gなどが減少し、ハケ調整を行う甕B・小型甕Bが増加する傾向がみられる。貯蔵具は須恵器甕類が多く、特に甕Eがめだつ。小型の貯蔵具では、長頸壺・短頸壺のほか平瓶・瓢などもある。またこの期は美濃須衛窯産須恵器が多量に搬入される時期にあたり、SB181では食器・貯蔵具合せた須恵器23個体中9個体が美濃須衛窯産である。

3期：土器全体のなかで食器の占める割合は徐々に高まり、相対的に貯蔵具の割合は減少している。この時期の代表的な遺構であるSB111では食器の占める割合は50％を越え、さらに、食器のほとんどは須恵器によって占められる。食器は杯A・杯Bを主体に構成されており、杯Aではこの時期に、底部回転糸切りが出現するが量的には底部回転ヘラ切りがまだ回転糸切りをうわまわっている。煮炊具では、1・2期に主体を占めた土師器甕A・小型甕Aなどは減少し、甕B・小型甕Bの2者が煮炊具の主体的な組み合わせとなっている。また、「武蔵型」と呼ばれる甕Cとロクロ調整の小型甕Dが出現する。貯蔵具は2期の状況を引き継いでいる。須恵器全体のなかに占める美濃須衛窯産須恵器の割合は減少し、SB111で58個体中で6個体を数えるに過ぎない。

4期：この4期から次の5期にかけての時期は、在地産の須恵器を中心とした食器構成の一つの完成の時期である。食器の割合はさらに増加し、須恵器が食器の主体を占めていることは変わらないが、この時期にロクロ調整の黒色土器Aと、同じくロクロ調整で体部内面に暗文状のヘラ磨きを施す「甲斐型杯」と呼ばれる杯Cが見られるようになる。黒色土器A杯Aはこの4期では、まだ土師器杯Eの内面黒色処理されたものとの区別が難しいが、この時期に初源があるものと思われる。須恵器は杯Aと杯Bが主体で、杯Aは底部回転糸切りが多くなるが、回転ヘラ切りも少量残っている。杯Aは口径13.5～14.5㎝・器高3.5～4.5㎝が主体の1法量のみである。杯BはⅡ（口径15～17㎝・器高4～5㎝）・Ⅲ（口径14.5～17㎝・器高5.5～8㎝）・Ⅳ（口径12～13.5㎝・器高3～4㎝）・Ⅴ（口径11～12㎝・器高4～5㎝）・Ⅵ（口径9～10.5㎝・器高4～5㎝）の法量分化が確立し、このあと5～7期までこの法量は基本的に堅持される。煮炊具は3期の状況とほぼ同様で、土師器甕B・小型甕B・小型甕Dの組み合わせに、甕Cが少量加わる。貯蔵具は須恵器で構成されているが、長頸壺A・短頸壺などの器種が多くなってくる。美濃須衛窯産の須恵器はSB218では219個体中わずかに4個体に過ぎない。

5期：食器・煮炊具・貯蔵具とも、4期の状況とほとんど変わらない。須恵器杯Aと杯B・杯蓋Bを主体に、少量の黒色土器A杯Aと土師器杯C・盤Aで構成されるのが5期の食器である。須恵器杯Aはすべて底部回転糸切り未調整となり、回転ヘラ切りのものは消滅している。杯Bの法量分化も4期と同様明確である。前期に出現した黒色土器A杯Aは、4期では量も少なく非ロクロ調整の土師器杯Eと区別しにくい不安定なあり方であったが、5期では量は少ないが各遺構とも一定量をもつようになる。この時期から杯AⅠ（口径15～19㎝・器高4.5～7㎝）・杯AⅡ（口径12.5～13.5㎝・器高3.5～4.5㎝）の2法量を確認できる。また土師器杯Cも見られる。このほか、口径20㎝以上で脚台をもった土師器盤Aもこの時期から見られるようになる。煮炊具は土師器甕Bと小型甕Dの組み合わせが主体で、甕Cと小型甕Bがそれを補う。貯蔵具は須恵器で、大型の甕Aなどの甕類・中形の甕Dなどの甕類、小形の長頸壺A・短頸壺A・短頸壺Cなどがある。美濃須衛窯産の須恵器はごくまれに甕類が散見される程度である。

6期：5期の状況を引き継ぎながら、各器種は自然な型式変化を遂げ新器種の登場などの変化はない。食器では黒色土器Aが次第にその占める割合を増し、須恵器が後退を始める。須恵器杯Aは底径の小さな体部の開きの強いものへと変化する。煮炊具では、土師器甕Bが次第に器高を縮め、口縁部が短く強く外反していたものが、立ち気味に伸び始めるなどの変化が始まる。甕Cも「コ」字形の口縁形態へと変化し

つつある。

7期：食器に大きな変化がみられる時期である。新たに灰釉陶器が登場し、黒色土器Aにも有台の椀・皿があらわれることである。またこの時期、5期から6期にかけて見られた、食器での黒色土器Aの増加と須恵器の後退がさらに進展し、遂に須恵器が食器全体の50％を割り込む状況となる。この頃をさかいに黒色土器Aに椀・皿Bが登場し、灰釉陶器も前後して共伴するようになる。また、須恵器杯Aは体部の開きが強くなる変化はさらに進展するとともに、器壁は薄く、ロクロ目が目立つものが多くなる。またこの期の後半（SB120）では、焼成が甘く、灰白色に焼き上った須恵器の杯Aがあらわれる。この土器は内面底部の見込部分のおさえがないこと、内外面に黒斑が例外なく残ることなどの共通点をもち、器種は杯Aに限られている。ここではこの土器を軟質須恵器と呼んで、硬質還元焔焼成の須恵器と区別することとする。煮炊具は土師器甕Cが減少し、甕Bと小型甕Dの2者による組み合わせが定着する。貯蔵具は硬質還元焔焼成の須恵器壺・甕類を主体に、灰釉陶器の長頸壺などが少量現われる。

8期：7期に起きた食器の椀・皿への指向はさらに進展する。食器は新たにロクロ調整の土師器が杯A・椀類に、須恵器・黒色土器A・軟質須恵器・灰釉陶器の6者で構成されるようになるが、須恵器は非常に少なく、基本的には須恵器を除く4者で構成されているといえる。このほかに量は少ないが緑釉陶器の椀・皿がある。器種はそれぞれの土器の種類によって作り分けられており、杯Aは黒色土器A・軟質須恵器・土師器、椀は黒色土器A・土師器・灰釉陶器、皿は黒色土器A・灰釉陶器という組み合わせで、これを外れることはない。なお、杯Aが大・小の2法量（Ⅰ・Ⅱ）をもつのは黒色土器Aのみである。煮炊具は、7期同様土師器甕Bと小型甕Dの2者の組み合わせである。甕Bは、器高が低くズングリした形態になる方向での変化はさらに進み、外面体部上半への横ナデ、底部外周へのヘラ削りがなされるようになる。貯蔵具では、長頸壺・短頸壺・小瓶などの小形器種に灰釉陶器があらわれ、以前からある須恵器の貯蔵具との2者で構成されることとなる。大形の甕類は須恵器が担う。

9期：遺構が急激に減少する時期にあたり、土器の構成を多くの遺構で検証することはできないが、SB196で見ると、食器は土師器の占める割合が急速に増加し、食器の主体を土師器が占め、残りを黒色土器A・灰釉陶器が占める構成をとっている。器種別に見れば、杯Aは土師器のみとなり、黒色土器Aは杯Aから撤退して椀に残るのみとなる。椀は土師器と黒色土器A・灰釉陶器・緑釉陶器がある。皿は灰釉陶器のみである。煮炊具はSB196では小型甕Dのみしか確認できない、甕Bもあるものと思われるが、量は8期をさかいに急激に減少しているのもと思われる。貯蔵具も詳細は不明であるが、須恵器と灰釉陶器の組み合わせであろう。この時期の土坑と思われるSK435からは土師器杯AⅡのみが一括して15個体出土したが、いずれも口径12.5～13㎝・器高3.1～3.6㎝の範囲のなかに入る法量である。またSK450からは同じく10個体の土師器杯AⅡが出土し、これらは口径12～12.8㎝・器高3.2～3.9㎝の範囲のなかには入るものであるが、SK450のもののほうが口径がやや小さいものが多くこちらのほうが後出的なのであろう。土師器杯AⅡは以後口径と器高を縮小させる。

10期・11期：この10期と次の11期は、北栗遺跡から遺構がほとんどなくなる空白の時期にあたり、良好な土器様相を示せる遺構はない。

12期：土器全体のなかで食器の占める割合が圧倒的となり、煮炊具と貯蔵具は少なく、特に貯蔵具の占める割合は極端に低い。食器は土師器・黒色土器A・灰釉陶器を主体に構成され、黒色土器Bと緑釉陶器が少量ある。土師器は杯A（Ⅱ・Ⅲ）・椀（小椀）・盤A・盤B（Ⅰ・Ⅱ）、黒色土器Aは椀（小椀）、灰釉陶器は椀（小椀）・皿・段皿が主な器種で、杯・椀・盤Bはそれぞれ同一器種で大小の2法量を持っている。土師器杯AⅡは口径10.5～11㎝・器高3～3.4㎝、杯AⅠは口径12.5～13.5㎝・器高3.5～4.5㎝の範囲のなかにある。煮炊具は土師器羽釜Aとロクロ調整の小型甕Dの組み合わせを基本とする。貯蔵具は灰釉陶

器広口瓶が少量あるのみでその実態は不明である。

13期：土器様相は前期と同様で、12期の様相をほぼ引き継ぎ各器種が自然な型式変化を続けている。土器全体のなかに占める食器の割合はさらに増加し、貯蔵具は非常に少なくなる。土師器杯AⅡはさらに小型化を続け、SB3では口径9.2～10.3㎝・器高2.5～2.7㎝の間にある。煮炊具・貯蔵具は12期の様相と変わらない。

14期：土器様相は12・13期の流れを引き継いでいる。食器では土師器杯AⅡがさらに小型化を続けSB81では口径9.4～10.6㎝・器高1.8～2.5㎝となる。また、土師器皿AのⅠとⅡがあらわれるのもこの時期である。

15期：古代の土器のうち最終末の土器群で、SB117に代表される。SB117では貯蔵具は無く、食器と煮炊具が認められるのみである。食器の主体は土師器で他に黒色土器Bと灰釉陶器・輸入陶磁器がある。土師器杯AⅡは小型化がさらに進み口径8.7～9.8㎝・器高1.2～2.4㎝の幅のなかにあり、大部分は器高2㎝を切るもので、杯というよりも小皿というべき形態である。煮炊具は羽釜Aと小型甕D・Eの組み合わせである。

（2）遺構出土の土器

ア 竪穴住居址出土土器

SB2 図版128

底部回転糸切り未調整の須恵器鉢A（1）と、土師器甕B（2）が図示できた。食器のほとんどを須恵器が占める。5期の土器様相である。

SB3 第7表、図版128、PL47

食器は土師器と黒色土器A・灰釉陶器で構成されている。土師器杯AⅡは小型化しており口径10㎝前後・器高2.5～2.7㎝。杯AⅢは認められなかった。5・6は盤BのⅡとⅠである。黒色土器A椀のうち7は内面のヘラ磨きが不定方向となっている。灰釉陶器椀（9・10）は漬掛け、10は杯部の腰の張りが強く、高台が高く直立する形態である。13期の土器様相である。

SB4 第109図、第8表、図版128、PL47・67

食器は土師器と黒色土器A・灰釉陶器・緑釉陶器で構成されている。土師器杯AはⅠとⅡがあり、杯AⅡ（1～3）は口径10.5㎝前後・器高3㎝前後である。杯AⅢ（4～8）は口径12.5～14.5㎝を測る。9・10はそれぞれ土師器と黒色土器Aの椀である。11は緑釉陶器の段皿で、口径は14.8㎝を測る。胎土は白色に近く軟質で、磨き調整はなされず、黒味のかかった濃緑色の釉が厚く施釉されている。12は灰釉陶器段皿である。13は土師器小型甕Dで、14は土師器甕でナデ調整する。15は羽釜Aで、体部をタタキ調整後内面にはハケ調整を施している。12期の土器様相である。

食 器

種 類	器 種	個体数	重量g	個体数比		実測図No.
土 師 器	杯AⅡ	6	310	8 62%	13 72%	1～4
	盤BⅠ	1	135			6
	盤BⅡ	1	120			5
黒色土器A	椀	2	260	2 15%		7・8
須 恵 器	杯 A	1	10	1 8%		
灰釉陶器	椀	2	230	2 5%		9・10

煮炊具

土 師 器	甕 B	1	5		4 22%	
	小型甕D	1	100			
	羽 釜	2	35			

貯蔵具

須 恵 器	甕	1	20		1 6%	

第7表 SB3 出土土器構成表

第109図 SB4出土土器法量分布図

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比			実測図No.
土師器	杯AⅡ	3	110	11 50%		22 82%	1～3
	杯AⅢ	6	215				4～8
	椀	2	40				9
	不明		280				
黒色土器A	椀	2	110	3 14%			10
	小椀	1	20				
須恵器	杯A	1	30	4 18%			
	杯B不明	1	5				
	杯蓋B	2	15				
緑釉陶器	段皿	1	25	1 4%			11
灰釉陶器	椀	1	15	3 14%			
	皿	1	5				
	段皿	1	170				12

煮炊具

土師器	甕	1	900	3 11%			14
	小型甕D	1	40				13
	羽釜A	1	640				15
	不明		230				

貯蔵具

須恵器	甕D	1	95	1 50%	2 7%		
灰釉陶器	瓶	1	5	1 50%			

第8表　SB4　出土土器構成表

SB8　図版129

黒色土器Aは杯AⅡ(1)と皿Bがある。2の須恵器杯Aはロクロ目の残るものである。3は土師器の鉢で口径29.5cmを測る。ロクロナデで調整されるだけで、内面にヘラ磨きや黒色処理は施されていない。6は須恵器甕Dで肩部に四角く面取りした耳を付ける。耳には上から貫通する孔が穿たれている。6期の土器様相である。

SB9　図版129・130

食器は須恵器と黒色土器Aで構成されているが主体は須恵器である。1は土師器杯C、明褐色の胎土で内面には放射状のヘラ磨き、外面は横方向のヘラ磨きが施されている。残存は口縁部で11%と少ないが口径12cmを測る。3～5は須恵器杯Aで底径の小さな外傾の強い形状である。黒色土器A杯Aは3の杯AⅠのみ図示したが杯AⅡもある。7は須恵器盤の脚台か、短頸壺の口頸部の可能性もある。8は土師器盤Aで脚台は高い。10・11は土師器小型甕Dで糸切り痕が残る。9は小型甕Cである。12～14は甕Bで体部を薄く仕上げ、内面には縦方向の指によるナデアゲ痕が残る。体部外面のハケは強く明瞭に残り、底部ぎりぎりまで施されている。口縁は「く」字に強く外反するが口縁部をやや肥厚させる新しい要素も含んでいる。15は甕Cで口縁部を「コ」字にする形態である。16は口縁部を欠くが体部をタタキ調整後横方向にナデる須恵器短頸壺Cか。17は短頸壺Aである。6期の土器様相である。

SB10

小片のみの出土である。食器は須恵器のみ、煮炊具は土師器甕B・甕C・小型甕Dの組み合わせは5期の土器様相である。

SB11　図版130

食器を主体に図示できた。1・2は黒色土器A杯AⅡで1は切り離し不明、2は底部回転糸切りである。須恵器杯Aは回転糸切りの3・4が図示できたが、このほかに回転ヘラ切りのものが1点ある。須恵器杯蓋Bは9個体あるが、杯Bは1点もなかった。7～11の杯蓋Bは天井部の回転ヘラ削りの範囲が比較的広い。11は美濃須衛窯産である。このほかに美濃須衛窯産製品は壺が1点ある。5は須恵器小壺の口縁

SB5　図版128

食器は須恵器のみである。須恵器杯Aはすべて回転糸切りで、1・2のように底面の広い形態である。1は燈明皿として使用されており内面全体と外面の一部に煤が付着している。3は杯BⅥ。煮炊具は土師器甕B(5)・甕C・小型甕D(4)があるが、4は底面を静止糸切りで切り離し、その後ハケBを施している。4期の土器様相である。

SB6　図版129

羽釜A(1)が1点あるのみである。体部は指で押えて調整するが斜め方向に粘土紐の積み上げ痕跡が観察できる。内面は指によるナデアゲである。鍔は指によってつまみ出され指頭圧痕が明瞭に残る。口縁端部は平坦に面取りされている。12期以降であろう。

SB7　図版129

食器は土師器杯A(1)と灰釉陶器椀(2)である。3・4は羽釜Aである。12～13期の土器様相である。

部である。6は土師器盤Aで全面をロクロ調整、脚台は強く外反する。内面は黒色になっている。12は土師器小型甕Dで底面に糸切り痕が残るが、体部下半を手持ちヘラ削りしている。4期の土器様相である。

SB13 図版130

遺物は全体に少ない。1は土師器杯Cで内面は放射状暗文、外面は手持ちヘラ削りで調整する。底部で残存は15%と小片であるが底径は7㎝を復元できる。2・3は須恵器杯Aで回転糸切りである。4は須恵器甕Dで、破片のため耳はないが本来は四耳が付されていたものと思われる。内面は当具痕を不定方向のハケによってナデ消している。煮炊具は甕Bが最も多い。5期の土器様相である。

SB14 図版131

食器は、非ロクロ調整の土師器杯E・F、高杯、と須恵器杯A1片がある。杯F(1・2)は体部に稜を持つもので底部外面を手持ちヘラ削りの他は、横方向の丁寧なヘラ磨きを施す。3～6は口径に比して器高の低い杯Eで、底部手持ちヘラ削りの他は横ヘラ磨き、3は赤彩を内外面にわたって施し、4～6は内面を黒色処理する。9は指ナデによる調整。10は外面をハケ状工具で調整する。11・12は土師器甕F。13は甕Aである。1期の土器様相である。

SB15 第9表、図版131、PL48・67

土師器杯Aは杯AⅡ(1～3)とⅢ(4～8)の2法量をもつ段階で、Ⅱは1でみると口径9.4㎝・器高2.7㎝である。9～12は土師器と黒色土器Aの椀。13の土師器盤Aは脚台が小さめで透しを穿つ。14は緑釉陶器椀で、胎土は灰白色やや軟質、磨き調整はなされず、濃淡のムラのある濃緑色の釉を厚く掛ける。口縁は玉縁状に外反させている。灰釉陶器は15～19の椀と、20・21の段皿で、施釉はすべて漬掛け、底部の調整は18・20が回転ヘラ削り、21は回転糸切り痕が残る。16・17・19が丸石2号窯式他は虎渓山1号窯式である。22は灰釉陶器広口瓶の口縁部、23・24は羽釜Aである。13期の土器様相である。

SB16 図版132

食器は須恵器が主体で土師器杯Cが1片あるのみである。須恵器杯A(1～3)は回転糸切りで、2は体部の外傾の強いやや新しい要素をもつ。6は薄手の土師器甕で小型甕Bか。5期の土器様相である。

SB18 図版131

遺物は少ない。1は土師器杯C、底部回転糸切りで外面は手持ちヘラ削り、内面に暗文は見えない。須恵器杯A(2・3)は回転糸切り未調整である。4は口縁部が強く短く外反する土師器甕Bである。5期の土器相である。

SB19 図版132

食器は須恵器のみで構成されている。杯A(1～4)のうち1は底面全体と底部外周を手持ちヘラ削りし、2～4は回転糸切り未調整である。いずれも底径の大きな形状である。5は扁平な杯蓋Bで口径18.8㎝を測る。6の杯Bは美濃須衛窯産と見られ底面にヘラ記号がある。美濃須衛窯産と見られるものには他に

食器

種類	器種	個体数	重量g	個体数比		実測図No.
土師器	杯AⅡ	7	275	20 50%	39 81%	1～3
	杯AⅢ	6	620			4～8
	椀	5	395			9・10
	ⅢAⅠ	1	5			
	盤A	1	315			13
黒色土器A	杯AⅡ	1	3	7 18%		11・12
	椀	6	380			
須恵器	杯A	1	10	2 6%		
	杯蓋B	1	5			
緑釉陶器	椀	1	10	1 3%		14
灰釉陶器	椀	6	270	9 23%		15～19
	皿	1	15			
	段皿	2	295			20・21

煮炊具

土師器	甕A	1	40	6 13%		
	甕B	1	380			
	小型甕D	1	30			
	羽釜A	2	1,300			23・24
	羽釜	1				
	不明		170			

貯蔵具

須恵器	甕	2	485	2 67%	3 6%	
灰釉陶器	広口瓶	1	135	1 33%		22

第9表 SB15 出土土器構成表

甕の破片が1片ある。煮炊具は甕B・小型甕C・小型甕Dがあり、7は小型甕Cである。4期の土器様相である。

SB20　図版132、PL48

土師器のみが出土したが、杯類は皆無であった。1は内外面をハケ調整する鉢。2～4は小型甕Aで、2はミニュチュア、3は底部に木葉痕が残り、4は内面ヘラ磨きの後黒色処理する。5は甕Bで内面にも横方向のハケを施し、口縁は直立気味で外反は弱い。6は甕Aで内面には粘土紐の積み上げ痕が、底面には木葉痕が残る。7・8は球胴の体部で内外面にハケを掛ける甕G。9はヘラ磨き調整の甕Fで、内面は板状工具による横方向のナデを施すが、粘土紐積み上げ痕が明瞭に観察できる。図示した甕類はいずれも焼成は良好で堅く焼き締まっている。煮炊具の構成は1期の土器様相である。

SB22　図版133

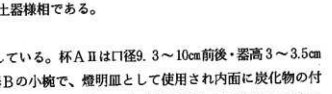
食器は土師器・黒色土器A・軟質須恵器・灰釉陶器で構成される。黒色土器Aの内面ヘラ磨き調整はやや雑で、4の杯AⅡのように磨きが全体に及ばず部分的にのみ施されるものもある。黒色土器A椀6・7は体部が直線的に開く形態で、底面には糸切り痕を残す。8は軟質須恵器である。9の灰釉陶器椀は漬掛けで施釉され、体部の残存部位には回転ヘラ削りは観察されない。煮炊具は土師器甕B(12・13)、小型甕D(10・11)がある。14は須恵器甕Dである。8期の土器様相である。

SB23　第110図、図版133

土師器杯AはⅡ(1～5)とⅢ(6・7)に法量分化している。杯AⅡは口径9.3～10cm前後・器高3～3.5cmである。8・9は盤BⅡとⅠである。10は黒色土器Bの小椀で、燈明皿として使用され内面に炭化物の付着がある。11・12の灰釉陶器段皿は底部に糸切り痕がある。15は甑Dで体部は直線的で端部を丸く納めている。12期の土器様相である。

SB24　図版132

遺物は少なく黒色土器A杯AⅡ(1)と、土師器甕B(2)が図示できただけである。6～7期の土器様相である。



第110図　SB23出土土器法量分布図

SB25　図版134

食器は黒色土器A(1～7)・須恵器(8)・軟質須恵器・灰釉陶器(9)からなるが、黒色土器Aが圧倒的に多く次いで須恵器、軟質須恵器と灰釉陶器は僅少である。黒色土器A杯AはⅠ(6)とⅡ(1～5)の2法量がある。7は皿Bで高い高台がつく。灰釉陶器は厚手の底部に小さめの角高台がつき釉は内面全体に自然降灰が認められる。黒笹14号窯式にあたる。煮炊具は土師器甕B(12～14)、口縁部を「コ」字状に外反させる甕C、小型甕D(10・11)で構成される。甕Bは口縁部を「く」字に外反させるものであるが口縁はやや肥厚させ気味である。貯蔵具は須恵器のみで15・16は長頸壺A、17は須恵器甕Eである。7期の土器様相である。

SB26　図版135

食器は須恵器のみである。杯A(1・2)は底部回転糸切り、杯B(3)は体部の深い杯BⅢであろう。煮炊具は土師器甕B(6)と小型甕D(4・5)がある。貯蔵具は須恵器のみで、長頸壺A(7)、横瓶(8)、甕D(9)がある。5期の土器様相である。

SB27　図版134

食器は黒色土器A(1～3)と須恵器(4)で構成されるが、黒色土器Aのほうが圧倒的に多い。煮炊具は甕B(5)、甕C、小型甕Dがある。7期の土器様相である。